猪木、佐山、小川!!
&村松友視緊迫絶妙トーク収録!

神様カール・ゴッチ
衝撃インタビュー第2弾

紙のプロレス RADICAL

No. 4



落とし前つけたるで!!

聞け! 引退への覚悟!!
前田日明

ターザン山本の、「取材拒否」後、初の新日本リポート&前田日明への激白!

読みとれ! 昭和世代の凄み!!
藤原喜明 vs ドン荒川

感じろ! パンクラス王者の野望!
近藤有己

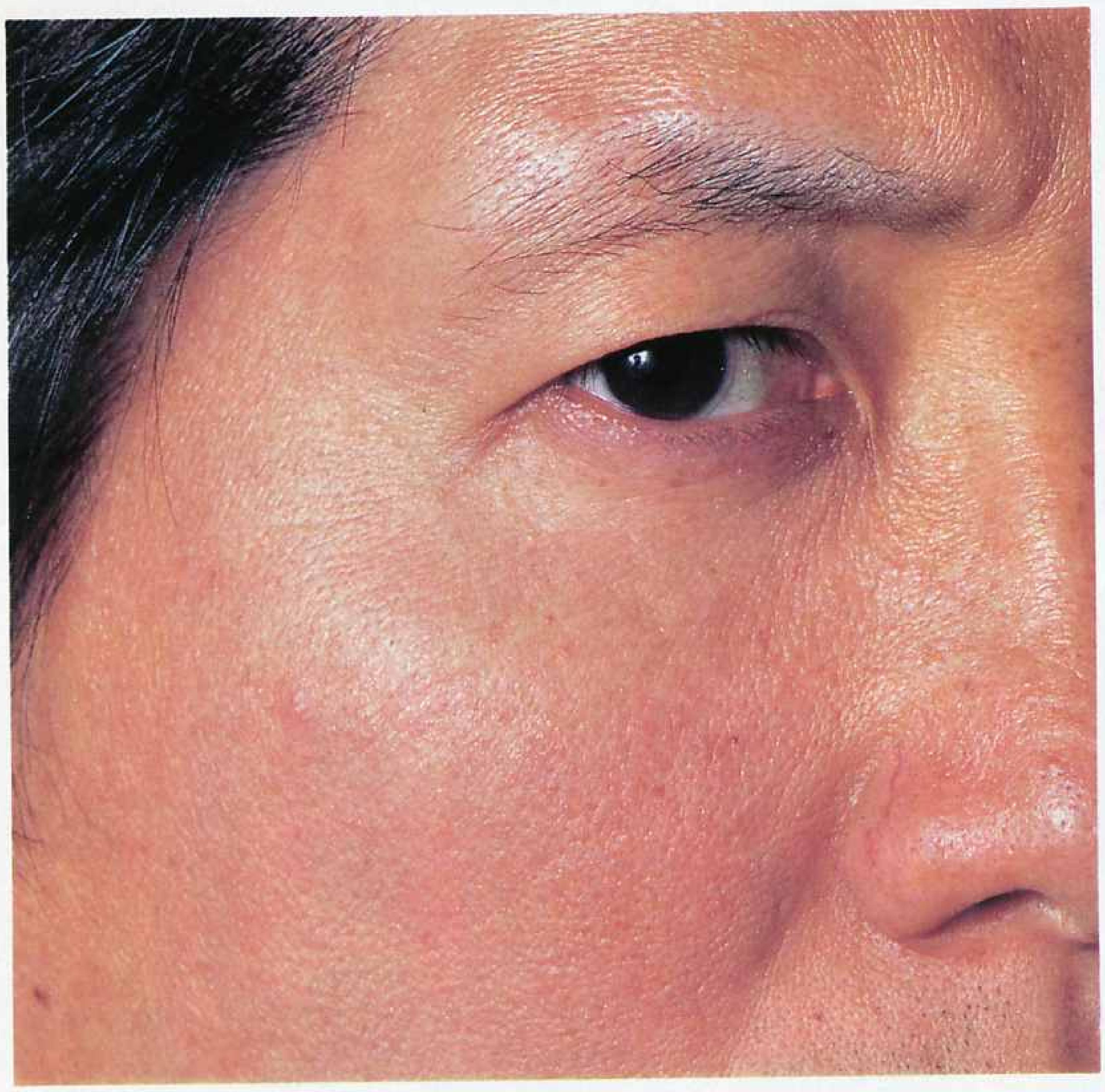
髙阪剛/山本健一

やはりプロレスの敵は世間だ!! プロレスファンじゃない人500人アンケート第2弾実施!!


発行元:(株)ダブルクロス 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話/03-3403-5188

俺は朝起きてから、夜寝るまで「前田日明」で生きてきたから

「落とし前」と「世界征服」'97



聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito


前田日明
AKIRA MAEDA
「落とし前」と「世界征服」'97



RADICAL
PASSION
INTERVIEW

「前田さん、ホントに引退しちゃうんですか?」

「引退します!」

終わり良ければすべて良し 男は引き際が肝心！

——さ、今日は夜桜のようにひっそりと巻頭インタビューです。

前田　夜桜じゃなくて**寒梅**のようにやね。

——いまは夜桜より寒梅ですか、お気に入りは。

前田　厳冬の頃に、人知れずひっそりと純白の花を咲かす寒梅のようにね。夜桜って人が見てるじゃない。見てるから**ハラヒレハレホレ**って、夜だもんネーッて照れ隠しできるけどさ、所詮、夜桜は夜桜！　寒梅にはかなわない！　寒梅の方がすごい！　でしょ？

——いや、でしょ？って言われても（笑）。で、今日は聞くことがいっぱいあるんで、飛行機の話と日本刀の話はナシにして下さい！

前田　飛行機と日本刀を取り上げたら、一体私に何が残るというの？（可愛らしく）。**こんな私に誰がしたの？**

——（無視して）まずですね、前田さんはホントに引退しちゃうんですか⁉

前田　引退します‼

——ホントにホントに？

前田　（頷きながら）引退後にやりたいこともう決めてあって、手ハズも全部打ってあるからね。**終わり良ければすべて良し！　男は引き際が肝心！**　起承転結！

——第一次ＵＷＦが出来て13～14年くらい。第二次ＵＷＦが出来て10年近く。そして、リングスが出来て5年以上。前田さんが従来のプロレスの枠を飛び出そうとしてから、様々な紆余曲折があったわけじゃないですか。

前田　ウゥ～ッ‼（突然、泣き真似を始める）。

——ああ、俺、今日はメチャクチャ緊張感持って来たんだけどなぁ……そこで泣きますか（笑）。

前田　くふっ（微笑）。

——で、前田さんの頭の中でも、いろんな思いが分裂したりとか様々な矛盾を抱えながらも、ここまで礎を築き上げてきたわけですよね。だから、今回の引退発言というのは、ズバリ言って前田日明流の「落とし前」ですよね。

前田　うん、そう！　**細石を巌にしたんよ！**　巌にしたから、後は苔のむすまで行っちゃうだろうからね。細石を巌にした人間は、まぁ象徴みたいな形でいいんじゃないの。俺の身体もちょっと壊れてるし、頭もイカレてるし（笑）。現役辞めてもマッチメイクとかいろんなことに関わっていかなイカンのやけど、いろいろ興味のあることも出てきたしね。

——でも、身を引くことによって「落とし前」を付けるというのは、前田日明らしくないかもしれないですよね。

前田　何で？

——前田さんだったら死ぬまでやってやるとか、燃え尽きるまでとか、そういうことを期待しているファンもいるわけじゃないですか。実際、ボクなんかもまだ

「落とし前」と「世界征服」'97

まだ見たいわけだから。

前田　死ぬまでやったら**気持ちよくないでしょ。**　元来、「シヌ、シヌ」って気持ちいい時に言う言葉でしょ。「シヌ～」とか「イク～」とか。一番気持ちいい時にパッとね。でしょ？

——いや、でしょ？って言われても。

前田　「あ～、シヌ～…ウッ！…ピクピク」とかないでしょ？　だからわかんないんだよ。あの子に聞きなよ、あの子に。

——あの子ってウチののものことですか。

前田　（可愛らしくおチャメに）気持ちいい時に「シヌぅ～」って言うよね～？　**ののものも**　ほえぇぇえ？？？

——前田さん、お言葉ですが、それはエロ漫画かエロ小説の読みすぎです！……話を元に戻させていただきます！

前田　はい（笑）。

——前田さんを見続けて来た人にとっては、従来のプロレスと比べて選手生命が短いといった表層的な部分まで含めてね、ホントに「落とし前」をキチンとした形でつけたら、前田さんがＵＷＦをやり始めて今までやってきたことが、実に整合性を持ってくるんですよね。

前田　そう。**俺は、朝起きてから夜寝るまで前田日明で生きてきたから。**

——そういう風に思えるようになったの









前田日明
AKIRA MAEDA

は、いつ頃からですか？

前田　ズッとそうだったと思うよ。新弟子の頃は、モロに「前田日明」を出すとイジメられそうだったんで、ちょっと可愛い子ちゃんぶってたの。「前田日明、なんちゃって〜（なんちゃってポーズ）」って（笑）。

——ガハハハハハ。「なんちゃって〜」なんて言ってなかったじゃないですか。いっつもゴンタ顔して。

前田　いや、新弟子の頃ね、練習生の頃。藤原さんとか個性派揃いだったから、ちょっと可愛い子ぶらないとあかんやん。

——新弟子の頃もUWFの頃も、僕は怖い前田日明しか見たことないけど（笑）。

前田　**「コラ、やるんか!?」**ってね（笑）。

——で、前田さんが「落とし前」をつけようとしてる時期に、奇しくも高田×ヒクソン戦って話が出てきましたよね。

前田　うん。

——高田さんも自分がやってきたことに対する、あるいはやれなかったことに対する「落とし前」をつけたいんじゃないかなって思ったんですけど。

前田　それはよくわかるんですよ。ある意味、**リベンジですよ！**　いっぱいいるじゃない。味方のフリして近づいて来て、いろいろとやかく言ってた奴らが。本人は違うって言うかもしれないけど、このマット界には失礼な奴いっぱいいますよ。マスコミもそうだしね。だから、それは高田の気持ち良くわかりますよ。

——前田さんは、『週刊ファイト』の中で「高田は勝っても負けても辞めるつもりじゃないか」って発言してましたよね。

前田　そう思いますよ。もし負けたとしても、高田が現役続けるとしても、それは本当の高田延彦じゃなくて**抜け殻の高田延彦**ですよ。気持ちは別の方にいってますよ。いろんな状況に引きずられて、現役続けることもあるかもわからないけど、ハッキリ言って抜け殻ですね。でもね、ヒクソンとかグレイシーって言ってもね、そんな**大したもんじゃない**ですよ。みんな騒ぎすぎや！

——グレイシーのことをそこまで言い切ってくれるプロレス側の人間って、僕は今、世界で二人しか知らないです。

前田　誰？

——カール・ゴッチと前田日明です！

前田　ゴッチさんから見ても大笑いでしょう。昔、新日本にいたイワン・ゴメスって、今でいうバーリ・トゥードのチャンピオンやったんやで。でもあれは新日本プロレスにやられた奴なんだから。プロレスラーになりたいって言って新日本プロレスに来たんだから。

——イワン・ゴメスは当時、木戸さんとか荒川さんとかとやってましたよね？

前田　**全然かなわなかったもんね。「ナニ言うてんねん！」の世界や。**

——そう、だから「ナニ言うてんねん！」ってズバリ言ってくれる人がいないから、プロレスファンの欲求も溜まってたと思うんですよ。

前田　あんね、失礼なのは、高田とか俺がいろいろ発言した時に「おまえら何にもわかってないくせに」って陰口叩く奴がいるんだよね。ホント失礼だよ、そいつら！　それも業界の連中でそうこと言う奴いるからな。頭の毛ひっつかんで**壁に叩きつけて**やろうかって思うよ‼



「落とし前」と「世界征服」'97

椅子使っていいんなら完全無欠に半殺しにします!!

——今、業界の連中はプロレスをナメきってますよ、ホントに。俺でもブッ殺してやろうかと思う連中もいますよ（笑）。

前田　まあ、ナメられてもしょうがない連中もおるけどな。そういう奴は排除してほしいね。**『インディー・ホイホイ』**でも仕掛けてほしいね！

——ホイホイときましたか！（笑）。

前田　インディーでもマトモな奴もいるんだろうけど、大多数はね。でしょ？

——でも、「もし高田が負けたら俺が敵を討つ！」って言った時には、久しぶりにジュンときましたよ。

前田　もし高田が負けるようなことがあるなら、変に相手を過大評価しすぎてしまうか、よっぽど体調悪いか、嫁さんに怒られたか、どれかしかないと思うね。順当にやったら**負けるなんて全然思わへん。**って言うか、負けることを考えること自体「エ〜ッ？」って思うもん。

——でも、もしやったとしたら業界の予想では、8対2くらいでヒクソンの勝利ですよね。

前田　へぇ〜、あ、そ（ブスッ）。

——だから何でそこまでプロレスがナメられちゃったんでしょうね？

前田　それはしょうがないっしょ！　俺らが新日本とかで一生懸命やってたのに、大仁田みたいなのが、**ドボッ**とああいうのをやり始めて、ああいうのもプロレスですなんて言うんじゃ、そりゃ**ナメられますよ！　でしょ？**　それはマスコミの責任でもあるしね。**味噌糞一緒**にしちゃったからね。山本小鉄さんにコーチしてもらった俺らのプロレスとは、ぜ〜んぜん違いますよ。

——そこでね、ヒクソンのことでいうと「何で前田が先に行かないんだ？」ってことになるでしょう。

前田　いや、高田が先にやるって言ってるんだから、様子見てるだけだよね。だいたい何だってそんなヒクソンで大騒ぎすんの。でしょ？　あのー、**『ミスタードーナツ』のCM**であるじゃない。

——は？

前田　「ストレス、ストレスって言うけどサラリーマンってそんな大変か〜？　ドーナツも食べれるしねー！」ってあるじゃない。

——ダハハハハ。真似してる。

前田　あれでね、俺と高田が会話したら**「グレイシー、グレイシーって言うけどそんなに強いんか〜？　ドーナツも食べれるしねー！」って、そんなもんスよ。**

——ガハハハハハ、そんなもんスか！　素敵だ！　やっぱり、前田日明は非常に素敵なプロレスラーですよ。

前田　グをクに代えたらクレイジー。クレイジー柔術や。

——そのダジャレはあんまり素敵じゃないですね（笑）。で、その高田選手に去年会った時に、「プロレスにプライドを持つ」って言ってたんですよ。前田さんの場合はプロレスにプライドを持てないと言いながらも、一番持ってるというのが伝わってくるんだけど、高田さんの場合は、「高田さんがプロレスにプライドが持てなくなったら、じゃあどうすんだ？」って思っちゃったんですよ。

前田　あいつは自分なりに、自分のできることやったんでしょ。やっぱスタートラインで猪木さんの大ファンで入ってきた人間と、全然関係なく**サーカスのスカウトマン**みたいな新間（寿）さんにさらわれてきた子供の違いでしょ。

——サーカスのスカウトマンにさらわれたアキラ君！（笑）。

前田　小っちゃい頃に夜遅くまで遊んでいると「サーカスのおっちゃんにさらわれるよお」って言われたけど、新間さん、まさにそういう感じだったね（笑）。

——だから高田さんが猪木さんに憧れて入ってきたからこそ、プロレスにプライドを持てなくなったと言うのは、これは業界にとっても大問題なのに、誰も問題にしないんですよ。

前田　だから、高田の場合、それにこだわってやってきたけど、やっぱり何か違っちゃったんじゃない。ほんで、**ニュースキャスター**なんかやったりして、そのおかげで関係ない悪口がいっぱい出てきたでしょ。それは、高田がプロレスラーであるっていう所から来てるわけでしょ。で、また身内っていうか、マット界にいる奴は、後ろから切りつけて来たり、刺してきたり、足引っ張ったりする奴いっぱいいるじゃないですか。「頑張れよ！」って気合いを煽ってくれるならいいけど、後ろからも切りつけられるし、何かって言えば叩くし。じゃあ一体俺、何のためにやってんだ⁉ってなるでしょ。ほんでドームかなんか見たら、俺、ホ〜ント**「ええーっ!!　これがプロレス〜？」**って思ったね。

——ああ、新日本との対抗戦ですか？

前田　ちゃう、『週プロ』でやったじゃない。

——ああ、4・2！（95年）。

前田　そう、見ててコレと一緒にされるんやったら、やだなって思った。必要のない人間が多すぎる。**ヤマ師**みたいなのが、ワーッと集まってるみたいやな。手軽にプロスポーツマンになれて、手軽に有名になれて、ある程度金になりそう、その上強そうと思われてエエなぁって感じでやってる奴ばっかりでしょ。何言ってんのや、あんな**中牧**（昭二）みたいなのが。俺やったら、あんなん**思いっきり半殺し**にしたるわ!!


——うわー。

前田　いや、ホンマに。椅子使っていいって言うんなら、**完全無欠に半殺し**にしますよ！　キレーに!!　寸止め、全然心得てませんからね。

——キレーに畳んであげますって感じですね（笑）。凄い。でも、さっき小鉄さんの名前が出ましたけど、前田さんたちが前座でガンガンやってた頃のプロレスがやっぱり一番熱かったですよね。

前田　面白かったね！　当時はその場にいたから生々しすぎてそうは思えなかったけど、今考えると一番楽しかったよね。巡業なんて修学旅行みたいなもんだったし（笑）。

——この前、「星野（勘太郎）さんとか長州さんと、真っ向からやり合ってた頃が一番面白かった」みたいなことも言っ


前田
AKIRA MAEDA
日明



「落とし前」と「世界征服」'97

てたじゃないですか。これは第1次UWFが潰れて、新日本に出てた頃のことですけど。

前田　全部自分の責任の上で何でもできたからね。失敗したら自分で全責任負えばいいし、成功したらみんなのためだし、ってそういう気持ちがあったから。今なんか、みんな口開ければ「自分のため、俺のため」って。**自分のためってナンボのもんじゃや！**　今、ロマンとか言うけど、低いよ。要するに自分のためでしょ？　俺らが言ってたのはロマンじゃない、**ビジョン**ですよ、**ビジョン！**　志ですよ。自分が良くなるイコール周りも良くなるんですよ。周りが良くなる中に自分もあるから良かったんですよ。

――「中途半端にやって陰でゴチャゴチャ言われるよりは、思いきりやり合えて良かった」とも前田さんは発言しているんですよ。この「思いきりやり合えて良かった」というところにもジュンときちゃったんですけど（笑）。

前田　そうですよ。今考えても思うのは、吉田さん（長州）にしても星野さんにしても、バッタリ会ったら**「おお、元気かーっ！」**ってできてね、それがテライなく聞こえるんですよ。何でなんだろうなって思ったら、やっぱり思いっきりいって、思いっきりやり合ったからなんだろうね。

――それは選手同士にしかわからないもんですかね？

前田　いや、人間誰もがそうだと思いますけどね。小賢しくなってるでしょ、今の人間って。で、**感情を出すのはダメ**だとか言うじゃないですか。でもね、十人十色でしょ。同じように考えて、同じように言ったりしてたら十人十色じゃないんですよ。じゃあ何が十人十色になるかって言ったら、その人独特の個性という**感情があるから**じゃないですか。

――それは大賛成です。

前田　でしょ？　その人の色を付けるためには、お互いの喜怒哀楽を交換しないと、ホントの付き合いとかホントの愛かどうかわかんないじゃないですか。それが今、**欠落**しちゃってるんですよ。

――でも星野さんとか長州さんとかと真っ向からやり合ってた頃は、あまりにもリアルすぎちゃって、周りの人たちは「迷惑を被った」みたいに感じた人も多かったと思うんですよ。

前田　その頃なんて、○○○○、バッタ、ミミズ、その下に前田日明くらいに言われてたからね。

――ガハハハハハ。凄い！

前田　で、星野さんと正面衝突した時は、新日本とUWFの交渉を倍賞（鉄夫）さんがやってたけど、全然現場に伝わってこないんですよ。途中に関所がいっぱいあって、何わけのわかんないことを言ってんだってことがいっぱいあってね。で、俺も伝わってるもんだと思って行ったら全然伝わってなくて、もうめんどくさいからワーッと言ったわけですよ。向こうは**「いつか潰してやる！」**とか何とか言うんだけど、でも、みんなリング上だと何もできないんですよ、誰も。だからたまに外人使ってきたりね（笑）。

――またデカイ（アンドレ・ザ・ジャイアント）のを使ってきましたよね（笑）。

前田　で、外人も潰したろか！と思ってると、リング上で耳元で**「アイ・ライク・ユー」**とか言われたりとかしてね（笑）。そん時、颯爽と星野さんが来たんだよ、今でも忘れないよ。試合では足取るとかじゃなくて、**ズーッと殴**

り合い。リング降りて控室戻ったら、星野さんが殴り込んで来てさ、そこで第2ラウンド開始!**「どチビ!」**とか言いながら(笑)。

——どチビ!(笑)。だから、その本気でぶつかり合える時代そのものにもリアリティーがあったし、やり合ってるお互いの感情にもリアリティーがありましたよね。だからアルティメットなんかは闘いとしてはリアルでも、リアリティーを感じないんですよ。人間と人間が闘ってるっていう気がしないんですよ、全然。

前田 覚知に交わるは証則にあらず!

——へ?

前田 人間がアッて思って認識できるもんていうのは本物じゃないですよ。考えて判断できるもんは本物じゃないですよ。本物は直感と判断がバチッと合うもの!でしょ?

——長州さんといえば、前田さんとの対談で、「俺達はUWFによって進化させられた」って言ってたじゃないですか。

前田 嬉しかったですよ。ずっと**Uがどうのこうの**ってそんなことばっかり言ってたでしょ。あの頃は羨ましいなって思ってたから。男も女もそうじゃないですか。どっちかが思いっきり追っかけても、結局上手くいかないでしょ。**『愛』と『憎』は背中合わせ**で、ダメになったらガンガン悪口言われるでしょ。それは性格の問題じゃなくて、当たり前の話。

——長州さんは「Uは枝の先っぽの雫だ」とまで言ってましたからね。

前田 「雫」とか言われたから対抗しないと。こっちは、雫の中にいるのは**ミジンコ**や! ミジンコより小っちゃいのは**ゾウリムシ**、ゾウリムシより小っちゃいのは**アメーバー**、アメーバーより小さいのは**細菌**、**ウィルス**、そん次が**長州力**や!って言ってましたよ(笑)。

——凄エ!(笑)。そういう発言まで含めて、やっぱりみんな本気でやり合ってましたよね。

前田 そうそう。ムキになってた(笑)。

——でも、その当時はホントに長州力に対して頭にきてたわけでしょ?

前田 きてましたよ! 人の痛いとこ突きますからねぇ。人が一番、頭にくるようなことを言うわけだから。**「雫」**とかね。俺は枝の先の雫じゃなくて、親父の雫から生まれたんじゃ!

——ガハハハハハ。

前田 そう言い返そうと思ったけど、それ言ったら下品になるかと思ってやめたの。いかん! 前田日明はインテリジェンスを目指すべきだ!**「親父の雫」**じゃダメだって(笑)。

——いや、でもあの対談は前田日明らしくない! 長州力らしくない!っていう声もいっぱい入ってきますよ。僕も最初読んだ時、そう思いましたからね。

前田 いや、みんな自分のレベルで物を考えちゃダメ。今の自分のレベルだったらわかんないこともいっぱいあるんですよ。人間20歳になって初めてわかることもあるし、30歳、40歳になって初めてわかることもあるし、歳を取るとはそういうことですよ。よくいるじゃないですか、レスラーでもね、青っパナ垂らした**ハナタレ君**みたいなガキがね、「僕、試合を楽しめましたぁ」って。アホかオマエは、ハナタレ小僧が! 今のレベルで楽しめたんなら、将来後悔すんのはコイツやと思うわ。なんか、そういうこと言うのかっこいいと思ってるんだよね。

——あの、世の中で最も冷たい眼差しって「無視」じゃないですか。無視されるって一番冷たい眼差しでしょ。で、前田日明っていう人を僕が定義してみたんですよ。「何で人のこと勝手に定義すんねん!」って言われたらそれまでなんですけど(笑)。

前田 (頷く)まあいい、許しましょう。言ってみなさい(笑)。

——前田日明って人は「絶対に無視しない人」ですよね?

前田 **あ~、そうかもな。**

——目に入る物すべてを無視せずに本気でぶつかって行くじゃないですか。

前田 ワタクシは**好奇心旺盛**なだけ! 私は好奇心が強い男!『私は好奇心の強い女』って映画あったじゃない?

——まったく知りません!

前田 **スウェーデン・ポルノの名作!(笑)。**

——ガハハハハハ。しかしロクなこと話題にしませんね(笑)。ま、そういうポルノ映画に対しても、無視せずに本気でぶつかって行くわけですよ、前田日明は。

前田 そうそう(笑)。

——だから、今回も引退という大きなテーマに前田日明が本気でぶつかって行ってるんだなってことを感じたんですよ。で、引き際ということでいえば、パンクラスの船木誠勝選手も、「譲れるものなら、若手に早くメインを譲りたい」って言ってますしね。

前田 船木って何歳?

——まだ27~28歳くらいですよ。

前田 ケツの青いこと言ってるよな。**土壇場**を経験してないからね、彼らは。だからね、いつのまにか責任感が希薄になっていって、20代なのに「引退する」とかそういうこと言うようになっちゃうんですよ。でしょ? **高橋(義生)君**みたいに、いい選手いますよ、俺から見ても。いい選手いてもあれじゃどうしようもないっしょ、ハッキリ言って。


——船木選手の「前田さんのところとは二度と関わることはない」っていう発言がありましたけど。

前田 あいつら俺のことといろいろ言ってるみたいだけど、**あいつらにそんなこと言われる筋合いないよ。**ハッキリ言えば、俺がずっと食わしてやってたんじゃないですか。俺は(第2次UWF時代は)社長でも何でもないし、株持ってるわけでもないのに、俺の自分の持

前田日明
AKIRA MAEDA

そこで第2ラウンド開始!「どチビ!」とか言いながら

「落とし前」と「世界征服」'97



ワケのわからん奴が、プロレスって言葉を輪姦してる

前田日明
AKIRA MAEDA

ってる金から、あいつらの毎月の給料出してやってたんですよ。試合もしてないのに。それなのに、お礼の一つも言えんと、ああやって悪口言われる筋合いないッスよ。でしょ？　船木なんか前のUWFのことも悪く言ってるけど、だったら来ぃへんかったらええやないか！　当時のUWFは、藤原さんとかいろんな個性派揃いで、あん中の人間を全部食わしてって、なおかつまとめてやってくにはどういう方法がええんかって、とくに**高田、山崎、俺**の3人で、そんなことばっかり考えてたんですよ。それを知らんとね、**お門違い**のこと言ってる場合じゃないですよ。そんな難しい状況にありながらも、ちゃんと新弟子とか全員食わしてましたもん。だから俺らがやってたことは「**空想**」じゃなかった。ちゃんと「**理想**」やってましたよ！　で、実際に文句ある人間も、ちゃんと使ってきましたよ。あいつらは文句ある人間には文句しか言わないでしょ。文句どころか関わり合いたくないって。それやったら、もう何にも言うなよ！　俺はやるだけのことはやりましたよ。やってないんやったら言わないですけど。他人から見たら、不器用だから「大したことないじゃない」って言われるかもわかんないけど、**やりましたよ！　だからハッキリ言いますよ！**　でしょ？　アイツらに俺が反論するとしたら「**そこまで言うんやったら、何しにUWFに来たんや！」、それだけです。**後になって当時のUWFまで告発するんやったら、それはオマエ話がちゃうんじゃないか！って。UWFどうのこうの、藤原組どうのこうのって、それはおかしいですよ！　それやったらUWFも藤原組もなしで、新日本からいきなりパンクラスをやれば良かったんですよ。でしょ？

――船木選手は、UWFはパンクラスだと思って入ったって言ってましたね。

前田　それも**おかしな話**ですよ！　ちゃんと俺、説明しましたもん。それで「わかった」って言って来たんですから。アホな子が言うように、後になって自分の都合のいいように変えたらダメですよ。

――今、前田さんが引退する、高田さんもヒクソン戦が終われば辞める辞めない、船木さんも若手に譲る譲らない、UWFに関わってきた人たちは……。

前田　でもね！　ハッキリ言って、**俺とか高田**が辞める辞めないって言うのと、**船木**が辞める辞めないとか言うのは、全然次元が違いますよ。あいつ、だって若手とかにも何にも責任とってないじゃないですか。経営的なこと何かしましたか？　でしょ？

――だから、それをやりたくないんでしょうね。前田さんたちが、経営的な面で苦しんでるのを見てるから、経営にはタッチせずに純粋に一選手としてやりたいって気持ちもあるんじゃないですか。

前田　でもそれ、船木がやらなきゃ**誰がやるの？**　逃げてるだけじゃないですか！　それを言うのは構わないんだけど、親父は親父の役割があるわけじゃない。みんな自分の役割を忘れちゃってんだよ。俺だって高田だって、経営努力っていう面では、すごく苦労したと思いますよ。俺だってええカッコ言いたいよ。言いたいけど、やらなきゃいけないじゃない。やんなきゃ会社も動かないし、社員だって選手だって食わしていけないんだから。船木がそういうこと言ってるんだったら、あいつこそ**汚い大人**だよ。大人っていうのは、自分で責任取りながら、なおかつ志とか理想とかビジョンとかを持ってる人を大人って言うんですよ。でしょ？　アイツが「大人になりたくない」って、そういう意味で聞くとよくわかるんですよ。ああ、なるほど、大人になりたくない、わかるよ。なれないもん。「**よしよし**」ってね。ウチだって去年とかしんどかったことあったけど、俺はリングス名義で一銭も金借りてないですよ。全部自分ですよ。リングス本隊は、金銭の面で一銭も傷ついてないです。全部自分です。しかし、（モーリス・）スミスに勝った時くらいには、「**うわーかっこいいなぁ、渋いなぁ」「あ～船木の時代来るんだろうなぁ」**って思ってたけど。

――一時期ベタ誉めしてましたよね。

前田　うん、良くなってきたな～って思ってたけど、こないだの（前号の船木インタビュー）読んで、「**おまえ、どないしたんや!?」**って、思わずこうやって揺すったわ（笑）。

――ガハハハハ、そんな本を揺することないじゃないですか。

前田　**脳味噌の皺**、元に戻してやんないと。

――さっき話の途中だったんですけど、前田さんも高田さんも船木さんも、UWFのトップの人たちが、今ハッキリ言って、みんな死に場所に向かってる雰囲気じゃないですか。

前田　死に場所…そういうもんかなぁ。

――選手としての死に場所と言うか、みんなそれぞれが「落とし前」をつけたがってる時期だと思うんですよ。第1次UWFで、脳天をハンマーで打ち砕かれたような衝撃を受けた僕としては非常に寂しいものもあるんですけどね。

前田　UWF嫌いだって言ってたじゃない！

――いや、僕は「第2次は第1次に比べると好きじゃない」って言ったんです。

前田　あー、**嘘だね嘘だねェ**。なんか話がちゃうなぁ（笑）。誰かをインタビューしてるの読んだら「UWFは嫌いです」って言ってたじゃない。

――それは誤解です！　僕はグチャグチャッとしてる中から何かを生みだそうとしている第1次Uに、もの凄いショックを受けたんですよ！　第1次Uはハッキリ言って今でも一番好きな団体ですよ。

船木たちは汚い大人だよ あいつらは"コトナ"です

前田日明
AKIRA MAEDA

前田　**そうでしたかっ！　よく存じ上げませんで、失礼致しました！（笑）。**

―くっそー、茶化されてる（笑）。だから僕は第1次UWFでのめり込んで、キレイに整備された第2次ではトーンダウンしたのが正直な気持ちですけどね。だから、今、俺がバトラーツが好きだっていうのもその辺なんですよ。まぁ彼らはキャリアが少ないから第1次UWFと比べるのは酷かもしれないけど。

前田　いや、でもね、バトラーツの選手は凄い頑張ってますよ。石川とか島田とか。船木と鈴木にね、**爪の垢**でも煎じて飲ませてあげたいですよ。

―あの二人の爪の垢を！（笑）。

前田　俺、正直言ってバトラーツ旗揚げした時に「半年もたないだろうな」って思ったけど、エッチラオッチラいろんなことやってるもんなぁ。あれは大したもんだよ、ホント。でもバトラーツの選手には共通する悪い癖があるんだよね。タックル潰されて上に乗られると、もう何もできないから。亀になって凌ぐしかないから。あれをどうするかってことだけど……。**教えないも〜ん**（可愛いこぶって）。

―ガハハハハハ、何じゃそりゃ。

前田　だってぇ、**リングスじゃないんだもん！**（非常に可愛いこぶって）。

―ガハハハハ。……参りました（笑）。

前田　練習してるとこ見たことないからわかんないけど、レスリングだけじゃ食えなくて仕事してたりするんでしょ？

―アレク選手なんかはグッズ管理までやってますね。

前田　それで**あれだけの身体**作って、あれだけのことができるってことは、最低限の真面目さはあるってことだから。真面目にズーッとコツコツやってる人は、やっぱり強くなりますよ。言ったことを素直に受け止められる奴はね。頭と性格が不自由な人はダメやね。

―ま、バトラーツの話はともかく、このまま前田さんが綺麗に幕を下ろして「落とし前」をつけたら、リングスはこの先、実質的にプロレスとは関係なくなっちゃうわけですか？

前田　俺は、その方がいいと思います。「プロレス」という言葉は傷つきすぎですよ。周りの人間がごちゃごちゃやりすぎ！　もうワケのわからん奴がやってきて、毎日毎日**「プロレス」って言葉を輪姦**してるからね。

―輪姦！　パンクラスにしても、船木、鈴木がもし辞めちゃったら……。

前田　でもね、あいつら海外言ったら「プロレス」って言葉、これぼっちも言ってないよ。「シュート・ファイティング」って言ってるでしょ。「プロフェッショナル・レスリング」って使ってないですよ。そういう風に言うんだったら日本でも「プロレス」って言っちゃダメですよ。あいつらこそ汚い大人ですよ。パンクラスは「俺らはプロレスだ」って言ってるんだから、プロレス行けばいいでしょ。あいつらは**"コトナ"**（子供の純粋さ、残酷さと大人の卑怯な部分を持つ、という意味の前田用語）ですよ。

―あ、『SPA』でも、佐山さんのことをそう言ってましたね（笑）。ズバリ聞きますけど、その佐山さんとの和解はあり得ないんですかね？

前田　だって思いっきり**やり合ってない**んだもん。

―思いっきりやり合ってないから、しこりが残ってる？

前田　無理でしょ。俺がその気になっても向こうはその気になれないですよ。スケールが違いますよ。30センチの定規で1メートルの定規は計れないでしょ？　5メートルしかない巻き尺で、**18メートルのティラノサウルス**計れないじゃないですか。でしょ？　それと同じですよ。長州力とああなったのは、そういう定規があったんですよ。まぁ、これが器って言うんですかねぇ。エッヘッヘ。

―また始まった（笑）。

前田　エヘン！　自分の言葉に感動したなぁ。遠くを見ちゃったりして（笑）。

―だから長州さんじゃないけど、UWFという概念があったからこそ、今のプロレスはもってると思うんですよね。でも、リングスはリングス、パンクラスはパンクラスってなっちゃったら、また"新しい形のU"が生まれるのを待つしかないですよ、プロレス界としては。

前田　まぁ、なるようになるでしょ。

―そうかぁ、前田さんはもうプロレスと関係なくなるのか。寂しいなぁ。

前田　40年後の人間国宝目指して、**鍛冶屋**さんにでもなりますよ。トンテントンテン（笑）。

―ガハハハハハ。そういえばこないだの『週刊SPA！』のインタビュー見て、一番びっくりしたのは、ターザン山本についての発言なんですよ！

前田　何で？

―「『週プロ』の山本編集長を、業界で一致団結して降ろしたよね。だけどその彼を踏み台にしてのし上がった人間も、いっぱいいた。生活的にも社会的にも今の彼はきっと苦しいはず。なのに、世話になった人間が今の彼に力を貸してるという話は聞いたこともない」実に前田さんらしい発言ですよね、これは。

前田　だってそうでしょ。もし世話になってたら、**何とかしてやろう**って思うのが普通でしょ。

―だって前田さん、つい3〜4年前までは、ターザン山本のことを「髪の毛掴んで引きずり回して、その辺のたうち回してやる」って言ってたんですよ。

前田　ああ（笑）。でもね、何か自分が生きた世界だから、敵ながら**あっぱれ！**であって欲しいじゃないですか。

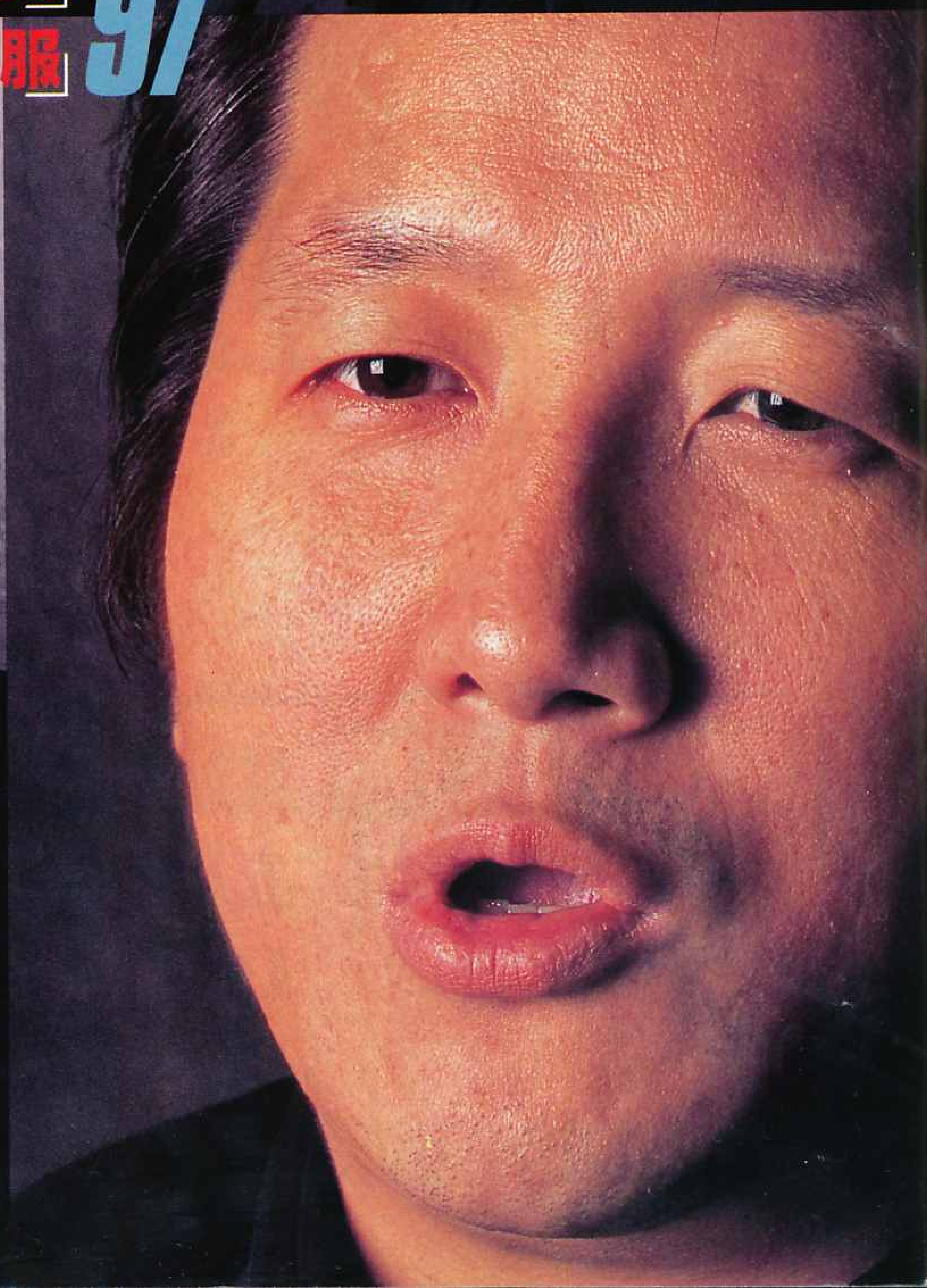
―ターザン山本とは思いっきりやり合





「落とし前」と「世界征服」'97





「落とし前」と「世界征服」'97

ったって感覚はないんですか？

前田　何でやり合えるんや！ あんね、アイツね、リングス旗揚げして間もなくの頃、「山本の首根っこ掴まえたら、俺は思いっきりぶちかましたるからな」って言ってたら、「山本さんはホントは前田さんのファンだって言ってましたよ。山本さんから伝えてくださいって言われました」って人から言われてね。「なにー！　そうかぁ？」って（笑）。俺が**爆発**しそうになるとそうやって言うんですよ。それがあの人なりの寝技。**汚い大人**の典型です。僕は**キレイな大人**ですから。

——でもターザン山本が前田さんを好きだっていうのは、僕が命を懸けて証明しますよ、ホントに好きですよ。

前田　俺は嫌いや！

——ガハハハ。いやまぁ、それは別として（笑）、だって自分で前田さんとは「一卵性双生児だ」って言ってますもん。

前田　何でやねん！　俺、アイツと一卵性双生児だったら1分後に自殺してるわ。「お父様、お母様、今までお世話になった皆様、どうもありがとうございました。私はターザン山本と一卵性双生児ってわかったので自殺します。さよなら」って。

——ダハハハ。で、そのターザン山本から伝言があるんですよ。

前田　何？

——「ボクは同情されるのが、一番嫌いなんですよぉぉ」って言ってました。

前田　当たり前やん、そんなの。わかって言ってるんだよ。人間誰もがそうじゃない、**同情**されるのが嫌やん。

——前田日明にだけは同情されたくない！　とも言ってました。

前田　人間、哀れられるのが一番こたえるんですよ。

——あ！　もしかしたら、確信犯でやったんですか？

前田　そう、**確信犯**です（微笑）。

——うそぉ〜、またぁ〜。後付けでしょう、それ。前田さんがそんな計算して発言するとは思えないもん（笑）。

前田　物の哀れを知る心ですね。いうなればこの国の伝統的純粋精神です、ハイ。

——伝統できましたか（笑）。

前田　本物のターザンは**「（声高らかに）アアァ〜」**って言うけど、あっちのターザンだと「（うなだれたように、溜息混じりで）あぁあ〜、あぁあ〜、しょうがないな」って。栄養失調のターザン！

——ターザンとの電撃和解なんてのは絶対にありえない？

前田　わかんないね。そんなに会う機会も少ないだろうし。ま、20年後くらいに、机に足乗せて猫抱きながら、最高級のワイン飲んで「何？　山本がギャラ半分よこさない？　よし、ミスターX行け！」ってね（笑）。

——タイガーマスクだ（笑）。

前田　リングスの理想郷は**『虎の穴』**だから。

——じゃあ、これから「落とし前ロード」を歩む前田日明から、読者に何かメッセージをお願いします。

前田　俺を見るな！　自分を見ろ！

——おお〜っ。パチパチパチ。キレイすぎる！（笑）。

前田　却下照顧、足元を見なさい！……また自分の言葉に感動して遠くを見つめてしまった（笑）。

——なんか今日はめちゃめちゃイケますね（笑）。

前田　これがパッションです！ パッションだから悪口でも思いっきり言うしね、冗談言って元気になるんです！（笑）。でもね、ほんとにね、プロレス自体もこの十年が過渡期だね。



——リングスの今後はどうなんですか。

前田　まだまだこれからですよ。やりたいことはいっぱいあるんだけど、先立つ物が足りない、そんな状況ですよ。

——よし、『紙プロ』で出しましょう！

前田　ありがとう！　じゃあその貸りは**カラダでお返ししますから。もうどうにでもしてっ！**……てね。

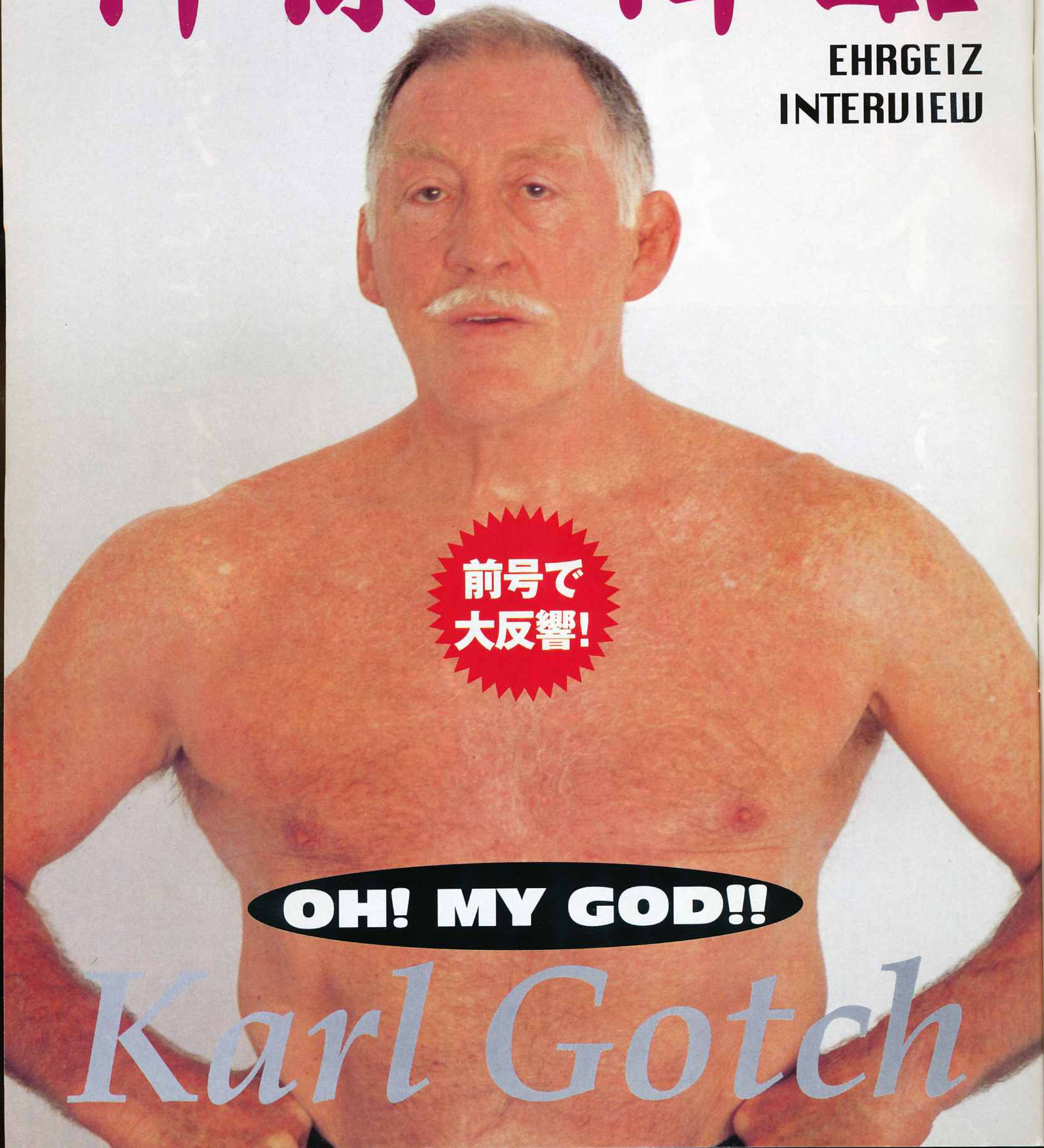
——ダハハハハハハ、スタジオさん、お返しします（笑）。

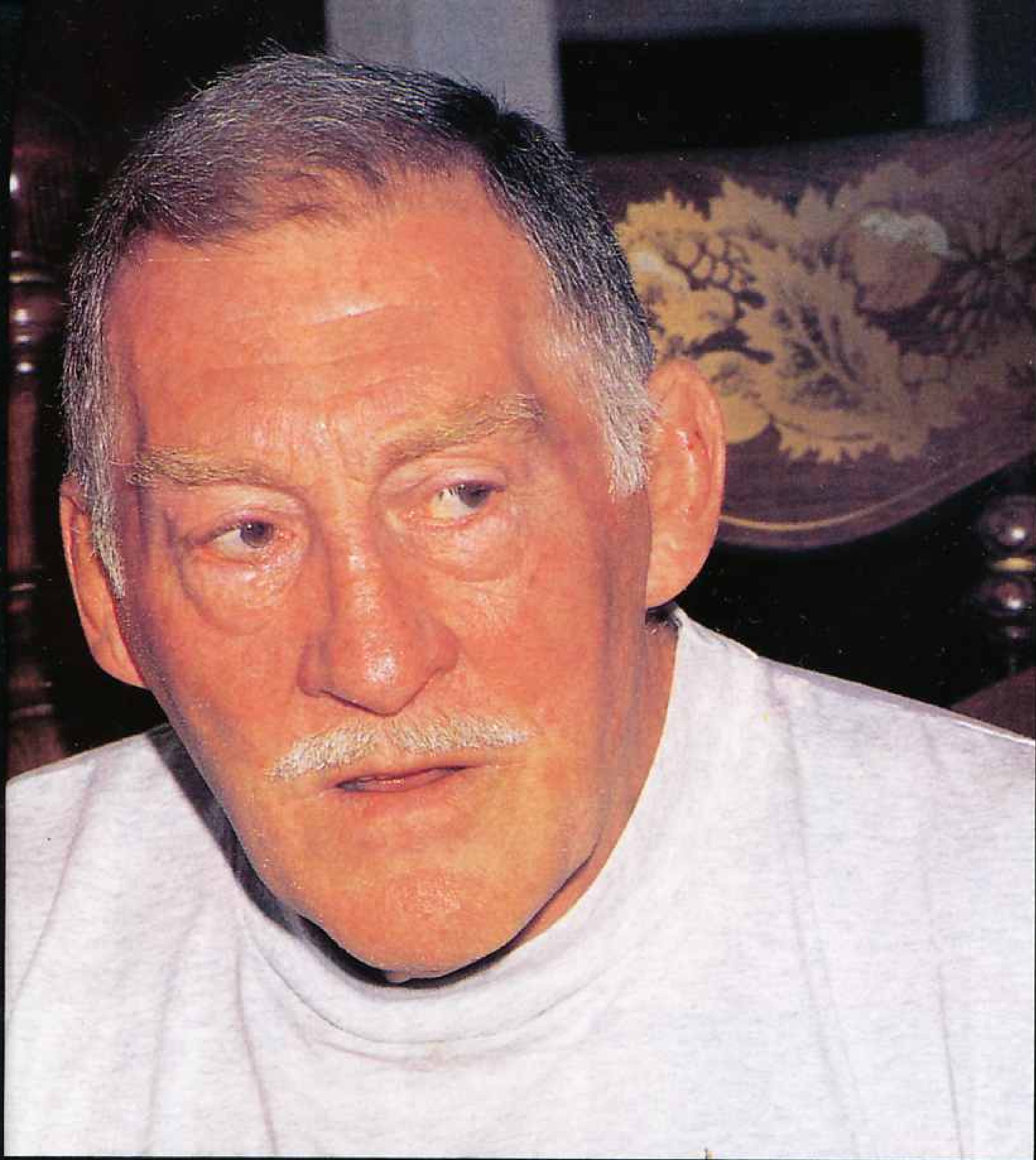
〈97年5月29日、六本木アートセンターにて収録〉

衝撃のカール・ゴッチインタビュー第2弾!

神様再降臨

EHRGEIZ
INTERVIEW





どう猛なことで有名なアメリカン・ピットブルの愛犬・ジャンゴが別室で吠えるなか、神様は興奮を静めるように、スーッと息を吸い込むと我々を見据えるようにこう言った…

GOD BLESS THE RING

interview by Nobby Yamaguchi
photographs by Yuri Saito
Cordinated by Mika Haneishi
Special thanks by WORLD PANCRASE CREATE／Show

「グレイシー？彼らは一流のビジネスマンだ!!」



EHRGEIZ INTERVIEW

Mr. Karl Gotch

アルキメデスはこう言った。「レスリングに必要なのは操縦桿だ」と

●強すぎるがゆえの悲劇——選手としては決して恵まれなかった神様は、現役を退いてからも、「バック・トゥ・レスリング」という警笛をマット界に鳴らし続けた。「イージーなものがはびこり過ぎている」——神様の再三の啓示により、日本には、新日本のストロング・スタイル、そしてUWFといった世界に誇るべきスタイルが萌芽した。

しかし、いまや世界のプロレス・シーンをリードしている日本マット界に対しても、神様はいまだに厳しい目を向けていたのだ。

——ゴッチさんはアルティメット・ファイティングは見たことありますか？

ゴッチ （渋い表情で）最初の頃は見ていたんだが、見ているうちに、もうこいつらは何もできないってわかってね。つまらなくて今は見ていないよ。**奴らは、何にも持ってない！** 何も持ってない奴らがやってるのを見ていたって面白くないだろう。ところで先週の月曜日、ビル・ミラーが死んだんだ。

——エエッ！

ゴッチ 私も驚いたよ。ジムでトレーニングしていて、駐車場に出た途端、心臓発作で死んだんだよ（62年にショーマン派の極みともいわれた、時のNWA世界王者、バディ・ロジャースをビル・ミラーとゴッチは、控室で袋叩きにするという"事件"を起こした仲である。ビル・ミラーもまた、その「強さ」については伝説を残したレスラーだ）。

——いくつだったんですか？

ゴッチ この6月で70歳になるところだった。私もこの8月で**73歳**になる。ちなみに私は獅子座だよ。

——あ、僕も獅子座です！

ゴッチ そうか。一つキミに言っておくが、**獅子座はアスホールだ（笑）。** 頑固で困る。

——獅子座は一生金に恵まれないんですかね（笑）。

ゴッチ ハッハッハッハ。アイ・ドント・ノー（笑）。しかしマネーがすべてじゃないさ。自分がいかに幸せに暮らせるかが第一だ。

——それでアルティメットの話なんですが（笑）。

ゴッチ ハッハッハ、そうだった。今、アルティメットでは盛んにレスリングのバックグラウンドを持った奴をタレントとして上げているらしいが、**アマチュアのレスリングとプロのレスリングは別物だよ。** 知っての通り、アマチュアはピンフォールを狙うものだが、プロフェショナル・レスリングのフィニッシュはサブミッションなんだ。その秘密は……、

——テコの原理！

ゴッチ YA！ その通り。テコの原理を応用する。アルキメデスをはじめ、古代ギリシャ時代の数学者や哲学者は、みんなレスリングをやっていたそうだが、アルキメデスは、こう言ったらしい。「レスリングで必要なのは、操縦桿だ」とね。**「操縦桿をくれれば世界を動かしてやる」とね。**

——「操縦桿」という魔法があれば、どんな奴でもコントロールできると。

ゴッチ そういうことだ！ ハッキリ言って、アルティメット・ファイターと呼ばれる輩は、誰もその操縦桿を持っていない！ おまけにキックの仕方も、パンチの打ち方も知らないんだよ。ボクシングやキック・ボクシングはダウンしたら離れるが、レスリングはダウンしてからが始まりなんだ。ドイツにはこんな意味の諺があるよ。**「牛は立っている時に殺すのではなく、寝かせてから殺す」**とね。レスリングもそうなんだ。

——「なんでもあり」についてはどう思ってますか。

ゴッチ 彼らは客寄せのために「ルールがない」と言っているけど、見せてるものは、すごくつまらんものだよ！

GOD BLESS THE RING

Karl Gotch

ルールというのはなきゃいけないんだ。なぜかというと、面白くするためにはルールがなければならないからだ！ **ルールがないということはゴールもない**ということだよ。

——素晴らしい言葉です。

ゴッチ YA！ いまはアルティメットもルールを少しずつ積み上げてプロモーションを成功させるようにしているらしいが、以前は下になった人間は何もできなくて面白くなかっただろう。**闘いはルールがあって、はじめてできるんだ。** 例えば、寝たままになっていたらカウントされたりとか、そういうルールになれば必然的に闘わなければならなくなるだろう。

——アルティメットの選手の中で技術があるなと思った選手はいますか？

ゴッチ ノー！ いままではない！ アマチュア・レスラーで少し見所があると思った選手はマーク・シュルツだな。そのマークも、結局はアマチュア・レスリングのバックグラウンドだけでね。あんなのが、のし上がれる世界なんだから、大した対戦相手もいなかったってことがよくわかる。

——初期の頃のアルティメットは見てるわけだから、もちろんグレイシー柔術については知ってますよね。

ゴッチ あれはジュージュツではない、**ジュードーだ！** 昔、ジュードーのキムラ（木村政彦）がブラジルに行った時、ジュージュツの人間を倒している。


——エリオ・グレイシーですね。

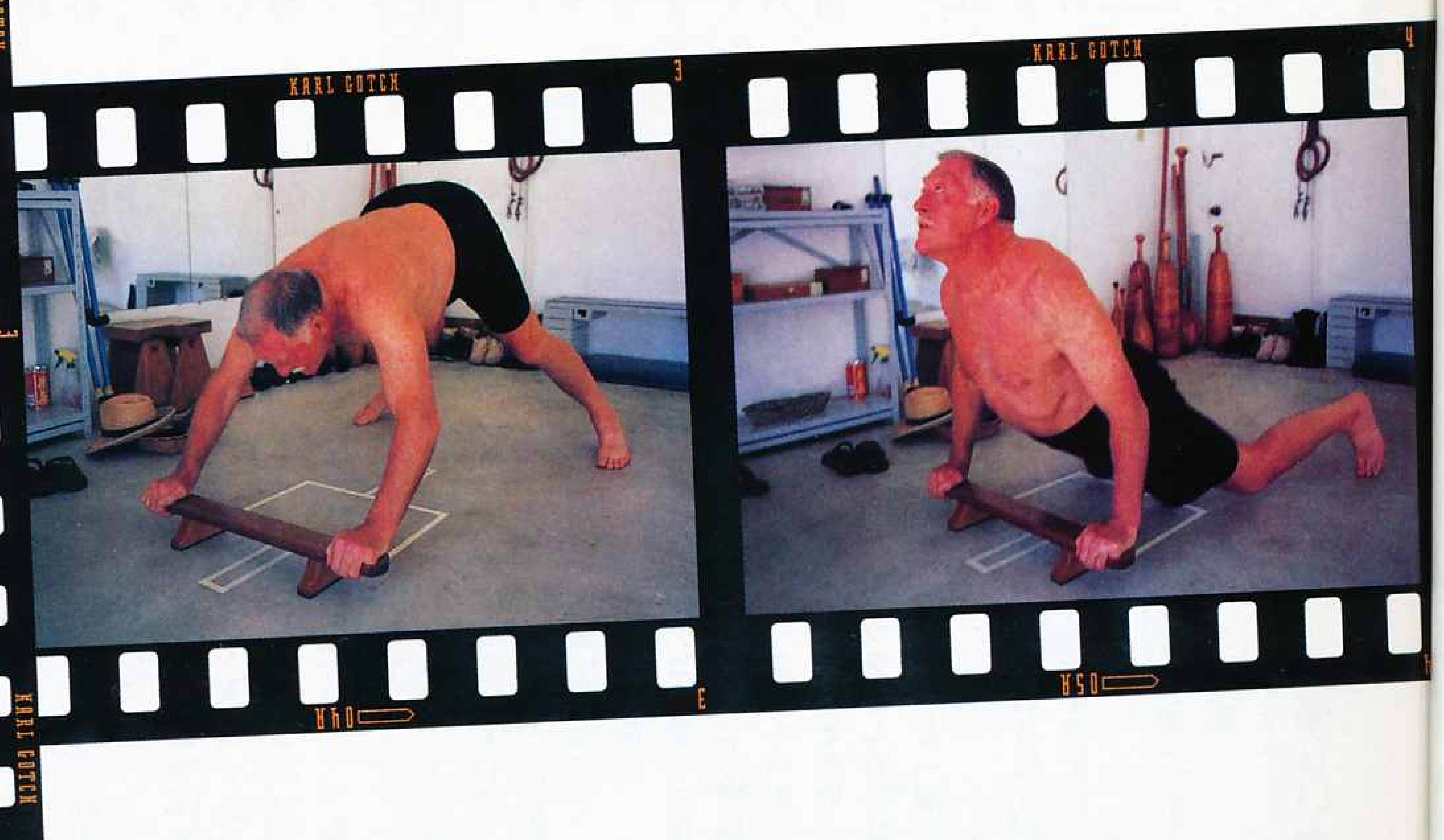
ゴッチ YA！ とにかく**グレイシー柔術は糞みたいなもんだ！** だが、いまはキムラは生きていないから、ジュージュツの奴は、いくらでも

好きなことが言えるだろう！　ちょっと待ってくれ。キムラはマイ・フレンドだよ。
※そう言うと、ゴッチさんは古いアルバムを持ってきて、木村政彦と写っている写真を見せてくれた。
——ゴッチさんから見て、グレイシーには何が欠けてるんですか。
ゴッチ　簡単なことだよ。彼らの寝技は文字どおり、**ただ寝てるだけ**だからさ。（ガード・ポジションは）レディのいる前で失礼だが、あれは売春婦が男を迎える格好だよ。ハッハッハ。私だったらあの態勢からすぐに片づけられるのに、なぜあんなにフィニッシュまで時間がかかるのか理解できんよ。
——ヒクソン・グレイシーとホイス・グレイシーについては、どう思いますか？
ゴッチ　**彼らは一流のビジネスマンだ!!**
——ゲッ！　一流のビジネスマン！
ゴッチ　YA！　彼らは、盲目の人たちをリードしてるだけだ。
——でも、そのヒクソンに日本のプロレスラーや格闘家が次々に敗れてるんですよ。なぜ勝てないんですかね。
ゴッチ　誰がやられたんだ？
——前田日明の弟子や、佐山聡の弟子たちです。
ゴッチ　グレイシーは自分が勝てる相手としかやらないのさ。でも、今の日本人にはハングリー精神がないというのも関係あるかもしれないな。**EHRGEIZ**（エアガイツ＝ゴッチさん曰く、大和魂と同義語らしい）を忘れるな、だ。例えば、戦前はジュードーでもキチンとトレーニングしていたもんだが、いまは黒帯がマネーで買えるそうじゃないか？　笑い話にもならんよ。私が日本のヤングボーイをトレーニングしたら、こんなジュージュツなんて**簡単にやっつけられるさ。**まあ、とにかく、ブラジルから、どんなにいいものが出てきたのか逆に教えてほしいくらいだ。
——ブラジルというかグレイシーには日本人が失った武道精神があるという見方があるんですよ。
ゴッチ　そうだ！　ブラジルにもいいものがあることを忘れていたよ。**確かにサッカーとコーヒーはグッ**

KARL GOTCH PROFILE

本名・カール・イスタズ。１９２３年ドイツ生まれ。８歳の頃からレスリングの道に入り、グレコ・ローマン・スタイルで西ドイツ・チャンピオンとなる。31歳の時に西ドイツでプロデビュー、その４年後にアメリカマットデビュー。芸術的なジャーマンスープレックスホールドと、サブミッションで実力的には認められるものの、妥協のないファイトスタイルで、レスラー仲間やプロモーターからは敬遠される。61年に初来日し、その後も日本マット界に多大なる影響を与え続けている。





アルティメット？糞からホイップクリームは作れないんだよ

ドだ。ハッハッハッハ。だがコンバットではまったくといっていいほどダメだ。彼らは頭がキレるから、いい**「広告」**は出すがね。

——ガハハハハ。いい広告ですか！

ゴッチ　YA！　いつも代わりのグレイシーが必ずいて、いつも埋め合わせができる。**グレイシー1、グレイシー2**とね。まるでアーミーみたいだよ。武道魂があると言うが、それは狡賢いから、そういったいい言葉を見つけるだけなんだ。私の場合は日本では「神様」と呼ばれていることを知っているが、**デストロイヤーほど稼げなかったよ（笑）。**私はトレーニングのコーチばかりだ。やっぱりキミが言ったように獅子座の男は一生貧乏なのかもしれないな（笑）。**イノキ**も自分が助けて欲しい時だけ私を呼んだよ。**サヤマ**も同じだ（シューティングの勃興期にゴッチはコーチとして来日していた）。

——その佐山さんはまたタイガーマスクとしてプロレスに復帰したのは知ってましたか？

ゴッチ　（そっけなく）いまではサヤマもビジネスマンだよ。9年間もなんの音沙汰もなかったのに、2カ月ほど前に急に電話がかかってきて、「来てくれ」と言い出した。いまでも「来てくれ」と頼まれてるが、彼のことはもはや興味の外になってしまっているんだよ、残念ながら。**フジナミ**も同じだよ。人間はビッグになると顔つきが変わる。要するにマネーが絡んでくるからね。変わらないのはフジワラだ。**フジワラ・イズ・ナンバーワンだ！　オサム・キド**もグッドだ。

——マイ・サン、ですね。

ゴッチ　YA！　マイ・サン！　いまは**ミノル・スズキ**だ。靴をくれたから言うわけじゃないがハートがある。いいかい、欲が人に嘘をつかせるんだ。私が父親から言われてきたのは、「嘘をつくことが人を泥棒にさせ、泥棒になることが人を人殺しにさせる」ということだ。

——では前田日明のことはどう思ってますか？

ゴッチ　**HE IS OK！**

——オォー。

通訳の羽根石さん　でも、ゴッチさんの「OK」って「まあまあ」ってことですからね（笑）。

——ま、まあまあなんですか？（笑）。

ゴッチ　いや、彼はガッツがある。**マエダはグッドだ。**

——高田延彦はどうなんですか？

ゴッチ　（そっけなく）ノー。**タカダ**は、この私に向かって「あなたに一体何ができるのか教えてくれ」という態度だ。これだけで、どんな人間かわかるだろう。モウ、サヨナラ（日本語で）。**パンクラスもおかしい！**「パンクラス」という言葉の中にはオールド・インド・レスリングも含めてすべてのレスリングが入っているはずだ。それなのに、「ハイブリッド・レスリング」と付け足してプロモーションするのは、まったくおかしな話だよ。

——いま日本のプロレス界は混乱の状態に陥ってて、藤原さんも馬場さんのリングに上がったりしてるんですよ。

ゴッチ　……フジワラにとっては今が再起の時なのだろう。だから、いろいろなところにいくんだろう。その気持ちは私にはよくわかる。

——今までの話を聞いてると、ゴッチさんが日本のレスラーに最終的に求めるものはハートなんですね？

ゴッチ　私は今までグレートなスポーツマンを大勢見てきたが、**グレートなハート**を持っていた奴はほとんどいない！　私はグレートなスポーツマンでもあると同時に、ハートも磨いてきたつもりだ。筋肉をつくるよりもハートとコンディショニング、まずそれが先決だよ。

——ゴッチさんの考え方の中にはトータルファイトの概念があるんですか、それともあくまで「レスリング」にこだわっているんですか？

ゴッチ　もし、トップになりたかったらレスリングを修得するべきだ。私はもちろん、キックやパンチの危険さは知っている。だが、レスリングを十分に知っておけば怖いものはないよ。パンチやキックは、その防御法さえ知っておけば十分さ。防御して、それからタックルに入ればフィニッシュだ。**レスリングさえ知っていれば最強になれるのさ。**もちろんプロのレスリングだがね。

——ゴッチさんが言うところの「レスリング」というのは、いまや日本にしかないものなんですか。

ゴッチ　ノー。**もうどこにもない！　キャッチ・アズ・キャッチ・キャン**が私の言うレスリングなんだ。昔はどこにでもあったんだが、今はもうどこにもない。アマチュア・レスリングのようにポイントだけを競い合ってるものだと隙だらけで、とてもグラップリング、闘いとは言えないだろう。ちょっと来てみなさい。これがテコの原理というものだよ。

※ゴッチさんは、テコの原理の説明を聞き手の山口を実験台にして開始した。フェイス・ロック、スリーパー・ホールド、リスト・ロックなどをゆっくりと解説した後、ゴッチさんの手首を掴んでみろと言われ、掴むと一瞬にして親指を極められた！

ゴッチ　そうだ、危険過ぎてまだスズキにも教えていない技を教えて上げよう（笑）。

——アッアッアッ、痛テテテテ！

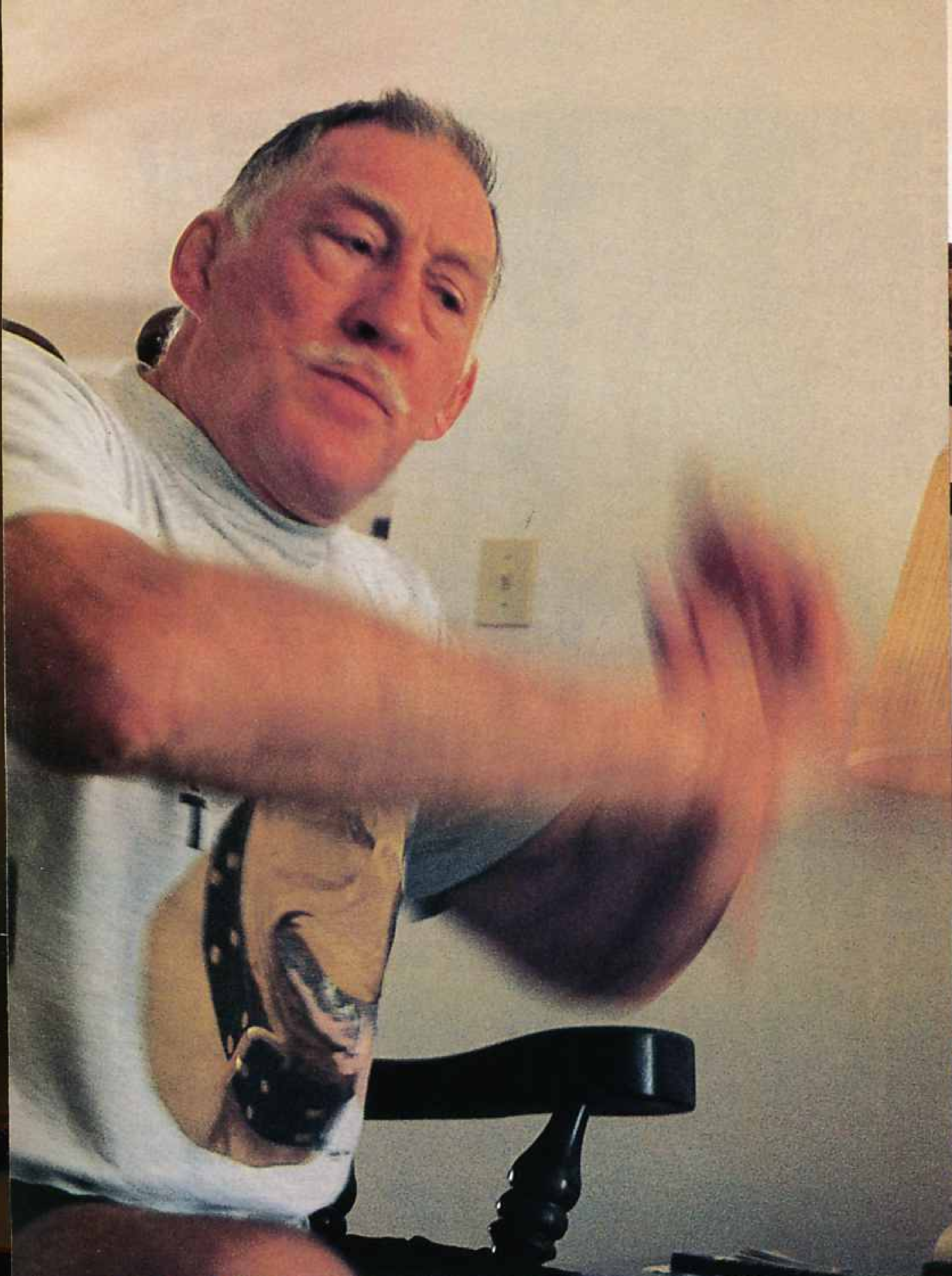
ゴッチ　ギブアップ？（笑）。

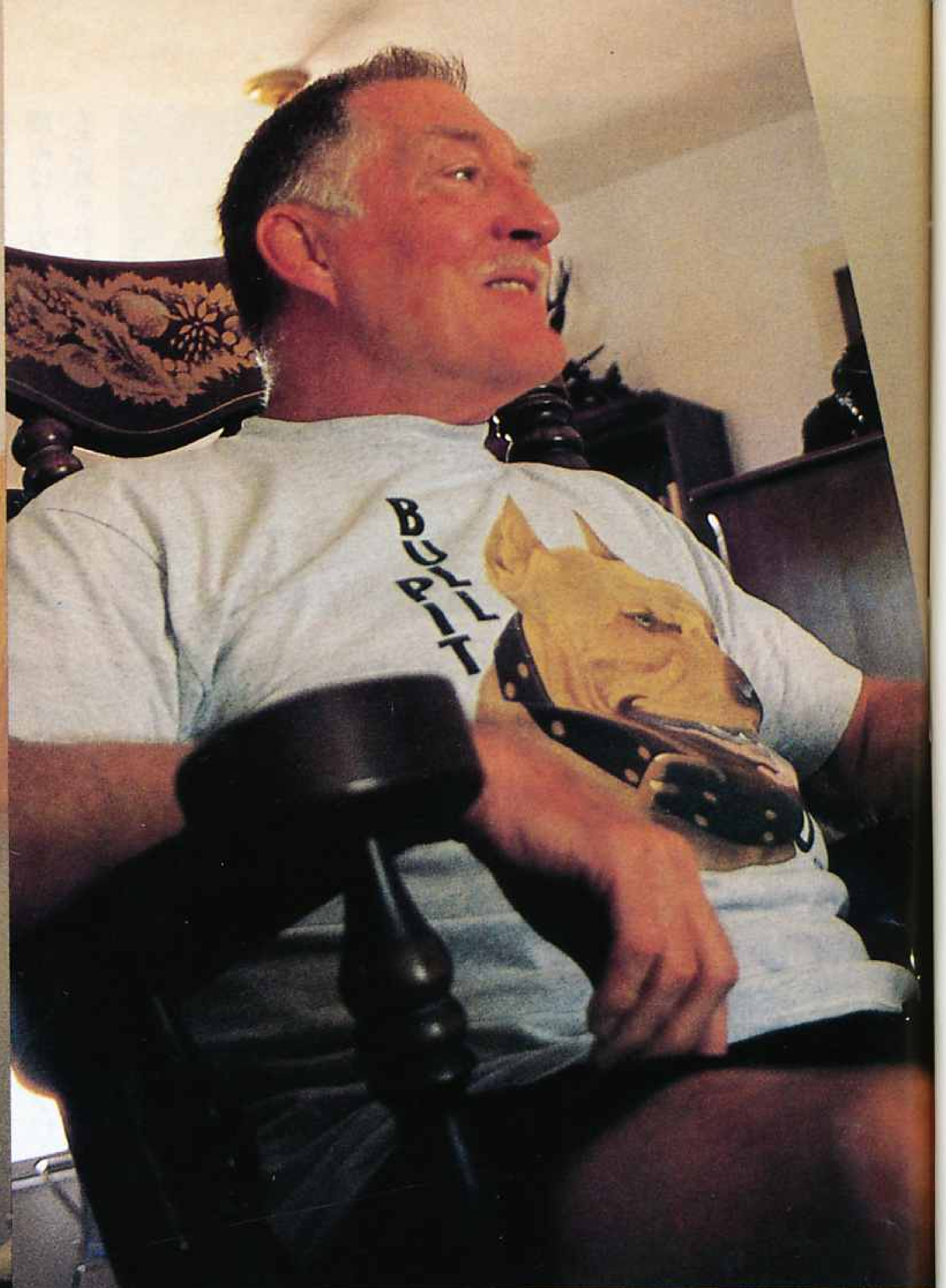
——イテテテテテテテ！

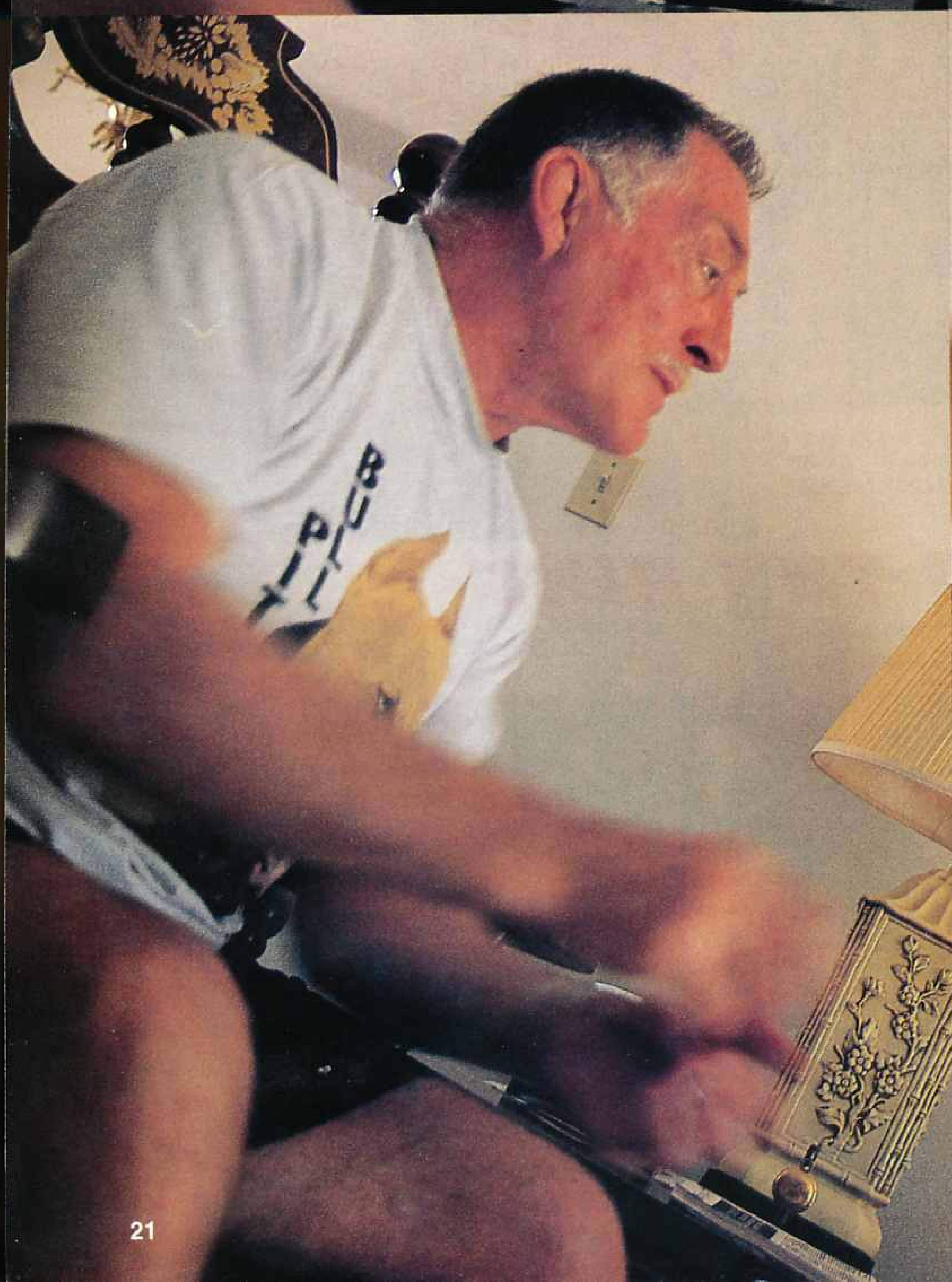
ゴッチ　ハッハッハッハ。**楽しいか？**

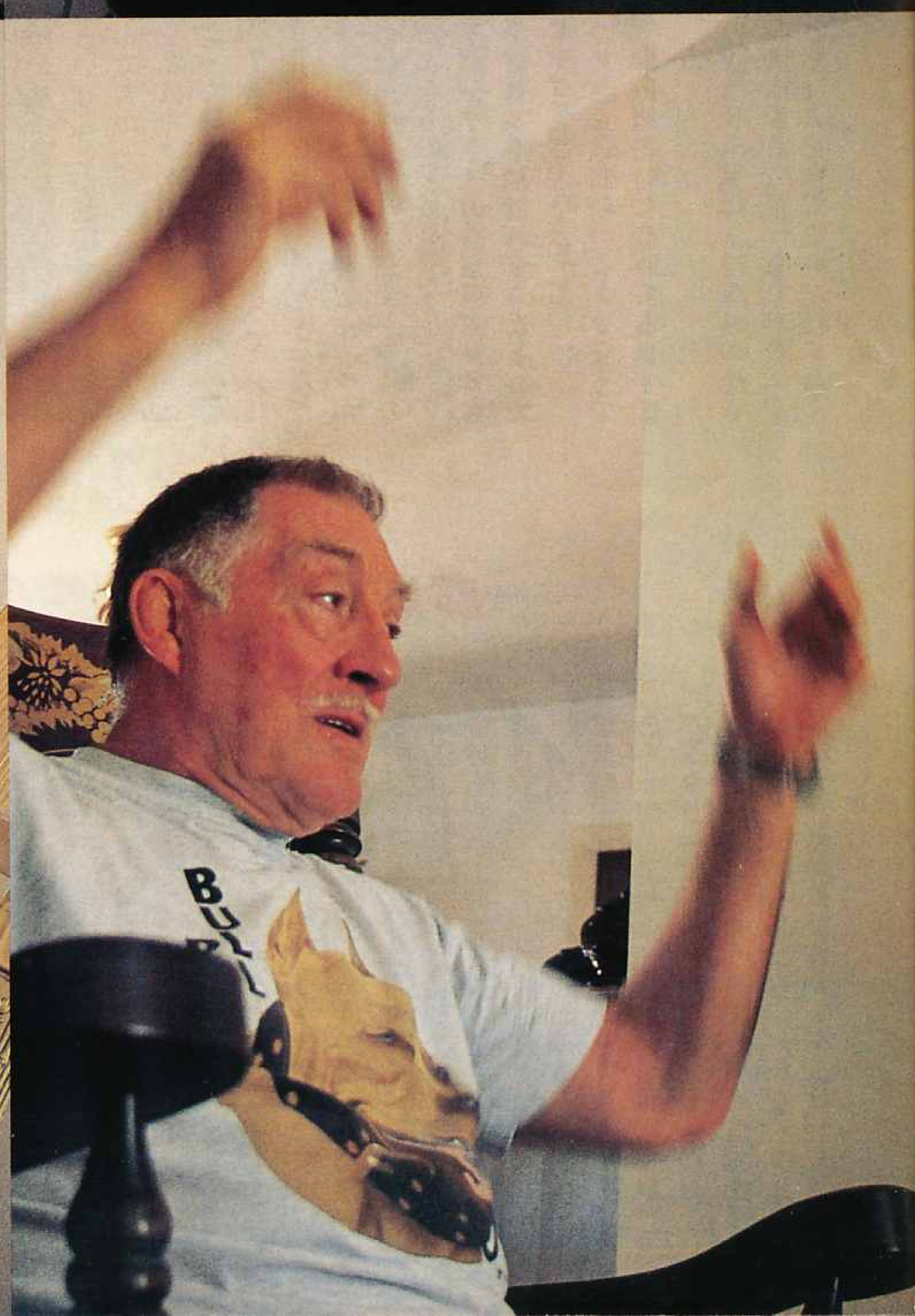
GOD BLESS THE RING

Karl Gotch




BULL PIT





WCWやWWFの連中をレスラーというのなら私は中国の皇帝になってもおかしくはない

やさしくしたんだがね（笑）。

——とんでもない（笑）。

※ゴッチさんはフロント・ネックロックのような態勢で実験台の首を抱えた。力を入れた様子もないのに、ゴッチさんは電光石火の早さで実験台の首の左側に電流を走らせたのである！「あの痛みは2カ月たった今でも忘れようにも忘れられない」（実験台・山口談）



71年、いまはなき国際プロレスのリング上で、"フッカー"（関節をひっかけるという意味）の異名を持った強豪ビル・ロビンソンと玄人ウケする攻防を展開したゴッチ

——あぁぁ、痛ってぇ……ところで話を戻すと、いまやアルティメットが格闘技界を席巻していて、グレイシーが世界最強だとも言われてるんですが。

ゴッチ　ノー！　**ともかく奴等は臭い！**　そんな臭いものは見る必要もない！　見ないから意見もない。ドイツの諺に「**糞からホイップクリームは作れない**」というのがあるが、まさにこのことだよ。

——アルティメットは、確かに最初は刺激的でしたね。

ゴッチ　私が16歳の時、友人が喧嘩でやられたんだ。その仇を討つため、街中の不良どもを全員ストリートで**叩きのめしてやった**よ（笑）。だが、ストリートでやるのはレスリングじゃないんだよ。もし私が、いまのように頭に雪が積もっていない若い頃で、法律でどんなこともやっていいような国があったら、アルティメットに出た奴ら全員を呼んできて、**皆殺し**にしてしまうよ！　もともと私が生まれ育った場所はみんなそんな闘いばかりだったんだ。

——なんでこの現代にアルティメットが流行ったんですかね?

ゴッチ　人間は2千年たってもなんら変わりはしないんだよ。2千年前に**パンクラチオン**があったように、今でも人間はそういった死を賭けた残酷な闘いを見たいんだ。

——アルティメット＝パンクラチオンと考えていいんですか?

ゴッチ　ノーだ！　その頃のパンクラチオンの選手たちは自分が何をしているかわかっていたと思う。だが、アルティメットの奴らは何をしてるか、自分でもわかっていない。奴らは、闘い方すら知らないよ。

——グレイシーが台頭したことで、ゴッチさんが常々言っていたキックは必要ないということが証明されたと考えていいんですか?

ゴッチ　私はキックが必要ないと言ったわけじゃないんだよ。**何が起こるか予測できない**んだから、それに備えることが大切だと言ってるんだ。相手がキックを知らない時にキックが有効なのは当然だろう。相手が知らない技はどんなものでも有効なんだ。

※ここでパンクラスの高橋義生が日本にアルティメット初勝利をもたらした大会をビデオで見ることにした。

——ゴッチさんは高橋のことを覚えてますか。藤原組の時に会ってるはずですよ。

ゴッチ　YA！　彼はアマレスのチャンピオンだったかな?　こういうのを見てると私は人を育てるのが好きなんだとよくわかる。**タカハシはクレージーだけどグッドハートな奴だよ。**

——クレージーですか（笑）。

ゴッチ　とにかく新しいジェネレーションを作ることだ。今、スズキがケガしてるんだったら、彼が指導して次の若者を育てるべきだ。スズキはそういう若者を育てることができるだろう。今回、タカハシが勝ったことは素晴らしい。だが、それにしても、新たなドアを開けただけにすぎない。新しいジェネレーションこそ大切なんだ。とにかく金に目がくらんだプロモーターとビジネスを排除しなければならない。今のプロレス界は、そんな**雑草ばかりがはびこっている。**それをまず一掃することが先決だ。ちょっと、ビデオを止めて、来てくれ。

※神様は我々を別室に連れていくと、マウント・ポジションを取られた時の反撃の仕方など、同行した大谷泰顕氏を実験台に、約30分間の即席ゴッチ教室を開いた。とにかく元気だ！

ゴッチ（息も切らさず元の場所に戻り）みんな口ではデカイことを言うが、実際に見せるものは大したことない。ちょっと待ってくれ。洗濯物を見に行って来るよ。

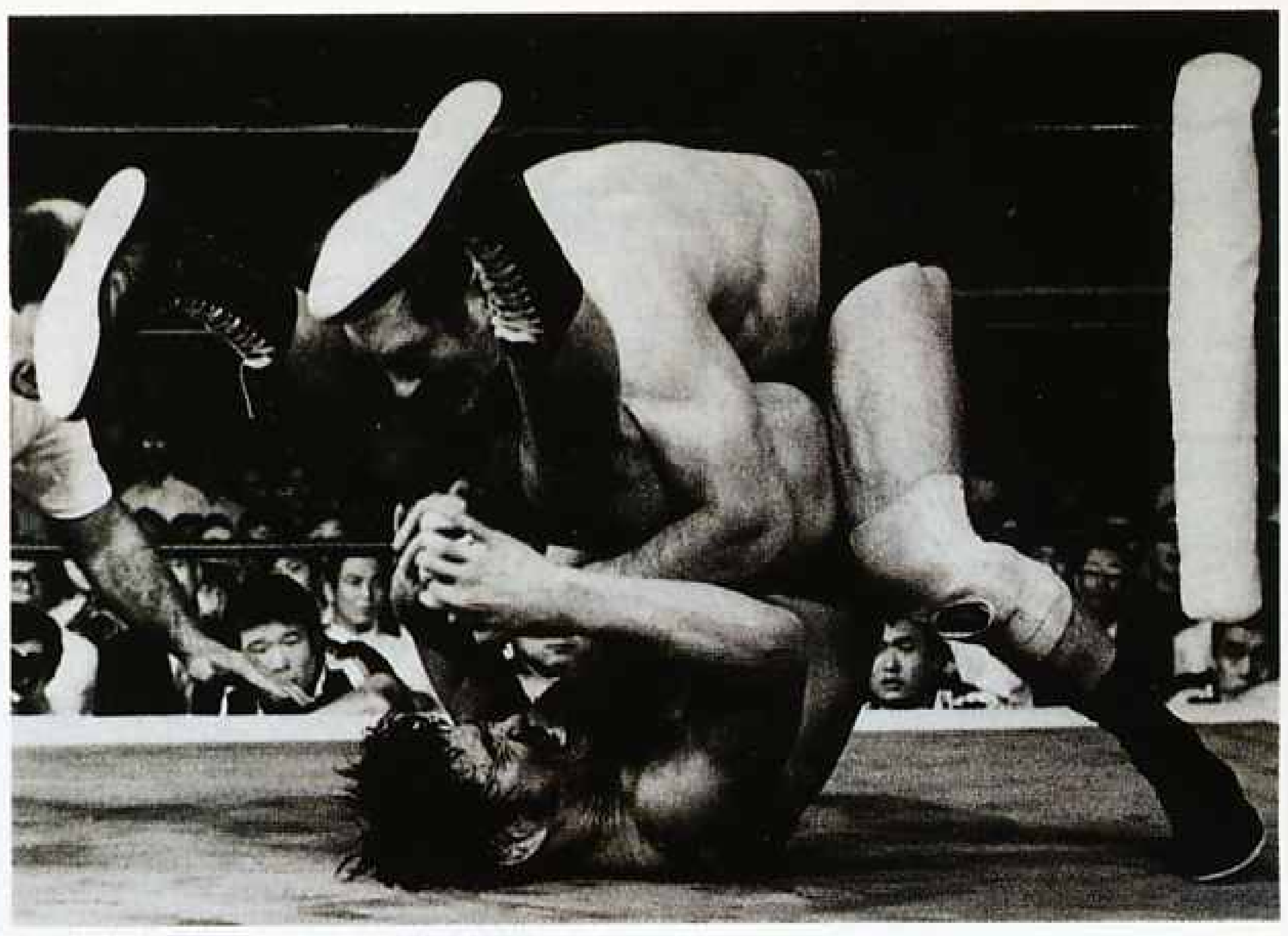
※しばらくして「洗濯場でコインを見つけた」と上機嫌でゴッチさんは戻ってきた。

——じゃあゴッチさんからすると、WWFのようなショーマン・スタイルであろうが、アルティメットであろうが、パンクラスであろうが、ゴッチさんが言うところのレスリングができる選手がチャンピオンになればいいと?

ゴッチ　確かにレスリングにはたくさ



全世界を巻き込んだ猪木―M・アリ戦（76年）のアドバイザーとして、**猪木のセコンドについた。ゴッチ自身も**プロボクサーとの異種格闘技戦は幾度か経験している。



72年の新日本プロレス旗揚げ戦ではエースであるA猪木を破ったゴッチ。その後も、何度か猪木と"実力世界一"を争った。一連の死闘はストロング・スタイルの礎となる

んのスタイルがある。どの国のどんな形であろうが、サンボだろうがなんだろうが、レスリングはレスリングだよ。だが、**WCWとか、WWFみたいな奴らをレスラーと言うなら、私は中国の皇帝になってもおかしくない。**リック・フレアーとかいう、あんなやつらが……。

通訳の羽根石さん（女性） もし、あなたが彼らと……。

ゴッチ ホワット？ 私と彼らは一緒なのか!? あなたは私のことが嫌いなのか？

通訳の羽根石さん 違います、違います。嫌いなのかって言われちゃったぁ（笑）。

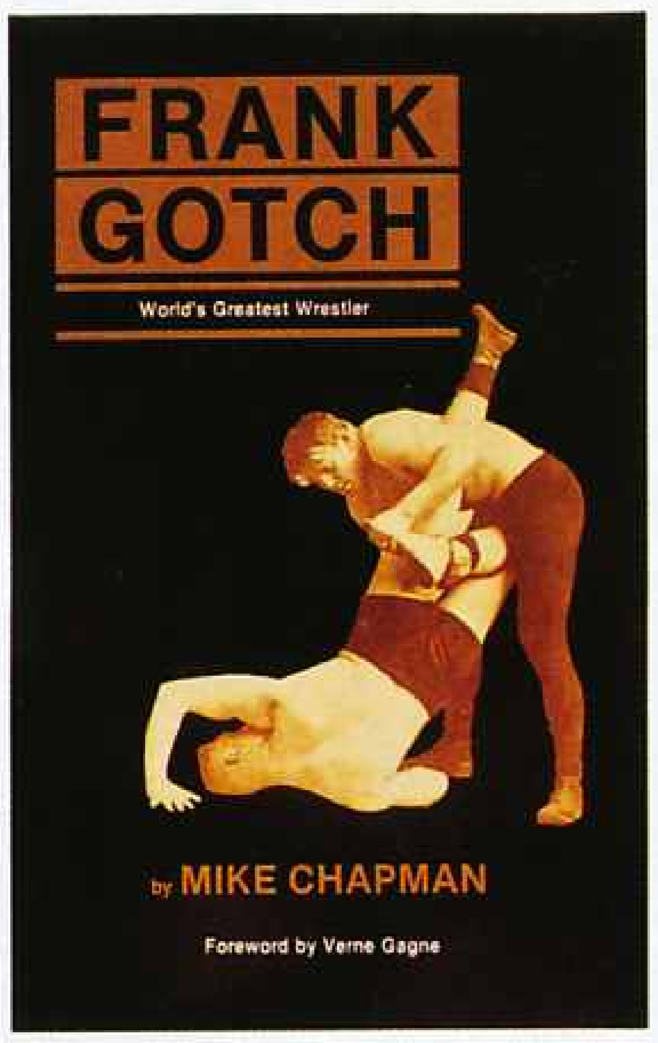
ゴッチ わかった、キミは私が嫌いなんだね。でも、殺さんでくれよ（笑）。

通訳の羽根石さん 違いますぅ（笑）。

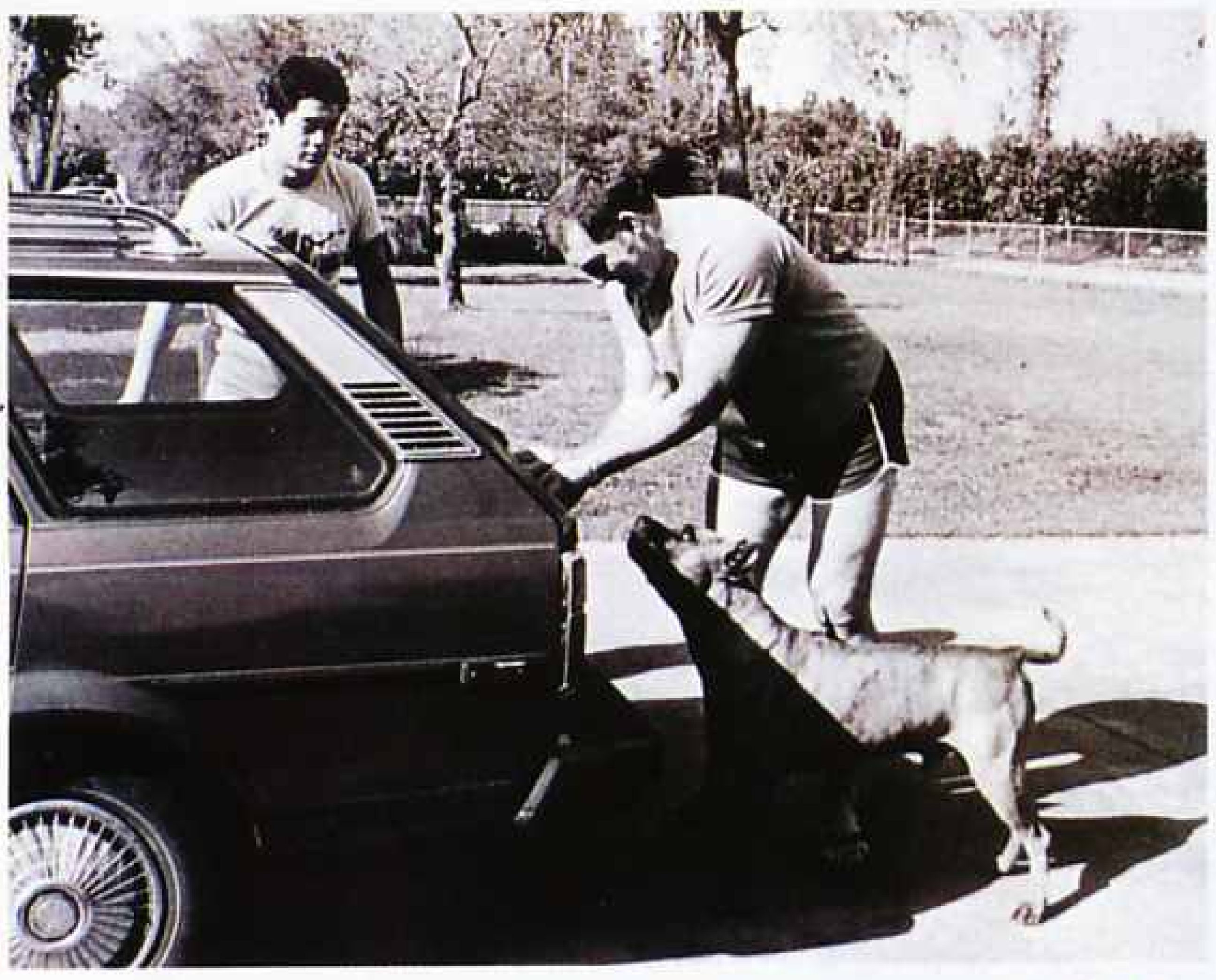
ゴッチ まあ、WWFみたいなものは見る気もしないということだ。私の範疇にはないし、興味もない。**彼らのレスリングは象がバレエを踊ってるのと同じだよ。**あれはレスリングのようでレスリングじゃない。

――ゴッチさんの言うレスリングの試合と、WWFみたいな試合を一つの興行の中に詰め込んで結果的にお客さんが入ったとしたら、そのプロモーターは悪なんですか？

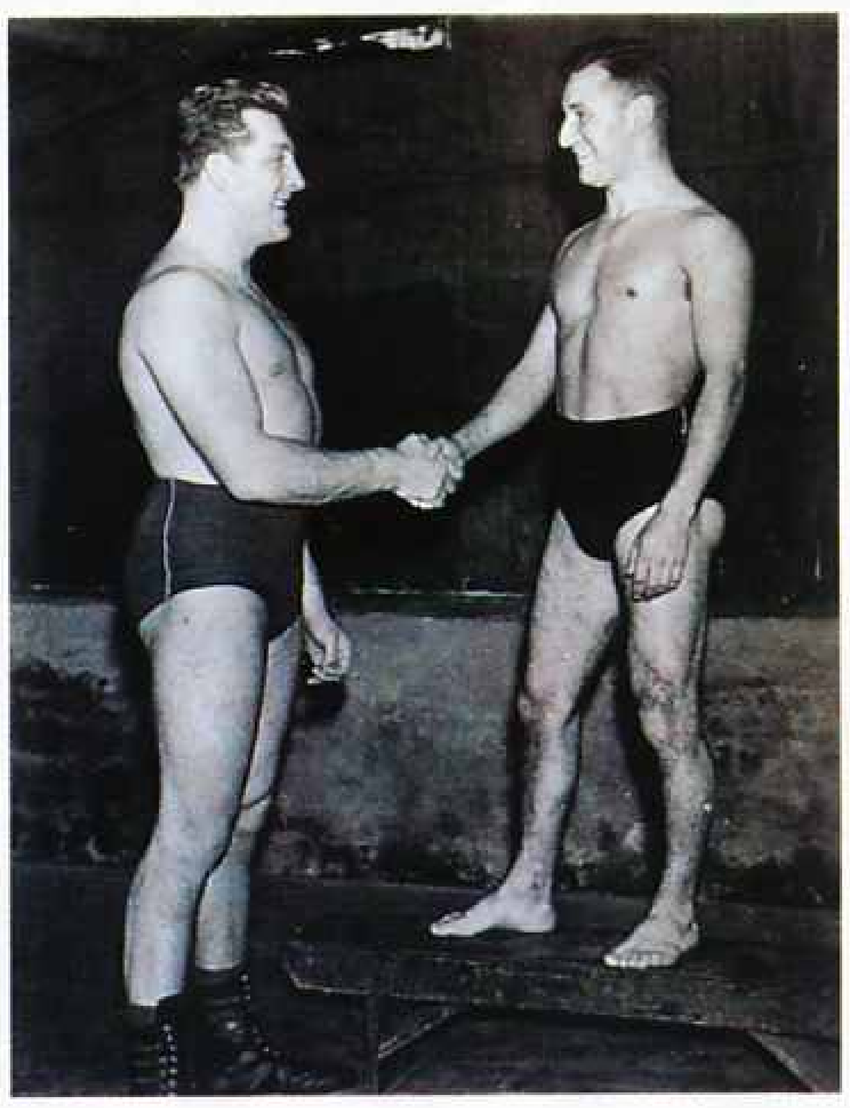
ゴッチ （遮るように） 銅と金が違うのと同じで、そんな興行はまずできない。おとぎ話だ。**コウベ・ビーフとアメリカン・ビーフは同じビーフでも違うものだろう？** 同じレベルで語るものではないはずだ。



神様が「真の実力もカリスマ性も兼ね備えた唯一のレスラー」と賞賛したフランク・ゴッチの自伝が本棚に。"賞金稼ぎ"の喧嘩ファイターという側面も持っていた



アルバムには日本人レスラーがゴッチ邸を訪れたときのスナップも数多くあった。写真に写っているのはヒクソン戦が無念の中止になった高田延彦



左が若き日の神様。ナチュラル・ボディの見事さは、まさに"無冠の帝王"の凄みを醸し出している。初来日では力道山とも引き分けているのだ



いま飼っているジャンゴの前に神様が飼っていたサムソン。ゴッチさん、最愛の犬。遠征から帰ると服をボロボロにされるほど飛びつかれたという

一人暮らしには広すぎるゴッチ邸は約3千万円で売りに出されている。この情報は本誌の取材が元で『フライデー』『週プロ』にも掲載された





必殺技のヘッドロックで対戦相手の気を狂わせたという伝説を持つ、晩年のエド・ストラングラー・ルイスとの貴重なスナップ

――でも、日本ではそんな興行がもう行われているんですよ。2年前、東京ドームに6万人が集まったんです。

ゴッチ　**一体、6万人がどうしたというんだ。**まずはレスリングを確立することだけを考えるんだ。何人客を入れたかどうかなど気にする必要はない。今はレスリングの基盤を作ることが大切なんだ。

――ゴッチさんは昔、「バック・トゥ・レスリング」を旗印に、日本に本物のレスリングを持ってきましたよね。それにアントニオ猪木が共鳴して、その後、UWFができてパンクラスやリングスができました。だけど、いま日本で人気があるのはアメリカン・プロレスなんですよ。どうして歴史は繰り返してしまうんですかね？

ゴッチ　（顔を真っ赤にして）才能ある若い選手を育て、**観客を育てるんだ！**　そうすれば、人々は何を見ればいいかがわかってくる。キミたちはベースボールを知ってるだろう。だが、私はヨーロッパの人間だ。ヨーロッパではベースボールはやらない。だから、何を見ていいか私にはわからない。それと同じだ。わかるか？　**何を見るべきか**を観客に教えることが重要なんだ。今はステロイドを打って身体だけデカい金髪の奴が**「オオキイネ（日本語で）」**と言われてレスラー面してるが、そんなものは中身のないシットだ。

通訳の羽根石さん　ちょっとゴッチさん、確かめたいんですけど。ゴッチさんの言うレスリングを理解して、しかも観客が呼べるレスラーが……。

ゴッチ　（大興奮状態）ちょっと待て！　いいか。多分そいつが世界一強かったとしてもカリスマ性がなければ、客は呼べない。だが、団体内で2番目に強いレスラーにカリスマ性があったとしたら、そのレスラーをトップにすべきなんだ！　**それがビジネスだ。**例えばの話、私が強さではナンバー1だが、カリスマ性がなかったとしよう。だがナンバー2の人間はカリスマ性を持っている。そうなったら、私はそいつにトップを譲るよ。それでいいんだ。もし他から強い奴がやってきたら、私が出ていってそいつを倒す！　わかるか、それが**「ポリスマン」だ！**　それがビジネスだ。

通訳の羽根石さん　だけどそれって正しいことなんですか？

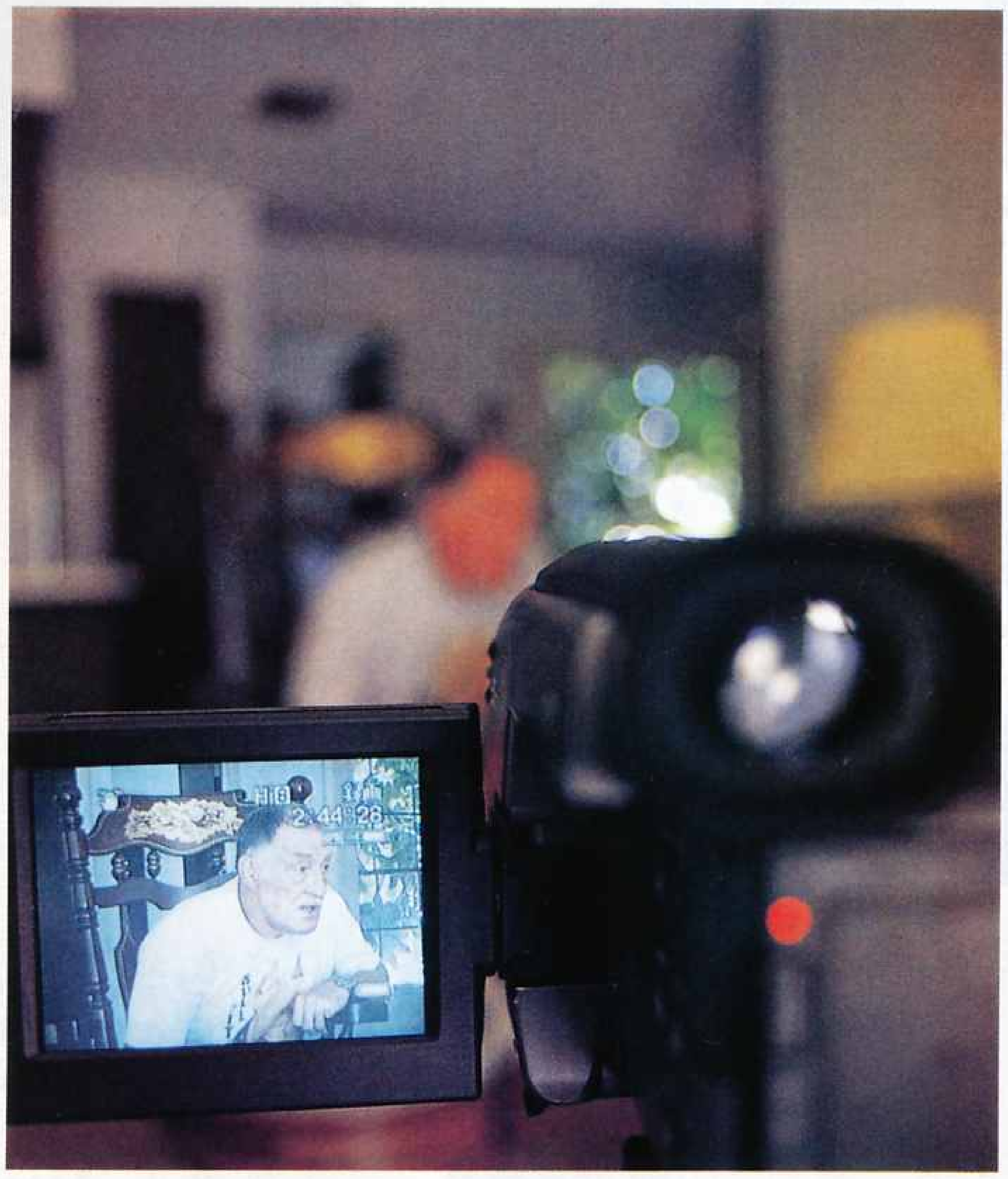
ゴッチ　（大興奮状態）客を呼ぶために他にどんな方法があるんだ!?　ナンバー2の人間にカリスマ性があれば、彼に客を呼ばせればいい。**ベルトもそいつにくれてやれ！**　ベルトの代わりに相当のマネーを手にすればいい。

――でも、やっぱり実力もあってカリスマ性もあれば一番の理想ですよね。

ゴッチ　（大興奮状態）そんな奴がいたら世話はない！　それができた人間はただ一人、**フランク・ゴッチ**しかいなかった。さっきも言ったが、才能ある若者を育て、観客にレスリングのなんたるかを教え込む以外にないんだ！　**タイガー・ジェット・シン**を呼んだら2万人入るとか――そんなレベルのことを考えてたらいかん！　**スタン・ハンセン**はババのところで金儲けしてるんだろう。ところで、**ババ**はまだリングに上がってるのか？

――やってます。来年還暦を迎えます。

ゴッチ　オー！　**ジーザス・クライスト！**　ババは、リングにのぼるにもステロイドが必要じゃないのか。奴の身体は3千年前のミイラだ。いや、ちょっと興奮しすぎて、言葉が汚くなってしまったかな。ハッハッハ。



GOD BLESS THE RING

Karl Gotch

●この後もゴッチさんは、我々を前に、実演を交えエネルギッシュに話し続けた。神様にかかっては、日本のトップレスラーも、アメリカの大手団体もすべてボロクソだった。

「未来のことを準備するためには過去を見なければならないこともある」「古いことは新しいことであり、新しいことは古いことでもある」

神様のこの言葉は日本マット界の現状に何を投げかけているのか――。いま一度考えてみる価値は大いにあるはずである。

それでは最後に神様の健在と毒舌と啓示に感謝しつつみんなで叫ぼう！

1、2、3、ヨイショッ、エアガイツ!!

【3月30日現地時間、フロリダ州タンパのカール・ゴッチ邸にて収録】



EHRGEIZ!!

新日本プロレス25周年特別試合



超過激対談

ドン荒川 VS 藤原喜明

新日トンパチスピリットの源流

新日ストロングスタイルの源流

新日黄金時代で治外法権を誇った二人の道場王が、酒と喧嘩と女にまつわる輝かしき怒涛の青春時代をビール片手に語り尽くした！あまりにも危険で、そしてあまりにも面白すぎる衝撃事実の数々に、新日幻想がまたも膨らむこと確実！なお、この対談は荒川さんの発言を疾風のような早口で、組長の発言をどもり気味に読むと、一層リアリティが増すはず。ではどうぞ。

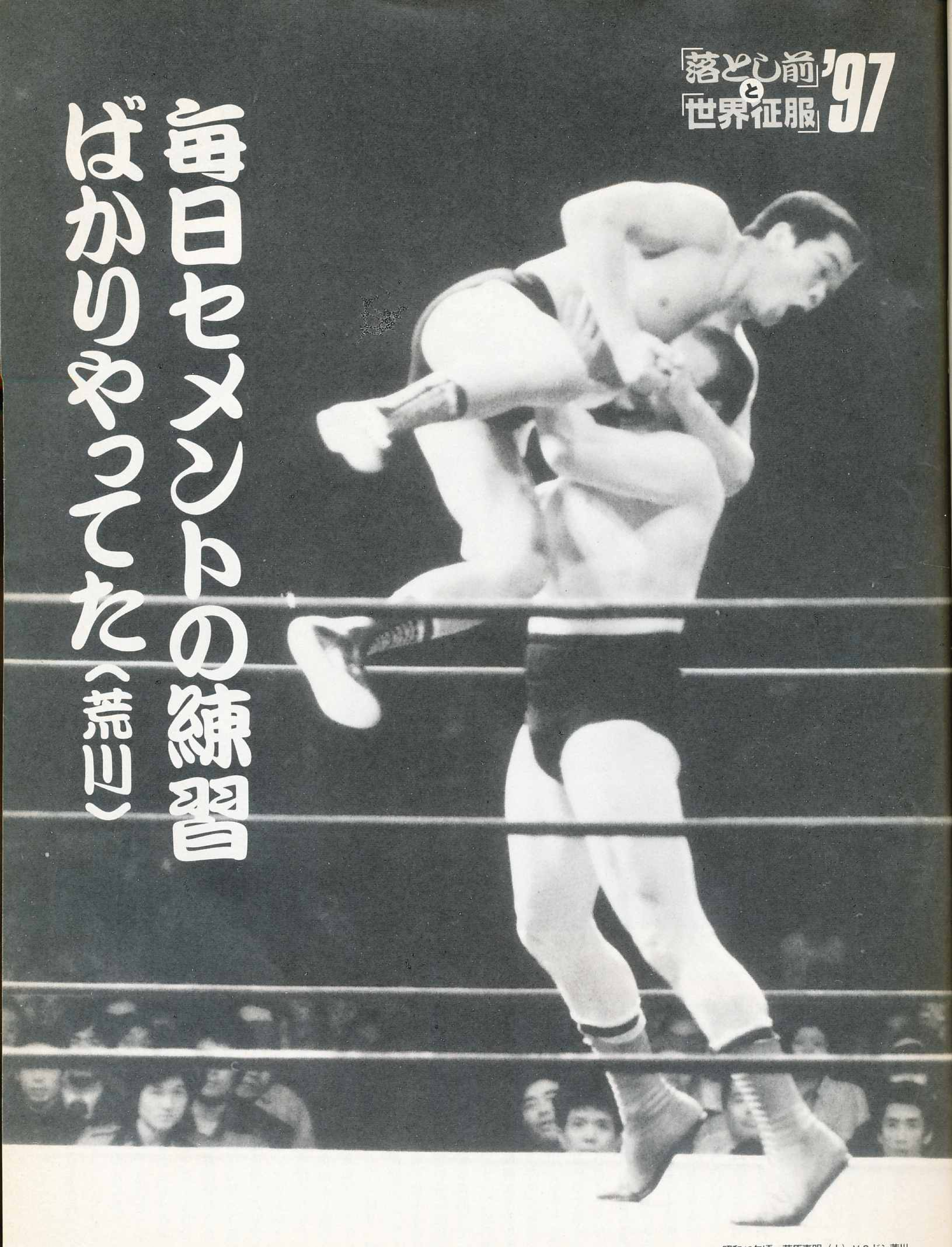
構成／吉田豪 with T
text by Go Yoshida
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

荒川 （本誌の『トンパチ』の広告を見て、突然）なに、トンパチ～!?
――ああ、荒川さんの話も出てますよ。
荒川 えぇっ！ でもトンパチって、コレ（クルクルパー）のことでしょ？ まぁ、私は普段もバカですからね（笑）。だからマラソンも42キロ走れるんですよ。バカでなきゃ走れませんよ。あんなクソ暑いのにさぁ（笑）。ま、ひとつよろしく！（藤原と固く握手）
藤原 よろしく！ しかし荒川さんとは、すごい手が合うっていうかね。いつも喧嘩ばっかりしてたな。「本気でやったらお前には負けない」とかね。「な～にィ、この野郎！」って（笑）。
荒川 「道場で勝負つかないから喧嘩でやるか!?」って。道場がシーンとして、誰も何にも言わないの（笑）。
藤原 血だらけだよな。死ぬ気でやってたよ。まあ血ィ流したって言っても、憎いとか何とかじゃないもんな。終わればもう、「ま、1杯飲もう」ってさ。
荒川 いつも一緒だったよ。
藤原 ラーメン食うのもね。そういえば荒川さんが「お前の技なんて効かねえよ、やってみろ」って言うから、俺はアキレス腱をグキグキってやっちゃったことあるんだよ、両足。だけどやられても「ガハハハ」と笑ってるわけ。それでラーメン食べに行くことになったら、「今日はちょっとタクシーで行こう」って言うんだよ（笑）。歩けないから。この人やせ我慢してさぁ（笑）。
荒川 ゴッチさんと30分スパーリングやった時も、ゴッチさんが頭きちゃってさぁ。でも俺は知らないからゴッチさんがやる通りにやればいいんだなって。だからゴッチさんが口に指を突っ込んできたらガッと噛みついて、ゴッチさん「ウワ～ッ！」って（笑）。
藤原 変な奴だよなあ（笑）。
荒川 それで腕の力でガ～ッと立ち上がったんだよ。ゴッチさんが「ファッキュー」って言うから、俺も「ファッキュー」って言い返して（笑）。終わってから、猪木さんに「おい、ゴッチが褒めてたぞ」って言われて。だからゴッチさんは何にも言わなかった、俺に。俺、これ（シュートサインを出す）になったときは喜んでニコニコしながら行くんだよね（笑）。俺は極まりにくい身体になってるから。
藤原 手足は短いしよ。手が15センチくらいしかないんだもん（笑）。
――ゴッチさんとの伝説は聞いてましたけど、いい話ですよね（笑）。
藤原 面白い伝説はいっぱいあるけど喋れないことが多いよ（笑）。
荒川 あのですね、彼（組長）は2人くらい先輩辞めさせてるんですよ。というのは私をレスラーじゃなくて管理人と間違えちゃって……。
藤原 ちょっと待て、俺にも喋らせろ（笑）。俺が入門したらこの人、すげえ偉そうにしてんだよ。「生意気な管理人だなぁ」と思ってたら、次の日の練習にいて「あれ～、おかしいな。管理人も練習するんだ」って（笑）。



荒川 彼はそん時、すっごい身体したものすごい新人だって言われててさ。デカい背広借りてたから背伸びしてたわけ（笑）。でも身体見たら、もうできあがってるの。それで彼に「ちょっとブリッジやって」って言ったら……。
藤原 見事なブリッジよ、もう。この人は、汚ねえブリッジだったよ（笑）。
荒川 最初で最後ですよ、こんな人。来たばっかでベンチプレス１６０キロ上げたんですよ。大騒ぎですよ。
藤原 俺だってね、ナメられてたまるかと思ったから気合い入ってたんだよ。
荒川 で、先輩達に「今度の新弟子はすごいですよ」ってすぐ報告して。ところが先輩達はブリッジ苦手で、しょっぱいと言うか（笑）。
――しょっぱい（笑）。
荒川 力弱いって言っても１２０キロは上げてましたけど、それ上回って新人が１６０キロですからね。だから2ヶ月くらいして、その先輩達は置き手紙残していなくなっちゃいましたよ。
藤原 あの頃は面白かったよ。旗揚げして半年ぐらいか。俺が入門したのが昭和47年の11月2日だから。
荒川 そいで、新人はみんな電話当番しなくちゃいけないんだけど、彼は逃げちゃうの。おかしいなあって。
藤原 電話が嫌いなんだよ！ しょうがねえよ。俺、どもりなんだもん。
荒川 プロレス界ってひどいですよねぇ。「どもやん」「どもちゃん」って。人が一番気にしてることを平気で言いますからね（笑）。一般社会だったら自殺してますよ、ホント。だからこの世界、悪口も何もないわけですよ。
藤原 でも、「どもりん」って言われると頭くるけどさ。だけどチビには「チビ」って言うからな（笑）。
荒川 そう浜田さんには「チビ」って。犬と一緒じゃない（笑）。
藤原 チビだよチビ。先輩なのに（笑）。
――まあ、猪木さんも力道山先生には「アゴ」って呼ばれてましたしね。
荒川 猪木さんはこうだよ（アゴに拳を2つ重ねるジャスチャー）。「これ、どこ行った？」って言ってたから。それ、猪木さんに丁度見られたんだよね（笑）。今さら逃げるわけにはいかなくて、「ん？ ピピピー」ってラッパ吹く真似してさぁ。だけど「ラッパないじゃねえか！」って怒られたよ（笑）。
藤原 昔はさぁ、貧乏だったけど「今に見ていろ！」って、みんな一丸になって一生懸命やってたよな。
荒川 当時、日本プロレスから来た坂口征二さん、キラー・カーン、木村健悟。よし、こいつらに絶対負けてはならないぞということで、毎日セメントの練習ばっかりやってた（笑）。塀のブロックにも毎日、頭ガンガンぶつけて（笑）。空手チョップもブロックに手が腫れるほどやるんですよ。「俺の方がもっとすごいぞ」って張り合って。
藤原 ブン殴るのが普通だったしな。
荒川 藤波選手も猪木さんにカーンとやられてたもん。コブできてたよ。
藤原 あん時は血がバーッと出たもん。よけたから余計な。

毎日セメントの練習ばかりやってた〈荒川〉



昭和48年頃　藤原喜明（上）ＶＳドン荒川



昭和59年12月のフィリピン遠征時。入門間もない橋本と相撲をとるドン荒川。「これ、橋本、私にまったく勝てなかった頃ですよ、ウヘヘヘヘヘヘ」（ドン荒川氏・談）

荒川　そうそう、彼と私も沖縄で山本小鉄さんに往復ビンタやられたの。「しょっぱい試合しやがって！」って。そのときは神妙な顔してるけど、すぐ「あはははは、馬鹿か？」って（笑）。

藤原　もう、話がメチャクチャじゃねぇか（笑）。つまり練習が終わったら明るかったんだよな。その代わり練習中はもう地獄だよ。鼻血出したり、頭から血ィ流したりさぁ。プッシュアップ用の棍棒で頭ガーンと殴られたりさ。

荒川　あれも息止めて正面から殴られれば、痛くないんだけどね。

――プロだなぁ（笑）。やっぱり、殴るのは小鉄さんなんですか？

荒川　小鉄さんですねぇ。猪木さんは、練習に気合いが入ってない時に殴るだけですよ。猪木さんが怒る瞬間っていうのは、ボクわかるんです。だから怒る瞬間に突然ガ～ッと練習するんです。他の人はやられちゃうんだけど（笑）。

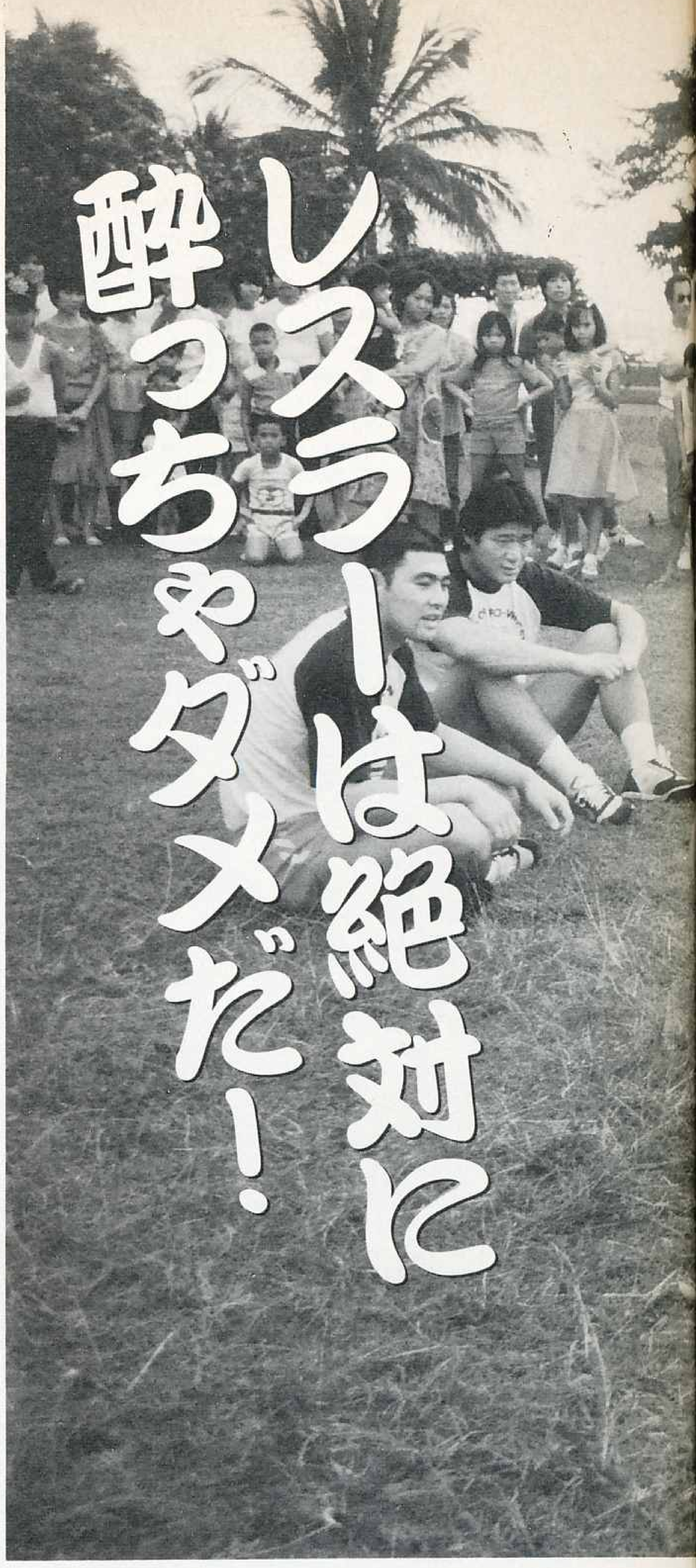
藤原　ホント、要領良かったよな（笑）。

荒川　みんな厳しい厳しいって言うけど、そんな1日中厳しいわけじゃないんだから。瞬間瞬間に気合い入れてやりゃいいんですよ。しょっちゅう気合い入ってたらやれませんよ、4時間も5時間も（笑）。野球でもそうよ、ピッチャーがいくら早い球投げても、3回くらい投げたら打たれるんだから。

――野球と比べますか。さすがは長嶋監督のソウルフレンドですね（笑）。

藤原　じゃあこの辺でバラそうか。荒川さんと永源さん（仮名）と私と、あそこ行ったんだ、ソープランドにな。

荒川　だ～っ！　そんなもんバラすもなにも、そんな（笑）。



レスラーは絶対に酔っちゃダメだ！

藤原　俺が一番先に行ったんだよな。そしたらこの人、「お前、いつまでやってんだよ」って、先に終わってずーっと待ってんだよな。３秒だよ（笑）。

――荒川さん、そっち方面でも伝説は多いですよね。橋本さんを筆下ろしさせたって噂は聞いてますよ（笑）。

荒川　いや、橋本、船木、佐山ね。

――あらっ、佐山さんもですか（笑）。

荒川　そう、アイツらが自分で喋ったんだから。俺は言ってないのに、本に書いてあるわけよ。そしたら俺、立場ないじゃん（笑）。

――ガハハハハハハ！

荒川　船木は15の時行ったんだよ。「お前、どんなのがタイプだ？」って聞いたら、「年下が好きだ」って。でも、15で年下いるわけねえから「辛抱しろ」って言ったら、24歳の人が来たんですよ。それで「何回ヤった？」って聞いたら「3回ヤりました」って（笑）。

――デビュー戦で3本勝負（笑）。

荒川　だから、プロレスよりデビュー早かったんですよ（笑）。

――橋本さんのときは、維新軍が離脱した日にソープ行ってたんですよね？

荒川　そう。みんな会議やってたんだけど「会議なんていいよ」って、武藤と橋本を連れて行ったんですよ。そしたら坂口さんが「（坂口調で）荒川～っ、いたのかぁ～（涙）。ジャパンに一番いいのを連れてってたのかと思った」って。だったら他のは何だってなっちゃいますよねえ（笑）。

藤原　まとめんの大変だよ（笑）。もっと、ゆっくり喋りなよ。

荒川　自分でバーッと喋ったこと自分でわかんなくなる（笑）。でもボクは必ず電話番号とか覚えちゃうからね。

藤原　そういうところはすごいよ。電話番号と名前と生年月日な。

「落とし前」と「世界征服」'97

荒川　あ、お誕生日には花ありがとうございます。ずーっと薔薇の花頂いてるんです。オカマじゃないですよ（笑）。

藤原　オッサンは毎年、誕生日にプレゼントくれるんだよ。

――はあ。しかし、どうして二人がこんなに仲良くなったんですかねえ？

藤原　あのね、仲良いって言ってもベタベタしたのとは違うんだよね。喧嘩したり言いてえこと言ったり……。

荒川　もう遠慮がないんですよ。「殴ったろか！」って言えば「殴り返していいぞ！」って。

藤原　それで喧嘩やったら喉乾くから、一緒に飲みに行くわけだよ。そこも全部ワリカンだからね。関係としては一番いい関係だよな。

――やっぱり新日時代にさんざん喧嘩したのが良かったんですかね？

荒川　喧嘩っつっても、お互いツーカーのキャッチボールの喧嘩ですからね。

藤原　ちゃんと分かってんだよね。ひっぱたいて鼻血垂れたり、顔は腫れるし唇は切るし半端じゃない喧嘩だったけど、半分冗談でやるんだよね。

荒川　いつも冗談から本気になっちゃうんだよ（笑）。やってるときは憎しみはあるけど、終わったら乾杯だから。だから、政治の世界もこういう部分を見習ったらいいんですけどねえ（笑）。

――喧嘩の理由は、どんなことだったんですか？　どっちが強いとか？（笑）

藤原　それだけだよ。

荒川　極端な話ね。道場の中で誰が一番なのか決まんないから（笑）。どっちかが関節極めても「参った」言わないし、骨折れたって「折れた」とは認めないわけですから。

――お互い頑固なんですねえ（笑）。

荒川　相撲やってても、練習中に2時間も3時間もずーっとやってんですから。

藤原　一番長かったのは何分だった？

荒川　28分だよ。

藤原　汗がボタボタ流れてリングでシミになっちゃうんだから。ホントだよ。

荒川　息抜く暇ないんだもん。

藤原　昔はよく練習もやったよな。オッサン（荒川）がまた力強くてなあ。

荒川　おだてられると力出てくるんですよ。普段は割り箸も持てないくらいで（笑）。いや、ホントに。人が見てなきゃ10キロも上がらないけど、人前でおだてられたら、ビュ～ンって（笑）。

藤原　金がかかったり、人が見てたら、やたら強いんだよ。しかしなんだな、俺らには酒と喧嘩しかないもんな。

荒川　四国にも行ったろ。船でさあ。

藤原　あれは死ぬかと思ったな。四国に漁師のスポンサーのとこ行ったの、俺とオッサンとあと2人ぐらいかな。

荒川　昭和47年12月ですよ。

藤原　あ、そう？　それで宴会になったんだよ。40人くらいいたよな？

荒川　丁度40人。山本さんと3人で行ったんだよ、ボクのタニマチんとこ。

――昔からタニマチ多いんですね（笑）。

藤原　でもって、みんなにお酌されるわけ。40人いたから4升だよ。それ全部飲みながらも、山本さんに「酔っちゃダメだ」って言われてたから……。

荒川　そう、「レスラーは絶対酔っちゃダメだ！」って。あと「喧嘩ふっかけられたらやれ！」って言われたもん。

――カッコいいっスねえ！

藤原　そう。で、朝方3時頃帰って。

荒川　真夜中だったから、真っ暗で。

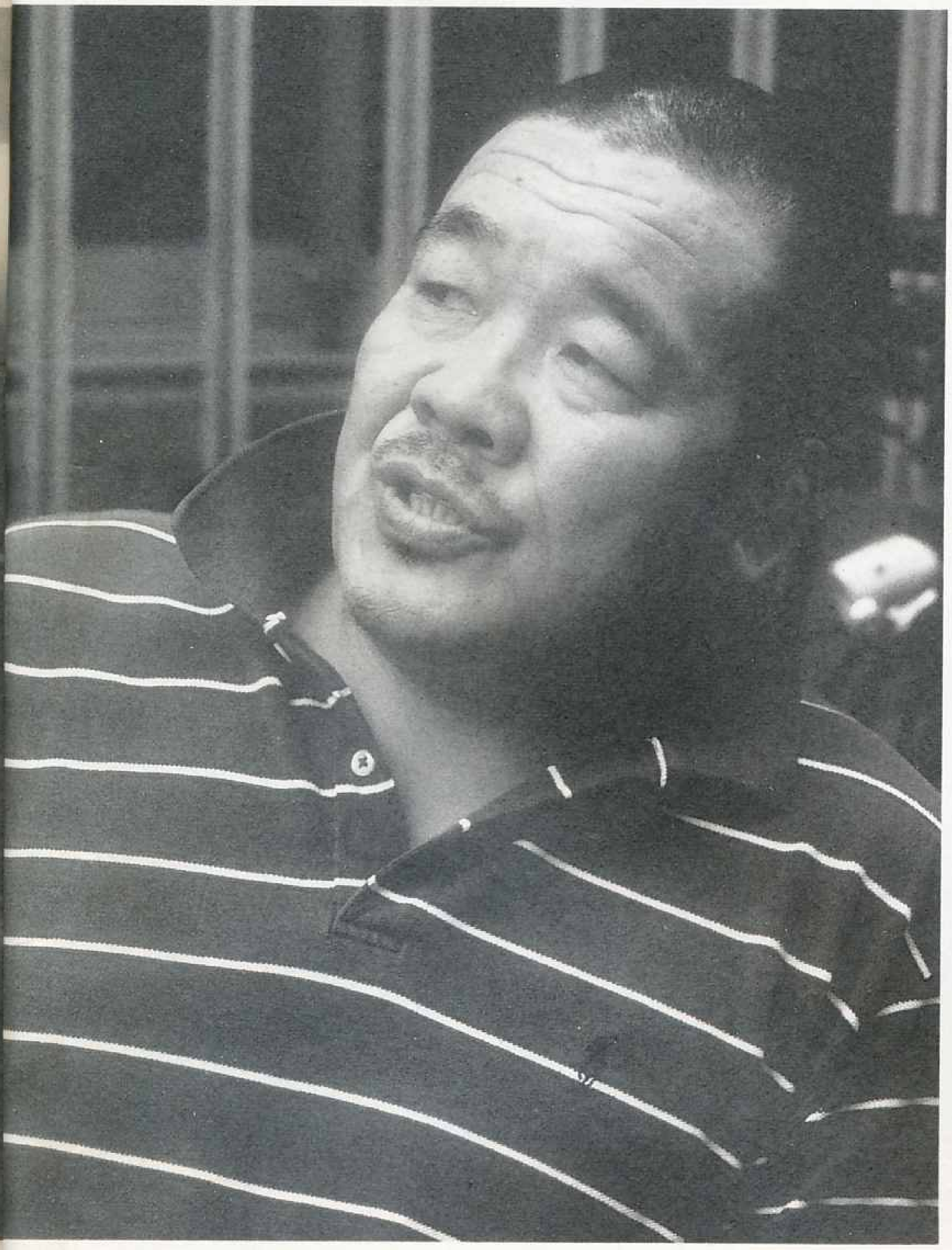
藤原　ザップ～ン！って波がすごいんだけど、「ちょっとオッサン、小便してえな」って言って、小さい船の上に昇って甲板に出たわけ。波がすぐそこまで来てるんだけど、甲板の棒に片手で捕まって海に小便したんだよ。あれ、手離したら確実に死んでたね。

荒川　行方不明で新聞載ってたよ。今じゃ金くれてもやんないよ。これが若さですよ。若さとバカさ。海の中じゃ、強いとか関係ないから。鮫に喰われて終わりよ（笑）。

――命懸けの立ち小便（笑）。命懸けと言えば昔、覗きで死にそうになったって伝説も聞きましたよ（笑）。

荒川　いや、それは。何で、そんな話知ってるの!?（笑）

でも二人でよく覗きやったよなあ（藤原）



藤原　はっきり言って、ドジ！　あのね、ある時に女風呂を覗きに行ったの。

荒川　愛知県だよ。忘れもしないよ。誰も入ってないんだよ、女風呂（笑）。

藤原　露天風呂でね、最初は柵にしがみ付いて覗いてたんだけど、ズズ～ッと落っこっちゃったんだよ。

荒川　そこで松ノ木に引っかかって助かったんだよ。松ノ木が垂直じゃなく、斜め上に向かって生えてたから良かったの。ヘソ曲がりの松ノ木の上にヘソ曲がりが落ちてたんだな（笑）。

藤原　次の朝、見に行ったら断崖絶壁に松ノ木がたった1本だよ！

荒川　もうビックリ。それ見た瞬間、汗がブワ～ッと出たよ（笑）。

藤原　ヘタすりゃ、あれ死んでたよな。

荒川　即死だよ。新聞に「練習生・自殺！」って（笑）。自殺する原因はないんだ？　他殺なんじゃないか？　って、そっちが犯人にされてたよ（笑）。

藤原　でも二人で覗き、よくやったな。

荒川　佐山が調べてくんだよ。「荒川さん、今日はいい風呂がありますよぉ」って。そうそう、佐山が覗き行って一晩中待ってたんだけど、誰も入ってこなくて佐山は風邪ひいたんだよ（笑）。

藤原　あん時、俺も一緒だよ（笑）。屋根にハシゴ掛けて、2月か3月だよ。俺と佐山、浴衣1枚で寒くて震えながら待ってたんだけど、誰も来ないの。

荒川　で、俺を呼びに来るんだけど、俺は今日は来ないってわかってたから。だってボクはその前に「今日は客入ってますか？」って、旅館の人に聞いてたんですよ。要領いいから（笑）。そしたら「今日はお泊まりはありません」って。だから行かないわけよ（爆笑）。

藤原　寒かったでぇ～（笑）。

荒川　翌日、「どうだった？」って佐山に聞いたら、「誰も来なかったです」って。「当たり前だよ、誰も泊まってないもん」って言ったら佐山、怒った怒った（笑）。かわいい奴だった（笑）。

――佐山さんも覗きで腕力鍛えたっていう伝説がありますからね（笑）。

荒川　あいつは腕力抜群だったよ。

藤原　あれだ、あと名前は言えないけど、あの斎藤（仮名）さん。

――ガハハハ、言ってますよ（笑）。

藤原　ある時ねぇ、佐山がバーッと来て「女、女、女。屋上に行った」って言うわけよ。で、佐山と二人で屋上にそーっと行ったら斎藤さん（仮名）がね……。もう時効だからいいよな（笑）。

荒川　今で言うと不倫だよ。大変だよ。

藤原　いいんだ、そんなもの！　で、屋上で相手の奥さんが一生懸命アレやってたんだよ。斎藤さん、こんなデカイ身体して「あ～、奥さん……、あ～、奥さん……」って言ってんだよ。だから佐山と二人大笑いして帰ったんだよ（笑）。そしたらね、次の日、朝飯の時だよ。オッサンがメシ喰いながら突然言ったんだよ。

荒川　（食事中に突然顔を上げ）「あ～、奥さん……」（再び食事中に突然顔を上げ）「あ～、奥さん……」（笑）。

藤原　そしたら斎藤さん（仮名）がビクッとしてさ、「なっ、何だよ、お前ら……」って（笑）。「すいません、昨日、見させていただきました」「見てたのか!?」って（笑）。メシ喰いながら、みんな大笑いだよ。油断できないよ。

――タチ悪いですねぇ（笑）。

藤原　それから斎藤さんがお風呂に行ったんだよ。そしたら丁度奥さんも女湯に入っててね、「奥さん、すごいわねえ。身体大きい人にモテて。何処行ったの？」って言われたら「いやぁ、大したモノじゃなかったわよ」って（笑）。それを斎藤さんが聞いて「あの、クソババア！」って怒ったんだよ（笑）。あと、ほら、小林邦昭（仮名）の件が。

荒川　サンペーちゃんは凄いんだもん（危険なので自粛）。もう怖いですよ。

――怖いですよ（笑）、ホントに。

荒川　彼（組長）は年上が好きだから、飲み行っても50、60歳くらいの女んとこ行くわけですよ。僕らが飛びつくような19、20歳のキレーな女の子に、彼は「こっち寄るな！」って（笑）。

藤原　オッサン、俺のこと「70歳の女とヤッた」って言ったらしいな！

荒川　いや、78歳ですよ（笑）。

藤原　68歳くらいだよ。失礼な！　あれも昭和47年だよ。俺がプロレスに入って、初めての巡業だよ。

荒川　彼と小林選手って背格好似ているんですよ、その頃はスポーツ刈りで。それで小林と僕が歯磨いてた時に、婆さんが来て小林の背中ポンポンって叩いて「（婆さんの口調で）アンタ、夕べ疲れなかった？　……あらっ、あたし、間違えちゃった！」って（笑）。

藤原　違うよ、そうじゃねえんだ。俺に喋らせろ！　ポンポンって来て「（婆さんの口調で）あ～た～しゃ、疲れたよ～～～」って（笑）。

荒川　それを俺が見たもんだから（笑）。

ドン荒川とは何か？●本名／荒川真。昭和20年3月6日生まれ。組長の3カ月前にデビューして独自の『ひょうきんプロレス』を生み出すが、平成2年にSWS移籍。何故か団体崩壊後も一人でメガネスーパー所属を名乗り、藤原組や全日本マットなどで活躍する。特技はフルマラソン。得意技は浣腸、目潰し、市役所固めなど。温和な性格のようで、時には橋本の手に割り箸を突き刺したりもするらしい……。

僕はモテない。荷物ばかり持ってた（荒川）



「おまえ、どうしてあんなババアとヤッたんだ？」って。で、翌年またそこに行ったらそのババア死んでたの（笑）。

藤原　それは作りだよ（笑）。まったく。でも、そのババアも女だよ。次の朝見たら口紅真っ赤に塗ってね、お化粧バッチリやってたもんね。

荒川　ねえ、80歳になっても女だよね。

藤原　80歳じゃねぇ、バカ！（笑）

――荒川さんはモテないんですか？

荒川　僕はモテない。荷物ばっかり、いっぱい持ってた（笑）。

藤原　このオッサンはね、いいとこまで行くんだよ、いっつも。だけど、誰かにいっつも取られちゃうの。

荒川　山本小鉄さん（仮名）なんて、何人取ったかわかんないよ（笑）。

藤原　彼は好きだったよ～。全国に20人くらい女いたんじゃねえか（笑）。

――出せるんですか、こんな話（笑）。

藤原　時効だもん、もう。

荒川　今、言われたとしても「何を昔のこと怒ってるんだ、アンタも大人でしょ？」って言うもん（笑）。

藤原　だって言っちゃ悪いけど、俺らに言わせりゃ、みんないたよ（笑）。

荒川　何をカッコいいこと言ってんの、猪木さん！

――ガハハハハ、猪木さんも（笑）。

荒川　でも師匠ですから。

藤原　いや、でも俺らが言っても大丈夫よ。「バカ野郎！」だけだから。

荒川　「あのバカ達が言ったなら、しょうがねえな」で終わっちゃうよ（笑）。

――治外法権ですね（笑）。

荒川　彼なんかバスで「うるさい」ってガーッとやってガムテープ貼られて

も、「（坂口口調で）誰がやったんだ？」で済んじゃうもん（笑）。

藤原　（荒川を遮り）いや、バスでね。

荒川　俺は喋れないから、彼が喋る。昔と逆だから（笑）。はい、どーぞ！

藤原　あのね、会社で2千万円の巡業用バスを買ったんですよ。俺は一番後ろに乗って、その頃練習ガンガンやってたから、疲れて寝てるわけだよ。そしたら坂口さんが必ずね、『火曜サスペンス劇場』見るんだよな（笑）。

――ガハハハハハハ！

藤原　そう、好きでいっつも見てるわけ。だからスピーカーがうるせえから、高田か誰かに言ったんだよな？

荒川　そう、「救急箱とハサミ持ってこい」って。俺はわかったよ、「あ、やるな」と思って。

藤原　ブスッと刺して、グリグリっと穴開けてさ。静かになったから寝たんだよ。そしたら坂口さんが来て「（坂口口調で）誰だ～、これやったの？」って。もう若い連中は青くなっちゃってさぁ、「……藤原さんです」って答えたら「藤原ぁ？　……ちぇっ」って（笑）。

――それで終わりですか（笑）。

藤原　新車だよ（笑）。「ちぇっ」で終わったよ。面白かったよ。

荒川　あの頃は面白かったねぇ。俺なんか酒飲んだら翌日試合休みだもん。

藤原　酒飲んで喧嘩して、顔こんな腫れてって状態で、そしたら次の日試合休むんだもんな（笑）。

――好き放題してますね（笑）。

藤原　それで試合が始まったら何するかと思ったら、浣腸してんだもん。

荒川　ウチは「ストロングスタイル」とか言ってたから、しょっぱい試合とかすると怒られるわけ。だけど俺の試合は猪木さん見るわけいかないでしょ。見たら喰らわさなきゃいけないから（笑）。だから猪木さんがス～ッと引っ込んじゃうんだって（笑）。浣腸したり、目突きチョンってやったりだから。

――ひょうきんプロレスですね（笑）。

藤原　みんなストロングスタイルやってるのにさぁ、一人だけ浣腸やってんだもん（笑）。でもみんな、それを楽しみにしてたよな。

荒川　そう。たまに私が真面目にやるとね、「面白くないぞー！」って声が飛ぶんですよ。誰かと思ったら、選手が言ってたんですよ（笑）。



「ほら、藤原がババア好きだっていう証拠写真だよ。気持ちよさそうな顔してるだろ、ウヘヘヘヘヘヘ」（ドン荒川氏・談）

――しかし、荒川さんの芸風がどうして注意されないできたのかが、ボクはずっと不思議だったんですよ。

藤原　いや、注意するとふてくされるからな（笑）。

荒川　ふてくされると何するかわかんないから、練習で（笑）。「稽古、お願いします」って言うから（笑）。

――藤原組でも、ひょうきんプロレスやってましたもんね。浣腸もありで。

藤原　そうだよ、藤原組のイメージ、コレのせいでガタガタになったもんね。

荒川　20年築いた財産が全部無くなっちゃった（笑）。

藤原　コツコツとやってきたもんが、一夜にしてパーだもん。試合中に屁かますからね（笑）。前田にも十字固めだか三角締めだか何かガッチリ極めて、鼻の前で屁ブリブリって。後で怒る怒る、前田が（笑）。「とんでもない！　冗談じゃないッスよ！」って（笑）。

荒川　あれ怒ったら一番やりやすいもん。だって全然怖くも何もないもん。

――カッコいいですねぇ！

藤原　いや、仲間だもん。前田、高田、佐山、オッサン、俺とな。

荒川　彼が新弟子仕上げてくるんですよ。それで半年ぐらいして俺とやらせるの。自信つけた頃に俺がガツーンってやっちゃうと、ガクーンって落ち込んじゃう（笑）。何回もやったよ。

◆

とまあ、三時間に渡って飛ばしまくる怒涛の放送禁止対談は、まだまだこれから！　この続きは次号でどうぞ！

【5月26日・食べて飲んでムエタイも見れるタイ料理・オーエンジャイで収録】

紙のプロレス RADICAL

1997 NO.4

元気が売り物の本誌は、
「プロレスを通じて
終生大衆に尽くす!」
これを使命とします!!

紙のプロレス・ラディカル

CONTENTS

「落とし前」と「世界征服」'97

●No.4 MAIN-EVENT

● SCANDAL&SCOOP

● SPECIAL NOVELS

● COLUMNS

● ANOTHER

Art Director
出田さん●San Ideta

Design/two-three
村松さん●San Muramatsu
ヒサくん●Kun Hisa
マツ●Matsu
古川ちゃん●Chan Furukawa

表紙モデル/前田日明
撮影/斉藤ユーリ
スタイリング/Akira Maeda
ヘア&メイク/Akira Maeda

※えー、「RADICAL」は「根源的」「根本的」という意味でとらえてくれると非常に嬉しいといいますか、んむはぁ

「落とし前」と「世界征服」'97



とは何か?

前田、来年引退で”U“の概念は消えるのか?

プロレスというジャンルに対する”道場破り“——。
それに対してプロレスは、必死の攻防を繰り返してきた。日本のプロレスの歴史はこのせめぎ合いの歴史といってもいいのである。
これまで、プロレスにはいくつもの”道場破り“が大津波のように襲った。
力道山全盛時代、まず最初に現れた”道場破り“の名は『世間』といった。
プロレスにとって、この『世間』は目に見えない魔物のような存在だった。この見えない敵にプロレス界は散々苦しめられることになる。
『世間』は、「八百長」「見せ物」「ショー」といった強烈な言語を武器にプロレスを襲撃してきたのだ。
それに対し、力道山時代のレスラーは全国行脚をしながら、できるだけ多くの人々にプロレスの凄みを伝えるべくカラダを張った。
その他にも、街頭での大立ち回り、一升瓶一気飲み、グラス喰い、力自慢などなど、古典的だが豪快な武勇伝、あるいは伝説をもってして迎撃態勢を整えたのである。
しかし、『世間』という魔物はとてつもなくしつこく、プロレスへの攻撃の手を一切ゆるめなかった。
力道山亡き後、その『世間』という魔物に敢然と立ち向かったのがアントニオ猪木である。
『世間』が、「真剣勝負」「格闘技」として認知していた空手、ボクシングとジャンルの攻防を展開したのだ。
”柔道王“ウイリエム・ルスカらとの格闘技世界一決定戦、”熊殺し“ウイリー・ウイリアムスとの格闘技世界ヘビー級選手権試合、そして全世界の注目を浴びた”英雄“モハメッド・アリ戦——。
これらの猪木流の一連の闘いの真の目的は、プロレスというジャンルに延々と”道場破り“を仕掛けてくる『世間』に対し、逆にこちら側から”道場破り“を敢行することにあった。
つまり、『世間』の懐に敢えて飛び込み、挑んでいったのである!
猪木の捨て身の作戦は一旦は成功したようにみえたものの、それでもやはり『世間』の息の根を止めることはできなかった。
そして、次に現れた”道場破り“はプロレスの内部から牙を剥いてきた強豪だった。しかも一気に二つの波が襲ってきたのである
その片方を『ケーフェイ』、もう一方を『UWF』といった。
ケーフェイとは、プロレス界の隠語であり、フェイク(ねつ造、サギ師などの意)という言葉の裏返しである。『ケーフェイ』という名の”道場破り“は、タイガーマスクとしてプロレスのリングで爆発的な人気を誇っていた佐山聡が、プロレスの矛盾点を突いた暴露本を刊行するという、実に鋭利な武器を携えて乗り込んできた。
しかし、その奇襲にあわてはしたものの、プロレスはジャンルとしての地力でなんとかこれを乗り切ったのである。
『ケーフェイ』は『シューティング』と名を変えて、プロレスに対して波状攻撃を繰り返したが、やがて潮が引くようにパッタリと”道場破り“には来なくなってしまった。
もはや、プロレスに対立概念を置く必要がなくなったのである。

”21世紀のU“

現在、『シューティング』という形態をつくり出した佐山聡は、再びプロレス界にリバウンドして戻ってきている。これは非常に不可思議な動きながらも、結果的にプロレスという世界の持つ広がりを示す形となった。

実は『世間』という魔物に対して〝逆・道場破り〟を仕掛けたアントニオ猪木は、その前にも、ジャイアント馬場という巨大な概念に〝道場破り〟を敢行している。

既成のレールに乗り、葉巻をくゆらせながら泰然自若と構える馬場に対し、果たしてプロレスは、いま敷かれているレールに乗っかったままでいいのか？　レールの歪みや老朽化を見直さなくてもいいのか？

猪木は、プロレス界に問題意識を投げかけ、現状打破をテーマにプロレスの内部改革を迫ったのである。

しかし、猪木の〝道場破り〟は空回りし続けた。

猪木が何度となく門を叩いても、『ジャイアント馬場という概念』は実体を見せなかったのだ。

それに対し、猪木は痺れを切らし、ストロング・スタイルという独自のレールを敷くことで、間接的にではあるが、『ジャイアント馬場という概念』に〝道場破り〟を仕掛けていった。

後に、この猪木の現状打破をテーマにした〝道場破り〟の遺伝子は、時代を越えて『ＵＷＦ』として現れる。

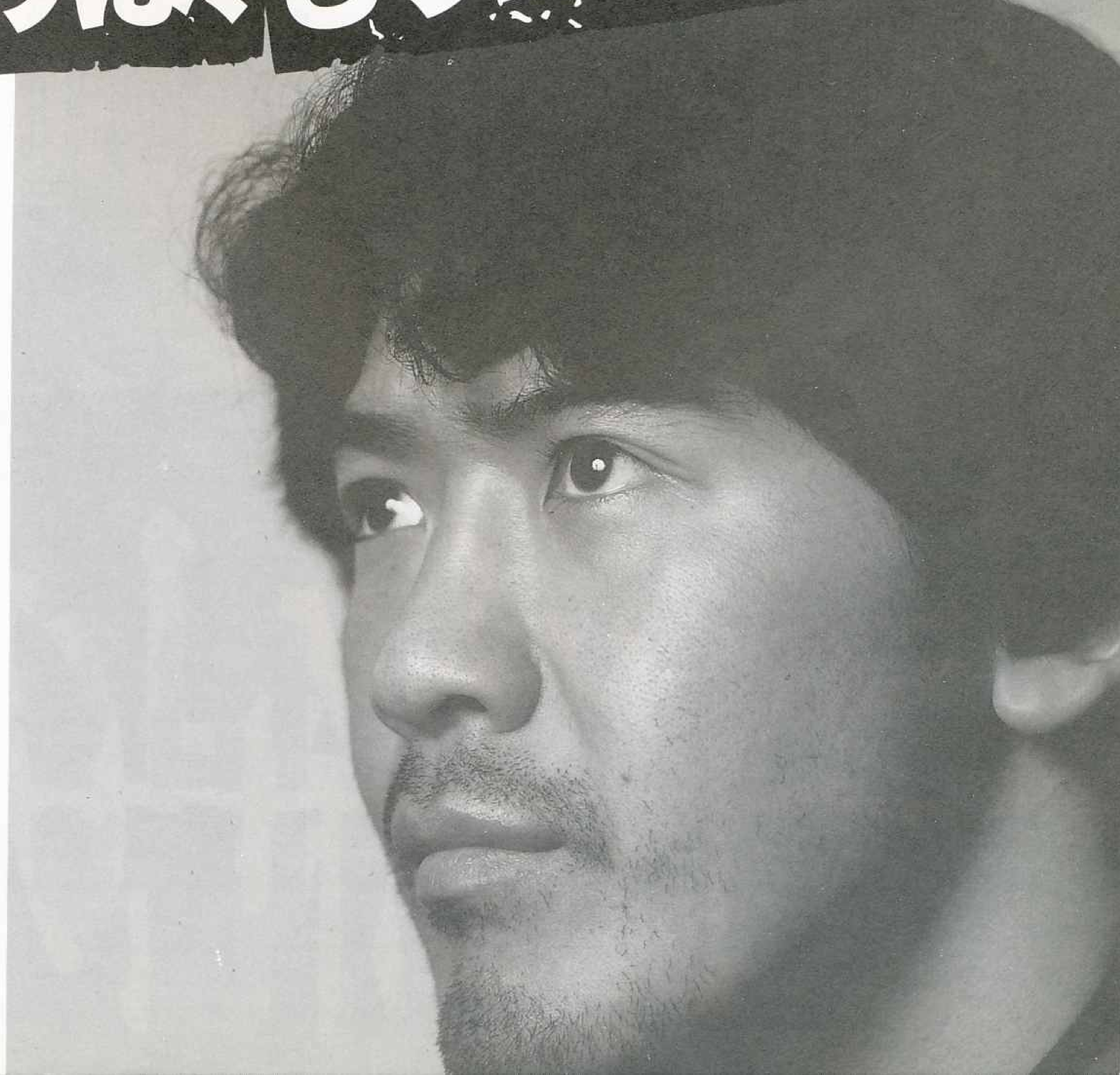
この『ＵＷＦ』の〝道場破り〟は、プロレスの土台を揺るがすほどの大きなうねりを起こすことになる。

プロレスというエンターテインメント性溢れる世界に「バック・トゥ・格闘技」、つまり「プロレスは格闘技である」という理念を武器に〝道場破り〟を仕掛けてきたのが、プロレスの内部から反乱を起こした『ＵＷＦ』と『シューティング』だったのである。

そしてこの二つの〝道場破り〟の目的はある時期まで一緒だったのだが、ある時を境に方向性が違ってくる。

『シューティング』は、プロレスに対する〝道場破り〟を一切やめることで、プロレスの呪縛から逃れることに成功した。『シューティング』という別宇宙をつくったのだ。

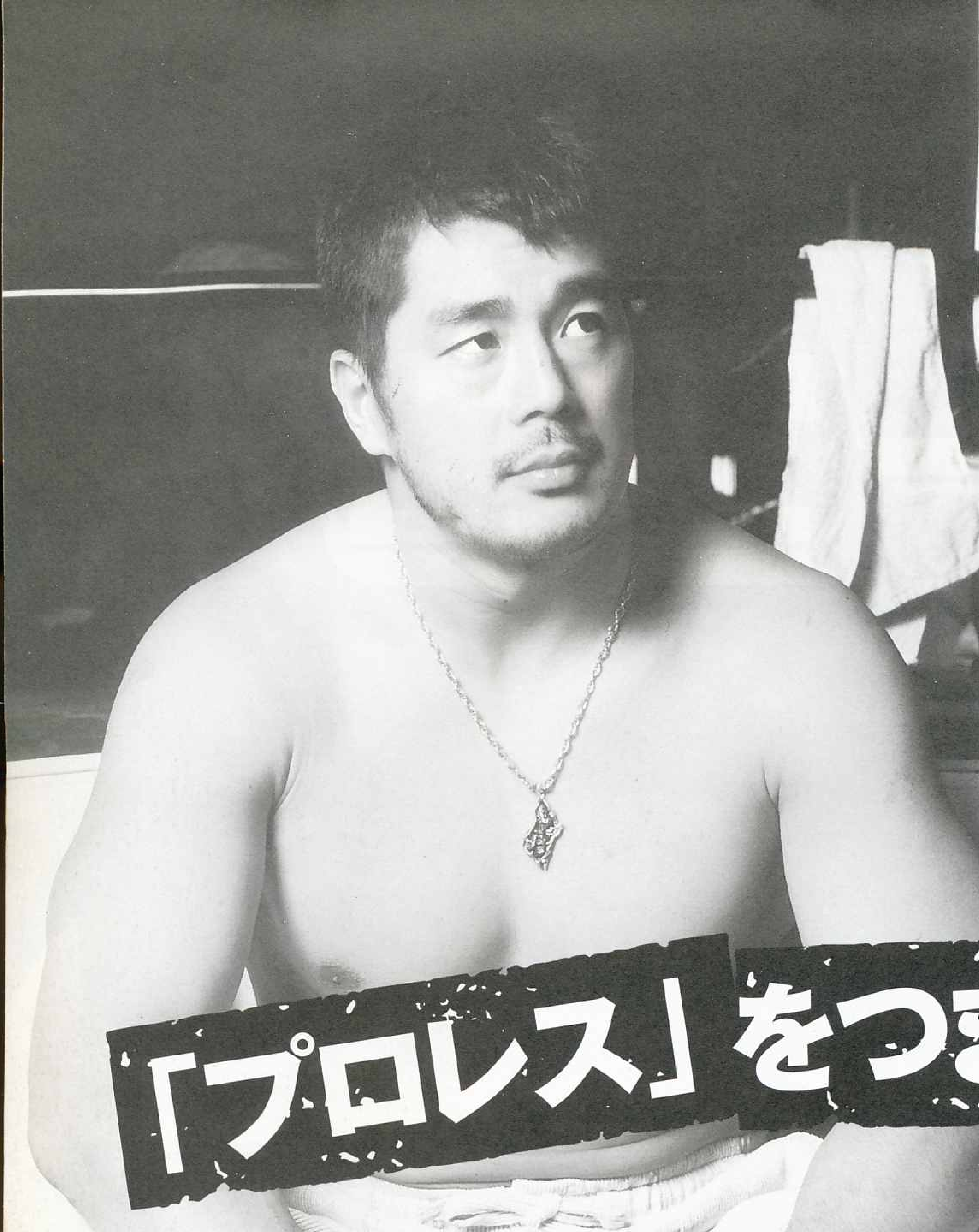
と言うのは、もう飽きた!!



しかし、『ＵＷＦ』はプロレスに対する〝道場破り〟をライフワークとしたので、逆にプロレスという宇宙の大気圏内に止まることになるのだ。

その『ＵＷＦ』の「ヘソ」は前田日明という。

前田日明もまた、プロレスに〝道場破り〟をすることでプロレス界に問題意識を投げかけ、現状を打破しようとした存在だった。お互いに反目しあいながらも、『ＵＷＦ』とプロレスは、かろうじてヘソの緒を通じて繋がりあっている関係だったのである。



「プロレス」をつまらない

その『UWF』以降に現れた〝道場破り〟の名は『なんでもあり』だった。

アルティメット大会やバーリ・トゥードあるいはグレイシー柔術。

向こうにはそんな気は毛頭なくとも、これらはプロレスの価値観をひっくり返すほどのパワーを持った〝道場破り〟だった。

しかし、プロレス側はそういった捉え方を一切しなかった。

強敵の出現にプロレス界は、目くらましをするように、「アメリカン・プロレス」という巨大な遊び場に逃げ込んだのである。

現在の「アメリカン・プロレス」には〝道場破り〟は絶対にやってこないし、〝道場破り〟を迎え打つという思想も元々ない。「ファミリー・エンターテインメント」という広場は、〝道場破り〟という概念が入るには、あまりにも広すぎるからである。

そんな時、〝その喧嘩、こっちが買った!〟とばかりに現れ『なんでもあり』を迎えうった集団がいた。それは、かつてプロレスに〝道場破り〟を仕掛けた『UWF』から派生したパンクラスやリングスといった武闘集団だった。『なんでもあり』に対する迎撃を買って出たのは、プロレスに〝道場破り〟を仕掛けた「落とし前」とも取れるのである。

併せて、来年、前田日明という「ヘソ」がなくなることで、かつて異様な光を放っていた『UWF』という概念はプロレスに対する役割を終えることになる。

これによって、パンクラスやリングスは遅かれ早かれプロレスの磁力が効かない存在となっていくはずだ。

そして世紀末——。

力道山時代からしつこく〝道場破り〟を仕掛けてきた『世間』という魔物は、もはやプロレスに〝道場破り〟を仕掛ける意味もなくなったといった不そんな態度で、とりあえずの和解を求めてきている。

しかし、プロレスはプロレスの持つ価値観をひっくり返すような〝道場破り〟と、必死の攻防を繰り返すことによって成長、拡大を遂げてきたジャンルである。

〝道場破り〟との必死のツバぜり合いなくしてプロレスの存続はありえないと断言してもいい。

現状のプロレスの価値観を驚かす〝道場破り〟が現れない限り、プロレス界は先細りしていくだけである。

現状のプロレスをつまらないというのはもう飽きた!

出でよ、〝21世紀のU〟——!!

〝21世紀のU〟とは、いまある世紀末のプロレスに対して乗り込む、概念としての〝道場破り〟に他ならないのである。

落武者、平成の世に化けて出る!!

週刊

DOUBLE CROSS

ターザン

NO.0

PRO-WRESTLING ★ 1997 ★

7/15

ダブルクロス発行

定価38円

嫌なら読むな!



勝利の禿げ に大食欲!



NOBORU YAMAGUCHI SCHOLASHIP

爆発的、圧倒的、衝撃的な
2大寄稿実現!

CONTENTS もくじ


大阪ドームの前でファンに噛みつこうとするターザン

1
失われた週プロ、ここにあり!
「取材拒否」後、初の新日リポート!
「97・5・3　大阪ドーム」に自費密航!!


本誌が大好きな前田日明にまで噛みついたターザン

2
落武者激白!
「前田日明に言っておく!
俺は同情されるなら
野垂れ死にした方がマシだ!!」

ターザン山本
元『週刊プロレス』編集長。昭和21年山口県岩国市出身。昭和52年に『週刊ファイト』でプロレス記者のスタートを切る。昭和55年に『ベースボール・マガジン社』へ。以後、破竹の勢いでプロレス界を引っ掻き回し、その影響力とハゲぶりと毒舌ぶりは他の追随を許さなかった。平成8年、新日本、Uインター、WARなどからの取材拒否が原因で週プロ編集長を辞任。真の落武者となるも、その霊魂と情念は今もプロレス界を席巻している。

大阪ドーム」に自費密航!!

て焼き畑プロレス!

メインの試合が終わってドームを出ると、雨が降っていた。
え？　なぜ、雨なの？
昼間、あんなに暑かったのに。
私は一瞬、信じられなかった。
これはないよな。
よりによって雨なんて……。
いっしょに東京からきた友人が、すかさずこう言った。
「ナミダアメデスヨ！」
そうか、涙雨(なみだあめ)か！
うん、泪雨(なみだあめ)だよな！
私はその言葉に妙に納得していた。
5月3日
ゴールデンウィーク
大阪ドーム
新日本プロレス
柿落(こけらお)とし！
もはや死語になってしまったが、私はレッスル・マニアのツアーで知り合った吉原さんと中原さんの3人で、大阪ドームに"密航"した。
密航！
なつかしい言葉である。
500キロ以上離れた場所からプロレス観戦の旅に出かける。ただし、一つだけ条件があった。利用する交通機関は各駅停車の鈍行列車に限る。
これを"密航"といった。
その昔、ファンの間で"密航ブーム"が起こった。
今、そんなバカなことをするファンはいない。あの密航ブームは一体、何だったのだろうか？
雨だというのにグッズを売っているテントの前は人、人、人でいっぱいだった。あれではものすごい売り上げをしたことだろう。
涙雨！
泪雨！
いつ
誰のために
なんのために
降り続けるのか？
ツアーの仲間が7人になった。なんばに出ていっぱい、飲もう。そういう約束だった。午後8時半からスタートするように予約済みだった。
大通りでタクシーを待つ。
だが、1台もこない。
どうなっているんだ、これは？
仕方なく地下鉄を乗り継いでなんばまで行くことにした。
傘がない。
途中、コンビニで安い傘を買おうとしたが、すでに売り切れていた。
濡れた。
雨の中を駅まで歩く。
濡れた。
歩きながら私は一つだけ不満を述べた。入場セレモニーがあり坂口社長とレスラーが、リングに勢揃いした。だがそこに猪木の姿がなかった。
新日本プロレスにとって旗揚げ25周年の記念興行ではないのか？
そこに創始者がいない。
それはないだろう？
失望したなあ？
まったく、がっかりだ。
新日本はみずからの輝かしい歴史を自分で否定したことになる。
A・猪木は現体制からすると厄介者なのか？　もし、そうだとすると泪雨の謎と意味が解けた（というものだ）。

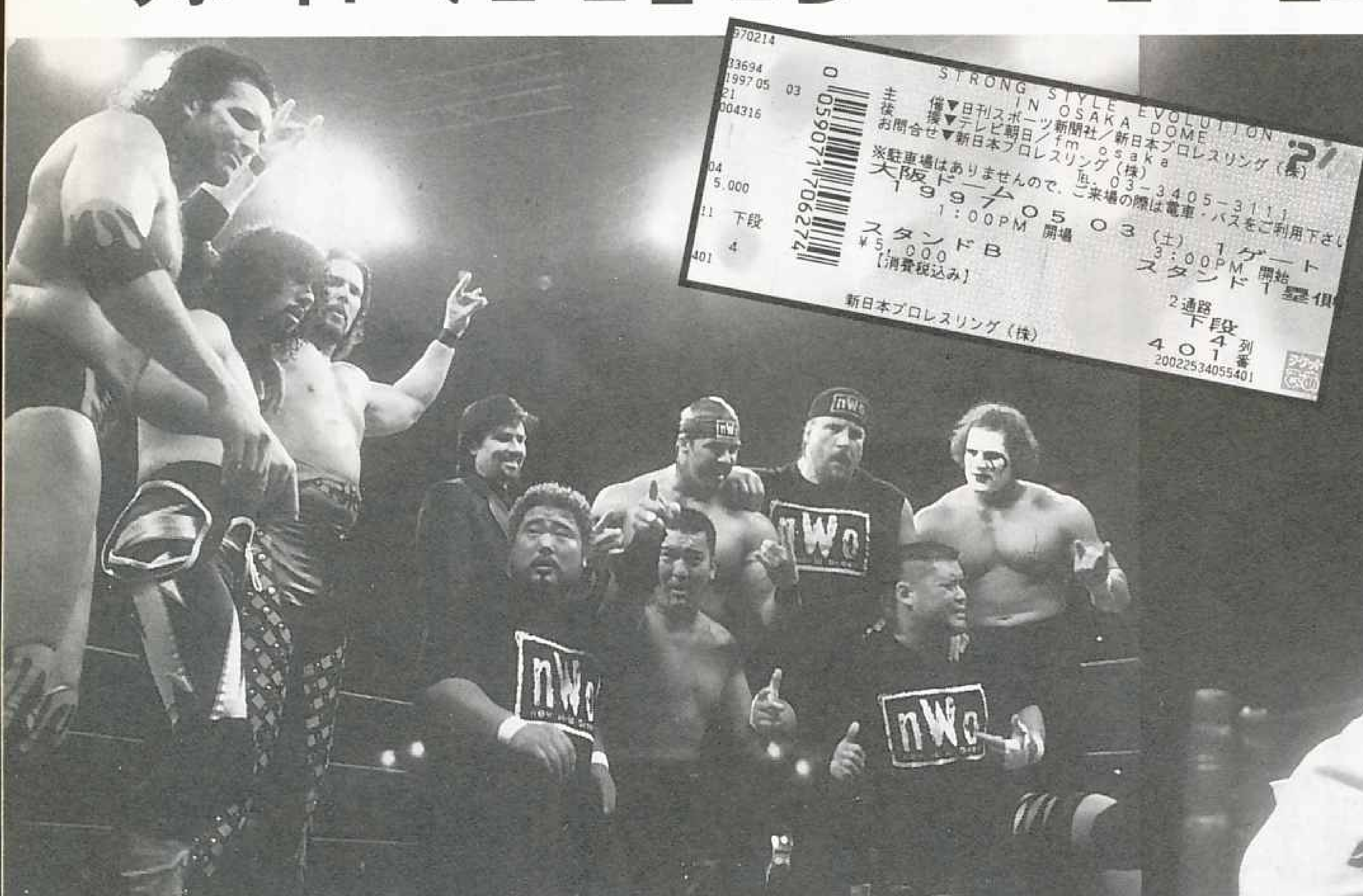


それならたしかに泪雨である。
こういうことを書くから私は新日本の関係者から嫌われるのだ。彼らからすると私は"いけないファン"というわけである。
「ファンが気分良くプロレスを楽しんでいる時、なぜ、あなたはわざわざ水を差すようなことを、そうしていってしまうのか？」
私はブラックリスト第1号である。
試合観戦中、友人のY氏から携帯に電話がかかってきた。彼も東京から試合を見に来ていたのだ。
「ねえ、ねえ、山本さん、見た？」
「え、何を？」
「いつ売店に行ってもファンでごったがえしているんです。試合なんか見ていませんよ。これって完全に休日のレジャー感覚ですよね。ドームってファン気質まで変えましたね」
おい、おい、そんなことにびっくりして電話なんかしてくるなよな。
ドーム興行はハード（巨大な設備）が、ソフト（表現としての試合）を強引にねじ伏せている空間なのだ。
我々を待っているのはドームという箱が持つ心地よさである。
そこではソフトは米粒のようなもの。限りなく微力な存在である。
ドームと米粒！
それを知ったらドームをお祭り広場におけるレジャーと考えるのは、賢明な発想といえるだろう。
同じ米粒でも猪木、藤原、佐山の3人は違っていた。彼らには「試合をしよう」という意識が初めからない。
それぞれのフォルム（形）と年輪を見せようとだけ思って、リングに上がっていた。これならたとえ米粒でも観客席に届くのだ。
猪木がタッグマッチで藤原にスリーパーホールドで勝ったとき、となりの席に座っていた吉原さんが叫んだ。
「いやあ、A・猪木って凄いなあ。こっちがもう少し試合を見たいなと思った瞬間、サッと試合を終わらせてしまうんです。まいったなあ！」
「吉原さん、それって誉め言葉なんですか？」
「もちろんですよ」
こんな見方をしたのはその日、ドーム広しといえども吉原さんだけだろう。
私は試合よりも吉原さんがいったその言葉の方が耳に残った。
私の席は1塁側スタンドB席。それも外野に近い端っこだった。チケット代は5千円。そこで目にしたのはnWoのTシャツを着たファンが、いかに多かったかということである。
あのデザインは素晴らしい。人気商品になって当然である。しかし、あれがWCWからの輸入品なのは、日本の団体にとって情けない話だ。
およそセンスが違いすぎるからだ。
吉原さん同様、中原さんも私を楽しませてくれた。藤波－天山の試合で藤波がスモール・パッケージを2度出した時、「次はグラウンド・コブラか？」といったら、藤波は本当にグラウンド・コブラツイストで天山を破った。
「もう、ああなるとわかっていたんだよな…」
そういうと中原さんは自慢そうにひとりで大笑いした。うれしくて仕方が

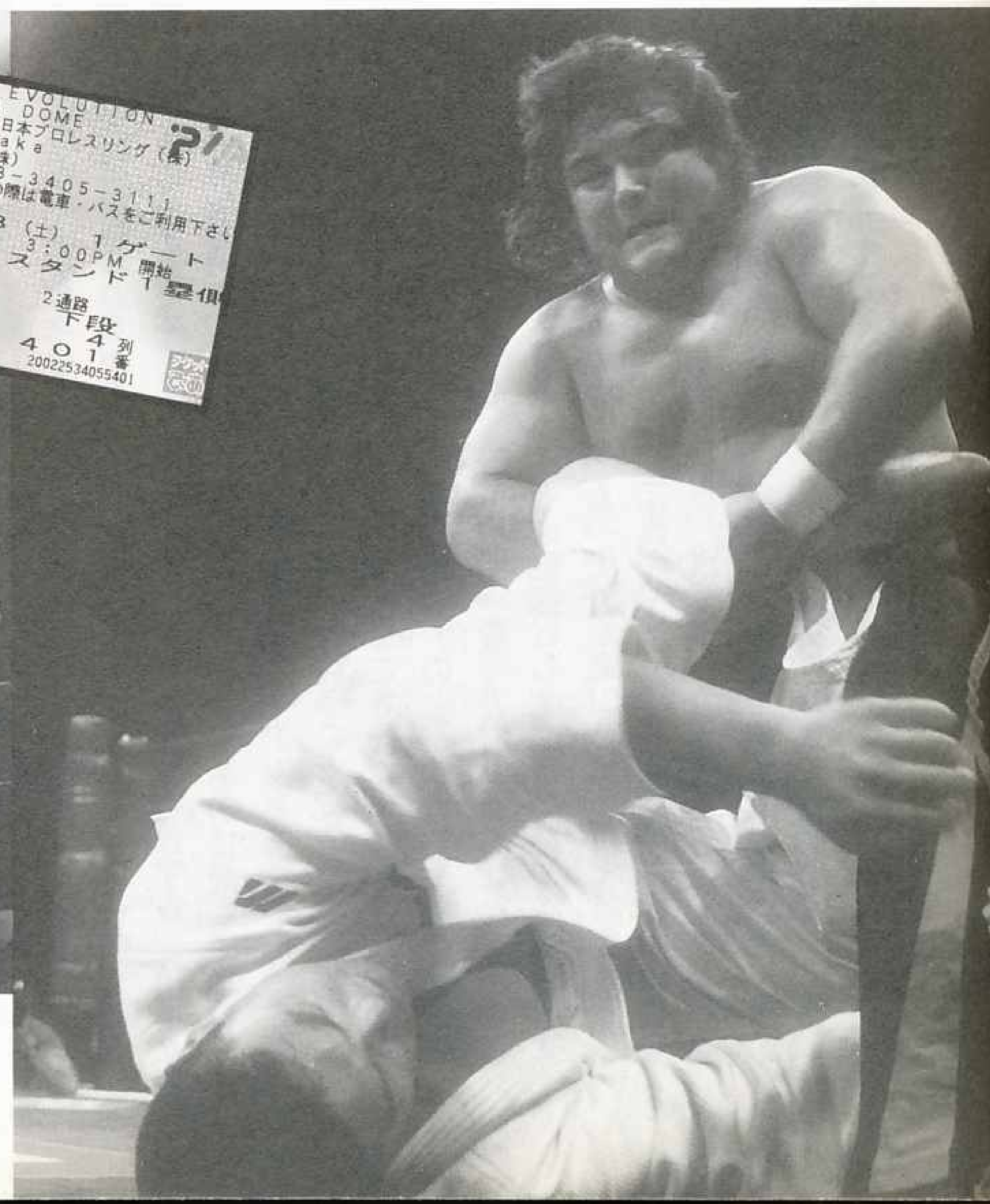
「97・5・3 新日本プロレス 大

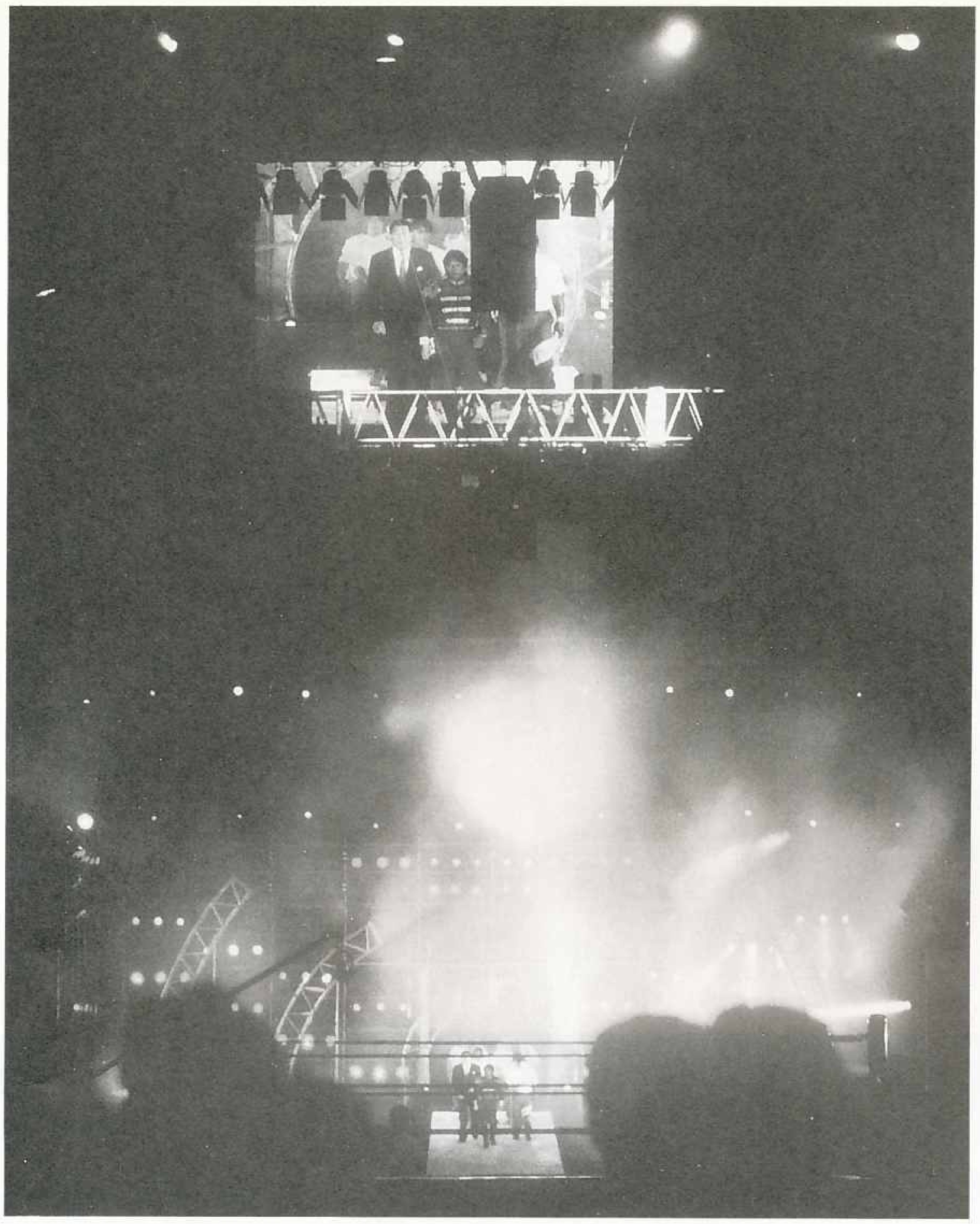
ターザン山本「取材拒否」後、初の新日リポート！

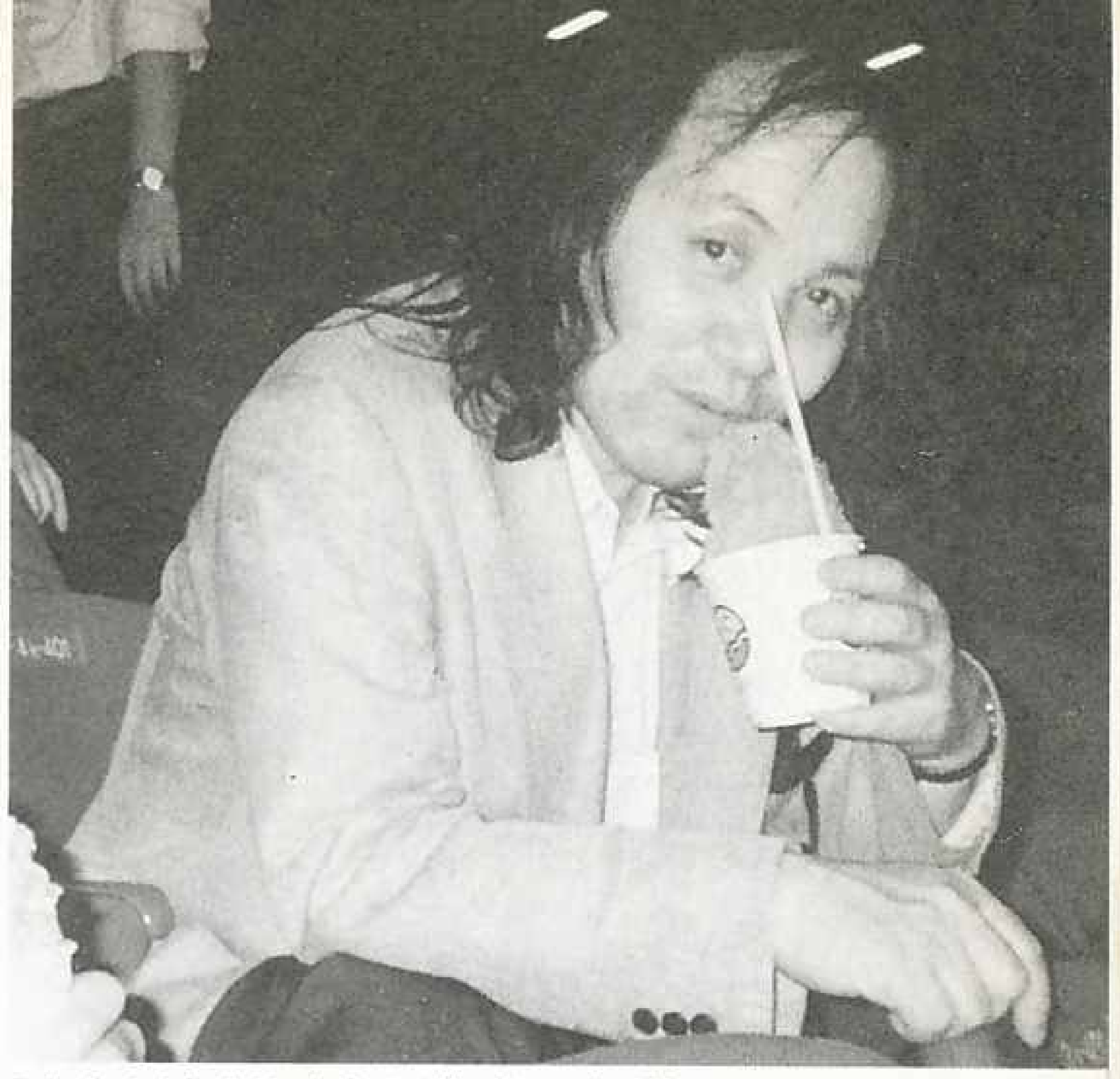
泪雨！米粒！そし



新日本の会場で取材できるはずのないターザンは、5千円のスタンドB席を購入。さすが「貧乏は悪だ！」と言い切るだけに太っ腹である







カキ氷（イチゴ味）を食べる俺（ターザン談）



スタンド席で（自腹）で新日本を観戦する俺（ターザン談）

ないといった様子だった。

その中原さんが休憩時間に〝かき氷〟を買ってきてくれた。みるとその〝かき氷〟はいちご色をしていた。

入れ物が大きいのでとても食べきれない。食べてみるとうまいような、まずいような、また、味があるような、ないようなそんな感じである。

要するに大雑把なのだ。いかにもドーム的といった感じがした。

吉原さんと中原さんを見てもわかる通り、プロレスの楽しみ方はほかから教えてもらうものではなく、自分で見つけだすものなのだ。

米粒（レスラー）と米粒（観客）の間で、かすかな電波によるキャッチボールができるのか、そこにすべてがかかっているといっていいだろう。

「ソフトとは一粒の米粒と理解すべきなり！」

米粒といえどもそこに至る過程においては田植えがあり、地下から水分を吸収し、太陽の光や風に打たれながら実を結んだ結果、できたものである。

ソフトには必ずそこに時間が刻まれているのだ。

地下鉄を乗り継いでなんばに向かった。本町で御堂筋線に乗り換えたときには、ものすごく歩かされた。

雨には濡れるしタクシーもないし、散々な目にあった。

予約していた店は〝ガンコテイ〟といった。

乾杯したあと開口一番、Y氏が「今日はつまらんかったねえ」といった。

それはみんなの共通した思いだったが、ドーム興行を見に行って、それをいっても仕方がないのだ。

私はテーブルに並べられた料理をパクパクと食べ続けた。普通、試合を見に行ったらそれについて、ああでもない、こうでもないと語り合う。

どんなにダメな興行だったとしても私たちにはそれができた。いい意味で試合を酒の肴にして盛り上がった。

しかし、その日はプロレスについて語れなかった。私たちの仲間は「落武者炎上の会」といったが、私も含めて昭和のプロレスファンは、本当に落武者になってしまい、平成に独り勝ちしている新日本プロレスによってハジキ飛ばされてしまったようだ。

その点について吉原さんは「自分たちも純粋なファンで、今のファンも同じく純粋なのだが、この二つの間には断層がある。異質な気がする」といった。「結局、僕たちは陰性なファンで、今の人たちは陽性なんでしょうね……」ともいった。

陽性な人々はドームという巨大装置（ハード）に容易に同化する。陰性なファンはハードなものに対してイレギュラーを起こす。なじめない。そこがもう古いということである。

だが、ここで沈んでいたら「落武者炎上の会」の名がすたる。そこからは宴会も一変した。私たちは仲間内のことを話題にして、その話で急に元気になったからだ。

「吉原さん、キミの結婚はオレに任せろ。バツイチの女性を紹介する。一度結婚に失敗している人が君には一番ふさわしい。その方が絶対に幸せになれるんだから……」



例によって私はメチャクチャなことをいいだした。バツイチの女性は幸運を呼ぶ。これは私の自論なのだ。この意味、わからないだろうなあ。

中原さんにも忠告した。

「中原さん、今の仕事はすぐに辞めた方がいい。自分で思ったんだから早く整体師になる学校に行け！　え、まだ会社辞めていないの？　だめだねえ！」

Ｙ氏は新婚５カ月で彼女を連れてきていた。桂三枝の『新婚さん、いらっしゃい』に出演できたのに、彼女が「テレビに出るんだったら私は離婚する」といって、その話はパーになった。

私たちは「なんでや？　出ればよかったのに……」と残念がった。

いずれにしろ５・３大阪ドームの話ができずに、身内の話をしているようでは、さびしい限りである。私は「新日本にやられた！」と思った。

そんな浮かれた中で一つだけ記憶に残っている一言がある。誰かがポツリとこんなことをいったのだ。

「会社でさあ、５月３日、大阪ドームを見に行くといったら、職場の人間が〝どうせ今度は橋本が小川に勝つんでしょう〟といわれた。あれはショックだったなあ」

世間はやっぱり敵である！

そういえばドームの前を歩いていたら、何人かのファンに「今日はどっちが勝ちます？」と聞かれたので、私が「小川！」というと、ほとんどのファンはがっくりした様子だった。

大阪ドームにやってきたファンは橋本に今日はどうしても勝って欲しいと思っていたようである。

〝ガンコテイ〟を出ると私と吉原さんと中原さんは、ホテルに帰った。雨はザーザー降りである。

ああ、ザーザー降りだった。

ベッドに横になりそのまま寝ようとしたが、どうもしっくりしない。私がツインの部屋に泊まっている吉原さんに電話して「ラーメンを食いに行こう？」と誘った。

アメリカ村の中にあったホテルから道頓堀まで歩いていく。深夜、雨の中を歩く。有名な立ち食いのラーメン屋があり、人でいっぱいだった。

チャーシュー入りを注文した。

うまい！

心に満たされないものがあった時はとりあえず〝食う〟しかない。食欲に走るのだ。吉原さんがまたささやいた。

「昔、猪木とブロディが大阪城ホールで闘ったときは、興奮したなあ。ああいうふうに見る側とレスラーが、一緒になって消耗し、心地よく疲れる関係はもうないんでしょうか？　自分たちは必要以上のことをプロレスに求め過ぎているんだろうか？」

５月４日、雨はすっかり上がっていた。何か暗い夢を見たような気がするが覚えていない。

新幹線の中では半分以上、眠っていた。東京駅が近づき身の回りのものを片づけようとしたら、いきなり中原さんが大声を発した。

「新日本は焼き畑プロレスだ。森を焼き尽くしたらあとには何もない！」

そうか、泪雨に焼き畑プロレスか…

今は平成なり！

「前田日明に告ぐ！ 俺は同情されるなら野垂れ死にしたほうがマシだ!!」

落武者激白！

前田日明が一般誌誌上において、立て続けに業界・ファンに衝撃を与えたことは、本誌読者なら先刻承知の助であろう。
ひとつは、かつてマット史上に残る"顔面襲撃事件"を引き起こし、和解は永久にあり得ないとまでいわれた、新日本プロレスの首領・長州力との『週刊プレイボーイ』での十年ぶりの握手！
もうひとつは『週刊SPA！』誌上で、驚くことに、これまた"犬猿の仲"といわれたターザン山本を「擁護」とも取れるような発言をしたことである。
前田日明は、いまも我々にとって実に"ショッキングな存在"である。本誌は前田日明という存在に多大なる関心を抱いている。いや、"前田日明なら何をやっても許されるのだ！"と言い切ってもいい。
しかし、その前田に真っ向から噛みついた男がいる。
誰あろう、今回は「擁護」された立場のはずのターザン山本である！
落武者は一体何に対して噛みついているのか!?
落武者の心の叫びを聞け！

まったく、
ふざけるなだ！
これだけは
はっきりといっておく。
前田日明に**同情**されるようになったら、オレも終わりだ。
同情されるなら野垂れ死にした方がましだ。
前田は変な性格をしているんだよな。
昔からプロレス界で突き抜ける人間が



【同情】 かつて、前田日明はターザン山本のことを「もし目の前にきたら、髪の毛掴んでそこらじゅうを引きずり回して、クシャクシャにしてやる!!」とまでに言うほど嫌っていたが、『週刊SPA！』（5／21号）では、「『週刊プロレス』の山本隆司編集長を業界で一致団結して降ろしたよね。だけど、その彼を踏み台にしてのし上がった人間もいっぱいいたわけじゃないですか。生活的にも社会的にも、いまの彼は苦しいはずですよ。なのに、世話になった人間がいまの彼に力を貸しているかというと、そんな話は聞いたこともない。（中略）オレ、そういうの嫌いですよ。古風な言い方かもしれないけど、彼らはあの編集長に大恩があるはずじゃないですか」と実にジュンときてしまう男らしい発言をした。これを読んだターザン山本もジュンとくるかと思いきや、上の原稿のように吠えまくっているわけである。前田と長州が和解した今となっても、前田とターザンの和解（というよりも精算か）はまったくあり得ないのだろうか？　もちろん、前田と長州の場合は、レスラー同士ということが和解をスムーズに運び、結果的にファンは喜んだ。これが前田とターザンとなると、喜ぶのは本誌くらいのものだというのも容易に

出てくると、必ずそれに**ケチ**をつけ反発した。

一体、前田はどういう神経をしているんだ。

最初に標的にされたのはA・猪木だった。

あの天下のA・猪木を前田はボロカスに批判し続けたのだ（あのころの前田はたしかに立派だった）。

「A・猪木なら何をやっても許されるのか？」

あれは前田ならではの〝名言中の名言〟だった。でも、それを言っちゃ、前田の負けになるんだよな。

次なる標的は作家の村松友視氏だった。村松氏が『私、プロレスの味方です』という本を書き、世間にプロレスブームを巻き起こすと、

「レスラーでもない人間が、わかったような理屈を付けて、プロレスを語るな！」と猛烈に噛みついた（これは明らかに筋違いだった）。

あ〜あ、レスラーがそれをいっちゃ、おしまいなんだよな。

オレがもしレスラーだったら口が裂けても、そんな恥ずかしいことはいわない。笑われるだけだ。それじゃ、コンプレックス丸出しじゃないか？

オレなんかひどいもんだよ。

前田はオレのことを、

「あいつは馬場さんからマンションを買ってもらった。だから山本は許せない！」といったのだ。

どこにそんなマンションがあるんだ。あるんだったら教えてくれ！（今の家以外にも一軒、マンションが欲しい）。

それでオレが『週刊プロレス』の編集長を辞めると、今度は「ターザンも生活に困っているだろうし……」とこれだもんな。

人の生活に干渉するな。余計なおせっかいだ。**ダンディズム**に欠けるぞ！

ダンディズムといえば1年前の〝取材拒否事件〟もひどかったよな。

週プロとオレが憎いんだったら、新日本は男らしく単独で取材拒否すればいいのに、他の団体に「一緒に週プロとターザンを潰そうよ！」と共同謀議を持ちかけたというじゃないか？

リングスにもその話はいったようだ。

そうすると「それは面白い。ターザンを潰すのは賛成だ。だが、長州さんが中心になってやるんだったらオレはやらない」といって前田は結局、**共同謀議**には加わらなかったというような話がオレの耳にはいってきた。

その前田も1年たったら長州とちゃっかり握手しちゃってるんだから、どうなってるんだといいたい。これじゃ、貧すれば鈍するといわれても仕方がないよな。

あるいは「武士は食わねど高楊枝」の精神は、どこにもないのかといいたい。

かつて前田は長州のことを〝言うだけ番長〟といった。それが10年前の〝**顔面襲撃事件**〟になったんだが、今回、一般週刊誌に載った長州・前田対談をみて、オレは思ったよ。

あれじゃ、もう、二人とも〝言うだけおじん〟だよ。老人の〝茶飲み話〟となんら変わらない。がっかりしたよ。

たとえていうならオレの脳裡の底にしまいこんであった記憶が、急にショートして、跡形もなく飛び散ってしまった。そんな気分だよ。

あれは、

記憶への裏切りだ！

しかし、よく考えてみると5月3日、大阪ドームのメインでおこなわれた橋本対小川の試合は、何と、橋本の〝顔面蹴り〟で勝負がついたんだよな。

これは歴史の偶然か？

オレにとっちゃ、意味深だったよ。

もう一つ。

オレが前田について一番、イヤなことは少しだけ陰に回った人間（今回、オレもはいったのか？）に対して、前田がエールを送ることだよ。

新日本のレスラーでは藤波辰爾だけ持ち上げてみたり、天龍源一郎についても「天龍さんのやってきたことは凄いことなんだ」といったりするんだよな。

そうすることで前田は藤波以外の人や天龍以外の人間の誰かを暗に批判しようとしているんだ。

前田からエールを受けた人間も、これじゃ、たまったもんじゃない。

プロレスラーだったら、いや、格闘家だったら、リングで観客を魅了しろ！

口でプロレスをするな！

それが肉体表現に生きるものの鉄則だ。

最後にいいたいことがもう一つだけある。

成功した者を
妬(ねた)むな
むしろ拍手をおくれ
同情からは
何も生まれない
それはすべて不毛だ！
いや、
同情とは実は
偽りの感情だ！
わかったか！

想像できる。だが、過去に「落とし前」をつけるためなら本誌はいくらでも力を注ぐつもりである。しかしこの先、ターザンのことを今までさんざんボロカスにケナしていながらも、「ま、前田日明が今回擁護したんだから、俺もターザンに少しは同情してやろうかな、応援してやろうかな」などという業界関係者やファンが続出しそうで怖い。そういう背骨の腐りきったヒトには本誌がキッチリと噛みつかせてもらいます！（註：本誌）

【ケチ】 本来は縁起が悪いこと、不吉な前兆のことをいうが、世間一般では金品を必要以上に惜しむ人間のことをケチという。前田日明が〝村松批判〟をして『私、プロレスの味方です』にケチをつけたのは、相手の縁起を悪くしようとしたわけで、そうなると前田日明は別名〝呪術師〟ともいえる。つまり私とはきわめて似た者同士ということか。みんな前田日明とターザン山本を避けるはずである。（註：ターザン山本＝以下同）

【ダンディズム】 辞書には男のおしゃれとか伊達ごのみと書かれているが、真の意味は野暮なことをしない精神のことをダンディズムという。いい意味で「人は人、自分は自分」を守り通せる人間のことをダンディズムと呼び、人のことをとやかくいう人間は、その反対に野暮天とか野暮の骨頂といってさげすまれる。男らしさをあらわした言葉である。

【共同謀議】 複数の人間が集まってよからぬことを相談し、確認しあうことを共同謀議という。ただしそこには人をたぶらかして謀議の中に引きずりこむ首謀者と、それにつられるか、もしくは強制的に謀議に加えられる人と二つのタイプに分けることができる。だから共同謀議は一時的に成功することはあっても、継続性に乏しい。

【顔面襲撃事件】 今から10年前の昭和62年11月、リキプロ主催後楽園ホール大会でUWFの前田日明とリキプロダクションの長州力が、6人タッグマッチで激突した。その時、前田が長州の顔面をハイキックで蹴り上げ、長州の顔面がお岩のように腫れ上がった。この試合で前田は新日本プロレスから追放処分を受けた。誰もが知っている有名な事件である――。

"プロレス界"のためなら

さぁ、みんな寄っといでぇ〜

自己破産する覚悟の紙のプロレス

本誌バックナンバーのお知らせだよ〜

某団体からは「何でこんな事しか書けないのかね」と叱られた──本誌

第9号

特集『週刊プロレスとは何か?』第1回

40万部というオバケ雑誌になった『週プロ』を通して、活字プロレスの鬼・ミスターX、テリー伊藤らがメディアの意義を分析!



＜2大インタビュー＞

大仁田厚
「嘘つきだもん、俺」

糸井重里
「このぐらいまでやらないとケツの穴が小さいと思ってるうちに脱肛になっちゃうことってあるんだよね」

第8号

特集『さらば新日本プロレス』

本誌編集長・**山口昇**、本誌元発行人・**柳沢忠之**、**斎藤雄一**、落武者・**ターザン山本**が当時の新日本プロレスに決別宣言した禁断の㊙企画!



＜2大インタビュー＞

20ページ堂々掲載!
ザ・グレート・サスケ
初インタビュー
関根勤

第5号

特集『たたかいグランプリ』

人生の闘いに自力のみを信じ、デタラメにブチ当たるドンキホーテ6人の極私的闘争記



右翼のレッテルと闘う**鈴木邦男**、人混みと闘う**杉作J太郎**、痔と闘う**山口昇**ほか登場

＜ロングインタビュー＞

馳浩
「芸術とは本能に訴えかけるもの。プロレスもそうですよ」

◎対談
デビル雅美VS氏神一番

第12号

特集『色気とは何か?』

＜9大インタビュー＞

村松友視「前田を見てると理解されないだろうなという色気を感じる」



蝶野正洋
「他人から壊されにかかっても壊れないですよ、俺は」

ザ・グレート・サスケ、河合メリージェーン、アントニオ猪木ほか

★94.10.31前田の暴行事件を検証!!

緊急座談会
「女子便所説教事件」の全貌

第11号

特集『狂気とは何か?』

＜6大インタビュー＞

堀辺正史「狂気性を帯びてる人っていうのは、ただのバカなんです」



タイガー・ジェット・シン
「俺様の目の中に何を見たいんだ! 狂気か!」

西村知美
「いまの趣味は献血。すごくいい献血ルームを見つけたんですよ」

佐野量子／糸井重里／ガッツ石松

特集『週刊プロレス』とは何か?完結編

第10号

特集『週刊プロレスとは何か?』第2回

現『UNO』編集長・**花田紀凱**、元『週刊ファイト』編集長・**井上義啓**ほかが『週プロ』の雑誌作りの仕掛けを解き明かす。



◎対談
アントニオ猪木VSキューバ大使

＜2大インタビュー＞

ユセフ・トルコ
「俺がいなかったら猪木も馬場もクソもないんだよ」

テリー伊藤
「俺たちはゴロツキだから自分の楽しいことがベースだよ」

第15号

特集『インディペンデントの逆襲』

＜13大インタビュー＞

茂木正淑「昔は館林銀蝿って呼ばれてたんですよ」



高野拳磁「新宿のショーパブで俺は化粧してものまねやってたんだから」ほかインディー界を背負って立つ13人の饗宴

特集
『K—1とは何か?』3大インタビュー

石井和義「K-1とはプロレスへの復讐なり」

ターザン山本「石井館長の本能が脅威ですよ」

谷川貞治「K-1は僕が格闘界に導いたんですよ」

第14号

特集『神秘とは何か?』

＜5大インタビュー＞

佐山サトル「僕の動き、それがもう神秘になってるんじゃないですか?」



鈴木みのる「神秘性のない奴はレスラーの範疇に入れちゃいけないんですよ」

大槻ケンヂ「偉大なる理念を残す人はインチキ臭くなければいけない」

プロボディーガードの世界で生きてきた**清水伯鳳**

相手に触れずに投げ飛ばす大東流合気柔術六方会宗師・**岡本正剛**

第13号

緊急特集『道場破りとは何か?』

安生洋二VSヒクソン、道場マッチ実現

＜2大インタビュー＞



山本小鉄「返り討ちに遭ったら、俺なら、その場で腹切りますよ」

上田馬之助「道場破りだなんだって言ったって長生きしたヤツが一番強い」

特集『ファミコンプロレスの逆襲』

前田日明　スペル・デルフィン　馳浩　斎藤文彦　須田剛一5大インタビュー

＜2大インタビュー＞

養老孟司／糸井重里

そんな本誌の最新23号は夏祭りの頃に発売？

第18号
緊急座談会・高田引退発言の読み方
『高田延彦さんへ愛をこめて』
特集『すてきな奥さん』
格闘家、レスラーを陰で支える偉大な妻たち
5大インタビュー



大山倍達未亡人
大山智弥子さん
佐々木健介夫人
北斗晶さん
ライガー夫人
●●千景さん
石川雄規夫人
石川道枝さん
サスケ夫人
村川メリーさん

第17号
特集『実況パワフル北朝鮮！』
＜3大インタビュー＆対談＞
アントニオ猪木VS永島勝司「ポーズ取って筋肉見せたって驚きゃしないよあちらの人は」



ブル中野「あの人たちのなにかが変わるきっかけはプロレスだなって思う」
橋本真也「プロレスの原点はみんなにできない喧嘩でしょ」
村松友視「北朝鮮とアントニオ猪木という世界は一般の真面目な目からはわからない世界だよ」
巻末特集
『藤原組の逆襲』

第16号
特集『新日本凸凹大学校』
後藤達俊「酒は飲んでも飲まれるな」
マサ斎藤「英語覚えるならベッドイングリッシュが一番よ」



キラー・カーン
「うちのカレーの秘密は野菜ジュースの缶を入れるんだよ」
橋本真也
「洋楽も聴きますよ。ホイットニーとか、ロス……インディオス」
ほか5大インタビュー
＜巻末2大対談＞
糸井重里VS谷川貞治
ユセフ・トルコVS由利徹

第21号
特集『幻的格闘技(ファンタスティック)』
6大インタビュー
前田日明「近所の竹薮行って刀の試し切りしとんねん」



世古典代（寛水流空手二代目会長）「緑区では（会長の大嫌いな）花火上げたら殺されるって有名ですから」
岩井作夫（古武術・武備会）／**甲野善紀**（武術研究会松聲館）／**井谷利之**（野太刀自顕流師範）／**櫻井文夫**（合気道S・A代表師範）
＜2大インタビュー＞
石井和義／**ガッツ石松**

第20号
特集『劇的格闘技(ドラマチック)』
格闘家の生きざまに迫る4大インタビュー
角田信朗「自分自身が泣けなくて、人を感動させることができますか」



真樹日佐夫「男の原点はやっぱり変わらないってことだよ」
K−1を語る
村松友視／**大槻ケンヂ**
◎日本プロレス3巨頭スペシャルインタビュー
ユセフ・トルコ／**上田馬之助**／**遠藤幸吉**
＜2大インタビュー＞
松永光弘／**神取忍**

第19号
特集『さようなら紙のプロレス』
紙のプロレスを偲んで5大インタビュー
ターザン山本／**ユセフ・トルコ**／**上田馬之助**／**糸井重里**



紙プロ追悼対談
高野拳磁VSザ・グレート・サスケ
座談会
『K—1三兄弟＋負けず嫌い座談会』
出席者　**石井和義、ターザン山本、平仲信明、谷川貞治**
巻末特集
『こんにちは紙プロインター』
山崎一夫／**ミスター・ポーゴ**
インタビュー

バックナンバーの購入方法

◯定価は『紙のプロレス』第5号、8号、9号は700円、第10号から第22号までは780円となります。『大山倍達とは何か?』『極真とは何か?』は1530円、『猪木とは何か?』は1320円です（消費税5%込み）。
◯送料は『紙のプロレス』、『何か?シリーズ』ともに、一冊＝240円、2冊＝310円、3〜5冊＝380円、6冊以上＝450円。
◎例えば、『紙プロ』5号と10号、『大山倍達とは何か?』を購入する場合
5号700円＋10号780円＋『大山とは〜』1530円＋送料380円＝3390円を同封して下さい。

●郵便振替の場合
00130—3—769154　（株）ダブルクロス

＊なお1号〜4号、6号7号は完売しました。

●現金書留の場合
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3—11—3—702
（株）ダブルクロス「本誌バックナンバー係」まで

第22号
特集『この人が喝っ！』
この国はあと100年で滅ぶと嘆く
撃墜王（元特攻隊員）坂井三郎インタビュー



水圧との闘いだった半生を語る
元海女・田仲のよインタビュー
＜新春ウルトラ対談＞
新春から人の臓器について嬉々として語り合った
前田日明VS養老孟司
＜3大インタビュー＞
高阪剛／**セッド・ジニアス**／**ジョージ高野**

バックナンバー常備の気骨のある店

書店
山形／八文字屋エビスヤ店　神保町／書泉ブックマート、書泉グランデ　秋葉原／書泉ブックタワー　池袋／リブロ池袋店、芳林堂書店池袋店　六本木／青山ブックセンター　大井町／博文堂大井町店　中野／タコシェ　吉祥寺／ブックスルーエ　町田／福家書店　浜松／イケヤ文楽館有楽店　名古屋／ヴィレッジ・バンガード、ヴィレッジ・バンガード2　豊田／ヴィレッジ・バンガード5　春日井／アイビー・ブックス　富山／精文館書店　大阪／駸々堂コミックランドアメリカ村　岡山／ブックマスターフィッツ

プロレスショップほか
水道橋／プロレス・マニア館、チャンピオン　新宿／アイドール　渋谷／レッスル渋谷店　池袋／レッスル池袋店　日本武道具　六本木／闘魂SHOP　大山／大山アメリカン　東大和／オフィスTAKA　札幌／リングパレス　甲府／キャッチ　名古屋／アイドール　和歌山／ヘラクレス和歌山駅前店　大阪／アイドール、バディスラム、チャンピオン—金沢／プロレス屋

大好評『何か？』シリーズ



猪木とは何か？
2大緊急
ロングインタビュー
アントニオ猪木／**村松友視**
◎**告発仕掛人・仙波記者に迫る！**
◎**立川談志**メッセージ
◎**新間寿**記者会見誌上再現



大山倍達とは何か？
押して忍んで
11大インタビュー敢行
大山智弥子／**大山茂**／**石井和義**／**前田日明**他
◎お宝対談発掘
大山倍達VS力道山



極真とは何か？
極真魂溢れる
16大インタビュー
黒澤浩樹／**フランシスコ・フィリョ**／**村上竜司**／**ウィリー・ウィリアムス**／**中村誠**／**大沢昇**／**磯部清次**／**松井章圭**他

別章＝時代の中のプロレス＜第3回＞

プロレスについて考えることは狂喜である

山本隆司

再生！『ザ・ドマイナーパワー』

今から14年前の話である。だから皆様には大昔のことだと考えて欲しい。そう、あれはたしかに大昔の話である。

昭和58年の7月、我が『週刊プロレス』が創刊された。といっても今は私のものではなく、週プロは他人様のものになっている。まあ、それはどうでもいいことだが、その時、私は週プロの〝宣伝文句〟――コピーを考え出した。

それは次のようなものだった。

月刊では遅すぎる！
日刊では浅すぎる！

自分でいうのも変だがなかなかのセンスをしているいいコピーである。

月刊誌ではニュースが遅すぎるために週刊誌にする。その際、日刊紙では記事の内容が浅いので、週刊誌では一歩、突っ込んだ記事にしたい。これが週プロを立ち上げたコンセプトだった。

よく考えてみると、この方向性の中に後の様々な〝取材拒否〟につながる要因が含まれていた。それは「週刊誌だから一歩、突っ込んだ記事にする」という一項目である。

日刊紙のプロレス記事は内容が浅いことを善しとする。この考えは正しい。元柔道の世界チャンピオン、小川直也がプロレスラーに転向すると、日刊紙はバカの一つ覚えみたいにして連日のように小川の記事を載せまくっている。



▲世はまさに、「一見さんがレジャーとして安心して楽しめるプロレス」と「日刊紙プロレス」の全盛時代である。

ちょっとしたプロレスファンならいい加減、食傷気味で「なんとかならないのか？ 小川直也が一体、ナンボのもんなんや！」といいたくなるだろう。

その気持ちはよくわかる。だが、日刊紙は専門誌ではなく一般紙である。この〝誌〟と〝紙〟の違いは大きい。また一般紙であるなら世間的に知名度の高い小川を重視するのは当然である。

それに小川は〝ニューフェース〟である。あらゆる意味で今の彼は〝一般紙〟向きの絶好の素材でもあるのだ。

折りしもプロレスを定期的に記事として取り扱ってきた日刊スポーツとデイリースポーツに対して、サンケイスポーツとスポーツニッポンまでプロレス＆格闘技のページを作った。後発ながら一般紙が本格参戦したのだ。

これによって報知新聞、東京中日スポーツを含めるとスポーツ6誌がすべてプロレスを記事にしたことになる。

この瞬間、マット界の流れは激変していった。つまり週プロや週ゴン（週刊ゴング）など、プロレスの専門誌の力が弱まり（ある部分、歴史的役割は終わったともいえる）、一般スポーツ紙による日刊紙の時代にリセットされたのだ。

世はまさにプロレスを深く掘り下げる必要のない日刊紙の全盛時代に突入する。日刊紙とうまくドッキングした小川は日刊紙認定のペーパーチャンピオンと呼べるだろう。

日刊6紙がプロレスを記事にすることで、ファンも総入れ替えの現象が起こっている。レジャーとしてプロレスを楽しむ人たちが、新しいファンとなって外野席に押し寄せているのだ。

彼らは『週刊ファイト』の元編集長である井上義啓氏が、いみじくもいったようにデルフィンの仮面を被ったのっぺらぼうの群衆である。群衆だから厳密には到底、ファンとはいわない。

ファン層までがリセットされたのだ。

思い入れ、思い込み、過去に生きる、歴史にこだわる、知識と情報を競い合うというマニアのファンは、リセットされた以上、彼らの居場所はどこにもない。日刊紙の時代になると新日本はドームツアーを興行しているので、プロ野球に例えると巨人に相当する。新日本以外の団体は巨人以外の球団と同じく、付け足しで報道されるだけだ。パブリシティー的にいうと死んだも同然である。

「日刊では浅すぎる」という意気込みは、すでにファンも求めていないのか？

専門誌もインディーも受難の時代だ。

さっそく読者の要望（見出し参照）に応えて、佐山、鶴田、藤波、前田、猪木などウチ的に大好きなレスラーへの的外れな批判ばかりが並ぶ北野君たちの**「命がけのトーク」**（竹内君・談）集を軽く批判してみたいのだが、そもそもボクは相方の竹内君の顔が生理的にどうにも非常に好きになれない（そのくせ堂々と雑誌で顔を出しまくるから、タチが悪い）。

そして、それ以前に彼らの考え方自体がどうにも好きになれなかったりするのである。つまり**「ロープに振るときも一回、肩を叩く」「吊り天井に行く前に相手の腕をパァーンと叩く」「馬場が切ってくれと言ったのにキラー・トーア・カマタが血のりを使ったので、日本に来なくなった。これは有名な話やからね」**など、いわゆるプロレスの八百長的なネタを口にして小馬鹿にしまくる彼らのチンケな芸風が、だ。

ちょっと実例を挙げてみよう。

竹内「前田が『来年からウチは真剣勝負でやるよ』と言うたら、山崎も高田も船木も『それだったら私はできませんわ』と言うた。藤原は『家の金を払ってくれたらやります』と。要するに、前田以外はみんな『真剣勝負ができない』って言った人間なんですよ」

北野「その前田も、田村に『もう少し肉付けなあかんやろ』言うじゃないですか」

こんなプロレス道にもとりまくるろくでもない暴露をかまして悦に入っているようでは、日明兄さんのみならず温和な菜食主義者のボクチンまで無性に腹が立ってくるのも当然というもの。

しかも明らかにプロレスのことをろくに知りやしないで暴言吐きまくっている始末なのだから、これはもう誰かが女子便所にでも連れ込んでキツく説教ブチかますしかないのである。でしょ？

というわけで、どんな失言をかましているのか、ツッコミも交えて勝手に引用するとしよう。

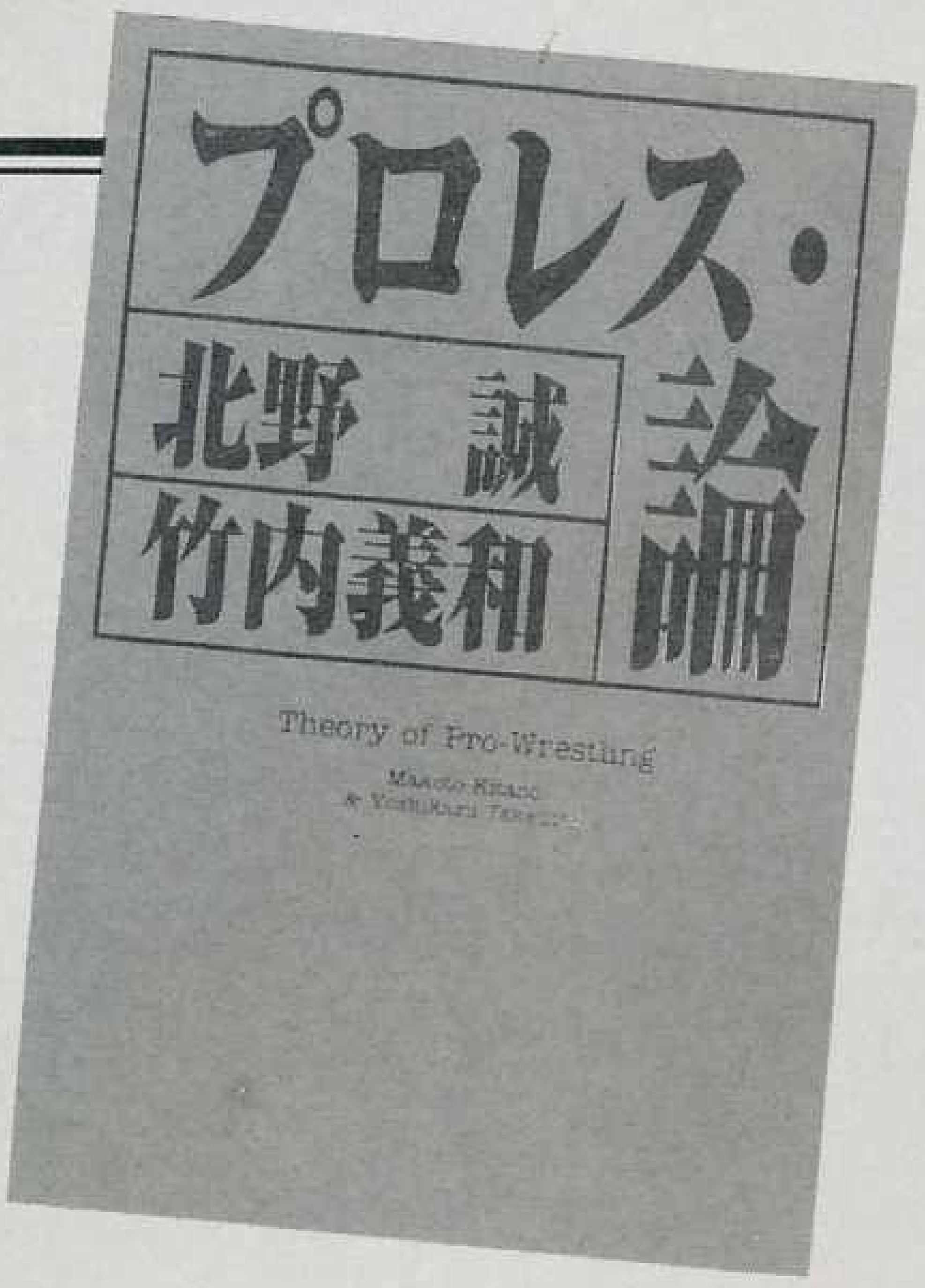
北野「普通、オクタゴンでストンピングなんかやられたら終わりやで」

竹内「死にまっせ。そういう恐怖心があるじゃないですか。オタービオは、もう恐怖心の固まりですよ」（なんで！）

北野「こないだ、藤波がすごい城マニアやってことがわかったんですよ」（昔からさんざん自慢しまくってるのに、いまさら気付くな、ボケッ！）

北野「バックドロップを、かつてのウィリー・ウィリアムスが猪木にやったみたいに、低い角度で反ってしまうと危険やで」（どうして極真の熊殺し空手家が危険なバックドロップなんかやるんだ？　これは当然、スティーブ・ウィリアムスだ）

北野「長州は、確かウエイト・リフテ



プロレス・論（北野誠・竹内義和／ぶんか社）

書評は平和ではない
書評は戦いである
武器のかわりが毒舌であるだけで
それは地上における最も激しい厳しい
自らを捨ててかからねばならない
戦いである――（ネール元インド首相の娘への手紙）

「SHOWはいらない」（大阪市／森田大祐君）「福昌堂のツッコミが浅くてムカつくチンケな本を潰して下さい」（世田谷区／佐藤栄二君）「北野誠の『プロレス・論』という本を批判してほしい」（大阪市／莚井博司君）など反響大爆発！

日佐夫クン人生劇場

書評の星座

PART2

ィングのチャンピオンのスコット・マギーとかいう選手とやったよな」（確かにそういうレスラーもいたが、この場合はトム・マギーが正しい）

北野「『グラップラー刃牙』の中で主人公のパティが言うねんね」（それじゃ刃牙じゃなくて『グラップラー・パティ』だと思うのだが、違うか？）

北野「漫画『グラップラー刃牙』の中で、主人公の渋川ゴウキが」（当然、これも単なる脇役で出てくる、塩田剛三をモデルとした合気道の老人だ）

北野「いまはスペル・デルフィンがジャンボ鶴田になりつつあるからね」（どこが！）

北野「昔、村松友視が『こんなプロレスをしていたら二十年もつ体が十年しかもたない』と書いたが」（こんなことも知らないで臆面もなくプロレス本なんて出してるのか、北野君は！　これは「こんなプロレスをしていたら、10年もつプロレス生命が5年や3年で終わってしまうかもしれない」と、猪木が自ら発言したことだ。違うか？）

どうですか、お客さん！

もしかしたら編集者がダメ人間なだけなのかもしれないが、それにしたってひどすぎるにも程がある。

ついでだから編集者サイドの不手際にも言及しておくと、笑いも取れないくせして事実誤認だけは膨大な注釈もまた、プロ注釈家を勝手に自認するボク的にはどうにも非常に許し難いのである。

たとえば**「暗闇デスマッチ」**は**「かつて海外でさかんに地下プロレス同様に行われたが、日本では大日本プロレスが復活させた」**だの（本当はW★ING）、**「長州、藤波のハイスパート」**は**「噛ませ犬発言で端を発した長州の造反劇」**だの（全然、注釈になってない）、**「熊との試合は小鹿社長が考案」**だの（これこそ海外で地下プロレス以上にポピュラー）、**「新日本対大日本の全面対抗戦」**（全面じゃないだろ）、**「94年&95年のK・1覇者パトリック・スミス」**だの（いつ優勝したんだ？）、とにかく無茶苦茶すぎていちいち訂正する気もなくなるほど。

注釈は死ぬ気で書けや、ボケッ！

まあ、編集者はともかく、問題はこの二人である。特に北野君は、**「長州は家庭をオープンにしないかぎら非常に素晴らしい。だが藤波は家庭を出しすぎて、外人専用のスーパーで5万円ぐらい使ってアホほど食いまくる異常なダメ人間」**（要約）との不可解な主張を繰り返しているようだが、レスラーが異常なまでの食欲をアピールするのはどう考えても素晴らしい行為のはず。まるでアンドレみたいだし。

そもそも我らがアントニオ猪木のように家庭を見せまくりながらも平気で狂気性を保ち続けるレスラーこそがベストであり、笑顔で良きパパぶりを見せつけつつも尋常じゃないほどメシを食いまくる藤波もまた猪木イズムの継承者なのである。

そんなことにも気付かず、まるで素人ファンレベルでしかない**「松永の新日からの敵前逃亡」**批判を繰り返しているようでは、まだまだ甘い。

結局、ボクに言わせれば「甘い！　やるんだったら俺を殺すまでやれ！」（BY藤波）ということでしかないのである。



プロレスラーの秘密の話2（新倉史祐／鹿砦社）

鹿砦社お得意の暴露本シリーズも、プロレスネタではさすがにトーンダウンしまくりの様子。ゆえにこれまた前作同様、秘密というよりも単にほのぼのとした楽屋話の連発でしかないのだが、新弟子時代の破壊王・橋本の破壊的エピソードがあまりにも秀逸なので勝手に引用するとしよう。

「おい、今年入った新人たち。お前ら一人ずつ自己紹介と何かやれ！」

先輩にそう言われた弱冠18歳の破壊王は、スポンサーや先輩レスラーたちの前だということも全く気にせず、いきなり**「おい、お前よ～」**と絶妙なビッグサカのものまねを開始したというのだ！

「それを見た坂口さんは激怒しまして、『テメー、何やってんだ！』とおしぼりをぶん投げるわ、近くにあったものをいろいろ橋本選手に投げるんですけど、彼はそんなことを気にせずに、マイペースで坂口さんの物マネを最後までやりきりまして、大ひんしゅくを買ったのです」

さすがボクらの破壊王！　たとえ嫌だと言われようとも、ボクは破壊王を全面的に支持する。そう、破壊王なら何をやっても許されるのだ！



猪木論
（木村光一／有朋堂）

現在、刊行が順調に遅れつつある『闘魂伝説の完全記録』（全10巻）。これはその前半のインタビュー部分のみを再編集したお手軽本でしかないはずなのだが、これまた抜群に面白い。まあ結局の話、猪木インタビューが面白くないわけもねえんです！

「俺は梶原さんとはほとんどつき合ったことないんだ。梶原作品も読んだことねえんです。極力避けてたんですよ。俺、梶原さんは好きじゃなかったから（笑）」

と、爆発的新日ブームの火付け役だった恩人・梶原一騎をあっさり断罪しただけでなく、梶原による伝説の『監禁事件』（タイガーマスクのギャラや猪木が会長を務める空手流派・寛水流設立などに関して梶原がホテルの一室でキツく説教した件）のことでもアッと驚く衝撃の新情報を公開するのだ。

「（梶原と）一緒にいた男は『チャカ持ってこい！』とか言ってるし。俺はチャカってピストルのことだってそのときは知らなかったんだけど（笑）」

じゃあ何だと思ってたんだ、アントン！

さらに、そんな確執まであった梶原一騎のことを、最後に猪木は一言でズバリ言い切る。

「それになんのかんのと言っても、あの人は基本的にはアントニオ猪木のファンだったんですから（笑）！」

なぜだ!?　それだけではなく、これまた鎖鎌片手に真剣勝負を迫ってきた寛水流・水谷征夫会長のことさえ、これまたあっさり一言で片付けるのだ。

「ただね、水谷さんと会って話してみてわかったことが、彼はアントニオ猪木のファンだったということなんですよ（笑）」

これぞまさに猪木イズム大爆発！　結局、地球は猪木を中心として回っているわけなのである。



わし流プロレス絵ンマ帳
（ぼおりゅう♥りき／日本文芸社）

オール平仮名の上、さらにハートマークまで混入した不快極まりないペンネームのみならず、そのルックスも**「少々変わり者で、風采が上がらず、目つきが決して良くはない」**（BYえのきどいちろう）ぼおりゅう♥りき36歳。『漫画ゴラク』誌上で**「人気投票で常にダントツの最下位をキープ」**し続けた彼の代表作が、デビュー11年目にしてなぜか初の単行本となった。

……が、似たようなテーマ（プロレス自体ではなく、その周辺の出来事やファンを描く）の傑作・『最狂超プロレスファン伝説』（作／徳光康之）とは大きく違って、ここに見るべき部分は非常に何もない。ただ、荒鷲指向のボク的に評価できるのは唯一、「一人称がワシ」という、その一点だけなのであった。



禁忌
（工藤めぐみ／フォレスト出版）

「私は謎を残して辞めたりしない！」と吠えるくどめが、**「フライデー事件から引退の真相まですべてのタブーを本人自ら明かした」**（オビより）初の自伝。

さすがにフライデー事件での相手の名前だけはタブーすぎたのか伏せられているが、なんとフライデー記者が**「他団体の女子プロレスラーから情報をリークしてもらった」**という衝撃事実も掲載（個人的には天田麗文がFMW女子を評した**「こんなの女子プロレスじゃない。踊りだ！」**という、空手ダンスでマス大山チックな衝撃発言が非常にお気に入り）。

そして最大のタブーというべき、「ターザン後藤が他団体の女子に嫌われている理由」までズバリ解き明かしているから、もうビックリなのだ。

やはりターザンを名乗る巨大な長髪男はどこでも嫌われる運命にあるのだろうか。悲しい現実である。

それで結局、なんで嫌われるのかというと後藤は常々、工藤らに**「場外乱闘、椅子攻撃は禁止」「男子のメインイベンターが使う大技禁止」「雑誌での派手な発言禁止」**を命じていたという。まあ、要するに女子は単なる前座扱いだったわけなのだが、それだけではなく後藤は**「交流戦後も他団体の会場に現れ、よその選手にも説教」**していたというから、まさに鬼神。

以前、全女の某有名選手が「あの人、試合のことにまで口出しするんですよ（怒）！」と炎上していたのは、そういうことだったのか。と、その理由がわかるだけでも買う価値のある一冊だ。



BREAK（SPIRAL）

某パソコン通信（ちなみにNIFTY）に彼らが送りつけた謎のアジ文によると、これは**「マルティメディア対応ユニットSPIRAL」**による、**「プロレス界ではおそらく初めてと思われる、フルMacによる本格的エディトリアル・デザインを取り入れたプロレス・デザインブック」**だそうである。なんだそりゃ。

まあ非常にわかりやすく表現すると、『最強宣言』とかいうミニコミを作っていた少年が、就職した勢いで作り上げた高価なミニコミといったところだろうか（ちなみに全100ページで1200円。『紙プロ・ラディカル』が高いという読者の声も多いが、これに比べれば非常に良心的なものなのだ）。

ちなみに彼氏、ボクがある筋から入手した文書（『夕刊プロレス』発表）によると、**「プロレス"おたく"って呼ばれるのは好きじゃない」**という思いから、こんな若さにまかせまくった発言までブチかましているから、もう強烈。では、どうぞ。

「プロレスには女の子が入ってくるためのセンスがいいものがほとんどない。団体やマスコミのセンスのレベルが低いのはもちろん、おたく達のセンスは最悪！　レスラーをキャラクター化したTシャツ、派手なバギーパンツ、人目を気にせず裸の男や血まみれの女の子が表紙になっている専門誌を読む感性……。プロレス自体もより複雑化し、コア～なおたくの世界へまっしぐら！　これじゃ女の子はもちろん、ちょっと興味を持った人が入り込むには怖すぎる」

弱冠21歳のプロデューサー・佐瀬君は、そんな熱い思いから己のハイセンスぶりを『スタジオボイス』を模倣したコラムページなどでレベルの低いおたく共にアピールしたつもりなのだろうが、かつての『プロレスJUNGLE』の勘違い『スタジオボイス』路線といい、プロレス雑誌がモード方面にコンプレックスを感じたところで結局は底の浅さを露呈するだけだとしかボクには思えない。

西川のりおが表紙になったり小人プロレスが記事になったりもしていた素晴らしき初期『スタジオボイス』を模倣するならまだしも、いまのモードなスタジオボイスに憧れてどうするのか？　どうにも身の程知らずというものであろう。

ゆえに**「無我のデザイナーさん自ら書いた『無我デザインを考える』や、これさえ読めばデザインのすべてが分かる『デザインとは何か？』など、読み物としても充実させてあります」**（©NIFTY）という充実しているとは思えない内容自体、ボク的にはイカンともし難いものがありまくるのだ。

そもそもセーラーズのデザイナーの手による無我グッズの、どこにセンスはあるのか、とボクは問いたい。だったらセーラーズ愛好家として広く知られる西川のりお師匠にもセンスはあるのか、と。

個人的に西川のりおを完全支持し、セーラーズ店長のサイン本まで持っているボクに言わせれば、これらはどう考えてもスタジオボイス的センスの対極にあるとしか思えないのである。

「世間から『センスがない』と言われ続けてきたプロレス・ファンですが、『BREAK』を読めばセンス向上間違えなしです」（©NIFTY）と、いきなり日本語間違えちゃってるのも問題なら、**「～でござる」**調の文体や**「週プロが面白いのはあぶない木曜日があるから」**なる勘違い発言にもセンス皆無。

そもそも『週刊プロレス』低迷期のセンスレス表紙コピー「ブレイクしようぜ！」（表紙・天龍&高田）を思わせる雑誌名自体、非常に問題であろう。

まあ人間、誰しも若いうちは隙だらけの失言を繰り返すもの。今後はくれぐれも注意して発言するよう努力精進してほしいものである。以上。

最初で最後の『紙プロRADICAL』登場か!?

花くまゆうさく

リングの汁 RADICAL



今月の汁

プロレス界にセカンドインパクトは必要か？

はずかしい話でありますが、わたくし正直に申し上げますと見に行っちゃいました、キングダムの試合を……というのはウソですが、見に行っちゃったんですよ「エヴァンゲリオン」を。独特の集団の中に入るのに、覚悟がいりましたがなんとか入りました。リングスの会場に行くようなもんでしょうか、居心地の悪さは。

そんで、エヴァンゲリオンと言えば"セカンドインパクト"ですが、前号の紙プロRADICALではバトラーツの池田選手が「バトラーツでセカンドインパクト起こしますよ!」と言っています。ですが、私はバトラーツ内ではなく、日本のプロレス界全体にセカンドインパクトが、必要なのではないかと思ってしまう訳であります。

と言っても「なに言ってんじゃー。今もプロレスは、こんなに面白いのにそんなの必要ないんじゃー」と、じゃーじゃーどやされたら「はあ、そうですね。すいません」と言うしかないけど、まあ聞いて下さい。

今の後戻りできないほど、どうしようもない爆発でリセットして、またいちからやり直したほうがいいのではないかと、思ってしまったりしちゃったんです、私は。

ここ数年で、ナガサキ、山本、安生、ビガロなどが、真剣勝負で敗れるという小爆発は起きていますが、プロレスは不死身なのでなかなか死にません。U―JAPANでプロレスラー全員敗北しても、「彼らは、トップじゃない」「あのルールはプロレスラーには不利だ」との言い訳で、プロレスは持ちこたえてます（しかし、「彼らはトップ～」はいいとしても、「あのルールは～」は言い訳にはならんと思う。本当にプロレスラーが強いのなら、プロレスラーにあんなに有利なルールはない。でも実際には、プロレスラーより強い奴がゴロゴロいたため、あんな事になってるではないか）。

そこで、ここらでデカイ爆発が、セカンドインパクトが起きて、プロレスはいちどブッ飛ぶんではないかと。それが、8・15東京ドームだったのではないかと思うのです。

幸いなのか、不幸なのかは判らんですが、この大会はどうやら中止のようです（5月25日現在）。しかし、当初のコンセプトどうりに、この大会が実現していれば、セカンドインパクトになっていたと思えます。

この大会は、プロレス対格闘技の全面戦争の企画だったようですが、もし本当にキングダム、リングス、バトラーツ、猪木グループの日本プロレス軍対外国人リアルファイター軍で行われ



★6月「人生リセットボタン」、7月「生きまーす」（マガジンハウス）、8月「労働2号」（青林堂）と単行本3冊発射！ よろしくおねがいしま～す。（今月のおねがい汁）

…リングたち

ガセネタ道場

フリーライター 椎名基樹

現在の時点で、アルティメットなど『なんでも有り』の闘いに、臨戦態勢で出撃できる国は、アメリカ、ブラジル、日本、そしてオランダ、ロシアといったところだろう。オーストラリアとフランスは、まだまだ、だいぶ遅れているといえるだろう。とにかく、世界中これだけたくさんの国がある中で、総合格闘技がなんたるかをわかっていたのは、たったこれだけの国しかなかったのだ。その中に日本が入っている、それはすごいことだ。

そして、日本に総合格闘技の概念を植え付けたのは、なんと言ってもUWF（シューティングも含めて、出発点が新日道場論という意味のUWF）である。UWFが持っていた『人間の仕留め方』は、日本を格闘技の先進国とする、すぐれて正しい技術体系だったのだ。アルティメット以降、プロレスは弱いなんて言った奴は、とんでもない話である。

しかし、このUWFとは、人数が増え過ぎて飽和状態となった、新日のただの別部隊として、偶然に誕生したのだ。その偶然が日本に総合格闘技の下地となった。そして、今10年前と同じく、新日っプロ（蝶野的表現）が飽和状態を起こし、別部隊が生まれている。

①越中の平成維新軍
②蝶野のNWO
③猪木、佐山、小川の世界格闘技連盟
④藤波の無我

どうですか、お客さん！ この個性で素敵なラインナップ！ どれもこれも、魅力的であるが、なんと言っても新しいと思うのは、藤波"窓際の辰っつあん"率いる『無我』である。ど



ていたら、大変な事になっていたんじゃないでしょうか。

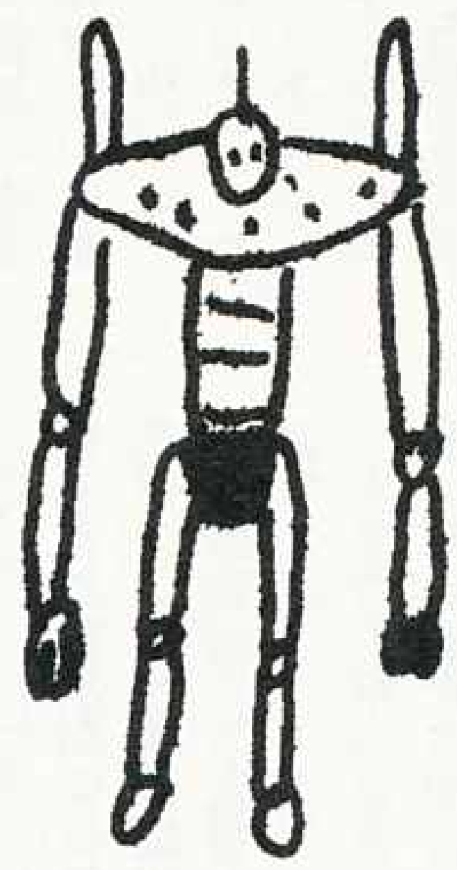
まあどう考えても、ヒクソン戦のメインの高田のために、リングスなどがわざわざこんなリスクのある戦いに参加するとは思えませんが、もし実現したとしましょう。で、想像すると、まずリングスはミーシャやピュードロフなどを出そうとしますが、日本人にしろと言われ却下されそうです。で、結局日本軍は、高田、安生、桜庭、高阪、田村、山本、バトラーツから数人、そして小川となり（絶対こんなメンバーありっこないけど）、そんで外国リアルファイター軍は、ヒクソン、コールマン、ウゴ、マルコ、ヘンゾ、バヘット、アマレスラー、キモなんかだとしましょう（だから絶対無理だよな、こんなの）。パンクラスは、高見の見物でしょうね、たぶん。

そんでヒクソンの「この大会は、一試合でもプロレスがあったら出場しない」のツルの一声で、全試合真剣勝負となってしまいます。武藤×オタービオ戦や、いわゆるU系プロレスは御法度です。

そしたらもう結果は、小川だけ勝ってあとはみんな負けちゃうんじゃないでしょうか？

安生、桜庭、高阪あたりは善戦するかもしれないけど。

U―JAPANの再現というかそれ以上の爆弾が、プロレスに落ちるわけですよ。そんで一度プロレスは完全に地に墜ちるべきではないのかな。なにかでかいショックが必要ではないのかなと。大量離脱というセカンドインパクトがあって、少しはよくなってきた『サムライ！』のように……。



しかしそんな事をさせない為にも、プロレス界の自然の力が、この大会を中止に向けさせたのかもしれないと、妄想する今日この頃の私でした、失礼。

花くまゆうさく●9月14日から初の個展をする事になりましたので、よろしかったらどうぞとの事。サミュエル・L・ジャクソンの顔には心を揺さぶられた。あんなレスラーの出現を願う今日この頃の私。

ふぞろいの

こが新しいかというと〝何がなんだかわからない〟という点だ。今までの新日の団体内軍団は、対立概念がハッキリしていた。もちろん、対象は『本隊』である。しかし、無我はそういうわけでもないらしいのだ。世界格闘技連盟も『本隊』が対象というわけではないが、アルティメット路線という目的がハッキリしているので、見る側にも伝わりやすい。しかし、無我は何がしたいのかよくわからず、観る側を不安な『無我ゾーン』に引き込むばかりなのだ。

だいたいにおいて、団体名が『無我』である。ものすごいセンスだ。『レッスル夢ファクトリー』も『社会人プロレス』もそのシュールさにおいて、足元にも及ばない。多分、この団体名は、ドラゴン得意の習字で、思いの外うまく書けた字であり、ゴキゲンにも、それをそのまま採用したのではないだろうか？　だからうまく書けた字が『初日の出』だったら、団体名が『日の出』であったはずだ。

そして、さらによくわからないのが、無我の主張するレスリング・スタイル。猪木VSゴッチが理想だとか、ランカシャーへの道だとか、あまりにも突拍子もなく、よほどのマニアでなければ、それがどういうものか、サッパリわからないという、これまたシュールなハードコア・スタイルを提唱。よくよく聞いてみれば、それは現在新日で主流のハイスパート・レスリングへのアンチテーゼらしいのだが、最近になって木村健悟と組んで、ちょっとだけIWGPのタッグチャンピオンになってみたり、少し前の話だが、かつての部下である、越中を呼び付けて、新日の谷間企画ワンナイト・タッグトーナメントで、必殺の飛龍・逆さ抑え込みで優勝をかっさらってみたりと、どう考えても、スタイル闘争とは別次元の、脈略のなさばかりが目立つのである。

このように、とらえどころがない『無我』だが、UWFと同じく筆者に、ひとつだけ新しい価値観を与えてくれた。それは『無我なる個性』である。筆者は常々「カレーに僕の顔が!?」とのたまう松岡修造を見て、NHKでタメロで解説する原辰徳を見て、真顔でUFOの話をする横尾忠則の犬面を見て、面白いと感じていたが、それを表す言葉が見当たらなかった。それをドラゴンが教えてくれたのだ。「それは無我ですよ」と。つまり、ドラゴンは筆者に『お人好しは、面白い』という、すばらしい真理を教えてくれたのだ。プロレス界に対しても、ドラゴンは『無我、思わぬゆえに、我あり』という、逆説的な個性発揮の方法を提示してくれたと思う。

もし、数年後、東京ドームで『無我COSMOS』が開催され、『無我の遺伝子』が飛び散ったとしたら、10年後何が起こるのだろう？　どんな偶然を生むのだろう？　素晴らしきかな、藤波。ドラゴンFOREVER！

椎名基樹●1968年、静岡生まれ。『週刊SPA！』内「バカはサイレンで泣く」でお馴染みのはっちゃけライター。お花は、ひまわりが好き♥　好きなアイドルは佐藤ルミナ♥

私、「紙プロ」の味方です

お笑い芸人
海砂利水魚 **有田哲平**

初めまして、私、お笑い芸人をやっております、海砂利水魚の有田哲平と申します。何をかくそう僕は大のプロレスマニアでして、長州力が藤波辰巳に"かませ犬発言"を行って以来、TVや雑誌（『週刊プロレス』は創刊号より全号持っております）など、プロレス漬けの毎日です。いわゆる"活字プロレス"というのにハマって以来、おそらく出版されたプロレス本は全て読破してると思うし、一番好きなプロレス誌は『週刊ファイト』という、東京ドームでパワーウォーリアーのTシャツを着て「フランケンシュタイナーって効くんだろうなぁ」などと言っているファンとは、一線を画しているつもりです。

その僕が読む側から書く側を任されてしまいまして、複雑な心境ですが、心より『紙プロ』には感謝させて頂きたいと思います。が、その前に『紙プロ』に一言モノ申させて頂きたいと思います。

僕がプロレスマニアというのは、一部の若手芸人の間では知られるようになりまして、何かと移動中とか空き時間とかにプロレス本ばかり読んでると、誰かなりが「一番強いのは、やっぱ橋本かねー」とか「UWFの前田って、まだやってんの？」などと基本的な質問をしてきます。そこで一斉の手を抜かずに熱く説明していると、結局は「そんな面白えんだったら一回生で観に連れてってくれよ」となります。そんでそんなに行きたいんだったら、プロレスの中のプロレスを観に連れて行ってやろうと考え、悩んだ結果選んだのが、あの『紙プロ主催・第1回ターザン山本追悼興行』だったのです。

僕は「ターザン山本っちゅーのは、今のプロレスに散々非常ベルを鳴らし続けてきたんだ。だからこの興行はよっぽど面白えんだぜ」と友人芸人の期待をあおり、12月26日川崎クラブチッタに訪れました。友人芸人もワクワクして待っているのがわかります。さて午後6時半いよいよ始まりました。

いきなり各関係者からの弔電のコーナーでした。「何だこれ？」早速友人は首をひねってます。僕は簡単な説明をし、「これからだぜー」と言って落ち着かせました。すると場内が暗くなり、「ウォーッ」と友人も盛り上がってきたようです。しかし、そこに起こったのは試合ではなく、ターザン山本が昔出た料理番組のビデオ上映でした。「は？　いや、は？」友人は5分位すると、眉間にシワが入ってきました。そこでも僕は簡単な説明をし（どんな説明だ!!）、魔の10分をしのぎました。

だがその後も試合はなかなか始まらず、鈴木健氏の開会宣言などが続き、いよいよ選手入場!!　と思ったら、入場してきたのは棺桶に入ったターザン山本でした。その後、ターザン山本のハイテンション演説が始まりました。長州力への宣戦布告や大仁田厚の悪口など、僕個人は楽しめたのですが、当然友人はアルコールの進みが早くなっています。「ヤバイ……」そう思ってたら、急に安生洋二のテーマが鳴り響

RADICAL COLUMN

清志哀歌（エレジー）

輸入レコード店『ZEST』スタッフ兼音楽ライター
イナズマ・K

もう3年以上前に崩壊したというのに、今だにフェイヴァリット団体として、僕の心に熱く焼きついているのがウィングだ。正確に言うと、ウィング・プロモーション。通称第2次ウィングと呼ばれている。プロレス業界内では、とっても悪名高き団体らしいけど、その反面、一部のマニアのハートをワシづかみにする、何か得体の知れない魅力うず巻くステキなヤツらの集合体であったのは間違いないはずだ。

まぁ、金村だって名前くっつけてがんばってるし、今さらウィングうんぬんなんてもういいだろ、と言う人もいるかもしれないけど、敢えて声を大にして言いたい、「第2次ウィング万歳！　茨城全面支持!!」と。

そう、今のインディーマット界に僕が欲してやまないもの、それは"茨城イズム"なのだ。たとえて言うなら、梶原一騎先生のいなくなった現在の格闘技界をなげく心にも近いのである。K―1なんて、あんなクリーンなイメージになっちゃって。カラテでしょ、カラテ。独特のあやしい雰囲気おもいっきし消しちゃってさぁ。だから人気出たんだと言っちゃぁ元も子もないけど、何か物足りない。それは梶原色だ。それに新日本。ここんとこ小川がらみでおもしろ度アップしたけど、梶原先生がいれば、おもしろ度さらに倍は間違いなしだったことでしょう。それにしたって、猪木と佐山が小川に合流してなかったらどうなっていたことか。さすが、黄金のトライアングル。ストーリーの奥行きが広がったのも、猪木の闘魂棒のおかげでしょう。

さて、猪木一派の格闘技路線軍団も、元をたどると梶原先生が提唱した『世界格闘技連盟・WMA』にぶちあたるというじゃないか。そして、第1次ウィングも正式名を『世界格闘技連合・ウィング』と言い、これが第2次ウィングと、旗揚げせずに終わったWMAの2つに分裂したという歴史がある。

そうです、ウィングはさりげなく梶原思想の延長戦上にあった団体だったんです。なんという因果なのでしょう。ステキです。

大分、話がズレてしまいましたが、第2次ウィング社長として君臨した茨城氏は、底知れぬアイディアで様々なデスマッチや、異種格闘技戦をクリエイトするプロデューサー的な面と、時間とお金にとってもルーズという経営者として致命的な面を持ち合わせた人だったというじゃないですか。会場費、ファイトマネーが払えないのはあたりまえ。それでも社長の人柄に魅かれて付いていく選手がいるからビックリ。さらにビックリなのは、ケンカ別れした人でも1年位すると仲直り、借金踏み倒されたりしているにも関わらずだ。そして誰もが口にするのは「ビジネスがからまなければ、あいつほどいいヤツはいないんだ」。僕は生まれてこのかたそんな人に会ったことはな

きました。「おおっ安生だ」友人も安生のテーマぐらいは知っているようでした。しかしG・カップスは洋服を着ていました。「何で洋服着てんだ!! 試合じゃねえのかよ!!」友人は完全にキレています。しかも、G・カップスVSターザンのボール投げ合戦などが始まっちゃったもんだからたまりません。友人は僕の説明など聞かずに『ヤンジャン』を読み始めました。しかし、G・カップスが退場し、ターザンが少々発狂した後、メインイベント1(一試合目からか!!)が始まってくれました。新崎人生VS愚乱・浪花です。「ふふふ……、この試合は盛り上がるぞー」ニヤニヤしてたら、あれだけ東京ドームなどでは盛り上がる人生の入場やカニのパフォーマンスで、会場が思ったより沸かないのです。さすが、マニアばかり集まっている会場です。ちょっとやそっとじゃ沸きません。しかし、その後友人の方は、中盤の高野拳磁withTのコーナーで、溜息をついていたのは別として、一試合ごとにテンションを取り戻してくれてました。特に薬師寺正人を気に入った様子で「薬師寺ーっ　ありがとうー!!」とまで叫んでました。

バトラーツの試合の後、友人が「今度はパンクラス観てえなー」と言って間もなく、タイミング悪いことに、将軍KYワカマツ率いる山賊男ガリバーズが入場してきた時にはヒヤッとしましたが、試合後、春一番さんと一緒に「ダーッ!」をやってましたからホッとしました。

しかし「なんかマニア受けするプロレスだったんじゃねえの。よくわかんなかった」という割と適切な言葉を残し帰って行きました。「ああ……、またプロレスから一人離れてったか……」と思ってると、年明け彼がこんな事を言ってきました。

「新日本のドームに行ってきたんだけど、スゲー面白かったよ。この間連れてってくれてありがとう」なんだかんだ言っても、あの日を機にプロレスに喰いついてくれてたのか、僕は少しうれしくなりました。

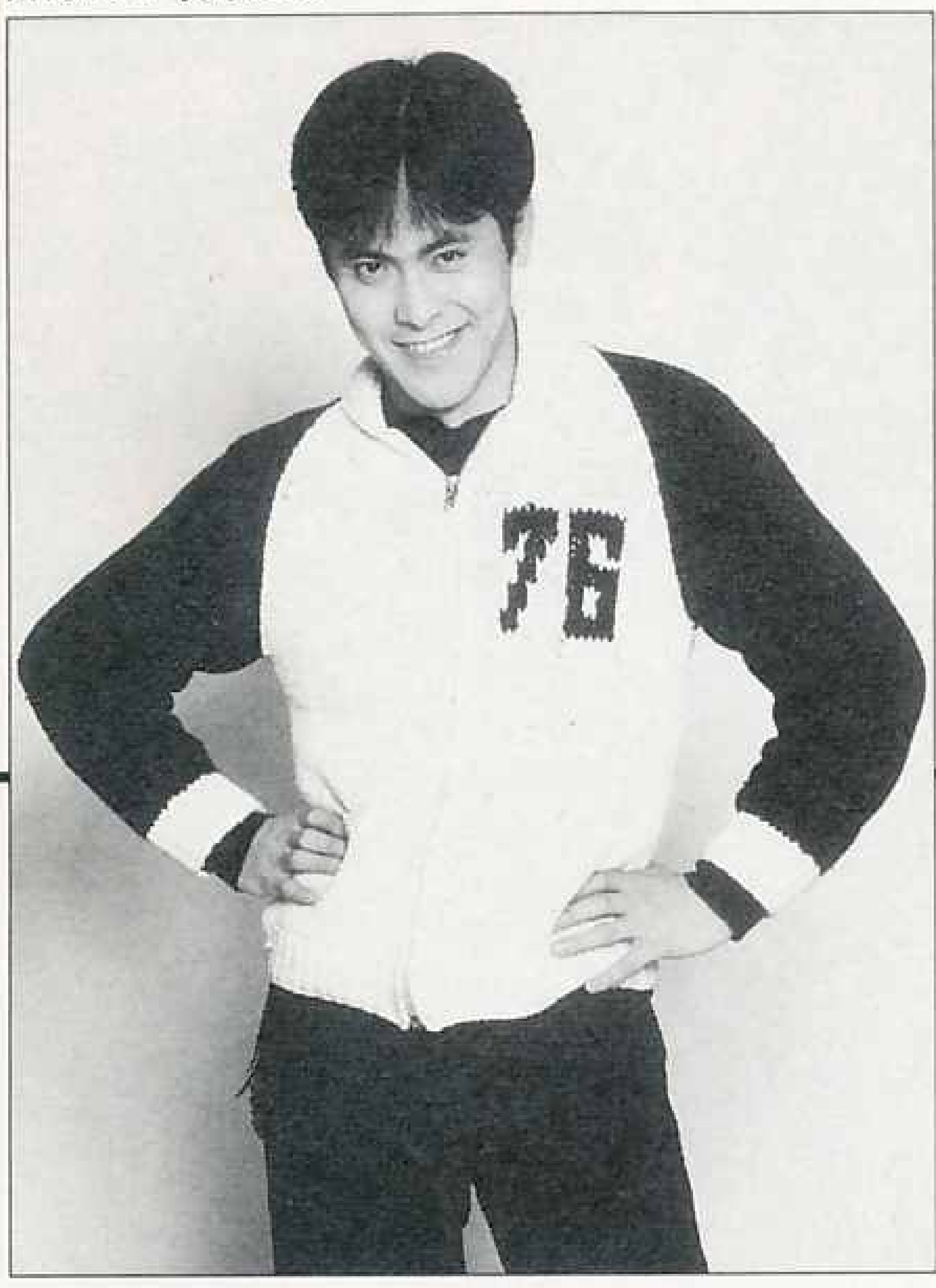
……いや、ちょっと待てよ、ってことはターザン山本の興行を機に、新日本ファンが一人増えたってことか!?

これは大変なことをしてしまいました。マニア受けの興行にド素人を連れてってしまったために、ターザン山本氏の意に反する事件を引き起こしてしまいました。何が起こるかわからないプロレス界とはいうが、こんな大逆転パラドックスが起こるとは……。

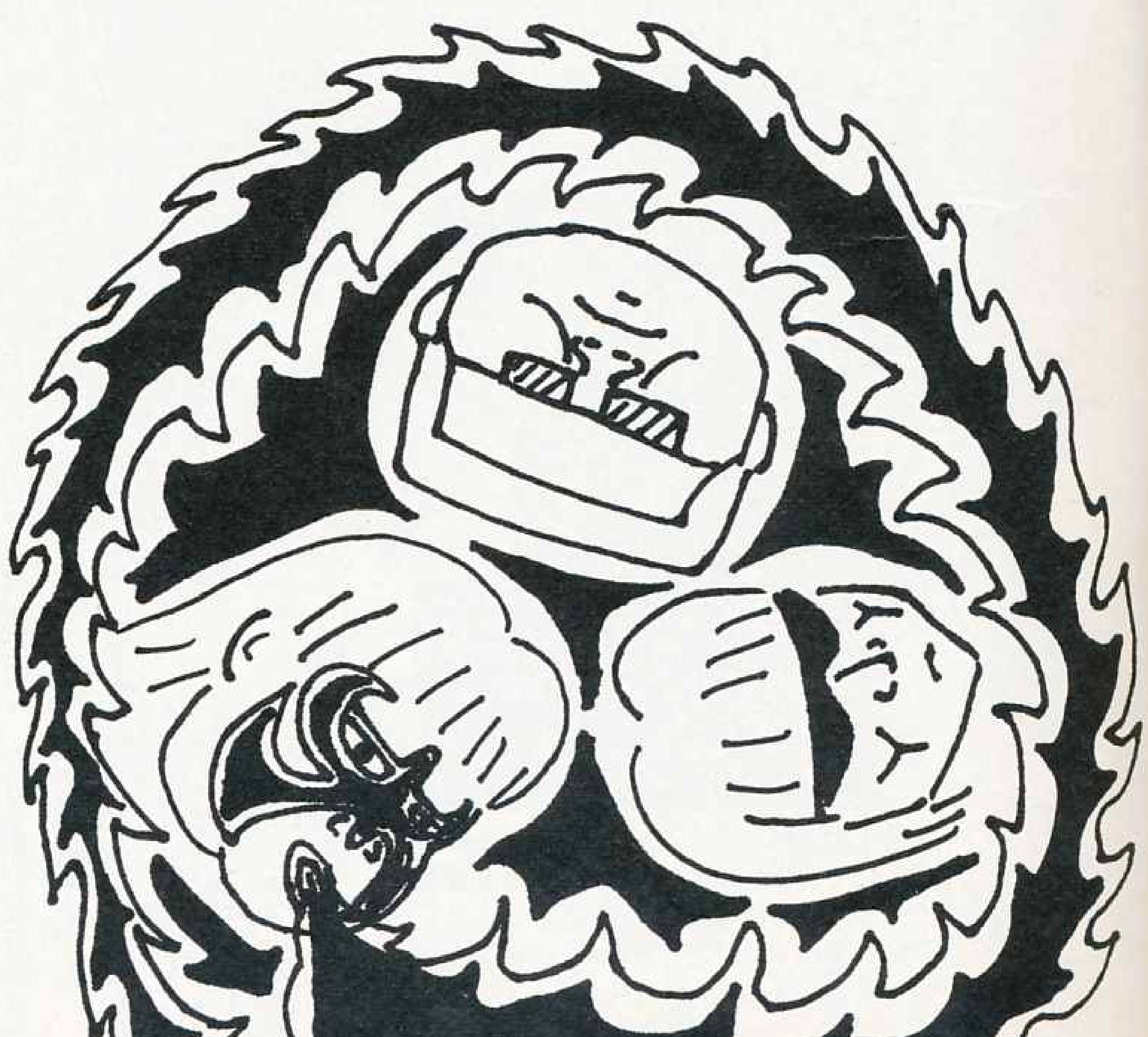
ターザンさん、『紙プロ』さん、よくわからないけど、すいませんでした。第2回からはコアなファンと行きますので、是非やって下さい!!

有田哲平●昭和46年2月3日、熊本県生まれ。(マネージャーさん曰く)名古屋で大ブレイク中のお笑いコンビ、海砂利水魚のボケの方。現在『王様のブランチ』(TBS系)など、レギュラー番組多数の売れっ子芸人(名古屋では超売れっ子芸人?)。

PHOTO：濱野文典



ふぞろいの



い。ドラマ『いいひと。』をまさに、地で行くような人なのだろうか、茨城って人は……?

そんな彼の下に、これまた個性豊かすぎるレスラーがこれでもかってぐらい集まっちゃったものだからウィングが魅惑の秘境になるのは、さけられなかったのだ。初めて自分中心の団体が出来て、ガッツ入りまくりのポーゴさんに、対抗するエースが金髪ヒゲ面、空手家出身の松永だし、キニョネスが連れてくるのはピンからキリまでのあやしい外国人選手達。これだから試合が始まる前から、おのずと想像はつく。

もうメチャクチャ、やりたい放題。だけど、その暴走っぷりが想像以上のスゴさ。それでいて、どことなくアホっぽくもあり、妙な心地よさもあったから不思議だ。この変なグルーヴ感はウィングがなくなって以来、プロレス会場では味わった事がない。第3次ウィングを作ったけど、2シリーズでクローズ。懲りずに第4次ウィングをスタートさせようという茨城氏には、ブッちぎれたアイディアでがんばってほしいと切に願うばかり。今度は旗揚げできるかなぁ、期待してます。

そして、今、このメチャクチャさ、ウィングっぽさはライブハウスで体験出来るのだ。そのバンドは『ギターウルフ』! 皮ジャン、サングラスに3コードのロケンロール。カオスを巻き起こす完全燃焼のステージングは、まさにウィングそのものだ! ウルフよ、ウィングよ、永遠なれ!!

イナズマ・K●渋谷系レコードショップ『ZEST』のスタッフ兼音楽ライター業も勤しむ。イナズマ・K名義でも駄文をたれ流す。常にプロレス、デスマッチ、格闘技のいい話を追い求める夕焼け好き♥



GIRLS ARE GIRLS

ガールズはガールズ

LOVE LOVE RINGS JAPAN

押忍！　みんな元気で押忍か？　のものもで押忍〜！（渋い声で）　最近ちょっと、あまりに軟派でおバカさんなイメージがつきすぎちゃったため、ここはひとつ硬派なのものもに路線を変更させて戴くで押忍！　押忍、押忍！

のものも硬派路線改造計画の第一歩……、かどうかはわからないが、のものもは最近RINGSに夢中なのである。初めてRINGSを観たのは、忘れもしない昨年の……、昨年の……、いつだったっけ？　んぇ〜、思いっきり忘れたぞぃ！（ベタすぎ）　でも場所はシッカリ覚えているぞ！　確か有明コロシアムだ！　カードは……、カードは……、んきょ〜、全然覚えてないぞ！（ほえほえ〜）

でも、でも、初めて観たRINGSは、ズバリ言ってかなり衝撃的だった。なぜならばっ！

絶対寝てしまうと思ってたのに、1回も寝なかったからだ！　自慢じゃないけど、パンクラスは寝てしまったぜ！　どこに行っても何してても寝てばっかだよ、のものもは！　ハッハッハッハッ！　……はぁ〜あ。

で、なぜ今RINGSに夢中なのか？　いつものおバカさんなのものもだったら、「寝なかったから〜」というバカ丸出しの簡単な理由で済ます所だが、硬派に生まれ変わったのものも的には、もうちょっと突っ込んだ理由を、ここにて定義させて頂くことにする。



プロレスラーじゃないけど、どこよりもプロレスラーらしい選手が揃ってるリングス。実はのものも、高阪選手のプロレスカードを手帳に忍ばせてるの。えっへえ、ただのミーハー？

新日本が大好きだったのものもにとって、U系というのは、正直言ってものすごく敷居が高い格闘技だった。大体ルールがよくわからんちん。ギブアップ、KOだけじゃダメなの？　何、判定って？　って感じだったのだ。だからパンクラスやRINGSには、今まで全く興味が沸かなかった。だが、だがっ！　ちょっと行って見る？　と軽い気持ちで観たRINGSは思ってた以上に面白く、「何だ、喰わず嫌いだっただけじゃ〜ん」と、改めて自分の浅はかさを思い知ったわけで押忍。

まだまだ初心者、空手で言うと白帯、もうちょっとで青帯？　と言った若輩者だから、のものもごときがRINGSを語ってしまって忝ない（「かたじけない」と読む）。って、全然語ってないやん！

むふふ〜ん、許してちょんまげ！　でもラブラブラブリ〜で押忍よ、RINGS♥

LOVE LOVE GAEA JAPAN

あい〜や、冒頭から悲しいお知らせだ。のものもが大好きなガイアの中野知陽呂選手が、5月25日の後楽園ホール大会で、解雇処分となってしまったのだ。このニュースを知ったのは25日の深夜。ラブラブ中野選手のことだっただけに、いても立ってもいられなくなったのものもは、『週プロのラブラブ須山ちゃんに連絡し、真相を聞いたのだった（注・のものもは、須山ちゃんと面識なし）。今さら真相をどうこう言うつもりは全くないし、どうでもいい。もう、ただショックビック、……その一言です。

5月18日、八王子マルチパーパスで、のものもは初めてガイアの試合を見た。ズバリ言って、めちゃんこ面白かった。そして、試合だけじゃなく、選手の礼儀の良さ（特に中野選手。だからラブラブなのである）にものすご〜い感銘を受けたのだ。

ちょっと前に取材した某団体での話だ。のものもが出向いたら、迎えてくれたのは、一人の新弟子だった。これが、もうサイテーの一言。とにかく挨拶できない！　敬語使えない！　のダメダメダメっぷり。のものも、ずいぶんエラそうだけど、別に新弟子だからヘコヘコしろって言ってんじゃないのよ。怒ってるわけじゃないの〜。でも悲しいかな、「あ〜、こんな新弟子がいたら、この団体の未来は暗い……」って正直そう思っちゃいました、悪いけど。

「団体の良さは新弟子の良さ」……ガイアの若女子達を見て、改めてそう認識しました。すれ違う度に「お疲れさまでーす！」って声かけてくれるのよ。のものもより君達の方がお疲れでしょーに！　デビューしたての頃から「すげー、すげー」ってあちこちから絶賛されて、普通だったら天狗になってもおかしくないのに……。さすが、長与のチコ様の団体。もう完敗、乾杯、とん平です。

誰からも愛される、そして試合もベリーグッドなガイア・ジャパン。のものも、プロレスラーになるなら、絶対ガイアに入門しようと決めた15の夜でした（ぼぇ〜、のものも、ずーずーしいくらいサバよみすぎぃ〜）。



中野選手の悲報を聞いて、ホントはガイアネタ書くのやめようと思ったけど、今回一番言いたかったのは中野選手個人のことじゃなく、若手の礼儀についてだったので、このまま行くことに決めました。いつもと違って、何かマジメになっちゃってゴメンね。読むの疲れた？　のものももマジメモードは疲れるよ。たぶん、また18時間くらい寝に入っちゃうんだろうな〜。

5月2日か
あろうから
に世に浸透
誕生した1
ントニオ猪
おんもしれ

衛星デジタルラジオ
PCM放送局
『闘魂BIBLE』誌上再録

プロレスをナメ切った世間に今こそカチ喰らわせ！

フザけた世間に牙を剥けっ!!



前号でレスラー、ファン、関係者を巻き込んで
大反響を呼んだ『プロレスファンじゃない
500人アンケート』が帰ってきた！
読者アンケートでも爆発的&熱狂的な反響が
あったので今回の継続もいち早く決定となった。
今回は、前回よりも突っ込んで「プロレス界の
現状が世間にどれだけ届いているか」という
コンセプトでアンケートを取ってみた。
すると、驚くべき現状が浮き彫りになった。
「プロレスのイメージ？　やらせ！」（16歳・男・高校生）
「ケンカしても勝てそうなレスラー？　馬場！」（28歳・男・会社員）
いまだに世間のプロレス蔑視は続いているのだった！
今こそ立ち上がれプロレス界！

大反響！

プロレスファンじゃない
16歳から63歳までの
500人アンケート

第2弾!!

アンケート収集地　渋谷・原宿・新宿・大阪

NOMONOMO

GIRLS ARE GIRLS

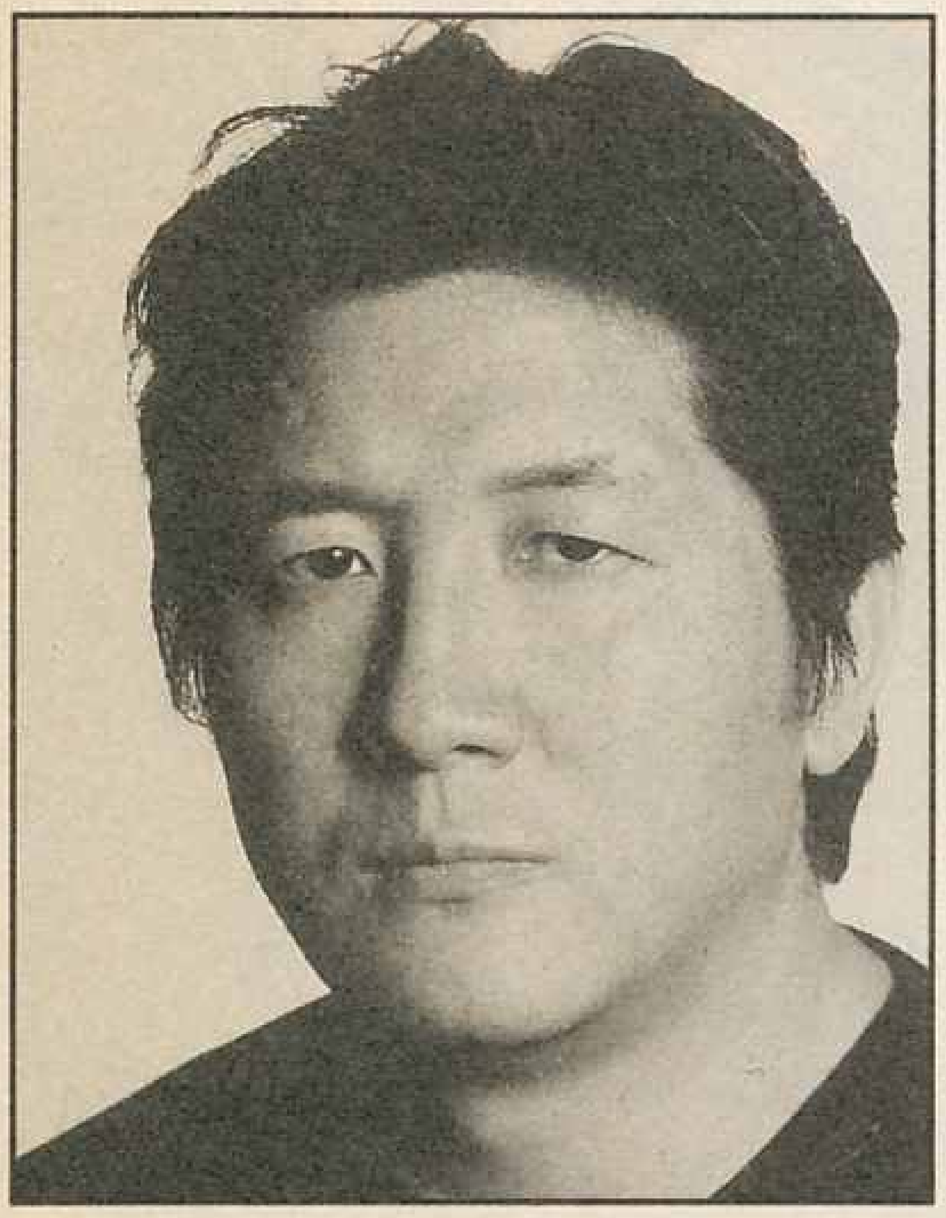
ガールズはガールズ

ファンじゃない500人アンケート結果報告！

Q1

フザけた世間に牙を剥けっ!!

以下の各団体のエース14人の中から知っている人に○を付けてください（複数回答可）。



第1位
前田日明（RINGS）
335票

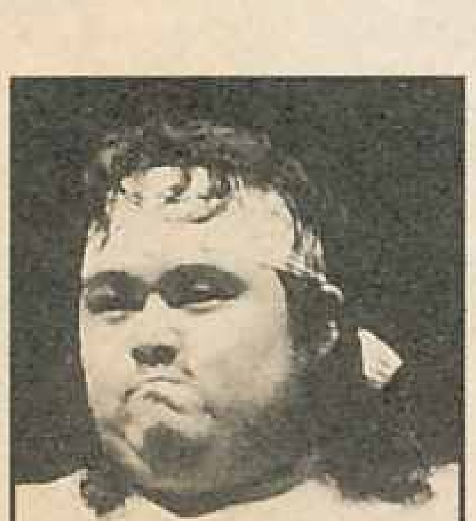
世間の認知度NO.1エースは前田に決定！　顔面襲撃事件から女子便所事件まで、前田の行くところに事件あり。こういった事件を起こしてまでも、プロレスを守る前田はまさにレスラーの鏡。さらに他の活動も幅広くこなし、プロレス内外にアピールする力を持つ、真の意味でのプロレスラーと言えるのだ。また、上位にメジャー団体出身者が名を連ねる中、唯一の成り上がり、サスケ社長が3位に食い込んだのは非常に素晴らしい。世間を標的にしているレスラーであれば団体の大小は関係ないことを証明した。



第2位
高田延彦（KINGDOM）
324票



第3位
ザ・グレート・サスケ（みちのくプロレス）
289票



第4位
橋本真也（新日本プロレス）
273票



第5位
天龍源一郎（WAR）
234票



第6位
三沢光晴（全日本プロレス）219票

第7位
北尾光覇（武輝道場）198票

第8位
ハヤブサ（FMW）171票

第9位
船木誠勝（パンクラス）155票

第10位
高野拳磁（PWC）102票

第11位
中牧昭二（大日本プロレス）67票

第12位
石川雄規（バトラーツ）42票

第13位
茂木正淑（レッスル夢ファクトリー）26票

第14位
山田圭介（IWA　JAPAN）19票

5月2日か
あろうから
に世に浸透
誕生した1
ントニオ猪
おんもしれ



衛星デジタルラジオ
PCM放送局
『闘魂BIBLE』誌上再録

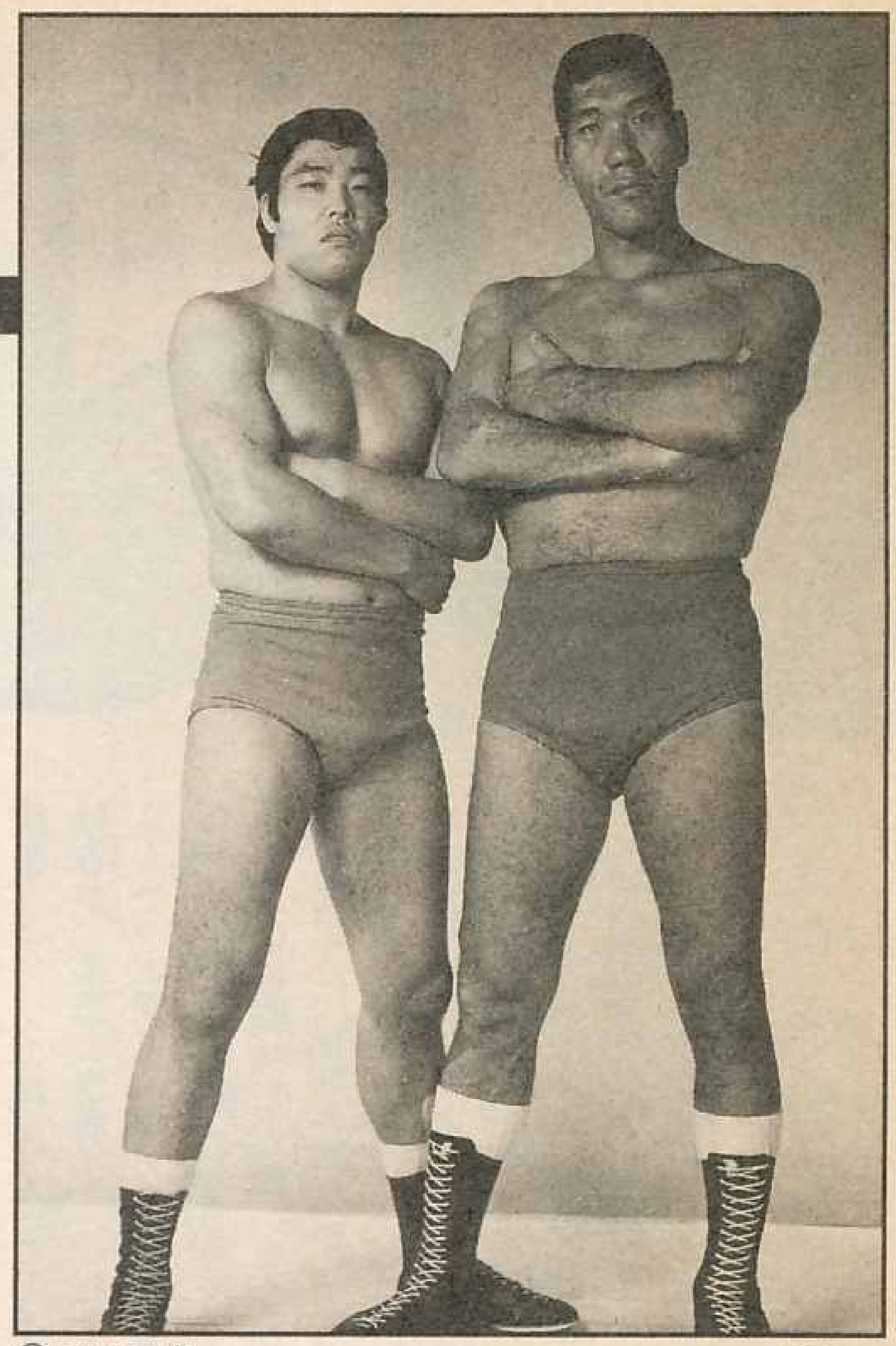
世間の認知度ランキングが決定！ プロレス

Q2

以下の14団体の中から知っている団体に○を付けてください（複数回答可）。



©マルベル堂



©マルベル堂

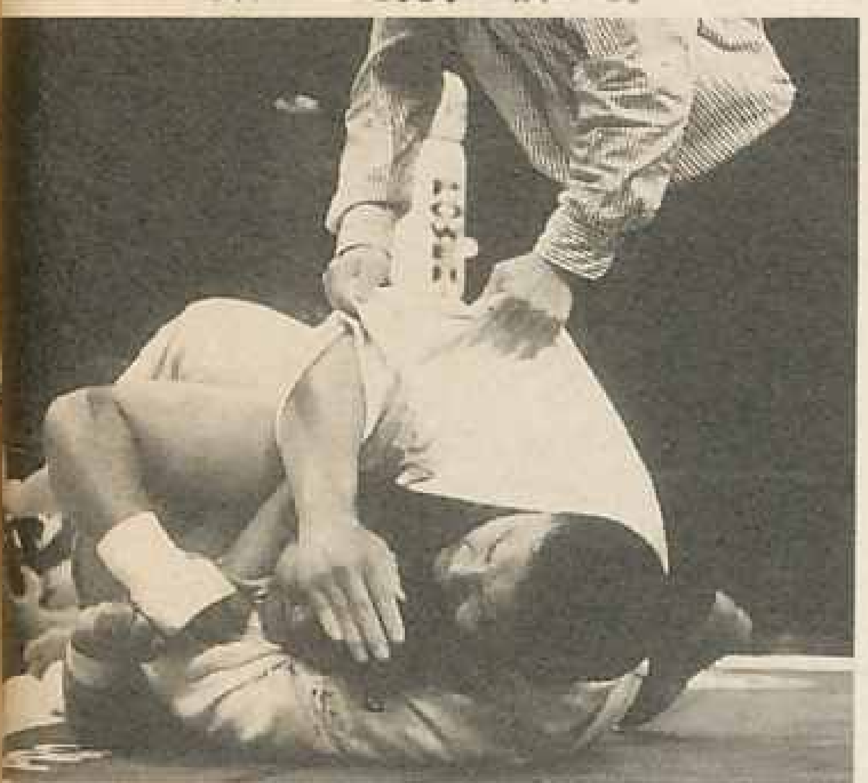
全日本プロレス 第1位 443票

新日本プロレス 第2位 381票

第3位	みちのくプロレス 269票
第4位	FMW 206票
第5位	パンクラス 178票
第6位	リングス 154票
第7位	WAR 120票
第8位	大日本プロレス 88票
第8位	IWA JAPAN 88票
第10位	キングダム 53票
第11位	格闘探偵団バトラーツ 42票
第12位	武輝道場 37票
第13位	レッスル夢ファクトリー 29票
第14位	PWC 13票

今年25周年を迎えた、伝統と信頼の老舗両団体がトップを独走、結局「プロレスを独占」した全日本がトップ。世間の88％が認知してるのは凄すぎる。ビバ、全日本プロレス！ で、ここでもサスケ率いるみちのくプロレスが大健闘。映画やTVからどら焼き業界まで、彼らの露出度は非常に高い。世間を視野に入れた活動は見習うべき点が多い。「スキャンダルを経営につなげられない経営者は失格」というA・猪木の言葉にあるように、スキャンダルで潰れるか、それで成功するかは経営者の心意気次第。やはりプロレス団体は時代と密着しながら世間に打ってでなければならない。

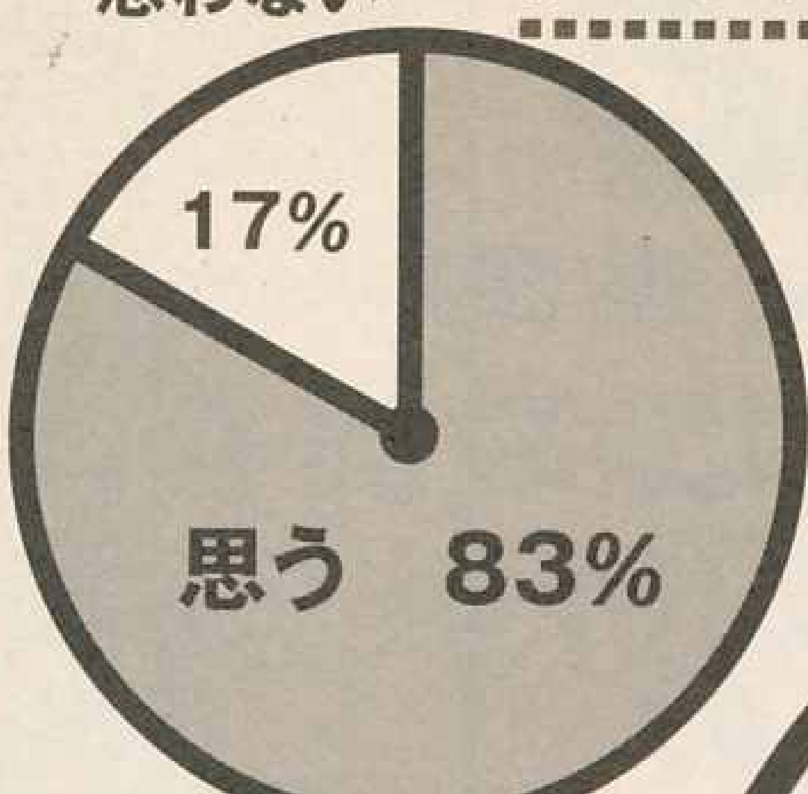
じゃない500人アンケート結果報告！



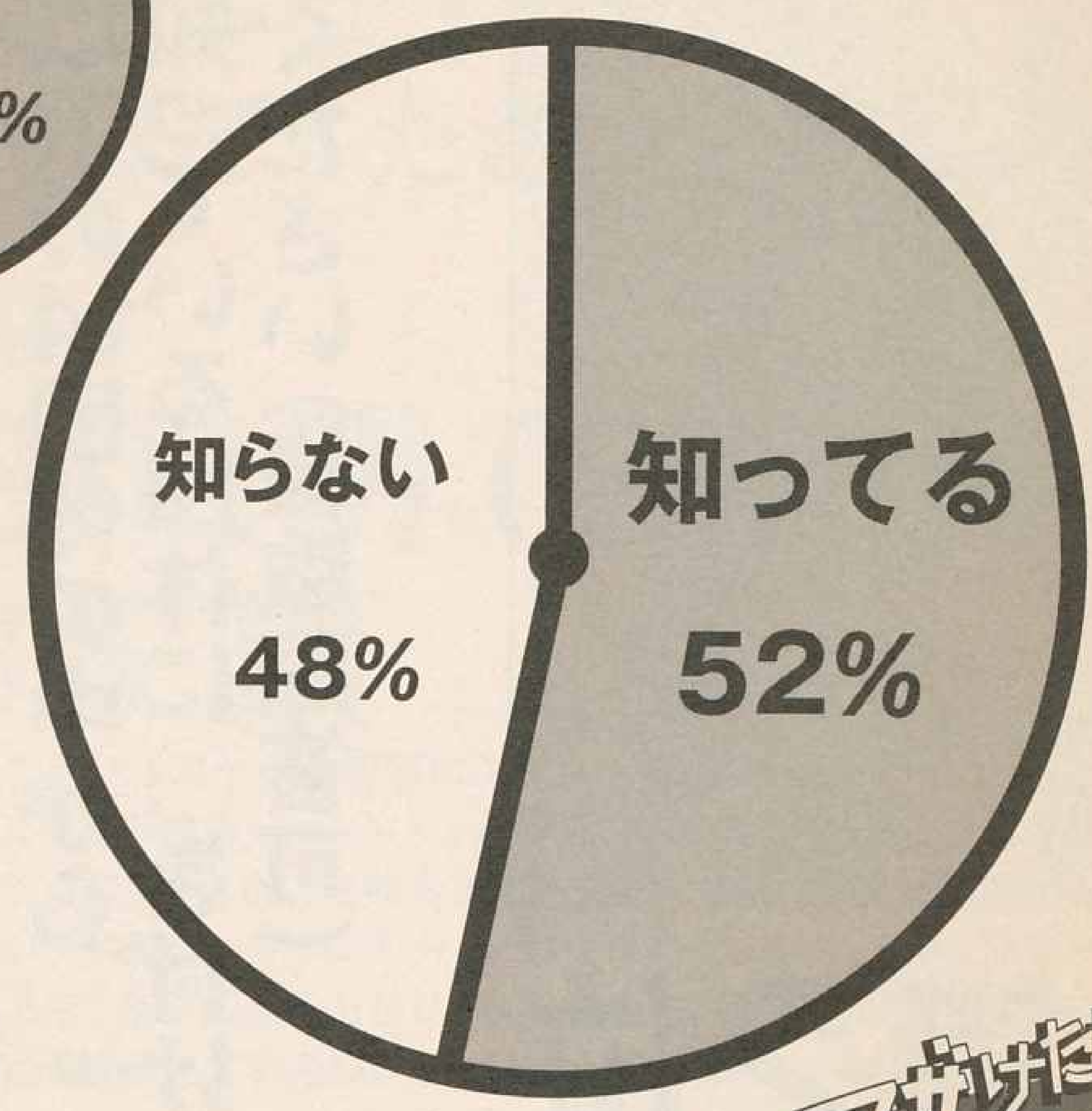
4・12東京ドームでの柔道王ＶＳ破壊王の異種格闘技戦は、翌日のスポーツ新聞の一面を独占。プロレスが世間の首根っこを見事に掴んだ。

Q3

プロレスは格闘技だと思いますか？



柔道の小川直也がプロレスラーに勝ったのを知っていますか？



右の表は橋本ＶＳ小川戦の認知度調査の結果。「え、この程度？」との不満は若干残るが、柔道の世界チャンピオンを引き込んで、世間に一発カチ喰らわせたことは間違いない。この一戦を踏まえた上で「プロレスは格闘技だと思いますか？」という質問には、世間の83％が「思う」と回答している。橋本が負けたことに多くのプロレスファンは不満だったようだが、この一戦が実現しただけでも、十分快挙ではなかろうか？　結果的にプロレスの怖さや格闘技性も世間に知らしめたのだから。アンケート結果だけを見ても世間の半分は認知しているのだから。こういうプロレスラーをファンは待ち望んでいる。

フザけた世間に牙を剥けっ!!

Q4

プロレスを見て疑問に思う点があったら教えてください。

プロレスはスポーツとは思えないのですが（46歳・女・主婦）

●血を流してまで闘うところ（25歳・女・会社員）
●馬場のチョップは痛いのか？　（22歳・男・学生）
●どこまで本気なのか（41歳・男・会社役員）
●八百長っぽい（19歳・女・大学生）
●プロレスは格闘技でもスポーツでもなく、ショウじゃないのか（49歳・女・主婦）
●一度、倒れた人が、すぐ復活して反撃するのはなぜか（20歳・男・学生）
●ルールがわからない（54歳・女・無職）
●ホントに痛いのか（20歳・女・学生）
●どうして殴りあうのか（27歳・女・歯科技師）
●何で襲われる前に逃げないんだろう（21歳・女・販売員）
●なんで電流爆破なの？　身体で勝負しろって感じ？（16歳・女・高校生）
●身体はすごいが、技はウソでしょ？（25歳・男・会社員）
●なぜ、そんなに団体が多いのかということ（31歳・女・主婦）
●何が楽しいのか分からない（19歳・女・フリーター）
●やらせは実際にあるのか（46歳・男・会社員）
●場外に出て、椅子を投げ合ったりしてるが、あれで試合と呼べるのか（28歳・男・学生）
●なぜ、ロープに振ったら戻ってくるのか（19歳・男・デザイナーの卵）
●ショーなのか格闘技なのかはっきりしない（24歳・男・大学院生）
●当たってもないのに、なぜ痛がる（63歳・男・無職）
●マスクとか長い髪とかブーツとか、なんでそんな格好するの（23歳・女・専門学生）
●プロレスが格闘技なのか理解できない。私にとってプロレスは謎の世界です。私はボクシングと一緒だと思ってました（21歳・女・学生）
●ショーを見せろ（25歳・男・デザイナー）
●本気でやってそうな団体と見るからに適当な団体があるのはなぜ？（23歳・男・無職）

不思議なくらいに痛めつけあうところ（18歳・女・学生）

（アンケート回答は原文のママです）

衛星デジタルラジオ
PCM放送局
『闘魂BIBLE』誌上再録

好きと嫌いがまっぷたつ!! プロレスファン

Q5 プロレスは好きですか？ 嫌いですか？

好き	44%
嫌い	44%
どっちでもない	12%

【好きな理由】
●血が出る（19歳・女・学生）
●うさんくさい（39歳・男・会社員）
●真剣にやってる（20歳・男・販売員）
●スカっとする（18歳・女・学生）
●キャラが濃い（22歳・男・学生）
●筋書きっぽくきまってて、ドラマがある（21歳・男・学生）
●迫力がある（26歳・男・土木作業員）
●一方的でつまらない試合は少ない（24歳・男・公務員）
●格闘技は男のロマン！（34歳・男・会社員）
●力道山がいたので（57歳・男・自営業）
●熱中する（62歳・女・清掃業）
●ショーとして確率したものを感じるから（30歳・男・教員）
●芸術を感じるから（36歳・男・公務員）

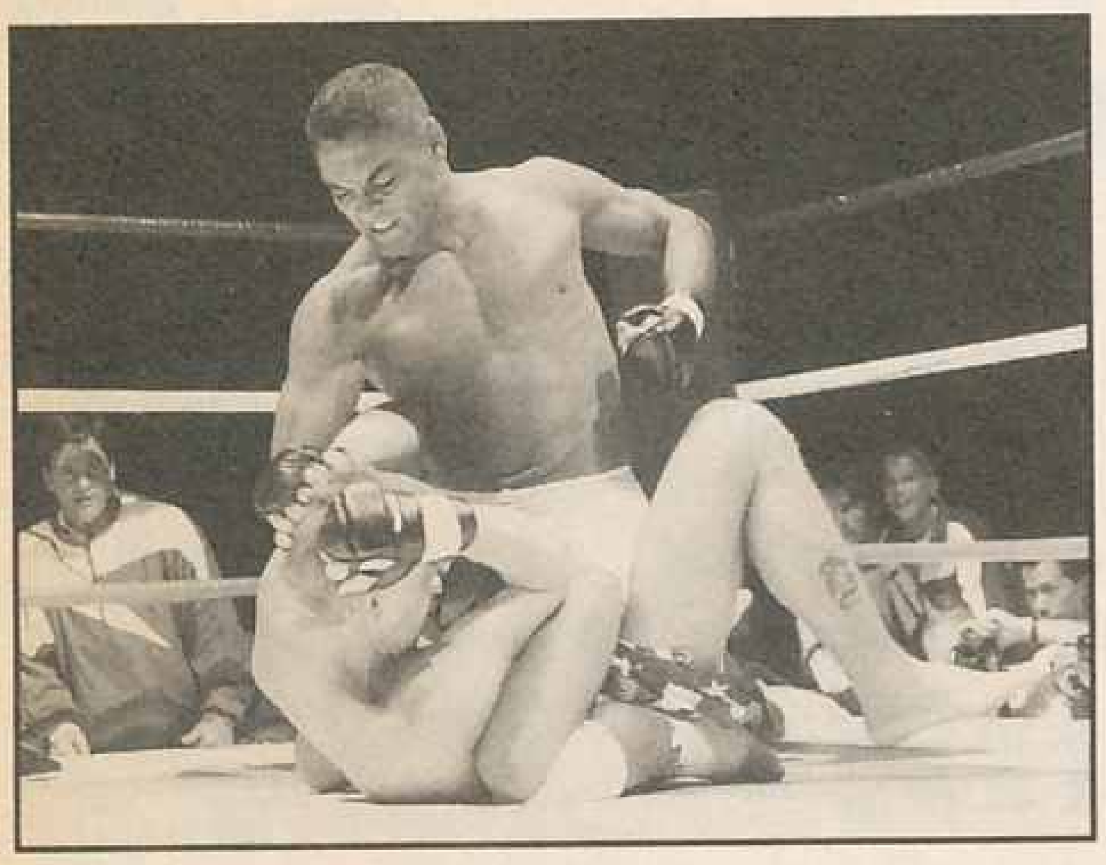
【嫌いな理由】
●血だらけだから（19歳・女・学生）
●あれはスポーツじゃない。反則も平気だから（19歳・女・学生）
●KOがないから（17歳・男・学生）
●真剣勝負の感じがしない（34歳・男・編集）
●殴り合い、蹴り合いは好きではない。野蛮っぽい（21歳・女・学生）
●人間は腹が立つと暴力を振るいたくなるが、それを理性で押さえる生き物。あおり立てるようなものだ。（45歳・女・主婦）
●ショーのくせに、格闘技とかスポーツとか言ってるから（38歳・会社員・女）
●暴力が嫌いだから（20歳・男・専門学生）
●怖い（26歳・女・OL）
●理由もなくケンカしてるように思えるから（22歳・男・学生）
●肉肉しくてイヤ（18歳・女・学生）
●今はつまらない。ダマされたい（25歳・男・デザイナー）
●スピードがとろい（17歳・女・高校生）

好き派
力道山がいたので……（57歳・男・自営業）

プロレスは人間の暴力性を助長する（33歳・女・主婦）
嫌い派

Q6 あなたが思う最強の人間は誰ですか？

●橋本真也（17歳・男・高校生）
●高田延彦（24歳・女・家事手伝い）
●マイク・タイソン（20歳・男・会社員）
●ヒクソン・グレイシー（24歳・男・販売員）
●アンディー・フグ（20歳・女・OL）
●アーネスト・ホースト（32歳・女・看護婦）
●ビル・ゲイツ（23歳・女・大学生）
●クリントン（52歳・男・自営業）
●シュワルツエッネガー（20歳・女・学生）
●先日、コンピューターにチェスで負けたロシア人（43歳・男・会社員）
●真樹日佐夫（25歳・男・デザイナー）



『最強』というキーワードでここ数年のプロレス界、格闘技界を見るとグレイシー柔術は絶対に避けて通れない。その名は世間の人たちにまで浸透している。高田VSヒクソン中止が非常に悔やまれる。ヒクソン狩りに誰が次に立ち上がるだろうか？



高橋史子さん（20）学生
Q　プロレスラーにどういうイメージを持っていますか？「気は優しくて力持ちですね」



高田実穂さん（16）高校生
Q　あなたが思う最強の人を教えてください「アルティメット・ウォーリアーかなあ」



波多野宏君（22）書店勤務
Q　プロレスより面白いものは何ですか？「アウトドアっすよ」



石井秀太郎君（21）学生
Q　あなたが思う最強の人を教えてください「ホイス・グレイシーかな、あとオレの彼女」



松谷康彦君（16）高校生
Q　プロレスファンをどう思いますか？「あいつら弱そうだよね、みんな。」

起きあがりこぼし式街頭アンケート in 渋谷　結果報告

NOMONOMO

GIRLS ARE GIRLS

ガールズはガールズ

レスファンじゃない500人アンケート結果報告！

Q7 あなたがプロレスを熱心に見れなくなったキッカケを教えてください。

●テレビ放送が少ない（21歳・男・学生）
●なんとなく（21歳・男・工員）
●昔、力道山とかブラッシーを見て八百長だと思ったから（53歳・女・公務員）
●応援してたレスラーが引退して、すぐ復帰した（19歳・男・学生）
●仕事を始めてから（30歳・男・会社員）
●真剣さ、迫力のない試合を見てしまったから（36歳・男・教員）
●八百長っぽく思えたから（25歳・男・会社員）
●ボクシングとかK―1を好きになったから（21歳・男・学生）
●とにかく野蛮だから（22歳・女・家事手伝い）
●長与千種が引退したとき（26歳・女・販売員）
●相手がひどいダメージを受けてるのに、さらに痛めつけるシーンは人間として見てられない。（45歳・女・主婦）
●親がプロレスを大嫌いなので（20歳・男・学生）
●中学に入ったとき、周りに見てる人がいなくなったから（24歳・女・接客業）
●ハンセンのラリアットで気が付いた（29歳・男・会社員）
●空手を始めてから（19歳・男・大学生）
●猪木が議員になってから（25歳・男・編集）
●いつも熱心に見てる（20歳・女・散髪屋）
●プロレス中継でドラえもんが見れなくなった（20歳・男・学生）
●団体同士の関係が分からなくなってから（25歳・男・学生）
●家族（プロレスを見る人）が出て行った（62歳・女・清掃業）
●小学校の校長に「やらせだ」と言われた（18歳・男・高校生）
●リングアウトの多発を見て、インチキだと気付いた（24歳・男・TV局）
●レスラーに頭の悪い人が多いから（31歳・男・自営業）
●猪木と馬場の醜い争い（42歳・男・会社役員）
●ノリの違うギャラリー。ガイア・ジャパンにはゆけない（23歳・男・プログラマー）
●J・鶴田が三沢に負けたから（20歳・男・学生）

この質問には「初めから見てない」という答が圧倒的に多かった。またオーバーアクションが嫌で引いてしまった人もかなりいるようだった。



弱そうなヤツばっか（16歳・男・高校生）

Q8 プロレスファンをどう思いますか？

●私は、あそこまで熱くなれない（19歳・女・学生）
●若くて、マニアック過ぎる（22歳・学生）
●気持ち悪い（17歳・男・高校生）
●気持ちは分かる気がする。でも、ああはなりたくない（18歳・女・ダンサー）
●熱い人たち（24歳・男・TV局）
●オタッキー（18歳・女・フリーター）
●バカですね（16歳・男・高校生）
●好きならそれでいいと思う（24歳・女・銀行員）
●てっとり早くストレスを解消させている。ケンカ好きが多いのでは？（45歳・主婦）
●荒くれ者（19歳・女・学生）
●勉強熱心（20歳・男・学生）
●怖い！　でも楽しそうだから、ある意味で尊敬できる（22歳・女・学生）
●変わった人（33歳・男・警備員）
●同志（36歳・男・教員）
●すごく好きな選手がいれば、私もファンに……（19歳・女・学生）
●自分の好きな団体外の選手に冷たすぎ（21歳・男・学生）
●みんなナンチャンのような熱い人間なのか（23歳・女・販売）
●別に、どうも思わない（33歳・男・会社員）
●バカ（49歳・女・主婦）
●みんな本気でやってるとでも思ってるんじゃないのか（30歳・男・会社員）
●僕とは関係ない人々（18歳・男・大学生）
●垂れ幕作っちゃうような熱狂的ファンは、プロレスラーになってしまえ（22・男・学生）
●何かを一生懸命好きになるのはいいことだと思う（20歳・女・フリーター）
●身近にはいないので話したことはないが、別世界の人という感じです（33歳・女・会社員）

他人に技をかけるのはやめてほしい（24歳・男・会社員）



衛星デジタルラジオ
PCM放送局
『闘魂BIBLE』誌上再録

5月2日か
あろうから
に世に浸透
誕生した1
ントニオ猪
おんもしれ

プロレスラーをナメてる素人は叩き潰せ! プロ

Q9

あなたにとってプロレスより面白いものは何ですか?

カラオケ（16歳・女・高校生）

●NBAとかNFL（28歳・男・会社員）
●たくさんありすぎる（18歳・女・学生）
●ヨーヨー（20歳・女・フリーター）
●相撲、野球（30歳・女・無職）
●TVゲーム（26歳・女・薬剤師）
●人を傷つけないもの（22歳・女・学生）
●野球の阪神戦のみ（36歳・男・教員）
●買い物（19歳・女・学生）
●プロレス以外のすべてのもの（49歳・女・主婦）
●競馬（23歳・男・販売員）
●山登り（53歳・男・公務員）
●アイドルおたく（29歳・女・主婦）
●ライブ、飲み会（20歳・女・散髪屋）
●ツーリング（25歳・男・学生）
●普通のTVドラマ（22歳・女・学生）
●マラソン（62歳・女・清掃業）
●読書（19歳・男・フリーター）
●バイクレース観戦（21歳・男・学生）
●スノーボード（25歳・男・販売）
●プリクラ（38歳・女・主婦）

とんねるず（21歳・男・学生）

K-1（19歳・男・学生）

フザけた世間に牙を剥けっ!!

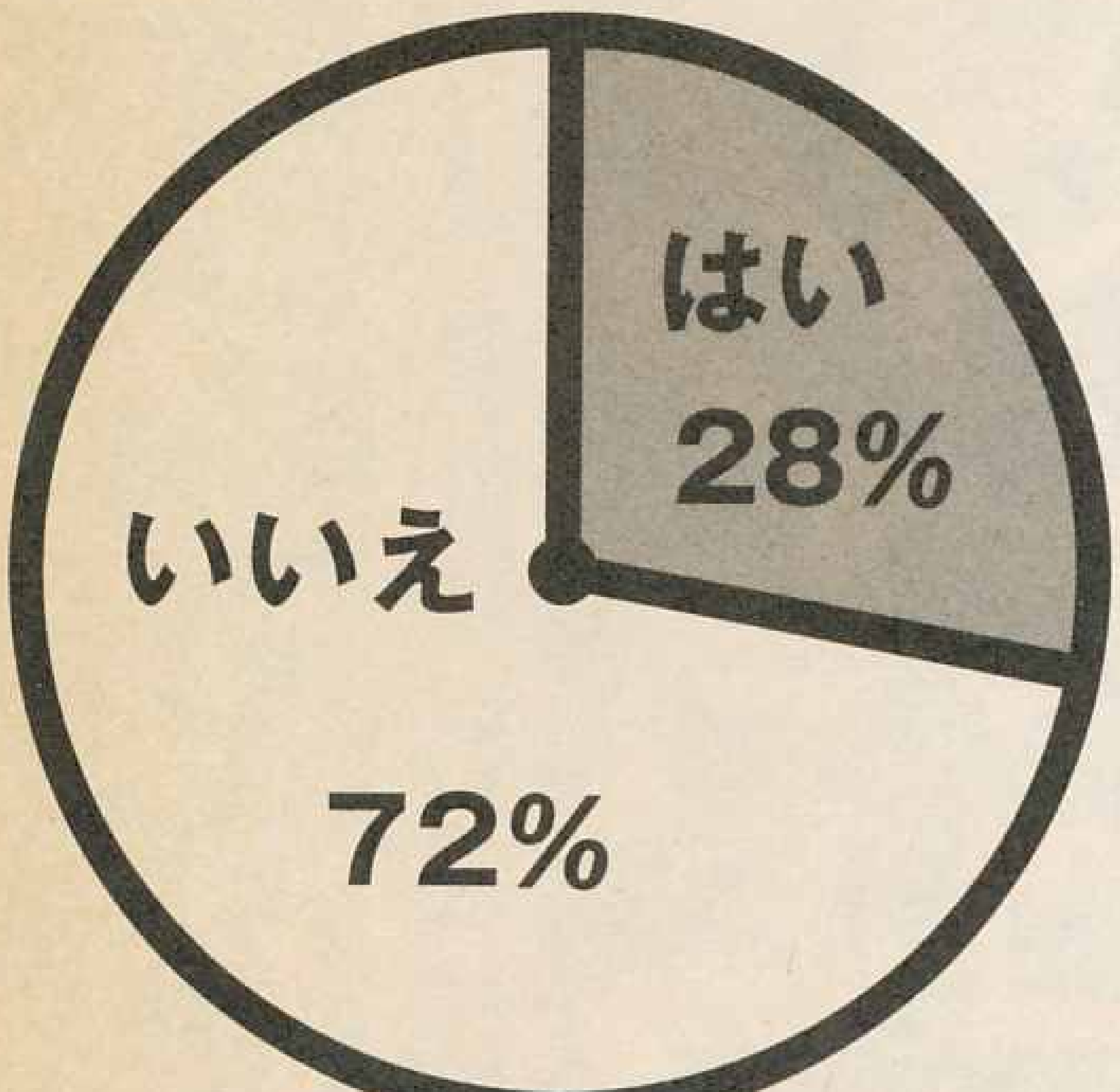
Q10

プロレスラーが知名度を上げるには何をしたらよいでしょうか?

●正々堂々勝負して勝つ（19歳・男・学生）
●テレビに出る（42歳・男・会社員）
●ボランティアをする（38歳・女・主婦）
●駅前でティッシュ配り（22歳・男・学生）
●美形のスターレスラーを作る（26歳・女・接客業）
●プロレスと称してイジメで何人も殺されているので、広く社会の影響を考え、スポーツの精神面を見せる（45歳・女・主婦）
●清いイメージを作る（26歳・男・新聞配達員）
●TV中継の時間帯をゴールデン・タイムに変える（33歳・男・会社員）
●強くなる（19歳・男・学生）
●何やってもムリ（19歳・女・フリーター）
●異種格闘技戦をもっとやる（19歳・男・学生）

Q11

あなたがケンカしても勝てそうなレスラーはいますか



世間の10人中に3人がプロレスラーとケンカして勝てると断言。内訳を見るとジャイアント馬場が一人で47票を荒稼ぎ。その他では中牧、全日の菊地に票が集まった。ただ、前田日明、高田延彦、橋本真也、安田忠夫、北尾光覇など命知らずなことを言う輩も。「みちのくの人」という回答もあった。プロレスラーが世間にナメられたらおしまいである。ここは、全てのレスラーにキッチリと世間を黙らせるプロレスを見せてもらいたい。もちろん馬場さんにもだ。



すでに映画監督としてはデビューしているが、今年は映画『傷だらけの天使』に出演したザ・グレート・サスケ。従来のレスラーにはない破天荒なキャラクターで、世間をかき回し続けている。サスケ社長の世間観を聞いてみたい。



衛星デジタルラジオ
PCM放送局
『闘魂BIBLE』誌上再録

5月2日から、怒涛のごとく……いや、御存知でない方も多いであろうから、ひっそりとか？　まだまだ発展途上であるが、確実に世に浸透してきている衛星デジタルラジオから、革命の如く誕生した1本の番組。それが、我らが闘魂！　元気が売り物、アントニオ猪木の『闘魂BIBLE』。ズバリ言って、もんのすごくおんもしれえんで、誌上再録しちゃいました。ンムフフフフ……。



アントニオ猪木



佐山聡

魂打（たまうち）カルテット参上!!

小川直也



村松友視



【魂打（たまうち）】驚いて肝を潰すこと（広辞苑より）

元気ですかァ？元気がないなぁ。元気が売り物のアントニオ猪木です！

「落とし前」と「世界征服」'97

猪木　元気ですかァ！　元気がないなぁ、みんなぁ。元気が売り物、アントニオ猪木！　今回この番組をやるにあたって、ちょっと緊張してますが一つ、緊張を解いて、いつなんどき誰の挑戦でも受ける！　その姿勢で、どんどんみなさんの質問も受けてたとうと思ってますんでよろしくお願い致します。

アシスタント近藤（以下、近藤）　よろしくお願い致します。ラジオですから、猪木さんに喋ってもらわないと始まらないんで（笑）。

猪木　大変ですねぇ（笑）。ま、気楽にやらせてもらいます（笑）。世の中が今、暗いニュースばかりですからね。一つ、我々だけでも元気で、若い人たちに夢をもってもらおう、そんなつもりで頑張りたいと思います！

近藤　ファンの方から質問を募集するわけで、中にはかなりきわどい質問もあると思うんですが？

猪木　いや〜、ちょっとやめてもらいたいですね（笑）。まあ、それも一つ、裸のアントニオ猪木を見てもらおうということで、なんでも結構です！

近藤　今日は第1回目ということでゲストをお迎えしております。直木賞作家で『私、プロレスの味方です』などのプロレス三部作、……ここまで言えばわかるでしょう。猪木信者にはお馴染みの村松友視さんです。

村松　こんにちは。

近藤　今日はさらに二人のゲストにお越しいただきました。佐山さん、小川さんです。

猪木　今日は何食べたの？

佐山　シーザースサラダ。サラダね。

村松　そんなに強調することないよねぇ（笑）。

近藤　ウフフ、あやしいですね（笑）。

佐山　いやいやいや、猪木さんはほんっと厳しいんですよぉ。セコムって呼ばれてますから（笑）。

猪木　まあ、24時間体制で監視してるんだけど、それでもかいくぐってね。

佐山　食ってないですからね。

猪木　食ってるからね（笑）。

村松　ファンの間では佐山さんがホントに痩せたのかって大議論になってますから。

猪木　痩せてないです！

佐山　痩せましたよぉ。見てもらえばわかる通り。何を言ってるんですか。

猪木　ホントに、痩せたの？（笑）

佐山　は〜い、すいませ〜ん。いやいや（笑）、ホントに痩せたんだってば。

近藤　4月12日の東京ドームでは、猪木さんは佐山さんと闘ったんですよね？

猪木　う〜ん。本音をいうと、一番やりたくないというか（笑）。そうですね、減量がうまくいってなかったんじゃないの？

佐山　いやいやいやいや、最終的にはちゃんとね。

猪木　だって盗み食いしてたという。

佐山　いやいや、ちゃんと僕の計りはね……。

猪木　「90キロまでに落ちてないと闘う権利を失う」って、やる前に確認してなかったんですよね。でも、まあ、俺はあんまり減量の苦しみって知らないから、本人にとっては大変だったろうなって思うけど。でも盗み食いは、ちゃんと証言者がいるんですよね。

佐山　いやいやいや、アハハ〜（笑）。

猪木　小川選手がいつも一緒にいるんで。だから、その証言を聞くとけっこう食べてるなって。

小川　いやいや、今ちょっとツネられてるんですけど、そんなことないですよ、全然。はい（笑）。よくあの……。

佐山　んっんん！（咳払い）

小川　クフフ。よくあの……、あんまり言えないんですけどぉ。

佐山　あのね、股割りのトレーニングあるんですけど、それ、もの凄く痛いんですよぉ〜。そんときに小川選手、ペロッと全部しゃべっちゃうんですよ。あることないこと……、あっ、ないこと、ないこと（笑）。しゃべっちゃうんですね。

村松　拷問で白状しちゃうんだ（笑）。

猪木　普通ね、チョコレートっていうのは、かじって食べるでしょ、ポリポリって。それを、あんな固いものをど

うやって頑張れるのかなって。

佐山　今日の話題はそんなことじゃないはずですよねぇ～。

小川　甘納豆食べるんですよぉ～（小声で）。

佐山　やめなさいっちゅーの！

猪木　おかげで私は背広を買わされてしまったと。

佐山　いや、スーツなんか全部ダメになっちゃったんですから。15～17キロ落としたんですからぁ。ですから、社長に、ハワイでセールやってたんで、セールのスーツを買ってもらおうと思いまして。でも、選んだのはセールのじゃなかったですねぇ（笑）。

猪木　それだけセールのじゃなかったんだよ（笑）。

近藤　それは作戦ですか？

佐山　いやいや～、気に入ったのが、たまたまそれだったもんですから。

近藤　で、実際90キロにはなったんですか？

佐山　ええ、もちろん。

村松　体重計の針を、始めからマイナス側にしてあったんだよ（笑）。

小川　計るときは壁つかんで（笑）。

佐山　いやいやいやいや（笑）。

小川　猪木さんの死角に入って、やってますからね。「見える？」「見える？」「見える？」っつって。

佐山　もう、せっかくここまで痩せても二人ともこんな感じですからぁ～。

小川　一番本格的に「痩せよう！」と決意を固めた目つきを見たのはですね、ある雑誌の四コママンガですね。

猪木　ンムフフフフフフ。

佐山　ンフフフフフフ～。全部僕が話題になってるんですよぉ。何か横の脂肪の肉を掴まれて投げられたりとかですね。それを見るたんびに、僕は、もうこれは一生懸命やろうと。

小川　タイガーマスクは必ず、丸っこいですからね（笑）。

佐山　そうそう、アハッアハハ～。ま、今日はそういう話題じゃなくてですね……。

近藤　そうですね、減量の話はこれくらいにして（笑）、小川さんに質問したいんですが、小川さんは御存知の通り、（新日本プロレス、4・12東京ドーム大会で）橋本選手に勝ちまして、この放送が流れてる頃には、5・3の大阪ドーム大会の結果も出ていることでしょうが、小川選手は、今後どうなっていくんでしょうか？

小川　「今後どうなっていくんでしょうか？」って急に言われても……。まぁ、今の段階では試合のことで頭がいっぱいなんですが、とりあえず、プロレスも好きなんで、プロレスもやりたいし、また、こういう形（異種格闘技戦）でもやっていきたいし、両方できる選手になりたいなぁと。あと、異種格闘技戦では、いろんな選手が挑戦してくると思うんで、いろんな選手と闘っていきたいですし。異種格闘技戦とプロレス、ホント二つできる選手になりたいなと思ってます。

近藤　佐山さんの小川選手の印象は？

佐山　こんなに身体が大きいのに、非常に器用に全てをこなしてくれるなと。で、スタミナが凄いんですよ。どんど



ん改良していっても、全部付いてこれるなと思うんですね。もし、それがなければ身体が大きくて器用な人はいるかもしれませんけども、そこまで対応できるようなスタミナがなければ、絶対覚えないんですよねぇ。これが彼の強みであって、素質プラスそのスタミナ、あと人間が素直だな～って。そういうところが教えてて楽しいなぁ～と思いますね。

猪木 一つだけ言わしてもらっていいかな。佐山も天才なんですね、物事をなんでもパッとできちゃうっていうか、タイプは違うんだけど天才なんだよね。器用にこなしちゃうっていうの。でも、その器用にこなしちゃうってところが、どっかで努力が足らないというか、努力しないでもできちゃうわけだから。ここを厳しくやってかないとね。ホントにできちゃうんだよね、二人とも。俺なんかはどっちかというと器用な方じゃねぇですから。だから、そこんところがね。誰か怖い人がいた方がいいじゃねぇかと。

小川 30%の奥義ですね（笑）。

佐山 アハハ～、やめなさいって。

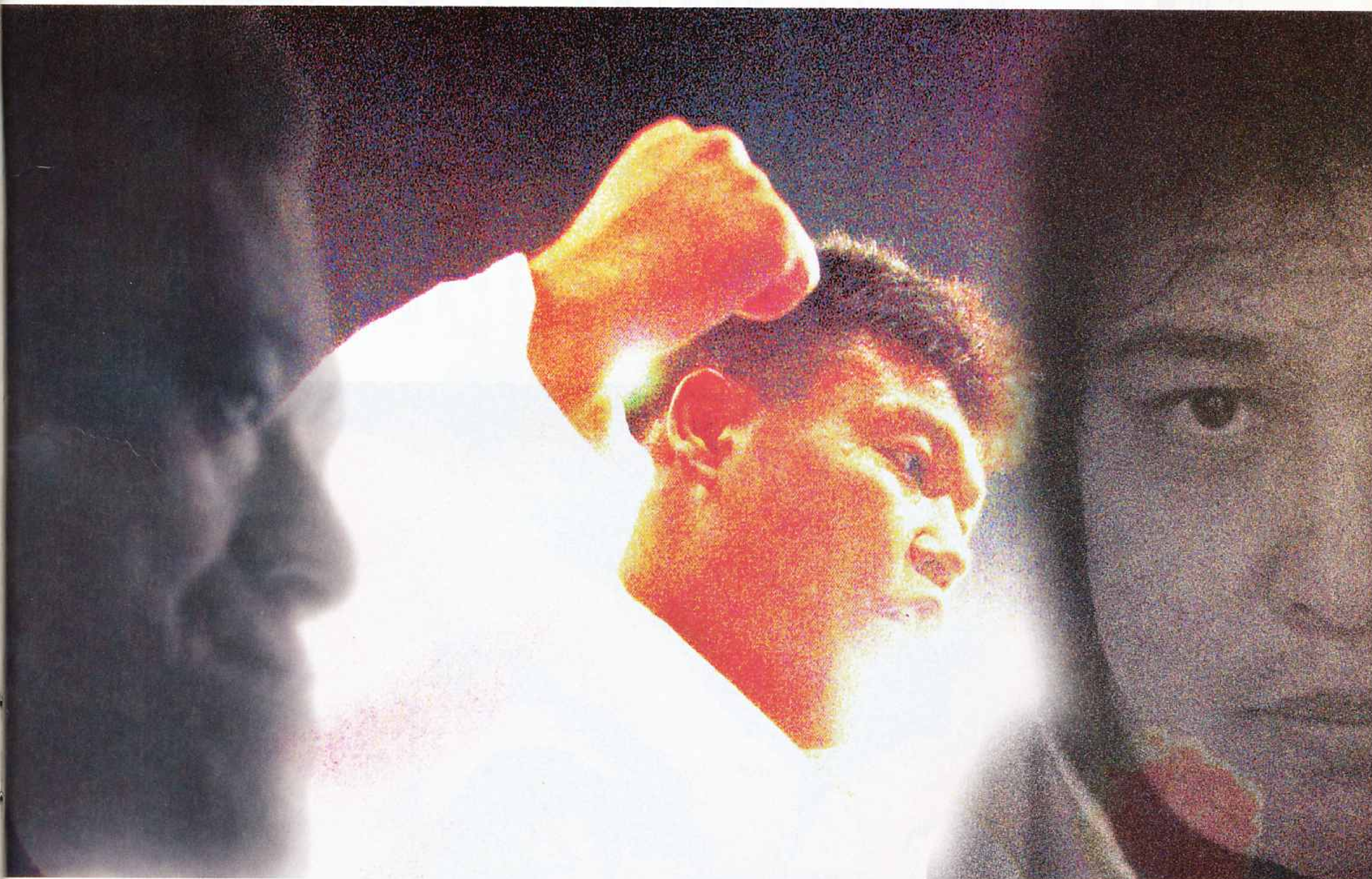
近藤 何ヒソヒソ話してるんですか？

猪木 佐山はね、30%の練習でも、人が100%出してやることを、30～40%で出来ちゃうの。もう、ミスター30%っていうね。

佐山 いや、110%です、はい。

小川 全力出してるのに30%って、会長は言ってますよ（笑）。

佐山 そうそう、全力出してるのにねぇ～。



猪木 だから痩せるんだって、もっと努力してりゃあ、もっと痩せるはずなんだけども。

佐山 いやいやいや。

猪木 確かに15キロ～20キロね、成功するのは大変だけど。もうこのあたりに努力が……。

佐山 アハハ～、いや、もう、写真集でも出して証明しようかなぁ（笑）。

近藤 それでは村松さん。小川さんが参戦したということで、今のプロレス界に与える影響などがあれば、村松さんなりのご意見を。

村松 もし3日の大阪ドームで橋本選手に連勝した場合は、今度は何とししても自分が小川の首を刈るみたいなね、形のエネルギーが結集するだろうから。見てる者にはものすごく有り難い結果になってくるでしょうね。

近藤 それでは小川さんに伺いたいんですけど、プロレスの世界の印象は？

小川 柔道界のときと違って、今度の観客はプロレスファンじゃないですか。「ブーイングがあるよ」とか、「プロレスファンは外の人は嫌うよ」とかいろいろ言われて、「ああ、プロレス界ってのはそういうとこなのかなあ」って思ったんですよね。で、プロレス界の中でも、ずーっとこの3人で行動してますから、あんまり他の選手の中に入ってないんですよ。ファンも選手も、外の人は受け入れないって聞いてたんで、お客さんに「帰れ、帰れ」と言われる以前に、選手の方に「帰れ」とか、「お前用済み」って言われるんじゃないかって、最初ドキドキしてたんです

小川は「さらさらいくよ」佐山は「悟る」です！ンムフフフ……。

よね。だけどファンの人は、ホントに温かく迎えてくれて、プロレスファンの見方って有り難いなぁと。

猪木　帰れコールがかかった方がよかったかもしれないなぁ、ンムフフフフ。

小川　やばいですね（笑）。次帰れコールがかかったらやばいです（笑）。ただ、自分なりに精一杯やって認めてもらえたのはうれしいですし、また、認めてくれるところがプロレスファンのいいところじゃないかと思うんで。試合が終わったら、ホント有り難いことに、僕のコールなんかかけてもらって。ホントあの時はうれしかったですね。もともと、帰れコール、もしくは橋本さん一色のコールだと思ってたから。そこが全然違ったんで、あん時は「ああ、良かったな」と思いましたね。ただプロレス界の選手の方はどう思ってるか、この三人でしか動いてないんで、そういうのはわかんないですね。

近藤　では、これから進んでいく道を教えていただきたいんですが。

猪木　川の流れです（笑）。

小川　ウヘヘヘヘ。

近藤　「川の流れ」と言いますと？

猪木　ガハハハハ、その先は知らねえよ（笑）。

小川　猪木さんが言いたいのは「春の小川はさらさら行くよ」と。猪木さんの口癖ですから（笑）。まあ、そういう風にいきたい、いければいいんですけど。まあ、プロレス好きですから、プロレスラーとしてもやっていきたいし、またこういう形でも、どこまで通用するのかなと、そういう気持ちもありますから。ただ、プロレス好きですから、いつかはプロレスラーになりたいなぁと思ってます。

近藤　それでは佐山さんにズバリ聞きたいんですが、ずっとプロレス界から離れていた佐山さんがプロレスの世界に戻ってきた最大の理由は？

佐山　う〜ん、最大の理由……。これも猪木イズムなんですよねぇ。あるきっかけがあって、プロレス辞めることになったんですけど。で、そこで対プロレスと、いろいろ喧嘩してる時もあったんですけども、それは自分の主義・主張じゃなくて、自分にも弟子がいまして、それはもうシューティングに賭けてる人間ばかり。これとプロレスとの間の話なんですねぇ〜。で、こんな状況で、自分としてはもう4、5年くらい前から何とかしたいなって思ってて、そんな時に小林邦昭さんが「早く帰ってきてよ」って言ってくれて、あの、小林さんとは付き合いがありましたんで。エキシビション、小林さんに出てもらったんですよ。その時、僕ね、ノックアウトしちゃったんですよ〜。アハハァ。僕がちょっと蹴ったのが、たまたま小林さんがタックル入ってきて、そこでボーンとぶつかっちゃって。僕の蹴りというよりも、倒れたときに後頭部バコーンと打っちゃって、アハッ（笑）。小林さんは周囲の反対を押し切ってエキシビションに出てくれたわけなのに、それを僕がKOしちゃったもんだから、これはまずいことしたな、申し訳ないなって、「小林さんにお詫びもしたいので、今度マスクを賭けてやりたい」って話をしてプロレスの中に入っていったんですね。あのね、僕、プロレス引退してないんですよぉ。みんな引退してる、引退してるって言うんだけど。

近藤　あ、そうですか（笑）。

佐山　マスク脱いでタイトル返したんですけど、別に引退したわけじゃないですよねぇ。それで、プロレスのリングに上がるってなった時に、全日本プロレスさんには悪いかもしれないですけれども、僕は全日本には上がれないですよねぇ。やっぱり社長のとこ行くのが筋ですよねぇ。で、社長と話し合ったら、とにかく「今のままじゃダメだ」と、「痩せなさい」って。ウフフ〜（笑）。「練習しなさい」と。まあ、それが罠……、まぁ罠とは言いませんが、凄い練習量でしてね、2カ月くらい一日も休みがないんですから。そういうのがずーっと続いて、今に至ってるわけですけども。まあ、社長の武器になっていければいいなぁと。社長にずっと付いていくのは、プロレスだけじゃないですからねぇ。

猪木　一つ言わせてもらっていいかな。結論から言うと悟るです！

——一同呆然

猪木　わかんないでしょ？（笑）。

近藤　結論から言うと悟るです？

猪木　ンムフフフフ。ね？　佐山聡というんですよ。

近藤　それはわかりますが……。

猪木 ンムフフ。
一同 シ〜ン……。
猪木 シラけたね、ガハハハハハハ。
村松 さすがの僕もフォローできなかった（笑）。
佐山 社長、今日は生放送じゃないですから、思いっきりどうぞ！
猪木 だって、だって、裸の佐山ってのがテーマなんでしょ？ だけどまだなんか裸になってないような気がするなぁ〜と思って。やっぱここで脱いでもらわなきゃいけねえような（笑）。
佐山 ええ、ええ。筋肉美といきましょうか（笑）。
小川 クフフフフッ。
佐山 笑うことないでしょう（笑）。
小川 いや、すばらしいなと思って。
佐山 ウフフ、なるほどね（笑）。で、お題はなんでしたっけ？
近藤 えっ!? いや、プロレス界に戻ってきたわけをですね……。
猪木 だから結論は出てんじゃない。悟るっつってるじゃない（笑）。
佐山 はいはい、聡、聡です。
村松 蒸し返した（笑）。
佐山 2回言いました（笑）、すいません、もう一度お願いしま〜す。
猪木 もう1回言ったら、また言うよ、ガハハハハハハハハハ。
近藤 それでは猪木さん、かつて違う道を歩んだ弟子が、再び同志として巡り合うことになったことについては、どう感じてらっしゃるんでしょうか？
猪木 ヌフフフ、あんまり感じてねえです（笑）。さっきの川の流れじゃないけど、人生ってのはいろいろあるんですよ。そん時そん時にみんないろんな思いがあったんだろうし、俺は俺で一生懸命生きてきてね。で、お互い歳を重ねて、佐山はいろんな格闘技が好きですから勉強して修得して、自分のものにしてるわけでね。だから今、佐山がこういう形で協力してくれてるってことは大きな財産ですよね。
佐山 そうそう……（ブツブツ）。
小川 クスッ。
猪木 小川選手も同じように、今おそらく最初の一カ月二カ月の間に、もう意識は全然変わっちゃってると思うんだよ。今の小川はそんなものじゃなくて、今度はもっとデッカイ、自分が与えられた夢というか、使命というか、そういうものを凄く感じているんだと思いますよ。
近藤 小川さん、佐山さんの指導は厳しかったんでしょうか？
小川 そりゃもう厳しいというよりか、……ヒドイですよ（笑）。
猪木 ズバリ言って、いじめです！
佐山 いやぁ、こっちはこっちで……。おかしいなぁ〜（小声で）。
小川 この間、思い起こせばつい最近なんですけど。
佐山 ん〜？
小川 山梨の三つ峠での麓で合宿したんですけど、その時パンチを見切る練習ってことで。
佐山 ウフフフ〜
猪木 ダハハハハハ。
佐山 それは俺じゃないんだよねぇ〜。ふふ〜ん（素知らぬフリ）。
小川 まず、パンチを見切る練習で、まずパンチに目を馴らすということで、ジャブの練習をしてたんですけど、ジャブの見切りをずっとつけてて。
佐山 ふふ〜ん（素知らぬフリ）。
小川 拳を寸前で避ける、顎引いて額で受けるとか、そういう練習してたんですけど、それだけしか習ってなかったんですよ、ジャブの避け方しか習ってなかったんですよ。で、「後ろで手を縛れ！」って言われて、縛って首の動きだけでパンチを避けて。ま、そこは上手く逃げてたんで。
佐山 僕じゃないんだけどなぁ〜（ボソッと）。
小川 次は「膝をつけ！」って言われて、コーナーの方で膝をついていたんですけど。その時グローブがなかったんですよ。だから、素手じゃ拳の方がいかれちゃうって。普通、顔のこと心配してくれると思うんですけどね（笑）。
佐山 逆だったよねぇ〜。……僕じゃないのになぁ（ボソッと）。
小川 まあ、素手にタオル巻いてですね、こうグルグルグルグル巻いて。
佐山 だから、僕じゃないんだけどなぁ〜（ボソッと）。
小川 きつくしめろよってことで、きつくしめてこうやってたんですけど。で、ジャブの方を練習してたんですけ

緊張感があって、なおかつ二人はコンビが合うんだろうね。

「落とし前」と「世界征服」'97

ど、佐山さんが「じゃあ、次は膝をついて、よしいくぞ！」ってことでやったんですけど……。なんかしんないですけど、アッパーがきたりですね、フックが来たりですね、逃げた方に拳が落っこってきたりですね（笑）。もう、バカボコにやられてですねぇ。

佐山 あのね、あのね、ちょっと待って下さいよぉ〜。拳にタオルを巻いてきつくしめて「これでやれ！」って言ったのも社長ですし。俺はこれだけで殴るのかな〜って思ったんですよぉ（笑）。で、こうやって軽くポンポンポンってやってたら「もっと殴れ！」って、社長の神の声が聞こえてくるわけですよぉ（笑）。

猪木 ンムフフフ。

近藤 猪木さんの指令だったんですか？

佐山 全部そうですよぉ〜。「ここ縛れ！」とか「後ろで縛れ！」とか、うわぁ、すごいこと言うな〜と思ったけど、僕、軽くポンポンポンと打ってたら、「もっとやれ！」（笑）なんて言うから。アハッアハハハハハ〜。

村松 それ特訓って言わないよね、リンチだよね（笑）。それもリンチされた人が笑いながら体験話してる（笑）。

佐山 やあ、僕も凄いなぁと思いましたぁ。社長が「もっといけ！ もっといけ！」ってうるさいから、最後は連発でパパパパーンってやったら、新聞記者の人が「おおぉ〜」となっちゃって、クフフフ〜、可哀想に（笑）。

近藤 実際、佐山さんってどんな人なんですか？

猪木 意地悪な人です！（笑）。

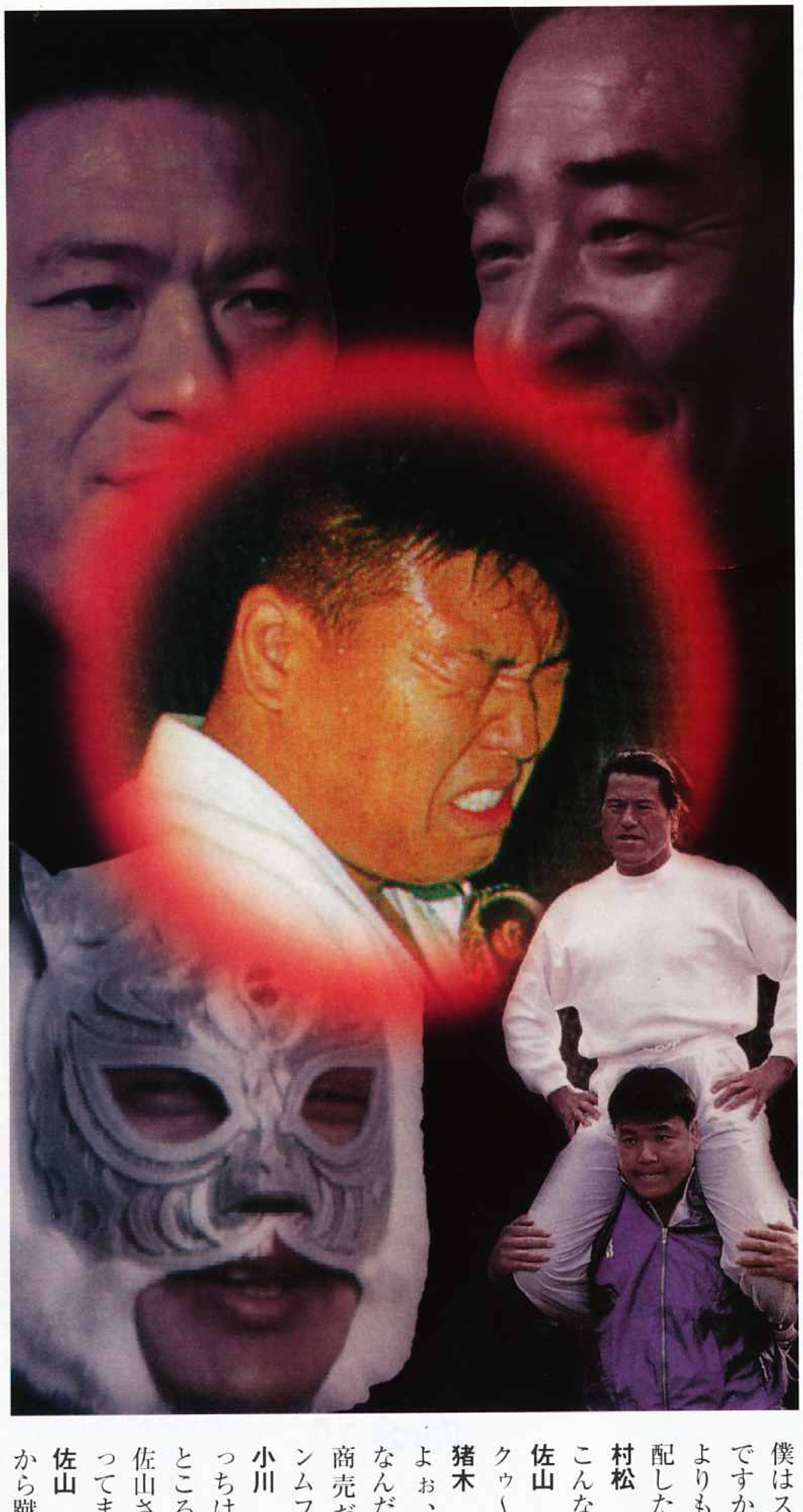
佐山 いや、それは……（小声で）。

小川 結構、感性が鋭くて……。

佐山 ウフッ。

小川 「やだなぁ」ってことを、思いっきり言ったりですね（笑）。あと、マスコミがいると俄然燃えちゃう人ですから。

猪木 ガハハハハハハ。



小川 まあ、また合宿の話になっちゃうんですけど、練習散々して、取材の人が来て、「お願いしますから、取材やらせて下さい」ってことがあったんで、じゃあ、もう一回やろうかってことになったんですけど。ま、取材用ですからねぇ、型だけでいきましょうって言ってたのに、カメラ向けられたら、ホントにガンガン来るんですよ。「えっ!?」と思って。

佐山 俺じゃないんだよなぁ〜（小声で）。

小川 蹴りとかも、もうバンバン来るんですよ。自分はほら、最初言ってたから、簡単なのが来ると思うじゃないですか。そしたらいきなり飛んできたから、腕のへんなところ入っちゃって、凄い痛くて（笑）。

佐山 あ〜あ〜あ〜あ〜ぁ。あのねぇ、僕はね、全然入れる気なんかなかったんですよぉ。そしたら小川先生がこっち側に動いてきちゃって、僕はスネを傷めちゃったんですからぁ。小川選手の腕よりも、僕はスネの方を心配したんですよぉ。

村松 なに言い合ってんだ、こんなとこで（笑）。

佐山 そのあと、そのあと、クゥ〜（泣）。

猪木 こんなとこで泣くなよぉ、二人揃って（笑）。なんだお前たち、痛いのが商売だろうっての（笑）。ンムフフフフフ。

小川 いや、でもねぇ、こっちは手が痛いのに、同じところ何回もやるんですよ。佐山さん、俄然力入っちゃってますから。

佐山 いえいえ、僕は痛いから蹴りたくなかったんですけどぉ。最初ぉ……。

小川 （佐山を遮って）で、痛い手を下げると、猪木さんが「ガード下げるな！」って言うから無理矢理上げて（笑）。佐山さんは、そういう風に俄然燃えちゃうタイプというか。

佐山 いえ、燃えたんじゃないですよ。僕も痛かったんだから。蹴りたくなか

「落とし前」と「世界征服」'97

ったんですからぁ〜。

近藤　でも小川さんから見るとそういう風に映ってるみたいですね。

小川　でも自分に厳しいんですよ。その証拠にすごい痩せられてますし。

近藤　そうですね。

小川　クフフッ。まあ、たまに冗談で、その場で笑いを取ろうとして、たま〜に、たま〜に、チョコレートとか食べるフリはします。

佐山　この間ですね。

小川　ンクフフッ。

佐山　「佐山さん、甘納豆は身体にいいから絶対大丈夫です」って言うんですよ。「そうかなあ」とか言って、僕いっつも騙されちゃうんですけどぉ。「甘納豆は絶対、絶対に大丈夫なんですから」ってパクって食べた瞬間、社長がいたんですよ（笑）。

猪木　ンムフフフフ。

小川　最初、猪木さんいない時にキョロキョロしてて、すっごい警戒してたんですよ。

佐山　アハッアハハハハ〜。

小川　それでパッと頬張るように食べたんですけど、次いないかなぁと思って、じゃあもう一個頂こうかなと、ゆっくり取った時に後ろで猪木さんが見てるのを知って、おっかしくて。気づいてないで食べる佐山さんの仕草がですね（笑）。

佐山　なんの話をしてるのかなぁ、もう（笑）。

近藤　ちょっと話が脱線してますねぇ（笑）。佐山さんってどんな人なのかなっていうのは……。

猪木　だからっ!!　そういう人なんです！

小川　そういう人ですね。

猪木　盗み食いをする人！

小川　練習は厳しくても私生活はこういう風にホントに楽しく。僕も楽しくやらせて頂いてます。

佐山　さぁてと（小声で）。

猪木　まあ、結構、だから緊張感があって、なおかつそういう部分の二人のコンビが合うんだろうね、多分。

村松　凄いですね、今までのを聞いてても。

小川　わかんないことがあるじゃないですか、やっぱ違う世界ですから。そういうことを、ホントにわかりやすく、ホント必要以上にわからしてもらえるっていうんですか。そういう意味でも、ホントに研究されてますし、格闘技のことは全部知ってますから。だからそういう意味ではホントに助かります。

佐山　二人は同盟結んでるんですよぉ〜、社長から逃れるために。だって、二、三カ月休みがないんですから。それでどういう風にして休むかとかね、僕と小川選手と事務所の伊藤さん。この三人は同盟を結んで、どうやって社長から逃げるかって話をいつもしてるんです。

近藤　いいんですか、猪木さんの前でそんな話して。

猪木　ん？　だから、それを逃がさないようにどうするかって知恵比べでね。次のスケジュールを組んで、もう合宿を組んで、もう逃げないように。でもねえ、そんな厳しくする必要はねえんですよ。ただ、さっき言った痛みとかね、打たれた痛み、痛みの耐えらえる力っていうのかな。格闘技にとって一番大事な部分は、同じパンチを喰って倒れちゃう人と、それを喰っても大丈夫な人っているじゃないですか。関節技喰っても参ったしない人と、ちょっと極まったら参ったする人と。そういう意味ではそういう忍耐力、抵抗力を高めてくと。あとは自分自身でコントロールしていくって世界でしょ。だから、別に俺が見てようと見てまいと、ちゃんとスケジュールがあるから。そういう自分の習慣を作っとくっていうのが大事なんですよね。どっかで怠け癖持ってるじゃない、みんなね。俺が水風呂入るのもそういうこと。水風呂入って気分を変えて、そういう習慣性をつけとけば、後は旅をしてようと何してようと、疲れようと、自分でコントロールできるじゃねえですか。

近藤　そうですね。

佐山　は〜い。

猪木　ホントかなぁ、お前たち（笑）。

佐山　ウフフッ、社長が水風呂入るのと、僕がまんじゅう食うのは同じ心境ってことですよねぇ（笑）。

【5月2日放送・『闘魂BIBLE』より一部再録】

●番組宛の質問、相談、メッセージはFAX.03-3261-8975　〒102 千代田区隼町2-18「アントニオ猪木の闘魂BIBLE」係



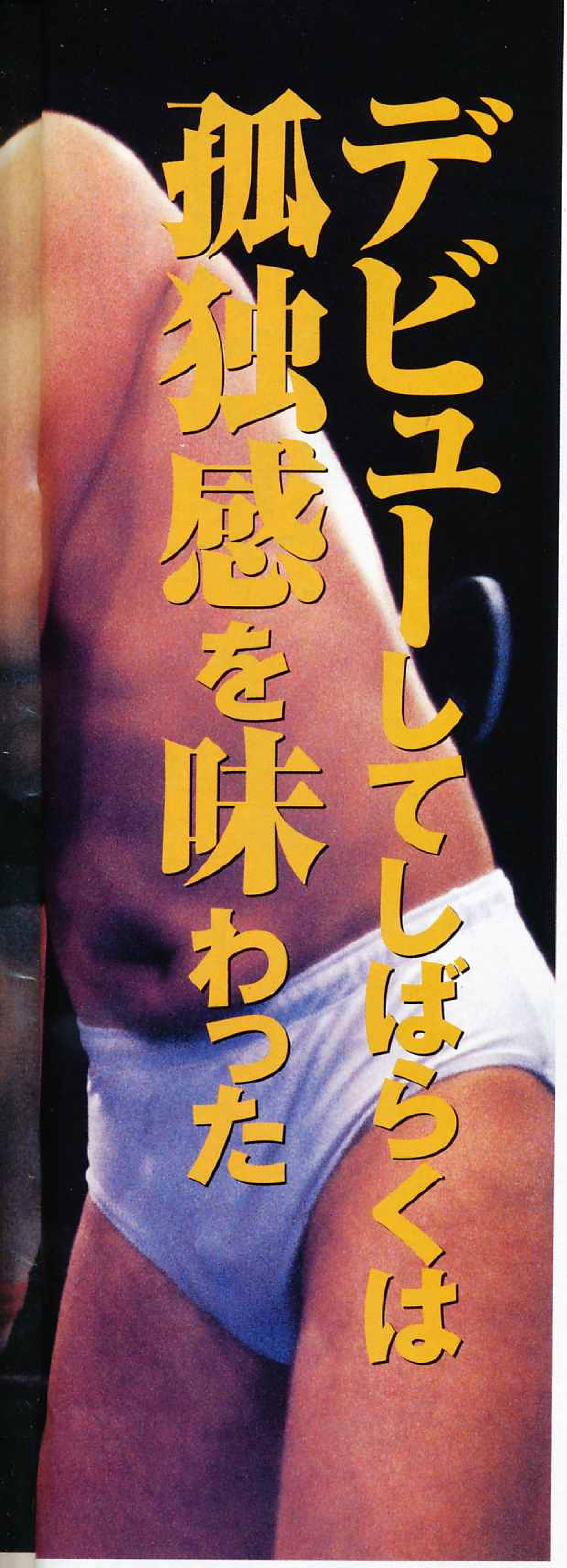
感謝の気持ちを込めて前田さんを叩き潰す！

高阪剛

Tsuyoshi Kousaka

聞き手／原タコヤキ君
interview by Takoyakikun Returns

撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saitou



デビューしてしばらくは孤独感を味わった

高阪剛

店員さん　お飲物は何になさいますか？

高阪　ウーロン茶ください。

—あれ、ビールじゃないんですか？

高阪　最近、全然酒飲んでへんねん。

—ホンマに!?　いつからですか？

高阪　NKホールのタリエル戦から。試合中でもね、2、3回記憶が飛んで、終わってから控室まで帰ってきたことも覚えてないのよ、俺。

—ボコボコ打たれてましたもんね。

高阪　それから前田さんにも「しばらく酒は控えた方がええぞ」って言われてずーっと飲んでなかって、それでまた、田村さんとやって足首ケガしたでしょう。そやけど最近、先輩の結婚式があって、それでもう……、ねえ。「もうええかなあ」って思ってねえ。

—カカカカカ。

高阪　「前田さんには飲むなって言われてるけどなあ」って。ほんで飲んだらもう、足がパンパンに腫れてしもて！

—それはきっと、飲む量がハンパやないからですよ。

高阪　うん！

—いや、うんじゃなくて（笑）。で、今日は真面目なことも聞きますよ。

高阪　ホンマに真面目なこと聞いてや。

—はい（笑）。大阪で田村さんと初めて闘ったわけですけど、田村さんはどんな選手でしたか？

高阪　一つ一つの動きにムダがないね。ただね、俺と合うようで合わへん部分っていうのがボコボコあるわけ。たとえ似てるようでも、実際やってみるとやってるもん同士っていうのは、ちょっとした違いが凄いデカイのよ。

—ん？　そのちょっとした違いっていうのは、技術の話ですか？

高阪　あのー、これを言い出すと凄い難しい話になるんだけどねえ。

—ほんならわかりやすく説明してください。

高阪　例えば、あんまり格闘技に詳しくない人がウチの試合をパッと観たら、コンビネーションとか関節技のポイントとか、そういう目に付くところしか見ないんですよ。

—まあ、なかなかそこすら目に付かないことが多いですけどね。

高阪　でもね、実際は、ゴングが鳴ってから終わりまでがその人の技やからね。部分部分じゃなくて。その動きの中で、お互いの違う部分っていうのがボコボコ出てくるわけ。そして、その違うところを相手により強く誇示できる人間が強い人間なんですよ。

—うーん、わかったような、わからんような話やなあ。例えば、田村選手は闘ってみた感じ、強い選手ですか、それともうまい選手ですか？

高阪　うーんとね、一発技の持ってる威力はいままでで一番凄かったね。

—一発技？

高阪　一発技。例えばね、もっと噛み砕いて言うと、柔道の古賀選手っているでしょ。あの人は一発技があるんですよ。背負い投げとか、あんまり知られてないけど小内掛けとかね。そういう一発技があるから他の崩しとかも効くんですよ。だから相手にしたら「アレがくるんじゃないか」って思って腰が引けるのよ。だから、田村さんの場合でも、その一発技があるために他の技術っていうのも相手にプレッシャーを与えるんですよ。で、試合は当然、相手の弱みにつけ込んだもんの勝ちやから、それを最初に探すんだけど、田村さんに関してはなかなかそれが見つからなかったね。

—うーん、いろんな意味でバランスがええのかなあ。

高阪　凄い計算し尽くしてるんだろうね。ここでこういう動きをしたら相手に安心感を与えてしまうというようなことが、あの人は本能的にわかってるんだろうね。だから試合の中で「ここにつけ込めるかな」っていう動きがね、あの試合の中では1、2回あったかな。でもね、俺にとってマイナスになってしもたからね、それを見つけたことが。

—弱みを見つけたことがマイナスに！　完全に選手にしかわからない話ですね。

高阪　そうそう。こういうことをわかりやすく言おうとしても難しいねんな。

—こういう話を選手同士とするとするじゃないですか。「いや、山本さん、田村さんの強さっていうのはね……」というようなことをね。それはやっぱり一発でわかるもんなんですか？



高阪　わかるわかる。

――まあ、そらそうやなあ。

高阪　もう間違いなくわかる！　だからね、テレビ見てるでしょ。俺なんかお笑い大好きやから、ようお笑い番組見てるんやけど、やっぱりダウンタウンの話なんか聞いてても隙がないよね。

――ワ～ハッハッハ。あんた何者や！（笑）。

高阪　ハハハハハ。うん、隙がない。逆に若手のお笑いさんなんか見てたら「なんやこいつ」って思うことがいっぱいあるでしょ？

――あるある。

高阪　そうなったら「あ、こいつには勝ったな」って思うやん。

――ホンマに何者やねん！（笑）。

高阪　思うわけよ！（笑）。俺は自分に置き換えて考えるから。「これやったら俺の方がおもろいな」とかね。それが試合になると、相手も同じ立場同士の者が闘うわけやから、なおさらその感覚がきついわけよ。

――よりリアルに感じますよね。

高阪　「あ、こいつ焦ってやがるな」とかわかるわけ。それを見つけると、相手は「あ、バレたかな」って下がる。逆にこっちは「しょうもないことしやがって」ってグッと前に出るわけよ。

――この説明はかなりわかりやすいなあ。お笑いやったらこっちもやる側で考えられるもんなあ。

高阪　試合の中身っていうのは、探り合い探り合い探り合いなわけよ。だからそこまで完璧にわかって見てる人は、やってる俺が言うのもなんやけど、リ

ングスの試合はもうメチャメチャ面白いと思うよ。「いまこいつミスったけど、あいつはそれをわかってるんかなあ」っていう見方ができるわけよ。もっと言うと、「あ、あいつはそれをわかってるんやけど、わかってへんふりをしてるんやな」とかね。

——そういうのっていうのは、選手でない僕らでも理解できることやと高阪さんは思います？ それとも絶対理解できないと思います？

高阪　いや、わかると思う。

——はあ、珍しい人やなあ！

高阪　いや、わかるわかる。わかると思う。特にねえ、俺なんかはよく周りにも言われるけどね、「もの凄くわかりやすいね」って。感情とか気持ちがすぐ出るって。「あ、こいつ喜んでるやんけ」とか、「あ、いけると思っとるやんけ」とか、すぐわかるって。

——それはそう思いますね。あの、こうやって僕はいろんな選手に話を聞いたりすることが多いんですけど、基本的に選手っていうのは、「しょせんこっちのことはわからないだろう」っていう意識が強いんですよ。

高阪　いやあ、わかるはず！ 一回二回やったらわからんやろうけど、毎回毎回見てると、ほんの小さいことが目に付いてくるわけよ。例えば、一つの試合を何回も何回も見てたら、「アレ？」って思う点が出てくるわけよ。

——そうそう！ 出てくるんですよ。

高阪　例えば、実力がはるかに違う選手同士の試合を見たりすると、もの凄くわかりやすいわけよ。

高阪剛



——しかし、その確信はなんですか？ カッコよく言うたら、観客を信頼してるんですか？（笑）

高阪　信頼ねえ（笑）。まあ俺はウチの試合を見に来る人はそういう人らばっかりやと、思い込んでるけどね。そら、わかろうとしてない人にわからせようとは思わんけど、わかろうとしてる人に対しては、わかってもらえると信じてる。

——確かにリングスのファンは、例えば、高阪さんの発言、田村さんの発言を雑誌で読んで、それを試合を観る時に生かしてるファンが多いですよね。

高阪　リングスのファンは頭いいと思う。だから手紙とかもらって読んでても、逆にファンの人に教えられたりすることがあるしね。

——例えばね、高阪さんが自分で「これはいい試合ができた」と思ってるのに、ファンや周りの評価が低いなんていうズレはないですか？

高阪　うーん、最近ない！

——いつぐらいからなくなりました？

高阪　2年前の4月の28日。

——また細かいなあ！（笑）。

高阪　ハハハハ。デビューした翌年の試合なんですけど、その時に人に見られてるってことを意識したんですよ。

——それはなに？ 簡単に言うたら徐々に慣れてきて周りを見られるようになったっていうこと？

高阪　いや、俺はデビュー戦から俺は周りを見ることはできた。ああ、だからそういう意味では、デビュー戦から観客に見られてるってことは感じてたかもしれへんけど。でも、デビューしてしばらくは、それがいったい何であるかわからんねん。だから、学生の時の柔道の試合と同じことをやってて、果たしてそれでいいのかって思ったわけよ。あのな、だいたいデビュー戦なんてのは、パッと始まって、何が何だかわからんうちに終わるもんやんか。

——みんなそう言いますよね。

高阪　俺は全然そんなことなかったけど、俺のデビュー戦ってラウンド制やってん。で、そのラウンドの合間にそういうことを考えだしてん。だいたい、デビュー戦やねんから俺のこと知らん人ばっかりやん。それやのにみんな「頑張れ！」って言うてくれるし。ウチの身内も会場に呼んでたから、「あ、身内かなあ」と思ってたら、全然違うところから声が聞こえてきたし。で、そういうのを聞いてたら、「俺はこういう世界にいきなり放り出されたのかなあ」って、ちょっと孤独感を味わったのよ。

——へえ。孤独感ですか。

高阪　実際には練習生として入門して、やっとデビューにこぎつけたわけやから、いきなりでもなんでもないけど、その時、なぜかそれまでの考えっていうのは一切消えてしもてね。おかしな話で。いきなりリングに上げられて「お前、あいつと闘え」って言われたような、そういう感覚に陥ったわけよ。全然知らん人に応援されたりするのなんか初めてやんか。おかしな話やで、ふつうに考えたら。俺なんか応援したって何もあげへんで。

——当たり前や（笑）。

高阪　で、メチャメチャ孤独感を味わってね。そういうことを考えつつも試合は流れて終わってん。で、家に帰っても興奮して寝れへんわな。

——考え込んでしまいますよね。

高阪　でも、やっぱりこれはおかしいと。とにかく、なんで孤独感があるのかがわからなくて。それから次の試合までの間隔があいたのよ。でも、それが結果的に俺にとって都合がよかったんや。その間に先輩のセコンドについて試合を観てるんやけど、でも客の方に目がいくわけよ。そこで「うわあ、やっぱり俺ら見られてんねや」ってわかってん。当たり前やけどね（笑）。

——うん（笑）。



わしを誰やと思っとんねん 天下の髙阪剛やぞ!

髙阪　「試合も観ないでしゃべってる奴なんかおらへんわ」って思ってね。ほんで、俺、昔からええカッコしいのところがあったからね。ようはね、サービス精神やねん（笑）。

――カカカカカ。

髙阪　それで、「俺はみんなに見られてんねや。それやったら、メチャメチャええカッコした方がええやんけ」って強く思ったのよ。それで4月に坂田先輩とやる時は、もう完璧にそういう意識が頭にあった。

――凄い！　しかし、そんな短期間でそこまで意識がいきますか。

髙阪　当たり前や！　ワシを誰やと思っとんねん（笑）。

――カカカカカ。もう、天下の髙阪剛やもんなあ（笑）。

髙阪　ホンマやで（笑）。でも、いま、自分が何をすべきかっていうのが、その時点でちゃんと把握できたしね。

――これは凄いなあ。だからプロレスっていうのは、基本的に見てる人の期待に応えるっていう部分のウエイトが大きいでしょう。


髙阪　うんうん、やってる方から意識的にいろんなことを提供してね。

――そう。でも、リングスみたいなスタイルは、試合自体が選手のためのものになりがちじゃないですか。

髙阪　あのー、だから2倍疲れるよね。勝つための動きっていうのも凄く大切やし、その反面、人に見られてるわけやから、それにも応えなアカン。でも、それはできると思ってたから、俺は。そういう気持ちの余裕もあったし。ほんで、技術的にも自信があったし。だから、それは全然苦にならへんけどね。だからあの試合は、俺にとってもすっごい大事な試合やし、いまでも忘れられへん試合やし。

――なるほどねえ。で、そうやって常に観客のことを考えてる髙阪さんとしては、髙阪剛は観客に何を求められてると思ってますか？

髙阪　それはねえ、考えん方がええと俺は思うな。完全に客観視してる人に求められてるものでなくて、自分が考えて、「いま、自分は何をすべきか」っていうことを周りに納得させる方が



大切やと思うから。だから、そういうことはなるべく人に聞かんようにしてるし、考えんようにしてるし。

のものも もう撮影はしないので食べてくださぁい。

高阪 はい。

――だいたいね、モグモグ、リングで闘ってる人とね、僕ら見てる人たちとの間には、深くて大きな川が流れてるんですよ（笑）。よく言われることですけど、「リングで受け身をとったことのない人間に何がわかる」っていう意識が選手には強いですから。

高阪 確かにそういう意識を持った方が楽やと思うよ、モグモグ。でも、そういう楽をしちゃいかんよ。昨日考えたんやけど、ウチの試合ってロイヤルリングサイドが2万円もするんやんか。2万円出して格闘技の試合なんて見たいと思わへんもん。

――リングスやったら？（笑）

高阪 リングスは見るよ（笑）。でもハッキリ言って、格闘技の試合なんて2万円も出して見たいと思わんもんやで。だから、それだけのものをお客さんに返さんとアカンよ。絶対そう思う。だから、少なくともウチの試合だけは「安い！」って言われるような試合をせなアカンなと思うねん。激安って言われるような（笑）。

――ファン第一ですね（笑）。

高阪 俺なんかミュージシャンで好きな人いっぱいおるけど、記事とか読んで、自分の頭の中で想像力膨らまして、「あの人はきっとこういう人なんや」って思うのって凄い楽しいやんか。

俺、リングスで一番強いと思ってるからね

高阪剛

—それが一番楽しいですよ。

高阪 そう、楽しいと思う。そういうのは全然否定せえへんし、ファンの気持ちもわかるところあるし。だから、10人いたら10人俺に対する見方が違うと思うし、「ああ、この人にはこういうふうに思われてんねや」っていうのが凄い面白いし。いろんなふうに見られるっていうのが、逆にこういう仕事してってよかったなと思うしね。

—なるほどねえ。それでですねえ、さっきリングスの方から聞いたばっかりなんですが、いよいよ前田さんと対戦するそうですけど。やっぱりやってみたかったですか？

高阪 当たり前やん！ どの業界でもいっしょやと思うけど、自分の師を越えるっていうのが、師に対しての一番の恩返しやからね。それに俺は恩返しできると思ってるからね。

—なるほど。もう前田さんを越えられるんですね。

高阪 その自信はあるね。

—おお！

高阪 というか、越えなきゃいけないからね。そうせんと、俺自身も前に進めん部分あるし、前田さんも納得でけへんのちゃうかな。

—高阪さんにとって前田戦っていうのは、そういう見られてるっていう意識すら働かないような試合になるのかなって思ったんですけど。

高阪 そらないでしょう。ないっていうかね、そこまで楽したくないのよ。むしろ自分をドンドン追い込みたいね。

—追い込みたい？

高阪 お客さんに見られてるっていう意識も持ちたいし、自分のやりたいことを試合の中で通したいっていうのもあるし、「ここでこういう流れを作らなアカン」って考えながらやりたいし。そういう全てのものにうち勝って、それで初めて試合っていうものに勝つということやと思うしね。ただ、それは状況によって変わると思うよ。そう、道場破りみたいなのが来たらもう……。

—カカカカ。人に見せる試合もなにもないもんなあ（笑）。

高阪 そんなんできるわけあらへん。それどころか「リングスは恐ろしいところだ」って思わせるくらいでないとアカンやん。でも、俺は来てほしかったね。新弟子の頃。

—なんで？（笑）。

高阪 先輩に「道場破りとか来たら、お前ら練習生がいくんだぞ」と言われてたのよ。それでもし、相手をボッコボコにやったら、デビューできると思ってたのよ。だからもう、道場破り来てほしくてしゃあなかったもん。

—でも、そういう道場破りを相手にした、余裕のない高阪剛を、高阪さん自身も見てみたいとは思いませんか？

高阪 でも、余裕のない自分なんて、練習中にイヤっていうほど見てるからね。練習なんていうのは、自分を極限まで追い込んでやるもんやから。試合で負けて泣いたり後悔したりするんやったら、泣くくらい練習しろっていう話やんか。それくらい練習したら、試合なんか楽しくてしょうがないはずや。なんでかって言うたら、例えば1日練習するっていうたら、5時間も6時間もするわけやん。試合なんていくらやっても30分やん。試合なんか練習の何分の1ですむわけよ。時間だけを考えたらね。だから、逆に考えたら試合で余裕がない奴はそれだけの練習しかしてないっちゅうことやもん。

—それは説得力のある話ですね。高阪さんは試合で泣いたことありますか？

高阪 あるねえ。何回もあるねえ。

—高阪さんって人前で泣かん人やと思ってたけど。

高阪 俺、メチャメチャ涙もろいっちゅうねん！

—ウソやん！（笑）。

高阪 『北の国から』観たら必ず泣くし。（柔道の合宿で）『北の国から』観ながらガンガン泣いてたら、後ろから後輩が買い出しを聞きに来よんねん。「高阪さん、今日のカレーは何にすればよろし……」って言うて止まっとんねん。

—固まったんやな（笑）。

高阪 俺も（涙を拭きながら）「なに〜？」ってなってるし（笑）。

—ワ〜ハッハッハ！（爆笑）。

高阪 カッコ悪かったで。

—それはカッコ悪いなあ（笑）。そうかあ、高阪さんは泣くかあ。

高阪 この前の田村さんの試合もちょっと悔しくて涙流れたね。いや、悔しいっていうか、カッコ悪いと思ったな。

—カッコ悪い？ なんで？

高阪 うーん、なんでやろう……。控室帰って治療してもらって、しばらくしてからワッときたな。

—俺、高阪さんが試合をコントロールできないのを初めて見たもんなあ。

高阪 ああ、それはある。

—ねえ。あんなの初めて見たから。

高阪 「いつもの俺と違う！」っていうのがあとあとわかったから。だから、

いつもの俺はカッコええと思ってるから。やっぱり思い込みは大切でしょう。

――大切でしょう（笑）。田村戦と言えば、試合後、田村さんが「このままではリングスはダメになる」って言ってましたけど。どうですか？　田村さんが言わんとすることというか、田村さんが危機感を抱いてるところはわかりますか？

髙阪　よくはわからん。よくはわからんけども、田村さんがそう思ってるんやったらそういう部分もあるんやろうなとは思う。でも……、リングスはダメにはならないと俺は思うよ。だって、俺もいるし、田村さんもいるし、山本さんも、成瀬さんも、長井さんも坂田さんも、みんなおるし。前田さんも現役で頑張ってるし。まあ、引退するとは言ってはるけど、でも、まだあの人にはリングに上がろうっていう気持ちがあるからね。だから、前田さんも含めて全員前に出る気持ちを持ってるからね。だからダメにはならんと思うで。

――なるほどね。しかし、前田対髙阪戦は僕も凄く楽しみですよ。

髙阪　俺、リングスで一番強いと思ってるからね（笑）。田村さんに負けたっていうてもいまだに俺の方が強いと思い込んでるからね（笑）。

――まあ、そうやって言い聞かせてるんでしょうけどね。

髙阪　当たり前や！（笑）。

――ただ、これだけ練習を重ねて鍛錬してると、思い込んでる部分がだんだんいい意味で本気の自惚れに変わってくるでしょう。

「落とし前」と「世界征服」'97



髙阪　それはある！　あのねえ、練習っていうのは自己満足の世界やねん。マスターベーションやねん。自分でドンドン追い込んでいくと、自分が強くなるって勘違いできるねん。それは凄い大切なことやと思うなあ。それがでけへん人間はいつまでも強くなられへんよ。俺はそれができる人間やと思い込んでるけどね。もちろん、まだまだ上があるけど、現時点では追い込んでるし、それだけ自惚れられるような練習をやってるつもりやしね。

――ああ、いいですねえ。さあ、もうそろそろお時間ですし、シメてもらいましょうか（笑）。

髙阪　今日はいっぱい話したねえ。

――ねえ。面白かったです。

髙阪　釣りの話をもっとしたかったんやけどなあ。

――それはまた今度してくださいね。では、師匠に向かってメッセージをお願いしますってメチャメチャなシメやな（笑）。

髙阪　ええ……、前田さん、いままでの感謝の気持ちを込めて叩き潰しに行きます。

――カッコええなあ！（笑）。対前田戦、楽しみにしてますのでがんばってください。今日は本当にありがとうございました。

髙阪　またよろしくお願いします。

【5月17日　中目黒の居酒屋「炎風」にて収録】

※前田日明ＶＳ髙阪剛、8月13日鹿児島アリーナで遂に実現！！
問い合わせはリングス（03-3461-0257）まで！

新連載

プロレスマスコミ観察雑記



文／吉田豪
え／マツくん

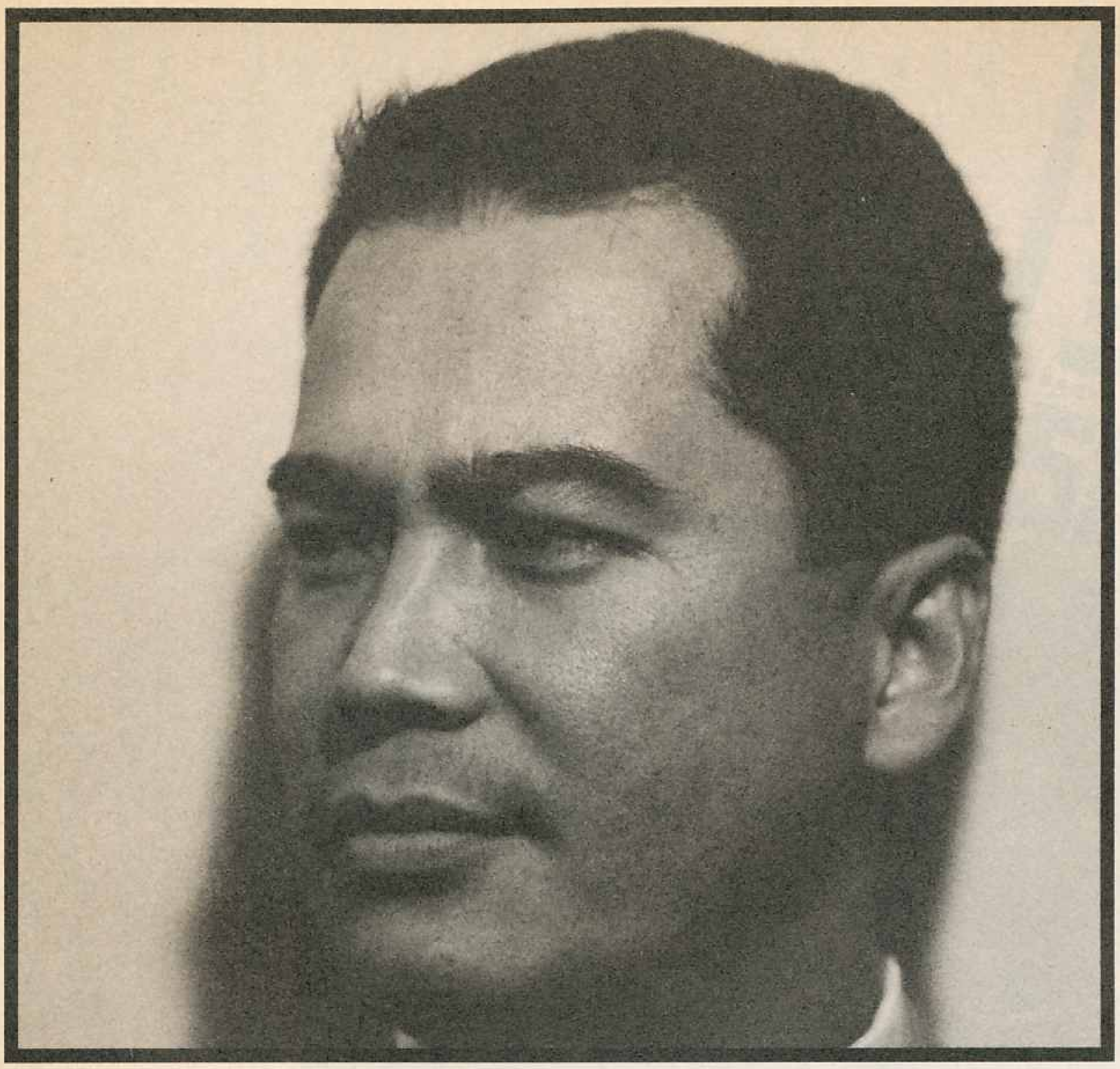
これはスポーツ新聞、
プロレス専門誌、
一般雑誌、パソコン通信
などに掲載された
プロレス絡みの
ネタの数々を
客観的に観察した、
愛と正義の
雑記帳である！

なお、苦情や脅し文句は
全て本誌編集長・山口昇
宛にでもどうぞ

いつもの俺
ら。やっぱ
—大切で
えば、試合
ではリング
てましたけ
んが言わん
さんが危機
りますか？
高阪　よく
んけども、
やったらそ
なとは思う
メにはなら
俺もいるし
さんも、成
さんも、み
役で頑張っ
は言っては
にはリング
があるから
めて全員前
らね。だか
—なるほ
戦は僕も凄
高阪　俺、
てるから
っていうて
思い込んで
—まあ、
んでしょう
高阪　当た
—ただ、
してると、
んいい意味
くるでしょ

暴走する鈴木健に、全盛期のUインターを見た！

（『プロレス・フォーラム』ニフティ・サーブより）



ニフティ・サーブ（プロレスマスコミで言うところのいわゆる「パソコン通信」）のプロレスフォーラム（いわゆるFBATL）で一時期設けられていたキングダム旗揚げ特設会議室を、キミはご存じだろうか？

不思議とパソ通の常連には評判悪かった様子ではあるが、これがまたボク的には抜群に面白かったのだ。

なにしろスタート当初は「です・ます」調でビジネスライクに発言していた鈴木健がだんだん暴走し始め、最終的にはすっかりUインター全盛期を思わせる行け行けドンドン状態になってしまったから、もう大変なのである。たとえばこうだ。

「リングスとの対抗戦は可能性あるよ。前田日明が最近長州力と雑誌なんかで対談しているんで、新日対リングスもありうるかもね。でもそしたら前田は二枚舌になっちゃうよね」

なっちゃうよねって、そういうキミの発言が可能性を減らしているような気が……。

「エンセン選手との交流は、うちがグレードが高いことを知っているので道場によく来てるよ。修斗との交流戦？　それはヒミツ。当日のお楽しみ！」

ウチがグレード高いから練習に来るとか傲慢なことばかり言ってたら、確実に交流戦どころじゃなくなるとも思うのだが……。

「W・1構想（ゴング誌上で発表された若手交流戦）も、結構苦労してます。実現させたいのですが、他の団体嫌がってまして、これも公表しちゃおうかな？」

これもって、もしかしてまだ懲りてないのか？

とにかく、こんなパソコンのモニター上にも一億円並べかねないほどの怒涛の勢いで吐きまくる鈴木健の暴言の数々も、世間的に評判の悪かったUインター全盛期（宮戸時代）をこよなく愛するボク的には非常にたまらないものがありまくるのだ。

「ひとつお願いです。ぜひおもしろいペンネーム（ハンドルっていうの？）を使って下さい。僕はいつも友達をあだ名で呼んでいるから、おもしろい名前の方が覚えやすいんだよね。おもしろいの期待しているよ」

何を言ってるんだとツッコミたくもなる、こんな発言もまた実に良し。

今後も鈴木健が強気で呑気な発言をこの調子で繰り返し、ついでに友達をあだ名で呼び続ける限り、ボクは断固としてキングダムを支持し続けるのである！　どうですか！

プロレスマスコミ観察雑記

前田・長州対談を読む

（『週刊プレイボーイ』5／6、13合併号・担当／佐々木徹）

「長州は言うだけ番長や！」

「前田は小ずるい奴。相手ができないのをわかっていて、やろうとする！」

そんなことを言い合っていた10年前を思えば奇跡のようなマッチメイクによってプロレス界をすっかり震撼させた、この対談。

と言っても「実はな、俺たちが中心となって（××××）をやってみたいんだ」という長州発言ばかりが騒がれているようだが、問題はそこではない。

ズバリここにあるんですよ、お客さん！

「アキラの頑張りのおかげで俺たちも変わっていけたんだ。いや、本当だって。アキラたちのUがいろんな話題を提供してくれたから、俺たちの世界も自然と変わっていったんだよ」

……本誌の熱心な読者なら、この発言に隠された巨大な疑問点に気付くことだろう。

さすがのアキラ兄さんも「長州さんがいちばんUを嫌ってたんじゃないですか（笑）」とツッコんだのだが、それも当然。

以前、似たようなことを言ったターザンに「何をいってんだよ～、お前！　そんなことあるわけねえじゃねえか！　それは感性が違うよオレとは。とんでもない話だ！　オレたちが頑張ってるからアイツら、枝の先っぽの雫みたいに落ちなくてすんだんだよ！」と言い返していたのは、紛れもなく長州力自身なのだから。

まあ人間、だんだん考え方が変わっていくのはしょうがないことなのかもしれない。

「俺も変わったよ。やっぱり、嫁さんをもらって子供が生まれたら男は変わっちまうよ。でも家庭を持つことはいいことだぞ。今度、いい娘を紹介するよ」

笑顔でそう語る長州。

だがボクは何年経とうとも相変わらず「（UWFが出来た時）猪木さんは逃げた」だのと15年前のことを根に持ち続けるアキラ兄さんの大人げなさの方が、大好きなのである。

「人間っていうのは長く生きてると浮世の垢が付くからさ。その中で変わらないでいられるっていう人間は、やっぱりよっぽどバカか、よっぽど素晴らしい自分を持ってるんだろうよ。男の座標軸みたいなものをさ」（真樹日佐夫先生・談）



いつもの俺
ら。やっぱ
——大切で
えば、試合
ではリング
てましたけ
んが言わん
さんが危機
りますか？
高阪　よく
んけども、
やったらそ
なとは思う
メにはなら
俺もいるし
さんも、
役で頑張っ
は言っては
にはリング
があるから
めて全員
らね。だ
——なる
戦は僕も
高阪　俺、
てるから
っていう
思い込ん
——まあ、
んでしょう
高阪　当
——ただ、
してると、
んいい意
くるでし

変わらないアキラ

（週刊SPA5／21号・担当／李春成）



そういうわけで引き続き、アキラ兄さんの大人げないステキな発言を紹介してみよう。

ファイト（5／22号）紙上では「**高田がもしヒクソンに負けたら、オレがアダ討ちしますよ。でも高田だったら99%大丈夫。自分がセコンドについたら1000%勝てますよ**」と、安生が負けたときの態度からは想像もつかないようなことを豪語した1000%男のアキラ兄さん。相変わらずボクらに夢ばかり与えてくれる男である。

同時期、そんなアキラ兄さんはSPA誌上でも夢のある発言をブチかましてくれた。

「**あの人（佐山）はいちばん子供だった。純粋だけど無責任で、残酷で……。だから佐山さんには、やっぱり一度謝罪してもらわなあかんなと思いますね。それがイヤだって言うなら、殴るしかないよッ！**」

15年も前のUWF時代のことでいまだに謝罪しろだの殴るだのと大人げないことばかり言っているアキラ兄さん自身も、いつまでも変わらない男の座標軸を持った純粋な子供みたいな人なんですけどね、実際。

この遺恨を超えて子供みたいな2人が和解したら格闘技界もまた面白くなるはずなんだが、それは長州とターザン山本が電撃和解するぐらい不可能なことなのだろうか？　悲しい現実である。

そんなターザンについて、ターザン嫌いのアキラ兄さんは同じくSPA誌上でこう語っている。

「**週プロの山本編集長を業界で一致団結して降ろしたよね。だけど、その彼を踏み台にしてのし上がった人間もいっぱいいたわけじゃないですか。なのに世話になった人間がいまの彼に力を貸しているかというと、そんな話は聞いたこともない。オレ、そういうの嫌いですよ**」

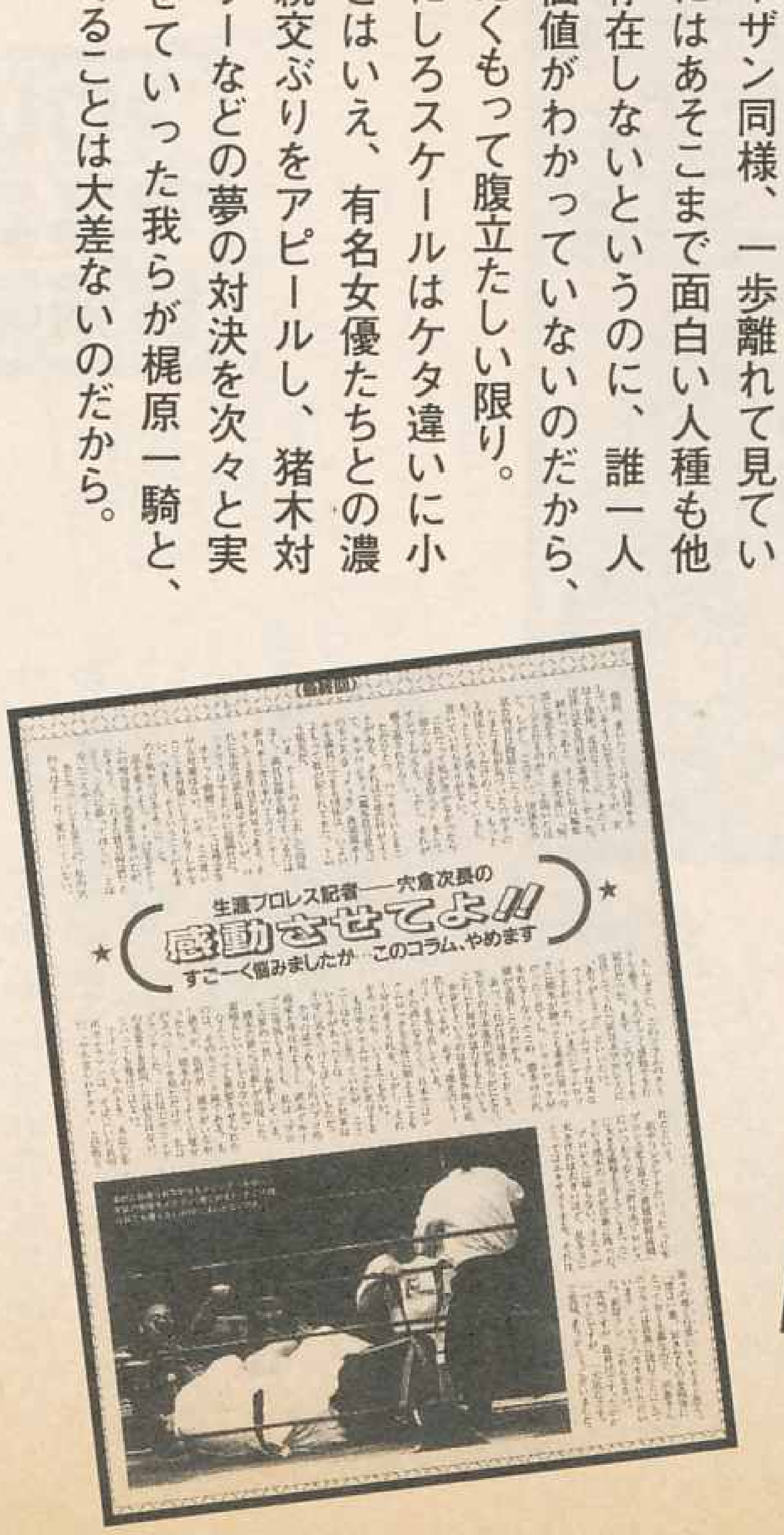
正論ではある。だが、このアキラ理論によると、すっかり落武者となったターザンと仕事したばかりに否応なく敵を増やしてしまった本誌なんて、ケタ違いに人間愛溢れる雑誌のはず。それなのに一部団体に嫌われまくってしまうのは、まったくもって不可解極まりないのである。

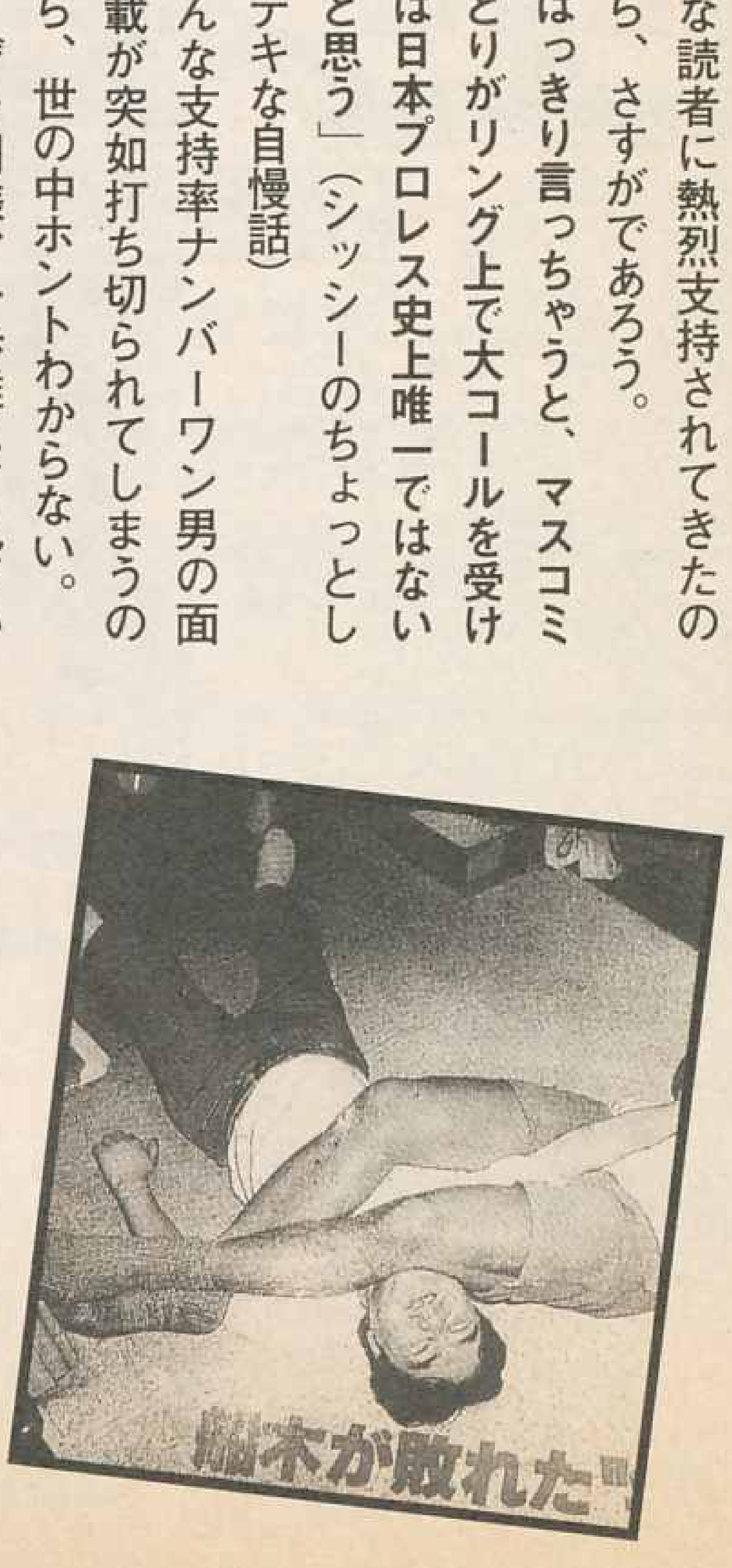
それでもウチが嫌われるっていうなら、殴られるしかないよッ！（誰に？）

プロレスマスコミ観察雑記

頑張れシッシー！「感動させてよ!!」最終回へのレクイエム

　ターザン追放後の週プロでただ一人、ターザンとは明らかに異質ながらも世間に毒素を撒き散らし続けた宍倉次長（通称シッシー）のコラム「感動させてよ!!」が諸事情により連載終了へと追い込まれてしまったことを、キミ達はいったいどう思っているのだろうか。
　確かに大々的に煽りまくった鈴木みのるインタビューを、話がヘヴィーすぎたため「ショックのあまり私は倒れそうになり」「途中から声も出なくなり」「話を受けとめるには、私の体調が悪すぎた」とばかりに勝手に掲載中止したりするのは、読者的には許せないことではあるだろう。
　「甘えないで下さい。貴方一人の体のせいで、どうして私達が嫌な中途半端なつまらない記事を読まなければならないのですか？　ファンをバカにしてます。体が悪いのならやめて下さい。かっこつけてんじゃねえヨ、バーカ」
　怒りのあまり、そんなFAXを送りつけた女子もいたようだが、キミたちの気持ちはわからないでもない。最初はボク内でも彼氏の芸風は非常に評判は悪かったのも事実だし。
　だが、一度このキャラクターを許すと全ての発言が突如としてどうにも魅力的に思えてくるから、ビックリなのである。
　「千種、北斗、神取。ここまで書くとピンときた方がいると思うが、私はこの三人と仲がいい。3人とも、私が入院し始めたころ、お見舞いに来てくれたのが何よりの証拠」だの「五紀クン（山崎＝現・永井）」だのと大物女子プロレスラーたちとの親密な付き合いぶりを公言せずにはいられない非常にフランクな姿勢。
　「これは初めて書くことなのだが、私のお目当ては半田美希さんだった」だの「いまだから書けることだが、私は『ヌード写真ならバイソンが一番、見たい！』と思っていた。とにかく、いいカラダをしている。いや、Hな意味だけではなく」だのと衝撃的にエロい告白をせずにはいられない非常にオープンマインドな姿勢。
　「病室に置いてあるのはすべて中村あゆみのCDだ。パンクラスの武道館で彼女の●●を流してもらえたら、もう大・大・大感激なのだが」だの「猪木対小鹿の初対決が見たかった」だの個人的な要望を叶えるべく妄想を活字化せずにはいられない非常に「一人夢の架け橋」な姿勢（実際、これでTAKAみちのくのパンクラス参戦が実現することになる）。
　ステキでしょ、これって。違う？
　「私の場合、ものすごく支持されるか、ものすごく嫌われるか、極端にわかれる」とわかっていながらも、「嫌われるのは覚悟の上」で毒素を撒き散らしてきた彼氏。
　それでも「バレンタインデーには読者から私あてにチョコレートの山が届き、総務部は大騒ぎ」となり、全日マットに上がればターザン山本とは正反対に大声援を受けたりと一部のコアな読者に熱烈支持されてきたのだから、さすがであろう。
　「はっきり言っちゃうと、マスコミのひとりがリング上で大コールを受けたのは日本プロレス史上唯一ではないか、と思う」（シッシーのちょっとしたステキな自慢話）
　そんな支持率ナンバーワン男の面白連載が突如打ち切られてしまうのだから、世の中ホントわからない。
　ターザン同様、一歩離れて見ている分にはあそこまで面白い人種も他には存在しないというのに、誰一人その価値がわかっていないのだから、まったくもって腹立たしい限り。
　なにしろスケールはケタ違いに小さいとはいえ、有名女優たちとの濃密な親交ぶりをアピールし、猪木対ウィリーなどの夢の対決を次々と実現させていった我らが梶原一騎と、やってることは大差ないのだから。


生還プロレス記者――宍倉次長の
感動させてよ!!
すご～く悩みましたが…このコラム、やめます



いつもの俺
ら。やっぱ
――大切で
えば、試合
ではリング
てましたけ
んが言わん
さんが危機
りますか？
高阪　よく
んけども、
やったらそ
なとは思う
メにはなら
俺もいるし
さんも、ば
さんも、み
役で頑張っ
は言っては
にはリング
があるから
めて全員前
らね。だか
――なるほ
戦は僕も凄
高阪　俺、
てるから、
っていうて
思い込んで
――まあ、
んでしょう
高阪　当た
――ただ、
してると、
んいい意味
くるでしょ

その後の「八百長論議と闘え！」

（『プロレス観戦ネットワーク・バーサス』創刊準備号より）



突然ですがボクチン、ちょっぴりウンザリしちゃいました。いや、ホント。

業界関係者なんかには評判が良かったらしい前号の巻頭記事「八百長論議と闘え！」も、読者的には極めて賛否両論。

それ自体は別にどうでもいいのだが、「つまらなかった」理由として**「プロレスは八百長じゃないんだから、ちゃんとそう書いてくれないと困る！」**だの、**「八百長だけど面白いからいい、とキッチリ明言して欲しい！」**だの、**「佐山聡は『フルコンタクトKARATE』でプロレスは八百長だとズバリ言ってたじゃない！」**だのと無理難題を押しつけてくるのだから、非常に困りものなのである。

そもそもプロレス雑誌では「八百長論」を扱うどころか「八百長」という言葉を活字化することですらタブーになっているような状況下で、他人の発言を引用するという姑息な逃げ道を使うことによって八百長問題に深く切り込んだというのに、まだ不満があるというのだろうか。

読者はボクに八百長だと言って欲しいのか、欲しくないのか。これにはジョージ高野ではないが、思わず「……ボクどうしたらいいの？」とボヤきたくなる始末である。

長州の爆弾発言？

（週刊ゴング5／29号・担当／金沢克彦）

プロレスマスコミ観察雑記

引退騒動などで近頃噂の長州力。だが、東スポの広告で「**長州の笑顔はゴングでしか見られない！**」とまで銘打った週刊ゴングでの長州ロングインタビューよりも、東スポでの「**長州引退。健介が2代目長州力襲名**」スクープよりもボク的には非常に気になった長州発言がある。

それは何か？　ゴングでのロングインタビューにおける「**素晴らしいものの持ってんだよ、小島も中西も。もうダントツで光ってるしね**」発言のことだろうか？



それとも山本小鉄プロデュースによる新日創立25周年記念ファン感謝デーのステージ上で、我らが安田忠夫のことをヤスと呼び、武藤のことを敬司とフランクに呼んでいたことだろうか？

その答えはズバリ、そのファン感謝デーにおける「**期待してんだ、俺は。すごく。あいつ（西村）、ウチでいちばんマスクはいいし**」なる衝撃発言なのである。いちばんじゃないだろ、どう考えても。

そんな折、『プロレス観戦ネットワーク・バーサス』なるミニコミの創刊準備号でも、これまた勘違いも甚だしいと思われる文章でボクの記事が紹介されていたので、怒りを込めて引用してみよう。

「コラムではレスラーや関係者が八百長を否定した発言・行動を取り上げている。同時に、レスラーや関係者が八百長を肯定してしまった発言を糾弾してもいる（ただし、論破しているわけではない）」

「つまるところ（？）、八百長論議と闘えとは言いながら何度も肯定論による自滅を繰り返し、結論として『レスラーが八百長と言わない限り、八百長じゃないんですよ！』というターザン山本の言葉を持ってきている。そんな不可思議な構成なのである」（カッコ内も原文ママ）

なぜにこのボクがレスラーという当事者の語る八百長論を論破しなければならないのか。

そして、なぜにこのボクのプロフェッショナルな原稿が「自滅を繰り返す不可解な構成」だのと素人に言われなければならないのか。

謎は深まるばかりなのである。

この作者は「世間に八百長だと言わせないためには、長州対橋本戦みたいな試合をどんどん見せていくしかない」だのと主張しているが、はたして本当にそうなのか。

ボクが言いたいのは、単純に「プロレスが八百長かどうかなんて非常にどうでもいい。だが、素人にナメたことを言われたら、レスラーたるものキッチリ闘わなければならねえんです！」ということだけである。

つまり試合自体より、むしろ普段の姿勢が重要なのだ、と。

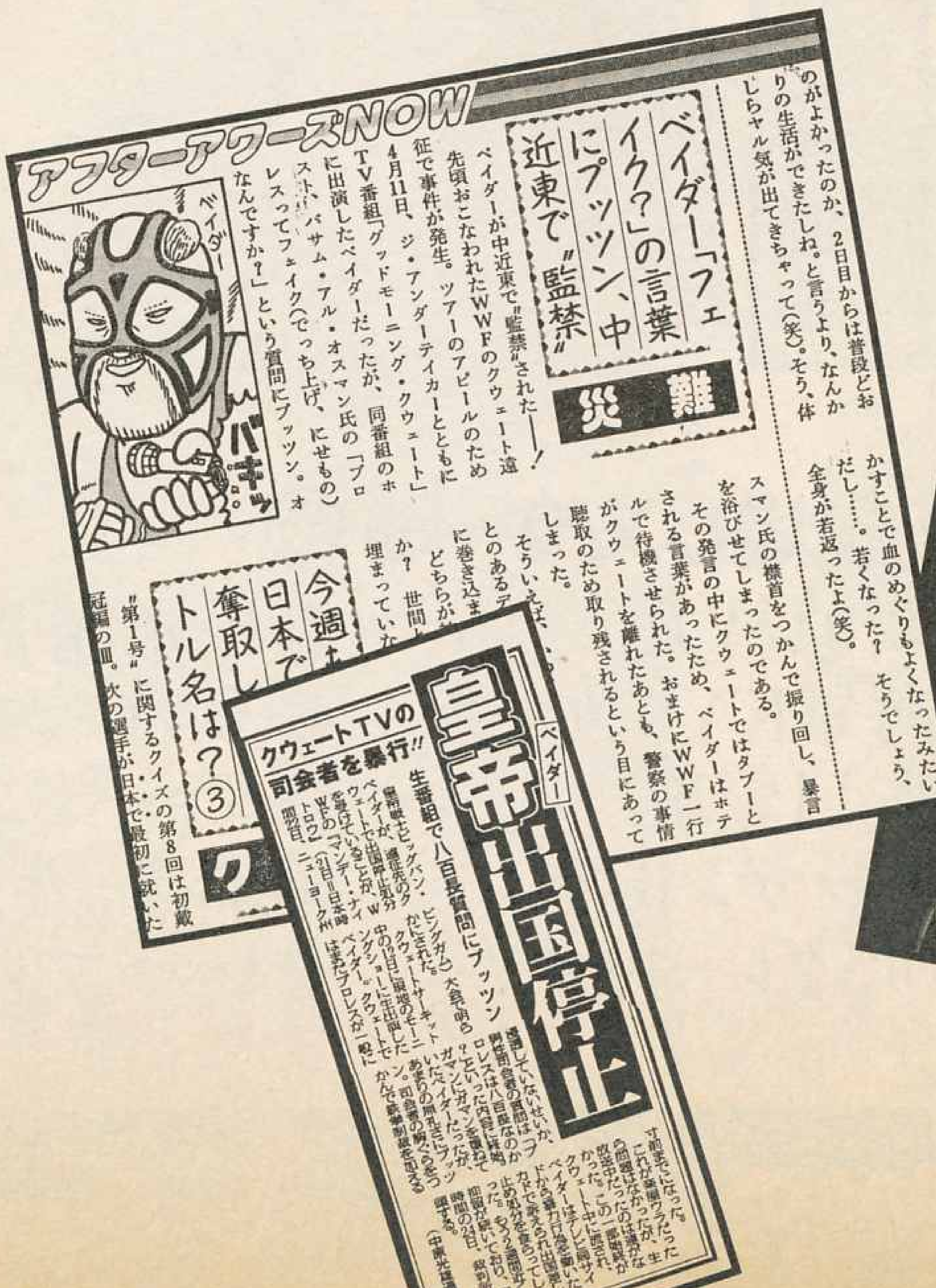
要するにこういうことだ。

「クウェート・サーキット中の12日に現地のモーニングショーにナマ出演したベイダー。クウェートではまだプロレスが一般に浸透していないせいか、男性司会者の質問は『プロレスは八百長なのか？』という質問に終始。ガマンにガマンを重ねていたベイダーだったが、あまりの無礼さにプッツン。司会者の胸ぐらをつかんで鉄拳制裁を加える寸前にまでなった。ベイダーはテレビ局サイドから暴力行為を働いたカドで訴えられ、出国差し止め処分を食らってしまった」（4月24日・東京スポーツより）

どうですか、バーサスの人!! プロレスラーたるもの、やはりこうでなければならないのだ。暴力賛成！

ちなみにこの事件。『週プロ』では完全に無視され（一ヶ月ほどしてようやく「フェイク発言に激怒」とコラムで紹介）、『週ゴン』では「インタビュアーの暴言に腹を立ててか大暴れ。その場で警察に逮捕された」と、当然のように「八百長」という言葉も使わない10行程度の記事になっていただけであった。

ボクが思うに、どう考えてもそっちの方が不可思議な構成であろう。違うか？





【おわび】 前号の「八百長論議と闘え！」においてターザン山本を「プロレス界の嫌われ者」と表現したところ、本人直々に「失礼ですよ！ ボクは嫌われ者じゃなくて、プロレス界の切れ者です！」とすっかり炎上しながら山口昇に電話してきたそうなので、ここに「本当は自称・プロレス界の切れ者だった」と訂正させていただきます。御了承下さい。
【おわび・その2】 そういえば以前、『紙プロ』本誌の『プロレス用語大辞林』で決起軍（高野俊二（当時）、仲野信市らが所属）が馬場さんに「全然、決起しないので解散させました」と言われたことをネタにしたら、高野拳磁直々に「俺は決起したんだよ！ 決起しなかったのは三沢！」などと電話してきたことを突然思い出したので、それもついでに訂正しておきます。今後も本人直々の苦情に限り喜んで【おわび】を出す用意があるので、どしどしどうぞ。

いつもの俺
ら。やっぱ
—大切で
えば、試合
ではリング
てましたけ
んが言わん
さんが危機
りますか？
高阪　よく
んけども、
やったらそ
なとは思う
メにはなら
俺もいるし
さんも、求
さんも、み
役で頑張っ
は言っては
にはリング
があるから
めて全員
らね。だか
—なるほ
戦は僕も凄
高阪　俺、
てるから
っていうて
思い込んで
—まあ、
んでしょう
高阪　当た
—ただ、
してると、
んいい意
くるでし



ライガーに「新弟子以下!!」と言われた男
茂木正淑（34歳）

会う人会う人に「新弟子以下!!」と言われる男
中村カタブツ君（34歳）

新弟子以下同士の
ドリームマッチ
遂に実現!!

VS

どっちが新弟子以下か!?
プロレス業界いち、
小さ～い遺恨マッチ

もてぴょん VS カタブツ君の
ノーピープル 髪切り CUT!! CUT!! CUT!! セメントマッチ

撮影／ハマコー

ここからはプロレスマンガとしてお読み下さい…。

プロレスをナメきったカタブツ君にもてぴょんが鉄拳制裁

前号、ド田舎のイカレ社長、サスケ氏との対談&読者ページ『カタブツランド』で、ダメ男ぶりがようやく世間に認知され始めてきた中村カタブツ君(34歳)。しかし「あんな奴はクビにしろ!」「誌面に出るな、不快だ!」という的を得た意見の中に、ごくごく少数ではあるが「負けるなカタブツ!」といった、くされカタブツ派の意見があったのには、さらにド・ド・ドびっくり。オーマイガッ、こんなプロレスをナメきった男に同情なんかするな! 「プロレスよりも空手の方が強い!」「もてぴょんよりも俺の方が強い!」と常に豪語している大馬鹿者のド阿呆なのだ! こんなバカちんを野放しにしてていいのか? よくねえだろ、なぁ、もてぴょん。

1997年5月22日

新弟子以下のドリームマッチ ノーピープル

髪切りセメントマッチ

場所:熊谷レッスル夢ファクトリー道場 またの名を夢工場







迷い犬だったところを夢工場で拾われた不幸な犬、源一郎。お察しの通り名前は天龍源一郎からとった。新弟子時代は、コイツも丸坊主にされていたらしい……。

ブツ「茂木さん! 今日は僕、道場破りに来ましたよ」**茂木**「道場破りィ! 何しに来たんだぁ、この野郎!」**ブツ**「あ、怖いぃ～」**茂木**「上等だよ、お前。やってやろうじゃないか! お前、なんてんだ、名前?」**ブツ**「カタブツと申します……」**茂木**「カタブツゥ お前が、あのカタブツかァ!」**ブツ**「いっ、いや、あれはホント言うと僕が書いたんじゃないんですぅ。ただ、僕も茂木さんと一緒にされたくないですよ!」**茂木**「オレもお前と一緒にされたくはないけどな! でも、サスケが俺とオマエは同等って言ってたそうだな」**ブツ**「ボ、ボクは茂木さんとは闘える、はっきり言って同等だと思ってますから!」**茂木**「カタブツ君がオ、オレと同等!?」**ブツ**「茂木さん、前号の『紙プロ』見て、俺に挑戦してきたんですよね?」**茂木**「ああ、そうだよ。でも挑戦じゃないよ。なんか「茂木に似てる」とか書いてあったから、カタブツ君の実物が見たかったんだよ(笑)。だから、うちの広報に電話してもらってね。う～ん、確かに似てるかもしれない(笑)」**ブツ**「(ムッ)とりあえず、挑戦された以上は白黒つけようじゃないかと思いまして」**茂木**「『紙プロ』では新弟子以下なんでしょ?(笑)」**ブツ**「ええ。だけど、『紙プロ』内では新弟子以下ですけど、他にいけばオレだって……」**茂木**「オレもライガーに新弟子以下って呼ばれたけど、インディーの中では新弟子以下じゃないからね。覚悟しとけよ、この野郎ォォォォ!」











気合満々のもてぴょん



自信喪失のカタブツ君

頼りないカタブツ君!! どうなる!? カタブツ君!!


新弟子以下対決は
いよいよゴング!!
カタブツキ〜ック!!
どれどれオマエの実力を見てやろうじゃねーか
ぼえ〜
とりゃ〜!!
ペチッ
ブルーなもてぴょんの心に火が付いた!!
ふざけんなカタブツ〜 プロレスをナメるなよ
もてぴょん復活!!
うりゃー
あれ〜?!
うりゃぁ うりゃあ うりゃあ〜
ちょっ、ちょっと待って〜


うわ～
あらよっと
14
ブレーンバスター!!
よいしょ
んふ～
15
ド素人、投げられる!!
16
超、危険!!
ド素人が真似すると、こういう目にあうので、よい子のみんなは注意しよう!!
オレに挑戦するなんざ10年早えんだよっ!!
ふんがー
17
ヒゲ伸ばすのも10年早えんだよ! 剃れ!! コノヤロ、剃れ!!
んあ～
ブチッ ブチッ
18
19
いた～い
折っちまうぞ! コラー
20
ギブアップか!?
ヤダ～(死にそう)
21
ギブアップか!?
ヤダ～(死んだ?)
いいかげんギブアップしろ～! コラッ!
あふ～ん♥(色っぽい声)
22
フィニッシュ～!!
んあ～
ロメロスペシャル!!
23





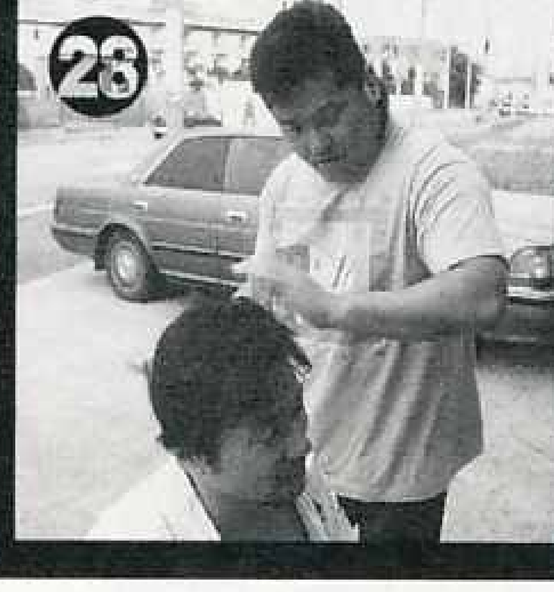
カタブツ プロレスの強さを思い知る!!

もののの見事にアッサリと負けてしまった中村カタブツ君（34歳）。**〈試合前の2人の会話〉茂木**「負けたらどうする?」**ブツ**「髪切りますよ」**茂木**「俺は今、大事なもの何賭けていいかわかんないから、何も賭けないよ」ブツ「多めにみましょう」**茂木**「多めに見ちゃうの?（笑）」**ブツ**「あ……。」

というわけで、めでたく坊主になることが決定したおバカさんなカタブツ君。そこでっ！　カタブツ、坊主記念特別プレゼント！　何と、この『もてぴょん（34歳）VSカタブツ君（34歳）ノーピープル髪切りセメントマッチ』のビデオを、奇特な読者3名にプレゼントしちゃうぞ！　しかも、カタブツ君の断髪式の他、『カタブツ・ダンシング』（紙プロ主催・しりとり大会でまた負けたための罰ゲーム。34歳にもなって、無邪気に踊るカタブツ君の恥ずかしい映像）もバッチリ収録。宛先は「カタブツビデオ係」まで!!（住所は読者プレゼントページ参照）







そして敗者、カタブツ君は…



ああ、見るも無惨なカタブツの姿……。カタブツよ、プロレスをナメるから、こういう目になるのだ、どうだ思い知ったか！

というわけで一戦を交えた二人はすっかり意気投合（ちなみにもてぴょんとカタブツ君は、同い年というだけでなく、トイレを流さないという所まで酷似していた……。天晴れ！　もてぴょん！）。この闘いを終え、前号のブルーもてぴょんから、すっかりハッピーもてぴょんに生まれ変わった茂木選手。ライガー選手と再戦も決まり、「これから心を入れ換えて頑張ります」と、ゴキゲンなコメントを残してくれた。

ちなみにライガーからNWAのベルトを取り戻したら、今度はカタブツ君とタイトルマッチをやると言う。どこまでも、バカ（笑）、されど、そんなもてぴょんは、ちょっと素敵♥　「歴代チャンピオン、ライガー、U・ドラゴンの名前に交じって、俺の名前が入るの？　うわぁ～、いいな、それ。俺、頑張ろう（笑）」カタブツ～、おまえ、懲りねーな！

プロレスこそが最強の格闘技!!
空手なんて弱い弱い!!
（By　中村カタブツ君（34歳））



34歳にして、
新弟子からやり直す男…
中村カタブツ君



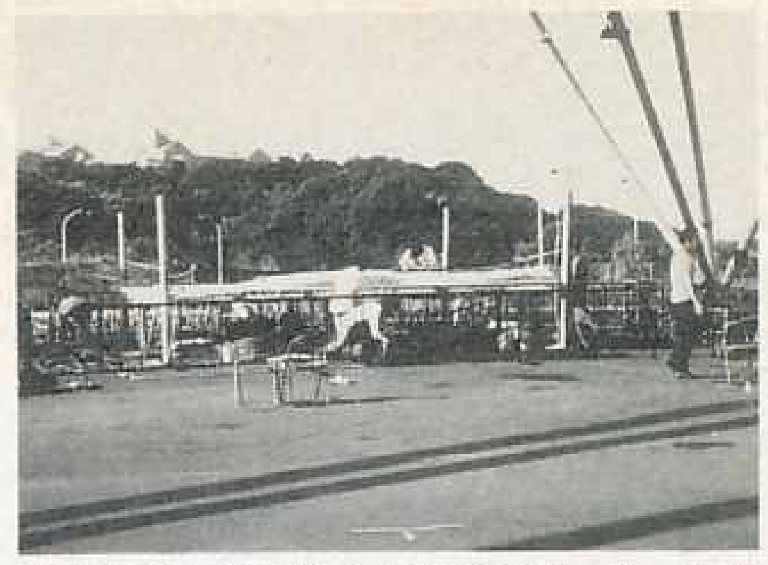
広田紗久良も売り子として売店に。後輩を引っ張る存在だ。



おかげでＴシャツが何回も飛ばされた。



会場は強い風がビュービュー吹いて、垂れ幕が大暴れ。



若手はリングを作るのも仕事のうち。ちなみに、この日のリング屋はお馴染みのパンチ軍団。



突如、バイクがリングサイドを回りだした。何かと思ったら後部座席には杉山社長が！　コワモテかと思いきや、オチャメな一面も。

こんな郊外の野外会場にもＪＷＰのボリショイ・キッドが宣伝に来た。この世の記念に一枚。





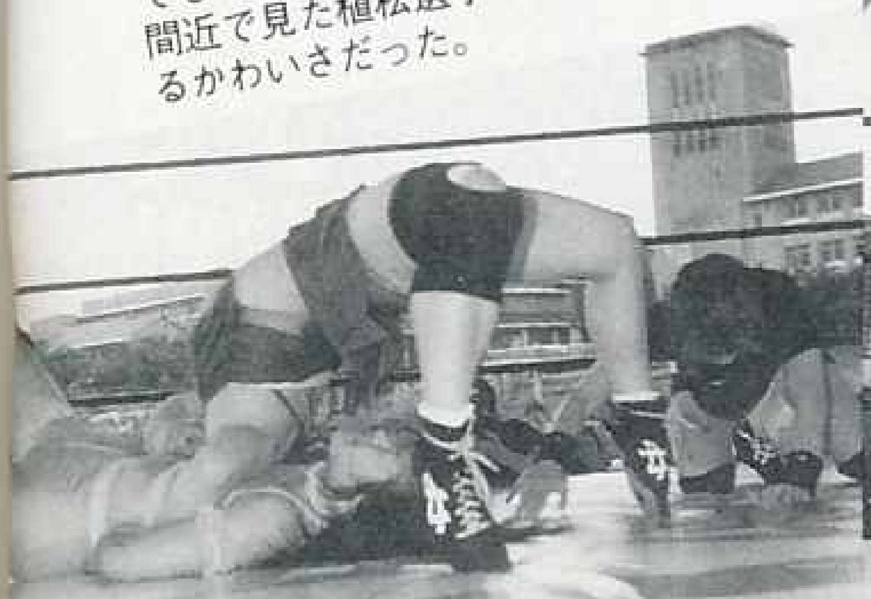
ボスの長与選手が「ちょっと、誰か！」と叫ぶと若手は全員返事する。チビたちは、遠くからでもダッシュで集合する。



今回は女子団体・ガイア・ジャパンの売店日記だ。そこにはバトラーツとは違った怪しさが存在していた。そして、この取材後に坂井結核がついに病死した！　死因はもちろん結核！　度重なる重労働でついに限界に達してしまったようだ。これが結核の最期のレポートとなってしまった。心から冥福を祈りたいと思う。合掌。



でも、最後は先輩の意地でフォール勝ち。間近で見た植松選手は思わず咳も止まるかわいさだった。





第三試合は植松ＶＳ石井。石井は、この日一番デカイ声を出していた。

青空をバックに女子が関節極め合う風景はかなりシュール。この日の観客に伝わってたのかな？





第一試合は里村ＶＳ沼尾、Ｕルールによる試合。ガイア・改というルールなんだそうだ。



売店の端っこで売っていたボクに「真ん中へどうぞ」と声を懸けてくれた中野だったが……。



第二試合は加藤（園）ＶＳ中野。これもガイア・改。この日は勝ったのは中野。

いい味出しまくりのシュガーが、杉山社長が、なぜかボリショイが、売店で炎上！

今回の命懸けの売店日記は「GAEA JAPAN」の登場である。前回のバトラーツで怪しい売店には、もうコリゴリなので、今回は癒しを求めて若手ばかりのGAEAに行くことにした。イメージ的にもきれいな感じがする。だんだん消えかけていく命の灯火を感じながら、未来の明るい若手選手たちに囲まれるのも悪くない。いや、むしろ囲まれたい！　売店潜入のプロ（編集者としてはド新人）として、試合以外でもチビたち（©長与千種）は驚異の新人なのかこの目で確かめてやろうと思ったからだ。

さて、取材当日のAM9：30に会場入りすると、既にリングは組まれていた。隅っこでは永島千佳世選手とシュガー佐藤選手が、すでに準備を始めている。「よろしくお願いします、今日はバイトみたいに使ってください」とあいさつをすると、2人も元気よくあいさつをしてくれた。が、それ以外は結構無口だ。2人をなんとか切り崩そうといろいろ質問をぶつけてみるのだが、なかなかスキは見せてくれない。さすがOzアカデミー、じつにクールな姿勢である。だが、佐藤の会話には不思議な間があって面白い。「今日の搬入はどうでした？」という質問に、「なんか、昨日、ここでパンクラスが試合したみたいで……」と真顔で答えてくれたのは、すごくよかった。

準備も終わり昼食を挟んで、い

結核、Ozアカデミー入り？



さっきはバイクにまたがってた杉山社長も売店に登場。

やがて入場式が始まり、売店には誰もいなくなる。





永島、佐藤両選手の他にも、中野知陽呂、沼尾マキエ、石井里奈、広田紗久良、加藤天美なども売店に登場。この2人からガイア流売店の極意を教わった。







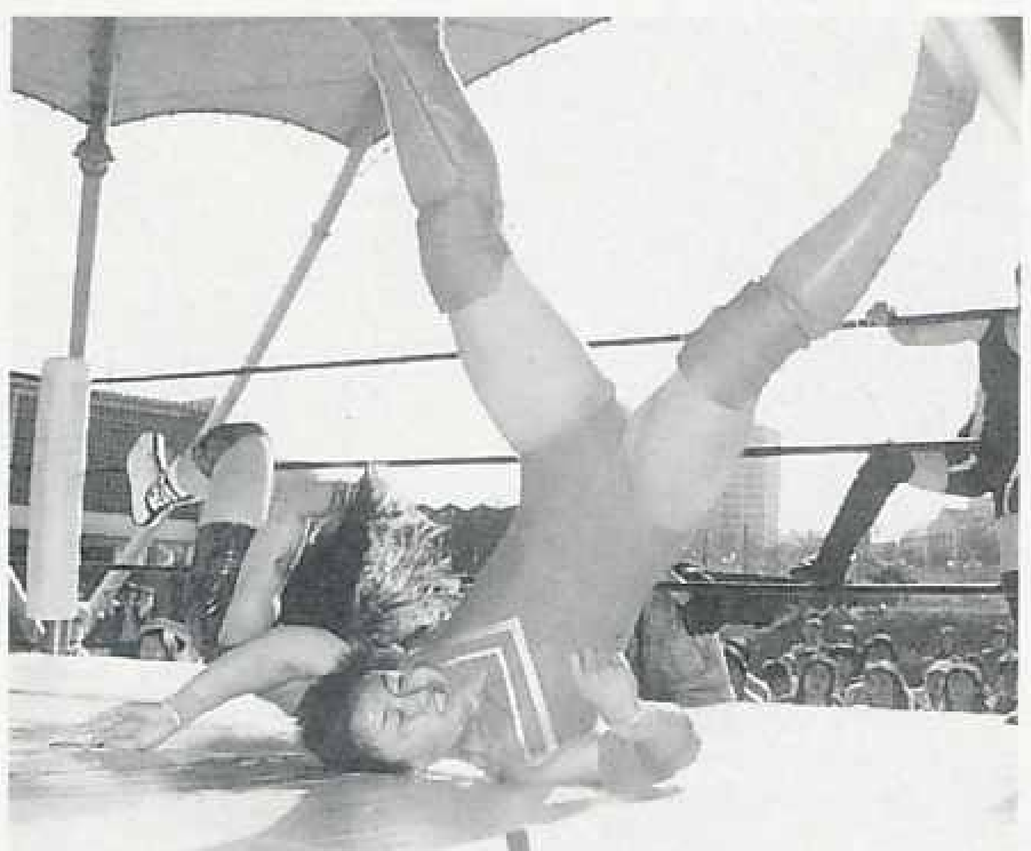
開場と同時に選手撮影会がリング上で行われたために、売店はがらがら。じじい&ばばあが見に来たりしていい感じ。しばらくするとマニアのファンが大殺到。

坂井結核が GAEA JAPAN 潜入に成功。チビたちは偉大だった…

この世で最期の売店日記

in 5.18 八王子マルチパーパスプラザ大会

こんなにやられても、若手は売店に立たねばならない！



先輩の厳しい攻めに耐えて、売店もキチンとこなす。ガイアの新人はタフだ。



セミ・ファイナルは北斗VS松本。北斗の潰しに耐えた松本。売店でハートを鍛えたに違いない。



第四試合は永島&佐藤VS広田&加藤(天)。どちらも連携が冴え渡った好勝負。



メインは長与&里村&加藤(園)VSKAORU&中野&沼尾の六人タッグ。



この日は売店に一回も出てこなかった北斗。サイン会をやれば、きっと売り上げも上がったにちがいない。



かなり大型の加藤(天)は売店でも一番目立っていた。売り子としてのセンスもギラリと光るモノを感じた。

よいよ開場である。すると早速、個性的なお客たちが入ってきた。昔からの長与ファンらしき女子たちや首からカメラをぶら下げた男子たちが中心であった。もちろんそれ以外もいるが……。

売店の選手にファンがプレゼントを渡すのはよく見る光景だが、ガイアのファンも例外ではない。特にこの日は、女の子2人組がボディーボードを担いでやってきて、いきなりそれを沼尾選手にプレゼントしたのだ。「ありがとう」と全く動じずに受け取る沼尾。「え、それプレゼントなんですか？」と驚くこちらを尻目に、「ええ」と浮ついた様子もなく、彼女は答えてくれた。ちなみに、こんな大きなプレゼントは稀だという。こういったプレゼントやファンレターをあげるファン、トミー蘭の追っかけファン、無言でバチバチ写真を撮りまくるファンなどファン的にはたまらない売店のようだ。ちょっと気を使って選手に一言「写真を撮らせてください」と声を掛けるファンもいた。しかし選手は「仕事中なんで……」と断ることしか許されていない。無言で撮るのはOKなのだそうだ。聞けば、仕事中はサインや記念写真の撮影ができないとか。こうした厳しい線引きはガイアならではといった感じである。

やはり、ガイアのチビたちは驚

GAEA JAPAN 興行日程 ●6.22 ツインメッセ静岡（14:00） ●6.29 長岡市厚生会館（14:00） ●7.2 大阪府立第二競技場（18:30） ●7.6 クラブチッタ川崎（14:00）



この会場でパンクラスの試合を見てみたい。ぜひ、その時は売店をやりたい。



試合後、撤収がかかってから。永島選手に垂れ幕の畳み方を伝授してもらった。

帰る間際のファンの方々。入れ込んだファンと、そうでないファンどちらの心も掴んでしまう団体である。



グッズが欲しけりゃ売店に来い！

おかたづけ百景



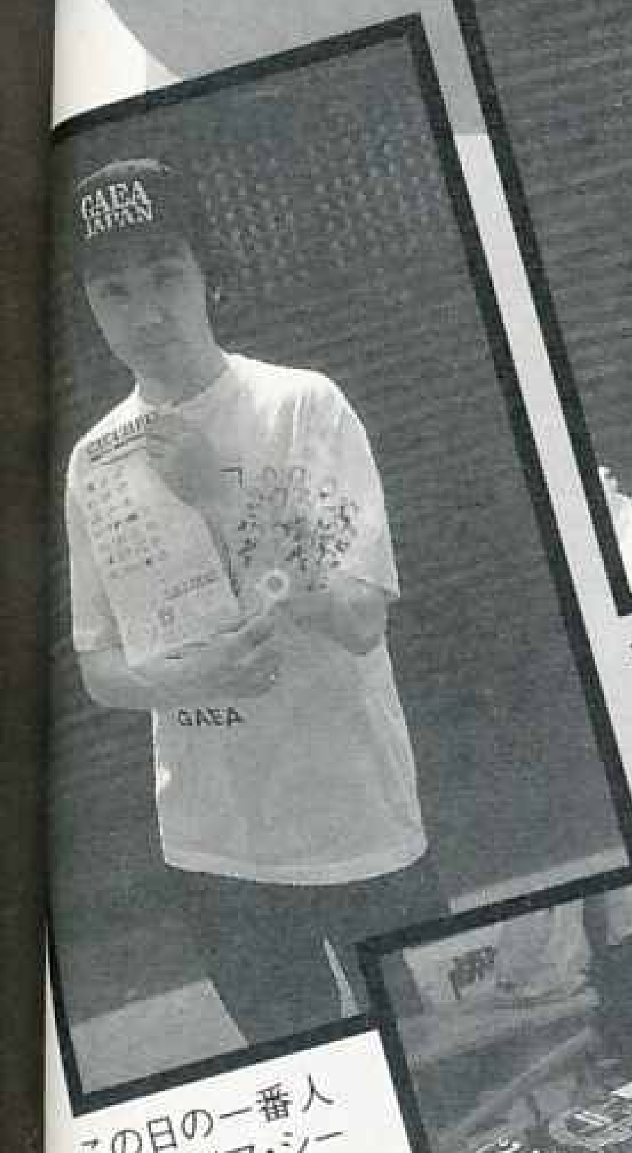
余命いくばくもないくせに若いつもりで働く結核。



この後、リングの撤収も手伝おうとしたら「あとは選手で出来ますから」と植松選手からやさしい一言をもらった。



ガイア旗揚げ時のパンフになぜか前田日明が表紙の『紙プロ』の広告が……。



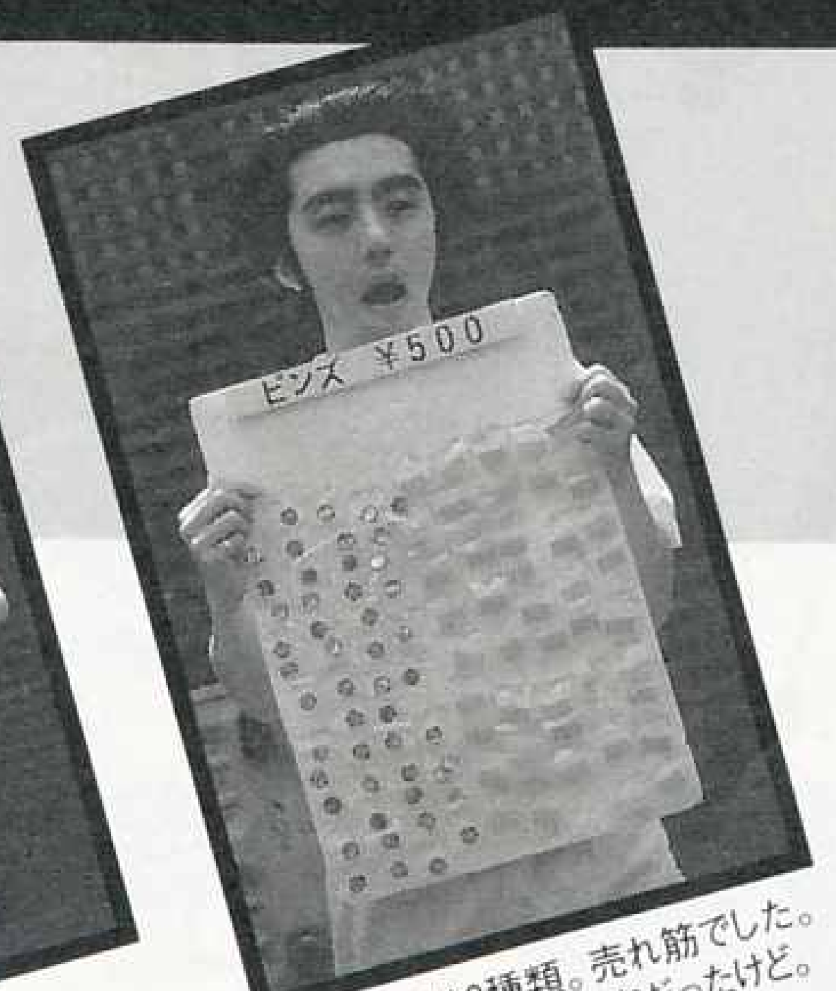
この日の一番人気がガイア・シール。メチャメチャ売れてきました。きっと子供がタンスにはったりするでしょう。



ビデオもいろいろありました。どこでもそんなには売れないのが悲しいさだめ。



夏はTシャツ！　という貴方に最適。2周年記念のTシャツも出た！

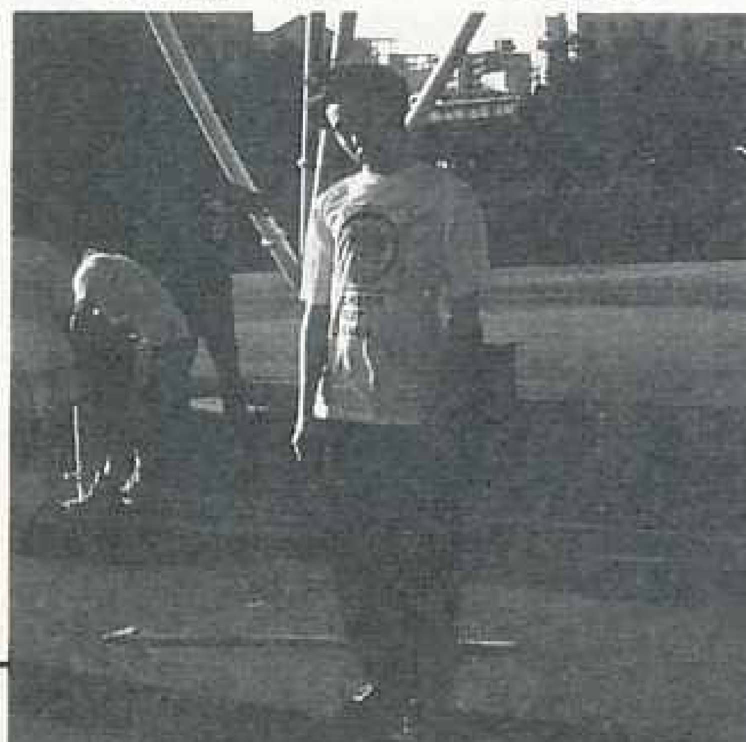


ピンバッチは2種類。売れ筋でした。ボードが風で倒れて大変だったけど。

異の新人たちだった。どんなファンに対しても、変わらぬ態度で接するチビたちに売店の面白さが見て取れた。バトラーツには売店自体の怪しさを求めるお客が集まっていたのに対し、ガイアの売店には若手選手たちとのふれあいを求めるお客が集まっていた。それでも選手はしっかりとした対応をしていて、それが非常にすがすがしく感じられた。チビたちにはグッズを売るだけが売店ではないことを気付かされてしまった。やはり売店は、その団体の持つ雰囲気を象徴する場でなくてはならない。そういう意味でガイアの売店は思いっきり団体の雰囲気を象徴している。写真の断り方一つにも『気持ちのいい若手の団体』というイメージが見て取れる。ファンが求めるイメージと団体が提供するイメージがガッチリ噛み合った、じつにいい売店であった。

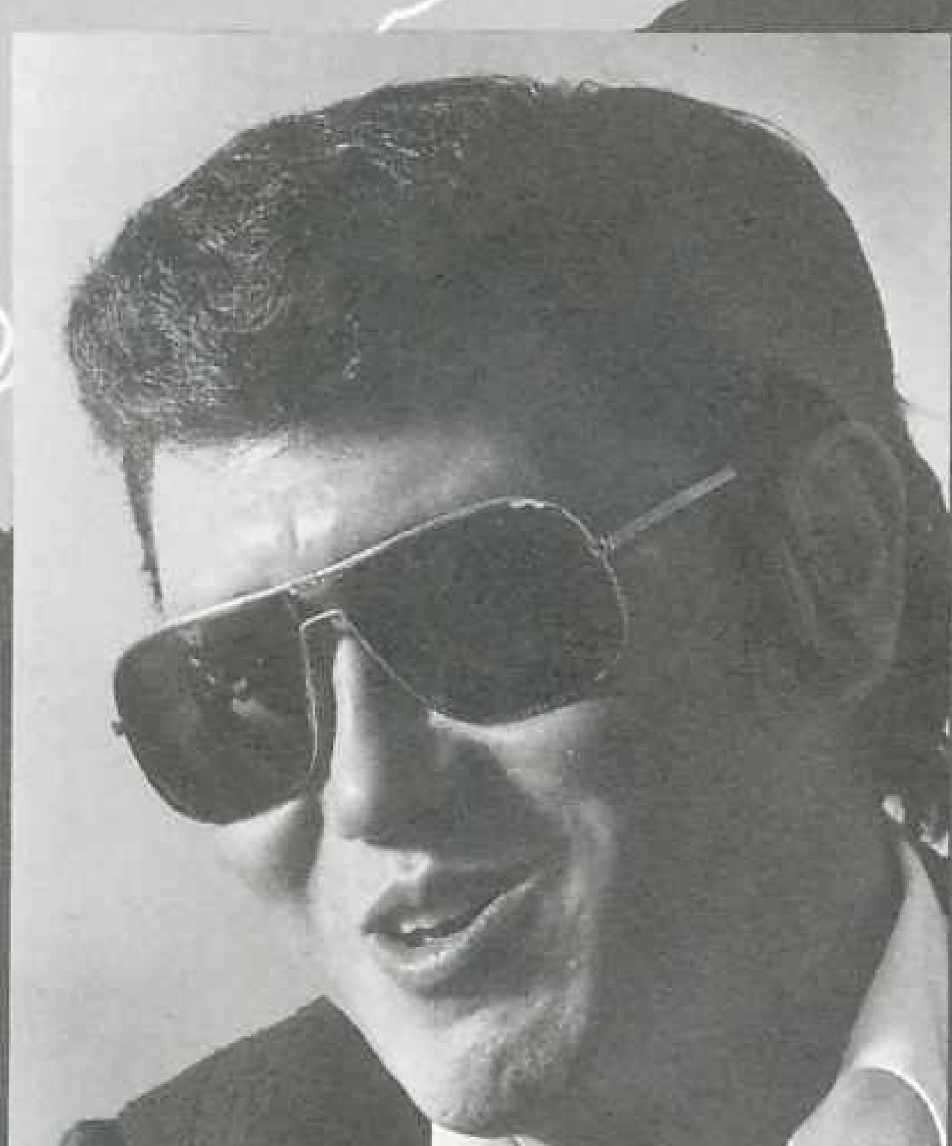
さて、そろそろお迎えが来たようだ。結核死すとも、売店は死なず！　是非、これからも各団体には素晴らしい売店を作っていってもらいたいも……（絶筆）。

これがこの世で最後の写真。無理して張り切ったのが寿命を縮める結果に……さらば結核。



無比人
Muhito

光が輝きを増す時、同時に闇も
その濃さを深める――
無比人の出現は混迷するマット
界に希望と新たな混乱を導く。
本格格闘プロレス小説第4幕!!



真樹日佐夫
コラージュ・
釜津田浩司

（10）

「ああん、ご慈悲を」真澄は身をくねらせ赦(ゆる)しを乞う

深みのあるブルーの照明が程良く減光された室内は、水のなかにいるかのような心地に皆をさせるのではないか。

絨毯もクッションも男も女も、なにもかも青一色に染め上げられたなかで、千堂は、傍らのテーブルに置いたブランデーグラスを取って口へ運ぶ。テーブルは絨毯に直(じか)に胡坐をかいて坐っていても、肘の位置が上にくるほどに低く、似た形状の物がゆったりした間隔でいくつか配され、そこに各種の飲み物が用意されている。

人や調度などはいいとしても琥珀の液体までブルーというのはちと興醒めだと、知らず知らず千堂は眉を寄せていた。

部屋は十五坪程度であろうか。置いてあるのはテーブルにキャビネットくらいでいずれもロータイプのせいか、ずっと広く感じられた。男女各七人、千堂を含めて十四人がいるはずで、大半はすでに脱いでしまい服のままなのは彼のほかに女性一人だけのようだが、窮屈というほどではない。

カップルがそれぞれに位置を占め、座したまま抱き合っている組。男が女を組み敷いているかと思えば、その逆とさまざまながら青の照明が薄いベールとなり、さほどあからさまな印象でないのは演出の妙というべきか。音量を抑えたBGMが流れ、喘ぎや睦言もそんなに耳障りではなかった。

千堂はグラスをテーブルへ戻し、薄明かりに改めて目を凝らす。二間(にけん)ほど先に真澄が一糸も纏わぬ身を横たえ、足許に蹲った男に片方の脚を高々と抱え上げられ股間への口による愛撫を受けており、仰向いた腰の下にはクッションが当てがわれて。

千堂から見れば頭が右で足が左、即ち真横で彼を向いたその顔は歓喜に打ち震えているようだが、一方ではまたどことなく後ろめたそうでもあった。

真澄と目が合った。遠慮がちな、それでいてなにか邪悪な企みへの期待に胸を躍らせるとでもいった危うげな眼差しが、乱交パーティーに同伴して欲しいと彼女が切り出したときのことを千堂に想起させた。元麻布のマンションの寝室のベッドでだったが、

――ねえ、あなた。

例によってソフトSMともいえるプレーの果てに何度目かの絶頂を迎え、斬り捨てられた者のごとく伸びていた真澄が、やおらシーツから頤(おとがい)を浮かすと上目を使い千堂をはすかいに見て言ったものだ。

――お願いがあるの。

――奴隷の分在で、ご主人さまにお願いだと？

プレーの延長のつもりでまるで無防備なお尻へ手をやり、こよなく柔らかな肉を鷲掴みにしてやると、

――ああん、ご慈悲を。

真澄は大仰に身をくねらせて赦(ゆる)しを乞い、その声の下から、

――乱交パーティーにこい、こいって誘われているの。カップルが条件だというし、一度エスコートしてもらえたらなあって。

――乱交？　どこのどいつだ、そんなところへ誘うのは。

尻たぶを掴んだ手に力を込めると、彼女は悲鳴を上げながらも、

【前号までのあらすじ】
深夜の道場マッチで無比人(むひと)はプロレスラー植野を叩きのめした。ディスコの用心棒・無比人は千堂の睨んだ通り、磨かれぬダイヤの原石だった。千堂とともにプロレス界に殴り込んだ無比人は破竹の連勝街道を走り始める。だが、彼は、千堂の思惑までをも無視し、突き進もうとする。そして、プロレス界の悪しき暗黙の了解を破り、団体のエースを一瞬にして倒してしまう――

――旧くからのお友達の芳賀絹子さん。やはりご主人と死別し、食品関係の事業を……。彼女が月に一度の割でパーティーを主催していて、それで。

――女事業家か。碌なのはおらんな、まったく。

――ああ、あ。お尻が千切れそう。堪忍してぇ。

――ご主人さまの見ている前でほかの男に抱かれ、よがりまくって後でこってりお仕置きをされたいと、そういうことか。

――あなた以外の男性に抱かれたいというんじゃなく、そこをあなたに見られる、さらにまたわたし以外の女性をあなたが抱くのを目の当たりにしながら我慢しなくてはならない。どっちも凄く辛いと思うけれど、でも反面、考えただけでも躰の芯まで痺れてしまいそうなほどに刺激的というか、なんというか……。

――そういうのを変態というんだ、この白豚が。

と口汚く決め付けながら、千堂は、マゾの素地を踏まえて真澄が次なるステップへの足掛かりを見出そうと苦慮しているのを感じないではおれなかった。同時にまた、彼女を性のさ迷い人とした責任の一半をも。

それが『四角いジャングル』社に氷見子の来訪を受ける半月ほど前であったか、その時点ではしかし千堂には真澄の頼みを諾くつもりはなく、いま一度プレーに彼女を引き込むことでその話を打ち切りにした。

ところが、それから二カ月としないうちに彼の方から言いだして、芳賀絹子主催の乱交パーティーへの参加を決めた。諦めていたらしい真澄は大変な喜びようで、そして六月初めのこの日、会場である中目黒のマンションへ彼女のポルシェで乗りつけたのだったが、それというのも無比人が取り決めを無視して〝メイストーム・第一陣〟で植野をフォールしてしまい、公表した手前、同・第二陣、第三陣と三日連続で残り二試合を戦わせたものの、まったくの不入りで大赤字。トータルでもなにやかやでざっと一千万の持ち出しとなり、六月末の決算を控え納税計画に大幅に狂いが生じたせいにほかならない。

千堂の目算としてはゴールデンウィークのその三連続興行で一日につき四百から六百、合わせて千五百の利益を見込んでいたのであるが、ほぼ目標に達したのは初日のみで、あとの二日はファイトマネー、会場使用料、印刷代、宣伝広告費などの経費がほとんど赤として計上されるていたらく。プラスマイナス二千五百のずれということになり、銀行にプールしてあったのは五千万ほどで、そこから東都プロレスへ五百。無比人の仕度金として八百。さらに氷見子にSMバーの開店資金三千万を用立てており、残り一千万弱に減じたところへ千五百の利益を加え、とりあえず当初の半分までは戻そうとしたのが、



悪しき暗黙の了解を無視し 無比人は植野に三連勝する

とんだ思惑はずれで綺麗さっぱり吐き出す羽目となった。

　納付せねばならぬ税額は一千万に少し欠ける程度だが、口座が空っぽというのでは社としても動きが取れぬ。運転資金のことなども考えるとなると、やはり少なくとも二千五百万は必要で、それには担保として押さえている店の権利書を使い損を覚悟で氷見子へ回した金を回収するのが手っ取り早いのはわかっていたが、なぜかふんぎりがつきかねた。結局、千堂は真澄を頼ることにして三千万の融資を申し入れ、心の負い目からそこで乱交パーティーの件にも自ら言及する仕儀となったのである。

　東都プロレスにスターは二人は要らぬ、と大見得を切った無比人はというと、リングを下りるとムヒトコールが沸騰するなかをさっさと退場。控室で彼を掴まえた千堂が、

——どういうことなんだ、おい。納得がいくように説明してみろ。

　声を荒げるのもどこ吹く風とばかりに、

——リングで言った通りさ。手の込んだ筋書きを拵えてまで、あんな奴を立ててとかなきゃならぬ必要はないって、急にそう思えちゃって。ほれ、言うじゃない。両雄並び立たず、だっけ。

　と肩を竦めてみせた。勝利の直後の傲岸不遜な物腰が嘘のように、茫洋として掴みどころがないいつもの無比人だった。

　もう少し威丈高になるかと踏んでいた千堂にすれば、はぐらかされたようでなんとも噛み合わず、またいつの間にか氷見子が同室しているのに気づいたこともあり、忿懣を抑えるよりなかった。

　第二、第三戦もセメントでいくことに予定変更し、いずれも無比人が圧勝したが、いきなり約束を反古にされて激昂する植野を宥めすかすのにひと苦労。にもかかわらず興行的には惨憺たる結果に終わったが、千堂にとり唯一の嬉しい誤算はこの後、大手を除くインディーズ諸団体から急に無比人への出場依頼がきだしたことか。植野との間が以前に増してしっくりいかなくなった東都プロレスにあって、一カ月足らずのうちに無比人は他団体のマットでもすでに五試合を消化し、名実ともに看板スターとなっていた——。

　真澄の口から声が漏れはじめた。

　マンション全館芳賀絹子の所有とのことで、この部屋はこうした遊びの場としてのみ使用されているのか。窓という窓には分厚い遮光カーテンが引き回してあり、昼日中だということも忘れるほどだ。千堂たちが着いたのが二時少し過ぎ、パーティーがはじまったのが二時半で小一時間経ったろうか。街はまだ眩い陽光のなかにあるはずであった。

　真澄の相手は四十年配の自営業風で、彼女がブランデーを立て続けに二杯呷り、緊張がほぐれるのを見計らったように誘いをかけてきた。クンニリグスを経て正常位で合体しており、腹を括って千堂が見入るうち、真澄の躰が裏返しにされた。

　顔がまたこっちを向いた。高波の襲来を予感するかのような淫らで弛緩した表情のなかで、目だけがいまにも泣きだしそうに不安げで千堂は胸を衝かれた。反射的に腰を浮かせかけると、横からスーツの女が低い姿勢のまま、すっと身を寄せてきて前を塞いだ。

「不粋な格好はわたくしたちだけですことよ、ねえ」

　芳賀絹子は、はちきれんばかりの胸許をやおらはだけつつ甘やかな声で囁いた。

（11）

　編集部の一隅を占める応接スペースのソファ・セットには、男が三人肩を並べて坐っていた。

　千堂が入って行くと、社長室寄りのデスクから徳永が起って小走りに近づいてきた。ほかに編集スタッフ数人の顔が見られた。

「申し訳ありません。携帯に一報入れたものかどうか迷ったんですが、なんせああして、もう二時間も頑張ってまして」

『四角いジャングル』編集人である徳永は、

真澄は千堂の目の前で見知らぬ男に抱かれる

真澄が登りつめた時暴力団の訪問を告げる電話が鳴る

前には女性誌の編集部にいただけに、総じて当たりが柔らかい。暴力団との折衝ということになると適役では、と感じたせいもあって千堂は同席するよう目顔で指示し、彼を従えた格好で応接スペースへと歩を進めた。

「お待たせしました。当社社長の千堂です」

傍らへ寄ると会釈した後、名刺入れを出し三枚抜き取った。一人として腰を浮かそうとしないまま、それぞれの前に名刺を置くと向かいのソファに腰を下ろした。

徳永は、命じたわけでもないのに控えの姿勢をとって立ったままだ。そんなところも、元女性誌編集者ならではの濃(こま)やかさといえようか。

「さっそくですが、ご用件をお聞かせいただけますか」

三人へ満遍なく視線を巡らしつつ、千堂は促した。乱交パーティーの場から呼び戻されたこともあり、多少気が立っていた。

芳賀絹子は真澄より二つ三つ上か、熟れた果実を思わす豊満な肉体と化粧映えのする目鼻立ちのはっきりした貌(かお)が見事にマッチしており、千堂の前でためらいもなく服を脱ぎだし、忽ち生まれたままの姿になった。しっとりしたなかにも火照りを感じさせる肌を押しつけられ、さすがに平静ではいられなくなって上着を取ろうとしたとき、ポケットの携帯電話のバイブ機能が作動したのである。

部屋を出て電話を繋ぐと徳永で、東都プロレスの件で蒲田の神州組と名乗る暴力団員三人が社長に会わせろと言ってきている、どうしたものかといったことを切迫した口調で告げた。一時間以内には戻れるとだけ答え、部屋へ入ると真澄が男の傍で半身を起こしたところであり、気怠(けだる)げなその動きようから上(のぼ)りつめたのがわかった。

手招いて、社に急用ができたので先に失礼すると言うと一緒に帰るとのことで、彼女に身繕いを急がせるうち、芳賀絹子が裸のまま千堂にしなだれかかり、

——タイプなのよう。ねえ、どうにかしてちょうだい。

——お騒がせして恐縮です。次の機会に、是非また。

と拝み倒して仕度を終えた真澄ともども、逃げるようにマンションを後にした。

千堂は一時に社の前でピックアップしてもらい、途中で昼食を摂ってから中目黒をめざしたのだが、帰りも送ると真澄は言って車を新橋へ向けた。



——馬鹿を見ちゃったわ。

走りだしてすぐに彼女が言った。

——なんのことかね。

——だって、あなた、肝腎なときに部屋にいないんですもの。

アクメに達する瞬間を見てもらえず、その分被虐の悦びが減殺された、それを言っているのかと千堂は察した。

——肝腎なとき、と言うからには満足することはしたわけだ。どうだい、初めて会ったばかりの男に抱かれた感想は。

と、あえて意地悪な質問をぶつけながら、この女の泣きそうな目を見て思わず起って行こうとしたあれはどういうことだったのかと、千堂はぼんやり考えていた。

——それがちっともよくなかったの。気がついたら終わりがきていたというか、即物的充足などと小説に出てきたりするのは、ああいう空疎な味わいを言うのよね、きっと。

——乱交パーティーの正体見たり、か。

茶化して言うと、途端に真澄はかぶりを振って、

——また連れて行ってもらいます。正体見たりどころか、まだ四分の一しか体験していないもの。

——四分の一？

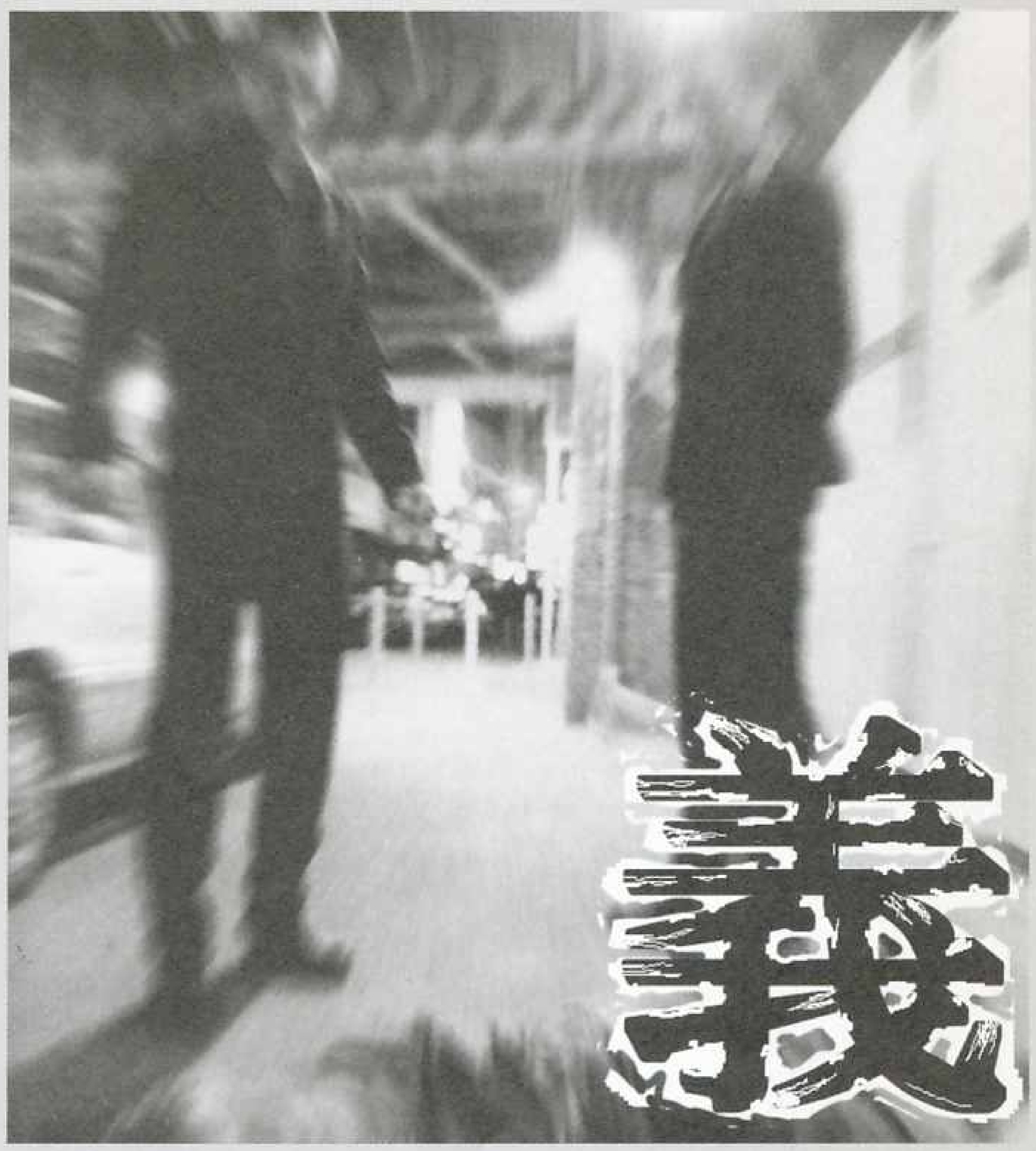
——そうでしょう。ほかの男に抱かれる、それをあなたに見られる、あなたがほかの女を抱く、それを見せられる。四つのうち、今日は最初の一つだけ。

——なるほど。

頷かされる一方で、千堂は芳賀絹子の肉置きの豊かな裸身を泛べ、組み敷くことを想像してみた。それこそ即物的充足だけならたやすく得られそうな気がした。

——あなたを視る絹子の目ときたら。

「組長の言付けを伝えに来た」男は静かに口を開いた——



と、ふと思い出したように真澄。

——わたしなど足許にも及ばない発展家なんだけれども、彼女があんなにあからさまな眼差しを男性へそそぐのを見たのは初めて。あなたに抱かれたら、どんなになるか……あ、考えただけでも息苦しくなっちゃう。

タイプだと別れしなに言われたことが千堂の脳裡をよぎりなんとなく落ち着かぬ気持ちでいると、

——あなたも彼女でよかったの？

唐突に真澄が訊いてきた。

——それはまあ。

——タイプなわけね、こっちも。

——聞こえていたのか。

——わたしと彼女を較べたら、どう？

——どうって。

——どちらがよりタイプかってこと。

——おいおい。そういうことを言いだしたらああいった遊びは成り立たないんじゃないか。抱くところを見せつけられてマゾの快感に浸りたい、ということのはずだったが。

——わかっているのよ、それは勿論。でも絹子のあなたへの反応があんまり露骨で、だからなんだか急に心配になってきちゃって。

女心の揺らぎ、というか思いがけない展開に千堂としても慌てないわけにいかず、そうこうするうち車は社へ着いたのであった。

真ん中に坐る一番年嵩らしい顴骨の突き出たのが、組んでいた腕をおもむろに解いて、

「神州組代貸の井出本だ。組長梶省三の言付けを伝えにきた」

言葉を切ると、心持ち顎を引き勿体らしい表情を見せた。その男だけが四十年配で、あとの二人は三十前後と思われた。少しの間を置いて、

「万無比人を連れて今夜七時、蒲田西口の組

事務所までくるようにとのことでな。時間厳守だぞ、厳守」

　無比人の名前が出て、千堂にはぴんとくるものがあった。電話で徳永に神州組と聞き、そういえば東都プロレスのバックには暴力団がいるとの噂だが、それがなんの用でと腑に落ちなかったが、無比人にトップの座を奪われたことを根に持った植野が泣きついた、となれば納得もいく。

「七時といいますと、あともう三時間ありませんし、もし万一連絡をつけるのが遅れました場合には、いかが致したらよろしいでしょうか」

　徳永が揉み手をせんばかりに遜って口を入れた。

　井出本はわざとのようにゆっくり見返り、

「編集長だったな。なあ編集長、俺たちの辞書にゃ、もしだの万一だのはねえのさ」

　言うと二人へ顎をしゃくって腰を上げた。

(12)

　壁の時計が十一時を指した。

　千堂は、見るともなしに時計を見て長大息し、テーブルにライターとともに置いた煙草の箱へ手を伸ばす。一本を抜き取ると、ここにきて封を切った二十本入りのロングピースが残り二本となった。

　ニコチンの力を借りて、ややもすると癇の虫が起きかかるのをなんとかまた抑え込みつつ、思いついて千堂は頚の運動をする。頚を回し、次いで肩も回す。隣に坐る二人が厭でも目に入ってしまう。

　無比人を中にして奥寄りに千堂、手前に氷見子が肩を並べているのであるが、二人ときたら時間のことも頭にないかのごとく、互いの躰を指で軽くタッチし合うかと思えば低く喉を鳴らして笑ったりと、まるで屈託がない。暴力団組事務所であることも忘れているとしか思えなかった。

　千堂の運転するワンボックス・カーで池上線蓮沼駅に程近い神州組の事務所へ着いた七時、空は暮れなずんで仄明るく、通りの店々のネオンなども薄ぼんやりして見えた。

　神州組は雑居ビルの一階ワンフロアを占め、土建業の看板を掲げていた。東都プロレスとはワンブロック隔たりがあり、千堂が二人を伴ってそこへ入り案内を乞うと、奥から井出本が現れて、

　――その女は。

と胡乱げに氷見子を視て言った。

　――彼のマネージャーでもあり、公私ともに一心同体だもんで社長さんに頼み込んで随いてきちゃったのー。

　氷見子が鼻にかかった声で応じ、井出本は口許を歪めながらも小さく頷くと、十人ばかりが屯するとっつきの大部屋を横切って隅のこの部屋へ三人を通した。

　古ぼけた応接セットが置かれただけの殺風景な部屋で、組長を呼んでくるから待つようにと井出本が告げて出て行って四時間。一度としてドアの開いた例しはなく、待たせるだけ待たせて神経を磨り減らさせ、交渉事を有利に運ぼうというのはこの連中のよく使う手なのだと心に言い聞かせてきた千堂も、二時間経ち三時間が過ぎると時間厳守を謳っておきながら虚仮にするにも程がある、とさすがに抑えが利かなくなった。

　ところが無比人と氷見子には気にした様子も見られないばかりか、こうして一緒にのんびり過ごしていられることを喜んでいるふうでさえあるのだ。社で井出本たちを送り出した後、千堂が無比人の携帯電話の番号を押すとすぐに繋がり、事情を説明し六時までにくるように告げたところ、

　――そんなもの、無視したらいいじゃないか。社長。

　――そうもいかんだろう。

　――自分は構いませんよ。奴らに目の敵にされたって、別に。

　――敵もその辺も見越しておればこそ、私のところへきたんだろう。毎日押しかけられた日には仕事にならんからね。

　――社長を救うためか、そういうことなら

無比人は組事務所の中でも屈託なく氷見子とじゃれる

付き合ってあげるよ。

抜け抜けと無比人は言い、約束通りに社へ現れたものの氷見子を連れていて、

――相手は暴力団だぞ。女性同伴で、もしなにかあったらどうするつもりだ。

千堂が詰ると、しれっとした表情を彼は見せた。そしてこう言った。

――目じゃないよ。暴力団なんか。

レスラーなど目じゃないと初対面の折に断じてのけたことが思い返され、胸苦しいような気分にさせられた。

――いいじゃないの。無比人は社長さんのために神州組とやらへ付き合うんでしょ。だったらピクニック気分を味わうくらい。あたしのことなら心配ご無用、なにがあっても社長さんを恨んだりはしないから。

氷見子のその言葉が駄目押しとなり、なにか逆らえぬものを感じたせいもあって同道を認めはしたものの、千堂がいることも忘れたかのようにいちゃつく二人を眺めるうち、苛立ちを通り越して馬鹿馬鹿しくなってきた。

三十分足らずでピースの箱を空にすると、

「帰ろう」

言って千堂は立ち上がった。

と、それを見ていたかのようにドアが開いた。井出本が顔だけ覗かせて、

組長のズボンは膝まで下げられ臀部は剥きだしだった

「組長がお会いになる。こっちだ」

顎を振った。

最寄りの氷見子が持参の手提げ袋を取って起ち、先に戸口へ。一番早く起ったにもかかわらず、千堂がしんがりになった。

大部屋の者たちは倍近くに増えていた。申し合わせたように机の上に脚を乗せ、スポーツ紙を広げたりゲームに興じたりしている。

井出本は正面奥のドアへ近づくと、さっさと開けて入った。氷見子、無比人、千堂の順で後に続いた。

組長室は応接室とはなにからなにまで対照的で、豪奢の一語に尽きた。特別誂えとおぼしい扇状をしたデスクに、虎の皮に覆われたソファに大理石のテーブルに、壁の一面を占めるオーディオ装置。

組長の梶はデスクにいた。井出本と似た年格好ながら細面の整った顔立ちで唇が薄く、紅を引いたように朱かった。後方に東都プロレスにでもスカウトさせたいような大男が直立している。

井出本に言われて、三人は梶の前に横一列に並んだ。梶が視線を千堂へ向けた。

「東都プロレスへあんたから五百万の金が渡っているのを承知で言うんだが、そいつは諦め今日限り手を引いてもらえんか。勿論、万無比人を連れてだ。さもなければプロレス雑誌を続けられんように手を回すしかないが、イエスかノーか」

「イエス」

千堂にすれば、無比人をフリーにするだけならいつでもいいし、そうしたら無理をして東都プロレスと関わりを持ち続ける必要もなくなるわけだと、その方へ気持ちが傾いていたところでもあり、即答し話はそれだけで終わった。

梶は、そこで井出本を一瞥。

「あとは万とのことなんで、はずしててもらう。女マネージャーは一心同体だそうだし同席させるが」

と尻を叩かせられては、千堂も無比人を恃んで退出するよりなかった。

大部屋の空いた席に坐って待っていると、しばらくして組長室で荒い物音が立て続けにした。総勢が血相を変えてドアへ殺到したが、突入するより先に出てきた無比人によって、瞬くうちに残らず叩き伏せられた。

「きてみなよ。面白いものが拝めるから」

無比人は息も切らさずに言うと、組長室へ消えた。追って千堂も駆け足になった。

組長室の大理石のテーブルの上でぐったりした梶が四つん這いの姿勢をとらされ、床には井出本と大男が仲良く伸びていた。

梶はズボンを膝まで下げられて臀部を剥き出しにしており、その真後ろに氷見子が見られた。ジーパンの腰になにか着けている。

ペニスバンドだった。

（以下次号）



初めまして 大黒坊 弁慶です！

のものも ラブラブ インディー♥ ダンディー♥

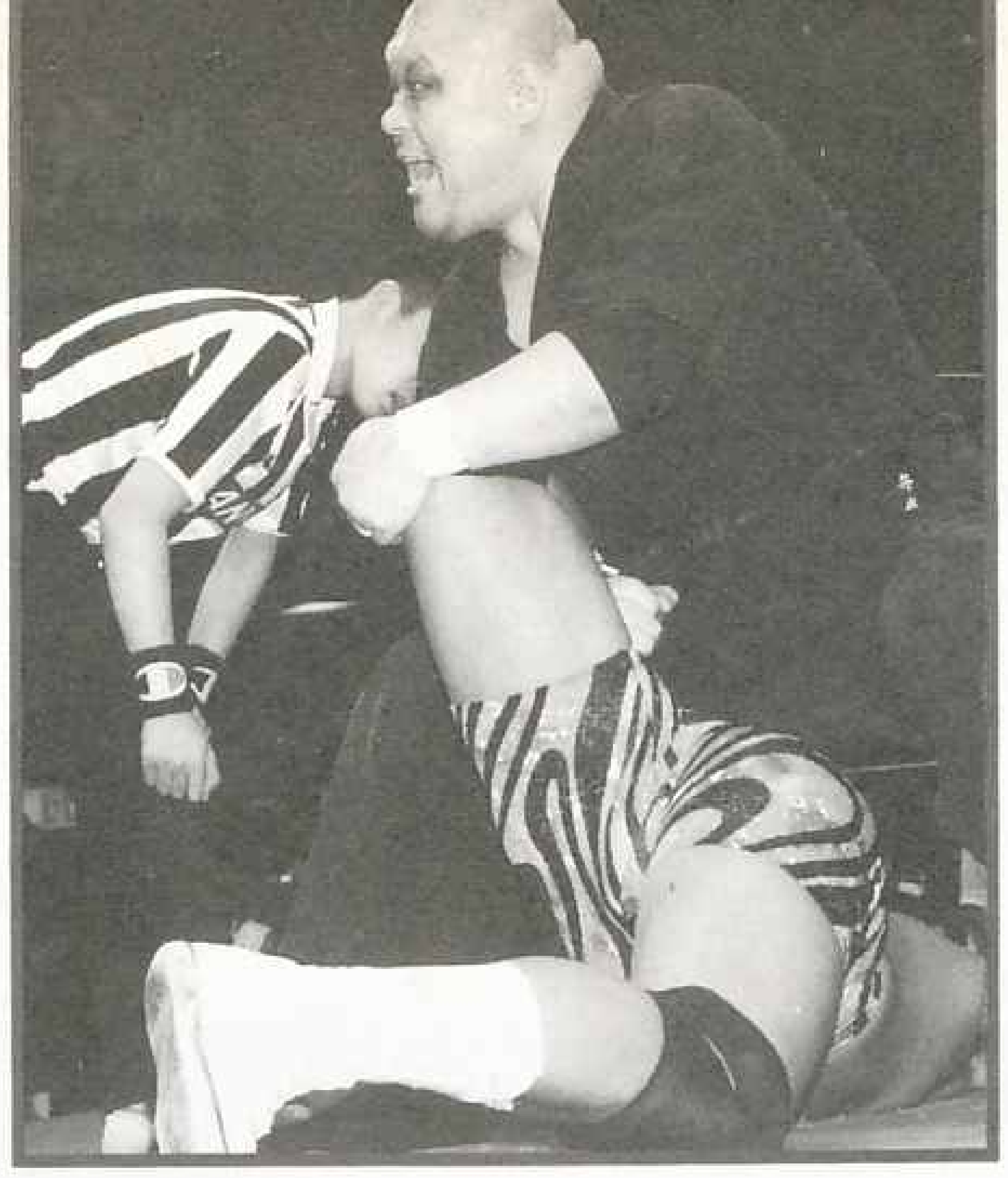
顔は恐いがハートはあったか～♥

聞き手／のものも
interview by NomoNomo
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

のものの新婚さんいらっしゃ～い!?

――私ね、弁慶さんのこと見事なほど何にも知らないんですよぉ。アハハハハ～。だから今日は弁慶さんのこと、いろいろ教えて下さいねぇ。

弁慶　はいはい、何でも聞いて。



――はいぃ。じゃあズバリ言いますが、弁慶さんは見た目怖そうですけど、ホントはすっごく優しそうですね。

弁慶　あ……（しばし呆気に取られる）。そうかなぁ？

――けっこう前に『週プロ』で、のものもの大好きなヤスカクおじさんがやってた「お宅拝見コーナー」に、弁慶さん出られたじゃないですかぁ。あれ見て「うわ～、顔は怖いけど、いい人なんだなぁ」って思いましたぁ。

弁慶　アハハハハハ。あれは仮の姿だから（笑）。

――仮の姿！　何でだ！　弁慶さんって、ヒールなんですかぁ？

弁慶　東京プロレスの頃はヒールだったんですけど、IWA　JAPANに来てからはヒールじゃないねぇ。

――私生活もヒールですかぁ？

弁慶　こんなナリして私生活もヒールだったら、オレ、道間違えてるよ（笑）。

隣に座る女性　ウフフフ。

――あのぅ、さっきから気になってんですけど、この方はどなたですか？（笑）

弁慶　あ、女房です。

――あらっ、奥さんでしたか。弁慶さんって結婚されてたんですかぁ？

弁慶　4月に入籍したんですよ。

――あらあらっ、新婚さんじゃないですかぁ。ンムフフフフ。奥さんは、弁慶さんのどういうところにグッときちゃったんですかぁ？

奥さん　見た目怖いですけど、すごく優しいんです。

弁慶　やっぱりそうか。それしか褒めるとこないんか（笑）。

――アハハハハ～。草彅剛以上にいい人、大黒坊弁慶！　ところで、街でケンカとかしたことあります？

弁慶　ないよ！　アンタ、こんな風貌の男にケンカ売りますか？

――えっ、私!?　売るわけないじゃないですかぁ。カタブツ君（34歳）じゃないんだから、そんな身の程知らずなことしませんよ！

弁慶　でしょ？（笑）

――はい、すいませ～ん。じゃあ、ちょっとプロレスの話しましょうか（笑）。えっとぉ、弁慶さんって、昔、お相撲さんだったんですよね？

弁慶　そう、御存知でしたか？（笑）

――はい、実はちょっとだけ知ってます。なんで相撲辞めてプロレスやるようになったんですか？

弁慶　ボクは日大の相撲部出身なんですけど、大学出てから輪島さんの花篭部屋にいたんです。でも、いろいろあって相撲辞めたんですけど、辞めてすぐプロレス界入りしたわけじゃないんですよ。

――あらっ、その間は何してたんですかぁ？

弁慶　あの、芸能プロダクションに、ちょっと……。

――えーっ！　芸能人やってたんです



かぁ???
弁慶　そういう仕事をしながら……。
——えぇーっ！　そういう仕事って何ですかぁ？
弁慶　ビデオとか映画やテレビに出たりとか……。
——えぇえーっ！　映画出てたんですかぁ？　見たい、見たーい。今も見れますぅ？
弁慶　いや、今はもう見れないんじゃないかなぁ。年末に紅白歌合戦の裏番組で、民放でドラマやってるでしょ。ああいうのに出てたんだよね。
——うわぁ、何の役だったんですか？
弁慶　いやいやいや、ヤクザの役ですよ（笑）。
——ナハハハハハッ、そのまんまだぁ～。その当時も身体大きかったんですかぁ？
弁慶　あの頃の方が今より大きかったよ。相撲辞めたばっかの頃だから。
——あ、そうなんだぁ。
弁慶　萩原健一、佐藤浩一、萬田久子、安岡力也なんかが出てたんだよ。
——弁慶さん、力也さんの子分の役だったんだぁ。
弁慶　全然芝居できないのに、セリフもちゃんとあったんだよ。
——えーっ！　何て何て？
弁慶　いやいやいや、もう忘れましたよ（笑）。
——それで、しばらく芸能人して、それからどうしたんですか？
弁慶　しばらくね、約3年間サラリーマン生活してたんですよ。
——えーっ！　サラリーマン！　何のお仕事？



覆面の下は、泣く子も黙る強面。でも優しいよ♥

弁慶　営業を……。
——えぇーっ！　営業！　その顔でぇ!?
弁慶　ガハハハハハ、そうそう。
——すごい、すごーい（パチパチパチ）。それでサラリーマン生活を経て、プロレス界入りしたわけですね？　最初はWARでしたっけ？
弁慶　そうそう、何だオレのこと知ってるじゃない（笑）。
——ホントだぁ、けっこう知ってますね（笑）。でも、私、けっこう嵐（WAR時代のリングネーム）好きだったですよぉ。
弁慶　アハハハハ、そう。
——マスクマンなのに、技が相撲技ばっかりだったじゃないですかぁ。あれはのものも心にビーンとくるものがありましたよぉ。
弁慶　覆面力士だったたから。異種格闘技戦ってことで出てたからね。プロレスの技、何にも知らなかったし。
——めちゃめちゃ正体不明のマスクマンでしたよねぇ。

弁慶　レスラーやファンはわかんなかったみたいだけど、でも相撲仲間は、みんなすぐオレだってわかったみたいだよ。

――相撲仲間！　いいな～、のものもも相撲仲間に入りたいなぁ～。

弁慶　ん？

――いえいえ、仲間っていいなぁと思って（笑）。でもそれだけ体格あったら、メジャー団体に行こうと思えば行けたわけじゃないですかぁ？

弁慶　う～ん、でもそういうことはあんまり考えてなかったからね。

――安田っスは、お相撲さんから転職して、新弟子から人生やり直したんですよぉ。30歳過ぎてたのにすごい勇気あるガッツマンですよねぇ～。あ、安田っスっていうのは、のものもが大好きな新日本の安田忠夫選手のことなんですけどぉ。

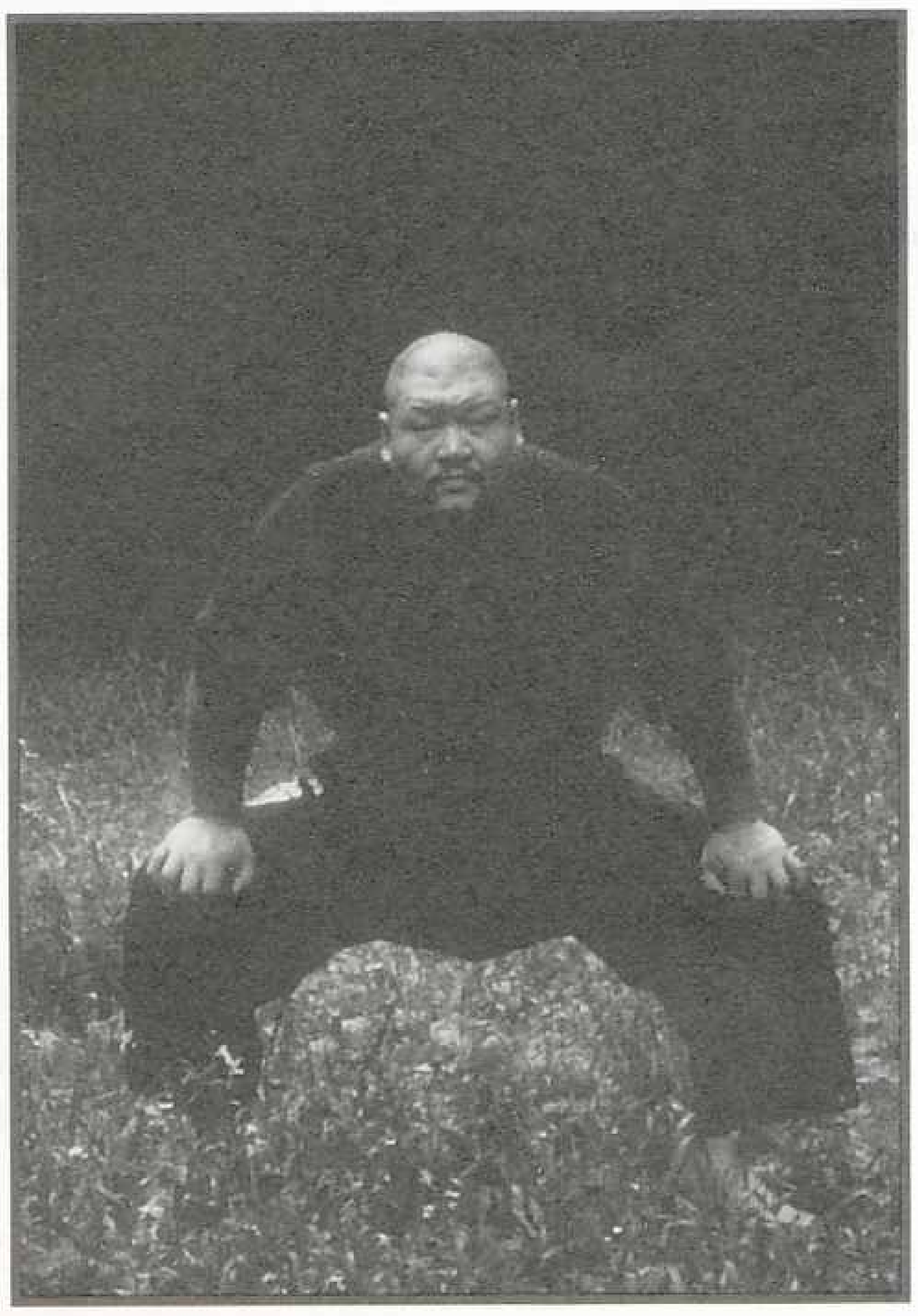
弁慶　あ～、そうだね。ま、それは人それぞれだから。

――人それぞれか～。何かインタビューがずいぶんホンワカしちゃってるんで、この辺でマジな話でもしましょうか。ズバリ！　潰したいレスラーっています？

弁慶　何だよ、突然（笑）。潰したいレスラーねぇ……。そんなこと言えるほどじゃないから。まだまだ半人前、勉強すること多いですから。

――うわ～、謙虚なお人だ。じゃあ、闘ってみたいレスラーって誰ですか？

弁慶　新日本の天山選手。



――ふ～ん（あまり興味がないという意味の、のものもお得意のリアクション）。えっとぉ、それで東京プロレスを経て、今はIWAのリングに上がってるんですよね？

弁慶　あれっ、何か話が急に飛んでますけど？

――（話をさえぎって）今、上がっているIWAは居心地いいですか？

弁慶　いい団体ですよ。

――IWAは、確か社長が20歳かそこらの若僧なんですよね？

弁慶　そうだね。山田（圭介）君、頑張ってるよ。

――山田君、ホントに社長業やってんですか？

弁慶　やってるよ。ウソじゃないよ（笑）。彼は若いけど、しっかりしてるよ。

――でも、何かすごいですよねぇ。弁慶さんが20歳の若者にギャラもらってるっちゅーのは。

弁慶　……（無言）。

――うふ、弁慶さん貝になっちゃいましたぁ（笑）。じゃあ、話題を変えて、趣味の話でもしましょうか。弁慶さんの趣味って何ですか？

弁慶　趣味？　なんだろう……、何かある？（奥さんに助言を求める）

奥さん　猫じゃない？

――ぐふっ、猫！　猫が趣味！

奥さん　いえ、猫と遊ぶこと（笑）。

――弁慶さん、猫好きなんですか？

弁慶　うん、今も2匹飼ってるよ。でも、猫だけじゃなく動物はみんな好きだよ。

――うわ～、ウチの犬殺し・山口編集長とは大違いだぁ。まぁ、動物好きに悪い人はいないってことですよね～。ところで、猫の名前は何て言うんですかぁ？

弁慶　うへへへへへ。

――うへへへへ？

弁慶　もにょもにょ……。

――は？

弁慶　（すごく小さい声で）ミウとキティ。

――あ～ん？

弁慶　ミウとキティ！

――ミウとキティ！（大爆笑）

弁慶　オレが付けたんじゃないよ。女房が付けたの！

――でも呼んでるんですよね～？

弁慶　うん……、まあ……。

――あ～、その姿見てぇ～！　ところで、奥さんは弁慶さんのこと何て呼んでるんですか？

奥さん　うふふふふ。

弁慶　何、その質問（笑）。それはやめて、恥ずかしいから（笑）。

――あーっ、言えないってことは恥ずかしい呼び方してるんだ（笑）。うふっ、ハッピー&ラブリー♥　その幸せをウチの山口にも少しは分けてあげて下さい。ってなことで今日はどうもありがとうございましたぁ。

弁慶　こんなんでいいの？

――よくないですよぉ。呼び方教えてくれないんだも～ん（笑）。

弁慶　それはダメだって（笑）。言わなきゃページ無くなっちゃうの？

――出るとこに出たら、それもあり得ます！

弁慶　何だよ、それ（笑）。……でもやっぱりダメです。想像して下さい（笑）。

――ぼえ～。

〈5月20日・弁慶さん家の近所のロイヤルホストにて収録〉

IWA JAPAN 6月シリーズの日程
～CRAZY CIRCUS TOUR'97～

- 6月19日（木）　長野・飯田市勤労者体育センター　18：30
- 6月21日（土）　岐阜・萩原町あさぎり体育館　18：00
- 6月22日（日）　愛知・江南市民体育館　17：00
- 6月25日（木）　東京・後楽園ホール　18：30

IWA JAPAN 6月シリーズタイトル……直訳すると、狂ったサーカスの旅！　ほぇ～、ほんとかなぁ？　とりあえずIWAからは目が離せないってことです！　もちろん弁慶さん個人からもね！　新妻、そしてミウとキティも応援してるよ!!

史に新しい３ページが今、刻まれる！



ングダム

どうもっ！ ノブです。坂井結核は売店で働きすぎて死にました。今回からはノブ一本で勝負します。今回は、ヒクソンに勝つことを信じて、今までで一番のノブをお見せしようと思ってましたが、諸事情により中止のようです。しゃーないので、突然ですがスーパーファーファに挑戦します！ そこで今までで一番のノブをお見せします！ 保証します！ って、なんでやねん？

構成＝坂井ノブ



（神奈川県　飯塚正和　28歳）

いつ何時、誰のイラストでも載せる！



（山口県　ブルピト）「ズバリ言って、言うことナシ！ 今回送られてきたイラスト中NO.1の作品です」



（世田谷区　佐藤学二　26歳）「間違えたところに紙を貼ってごまかすのは、頭悪そうだぞ」



（岡山県　村上博昭　31歳）「愛憎渦巻く師弟関係が上手く表現されてるね」



（青森県　青木雄大　21歳）「カタブツ君が入社以来、初めて人の役に立った瞬間だね」



（兵庫県　肥原健　16歳）「前頭部なんかそっくりだね」



（新潟県　高木孝博　23歳）「博士が逮捕されたとき、オレはもう地獄に堕ちた。それぐらいショックだったね」



（熊本県　塩本祐介　31歳）「最強？ それはボクですよ」

よこせってんだ、コノヤロー！

グレートさん（『金本は蹴り殺すゾ』な人）のお膝下、盛岡在住の中川一誠君（13歳）。同様のハガキを10通以上も送ってきました。nWo・Tシャツに人生を狂わされてしまったようです。



nomo ノモ・マガジン［縮小版］

ふがいないハガキにかぁ～つ！ 優秀賞には賞金出すって言ってるのにぃ。佳作もなぁ～し！ 以上！ このコーナー早くも沈没寸前です。ナイス・アイデア、求む！

（山口県　（株）汁　17歳）



（福岡県　山口恒次　22歳）



（名古屋市　花井順平　16歳）



結核病死！ ノブがキングだ！ 投稿王国の歴史に新

ノブ PRESENTS

は ハガキング

通称　ハガキング

☆始まる！（キングダム旗揚げ戦のパンフ参照）というわけでさっそく読者の声を紹介しよう。

●『ラディカル』3号、読まさしていただきました。ひどくつまらんのはなんでだ？　ページめくって、あくびでアゴがはずれました。カラーページが多くって外見はつくろったかもしれんが、中身は『プロレスファン』の千倍くらいしか面白くありません

（埼玉県　藤倉太郎　21歳）

☆一発目から非常に失礼なハガキでしたね。『プロレスファン』だっておもしろいと思うよ。『紙プロ』が逆立ちしてもかなわないよ。特にぬいぐるみ6個並べただけのすさまじく素朴な読者プレゼントのページとか。

●茂木のインタビューがつまらん。オマエがやめてもどうってことない。前田がやめるって言ったんと訳がちゃう

（東大阪市　今西誠博　19歳）

☆高田龍代表曰く「インディー界で一番基礎がしっかりしてる男」こと、もてぴょんのインタビューは、前号の読者アンケートでもブッちぎりの不人気NO．1でした。これ以外にも同様の意見が多数、寄せられています。まだまだやれるのに、引退なんて口にするブルーなもてぴょんなんて、みんな大嫌いなんだね。じゃあ、『引退』を報道されたけどまだまだ現役でやれそうな長州のことも、みんな嫌いなのかな？

●Ｓｈｏｗはいらない

（大阪市　森田大祐　25歳）

☆登場すると犯罪的な不快感を読者に与える男、それがＳｈｏｗ氏（28歳）です。長渕剛を愛しすぎて、世間から取り残されてしまったそうです。まさに『ロクデナシ』です。

●八百長論議の記事に、ハッときました。この本をかかさず買ってる自分にとってはビックリした記事です。プロレスは八百長ではありません。アンケートには本当にガックリです。プロレスラーのみなさん、そうではないということを信じています。イヤ、ぜったいちがいます。そういう記事を書いて下さい。きっとよくなります

（岡山県　芦田浩　17歳）

☆何書いてるのかよく分からないけど、ショックを受けて混乱してる感じが、すごく良く伝わって来るハガキですね。そんな貴方に朗報です！　これがレスラーからの八百長論に対する解答だ！

●86年頃、関西大学に長州力が講演会に来たのですが、質問のコーナーで「板坂剛氏の本について……」と質問しようとした学生を怒鳴りつけ「真剣にやってなかったらプロレスなんてとっくにつぶれてるぞ！」といってました。

（世田谷区　高峰謙治　33歳）

☆Ｖ－ＶＡ！　11年前の長州！　革命戦士がプロレスを守り切った素晴らしいエピソードです！『紙プロ』本誌にも登場したことのあるＺＯＲＲＯこと板坂剛氏が展開していた八百長論に対して初代・長州が見事にカチ喰らわした瞬間のタレコミ情報でした。二代目・長州にも是非、見習ってほしいものです。ちなみに、こういう古いネタでも大歓迎です。

●どこの雑誌でもカール・ゴッチのインタビューをやってくれないのでイライラしていたから本当に嬉しかった。

（神奈川県　友次孝之　26歳）

☆長い間、日本のプロレス界から姿を消していた感のゴッチ爺さんインタビューは予想以上の反響でぶっちぎりの人気NO．1でした。そんなゴッチさんの家をだれか買ってあげて下さい。なお、現在、某大物（自称・バカ社長）が水面下で動いているとの噂も。

●っつうか、シッシーのコラムが『週プロ』でおわっちゃったので、『紙プロ』で復活してほしい。オレはザッツレスラーより、あれが読みたい

（広島市　小笠原浩司　28歳）

☆ある人曰く、ターザンは『狂った男』で、シッシーは『壊れた男』だ、ということでした。闘病生活を終えて、不死鳥の如く復活したと思ったのに、連載終了とは残念な限りです。清潔な現在のプロレス界からまた一人、ステキな雑菌が消えてしまいそうでいたたまれません。ガンバレ、雑菌！

●カタブツ君、こあいっっっ！　生で見たら、きっと私、ハエたたきでたたいちゃうかもおだって虫っぽいんだもん

（北海道　上田恵　26歳）

☆前号でミジンコ以下のツラを初公開した中村カタブツ君（34歳）ですが、それ以来、各試合会場で「頑張ってください」などと声を掛けられています。そんなカタブツ君から読者の皆さんにメッセージが届いています。「みんなボクを応援しないでください。それよりいじられてるほうが嬉しいです」とのことでした。今度、試合会場で見かけたら、ゴミ箱でもぶつけてあげよう。

●カタブツさん、あんたがいる限り、『紙プロ』は潰れない！『紙プロ』は永遠に不滅だぁ－！

（岩手県　中川一誠　13歳）

☆ボクもなんとなくそんな気がします。なお、カタブツ君の近況は次のページで読めます。

●前号で面白かったのはカタブツさんのサスケインタビューです。安生インタビューとあわせて読むと無能な人間が勘違いして出しゃばる様にムカついてるダブルクロスの皆さんの気持ちがよく伝わってきます

（世田谷区　佐藤学二　26歳）

☆カチ喰らわすゾ、コラァ！　カタブツ君にもいいところはあるんだぞ！　例えば、トンマだし、トンマだし、トンマだし……。他には何もないけどさ。

●中村カタブツの給料ドロボー！

（熊本県　山崎英紀　31歳）

☆『こんな人間が社会人として生きていけるのか？』という声が非常にたくさん寄せられています。こんな声にもめげずに、今日もカタブツ君は『ＢＩＧ　ＴＯＭＯＲＲＯＷ』を熟読しています、仕事中なのにね。

●昔、村松友視氏は「話が大きく弧を描く、ブーメランのようだ」と猪木のことを評した。山口昇のインタビューにそれを感じた

（埼玉県　住吉功　35歳）

☆本誌ブーメラン編集長は出かけたまま帰ってこないことが多々あります。先日も、出かけたまま10時間以上帰ってこないので携帯に電話をかけてみたところ、眠そうな声で「今、麻布の路上で寝てる」とのことでした。ダブルクロスのブーメランは戻ってきません。

●初めて『紙プロ』を買いました。650円にしては結構内容がこいです。バトラーズの石川さんをもっと載せてください

（大阪府　岡田裕子　26歳）

☆日頃、石川社長がとりつかれたように語っている『粘膜の論理』（内容不明）を今度じっくり語ってもらいたいものです。余談ですが、バトラーツが正しい団体名です。本誌お勘定の林ヘックション一枚もよく同じ間違いをします。気をつけましょう。

今までで一番の募集をお見せします！

■ヒクソンも裸足で逃げ出す力強いご意見
■ヒクソンも泣き出すスキャンダラスなタレコミ情報
■ヒクソンも腰を抜かすナイスなイラスト
■ヒクソンもアゴをはずして大笑いするステキなダジャレ（イラスト付きなら採用率ＵＰ）
■ヒクソンもたじろぐカタブツ君へのメッセージなどを送って下さい。

ダジャ専
日本ダジャレズム専門学校

初夏の陽光が眩しい今日この頃、皆さんは元気ですかー！　本校・ダジャ専講師のダジャ・コングです。この『ダジャ専』という名前の由来ですが似たような専門学校の名前をパクってみました。なにしろ、最近は『ライターズ・デン』なんてイカした名前の学校もあるらしいんで……。それにしても今回は、嘆かわしいほどの不作だ！　さっそく本校も経営難です。専門学校でひと山当てるというダブルクロスの野望も先が真っ暗になってきました。というわけで、今回はイラスト付き作品のみのエントリーです。今後もイラスト付きの作品は掲載率が高くなるでしょう。それでは本校が潰れないことを期待しつつ、高い壁を乗り越えて行きましょう。でも、頭打っちゃったからよう、ダァ～！

オレらが合宿しても会社が経費として認めてくれない級



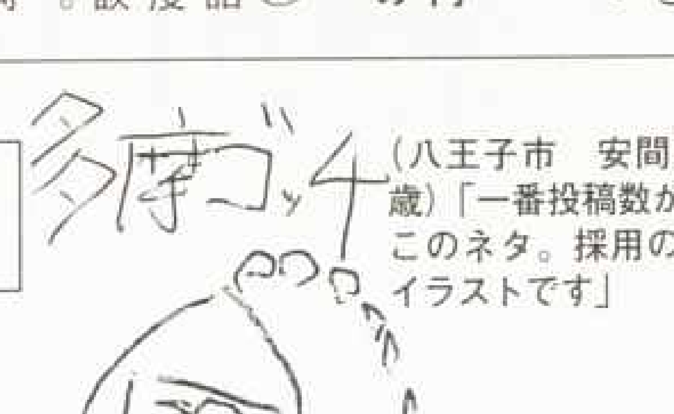
（大阪府　中嶋鈴　16歳）「小川に勝つために激ヤセした破壊王。そういえば、本物のノブに勝ったときも減量してたね」

アントン級



（埼玉県　本多達郎　18歳）「こんなダジャレを聞かされたら、10年持つアゴが3年ではずれてしまう」

『神のプロレス』なんつってな級



（八王子市　安間英幸　31歳）「一番投稿数が多かったこのネタ。採用の決め手はイラストです」

今号で一番下品な一枚級



（中野区　道下健太郎　18歳）「オレも酔っぱらって、よく道で寝てました」

のも～る　友達が欲しい！　そんなのものもに手紙を出そう。君ものも軍団に入ろう。返事は確実！　〒151 渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702（株）ダブルクロス「のも～る」まで。

類似品に注意！　最近、創刊した『週刊アスキー』で岡田斗司夫氏のオタ・キングダムという連載が始まりました。そっちにはカタブツ君のことは載ってません。気をつけて下さい。

カタブツ君の記事が読めるのはRADICALだけ！失敗も増えたのでコーナーも拡大！

無意識とは悪である



まずは悲しいお知らせをしなければならない。前号でブチ上げた『カタブツ革命』（カタブツ君が書いた原稿を読みたい、というハガキが30通来たらその原稿を掲載するというもの）が、さっそく暗礁に乗り上げてしまったのだ。最終的にハガキが7通しか来なかったのである。最初は1通も来ないのではと思っていたのだから、言ってみれば大健闘である。というわけでその健闘を讃える意味でその原稿を2行だけ掲載する。

なぜない！　さっきまでそこにあったはずだ。どこに置いたっけ。ああ、思い出

さて、そんな中村カタブツ君（34歳・好きな食物は『ココイチ』のポークカレー350円）への反響は予想以上であった。カタブツ君のあまりのダメっぷりに対する同情や共感もあるにはあるのだが、それ以上にあのツラに対する不快感が爆発しているのがハガキを通じてビシバシ伝わってくる。ただ不快なだけなら見過ごせばいいようなものだが、中村カタブツ君（34歳）の場合は踏み潰さずにはいられないような不快感を確実に与えている。読者の皆さんは、どこかでカタブツ君を見つけたら、机でもぶつけてあげてほしい。

この前代未聞、空前絶後のダメ男は業界関係者の間でもちょっとした話題の人らしい。会う人会う人に『どんなダメ人間なんだろう』とばかりに、まるで珍獣を見るかのようにしっかり観察されているのだ。プロレス界広しと言えども、そんなのは中村カタブツ君（34歳）だけであろう。そんなみんなの期待を裏切らず、先日もターザン山本宅に『RADICAL』NO．3を届けようとしたところ、道に迷ってターザンを30分待たせ、「オマエはカタブツじゃない！　半端モンだ！　改名しろ！」と言われる今日この頃を送っていたりする。珍獣扱いもやむなし、である。

カタブツランド。

全国1億2000万の『やればできる子』に捧げるポンコツ・ドキュメンタリー！

さて、今月もこんな調子でたっぷりと身体を張ったドジをやらかしてくれたので、早速お届けしよう。

●夢ファクの小山大会を見に行く途中、中村カタブツ君（34歳）が車にはねられるという大事件が発生。しかし、「とっさの判断でジャッキー・チェンみたいにボンネットに飛び乗ってかわしたんだよ」と自信たっぷりのご様子で、遠くを見つめて感慨深げな表情で会社に報告をするも「今、考えると車は止まってたかも知れません」と内幕を自ら暴露して自滅。

●会社で散々ダメな箇所を指摘されまくり、窮地に立たされたカタブツ君。腹に据えかねたらしく「オレはやればできる子なんだよ！」と34歳にして豪語。「だって小学校のとき言われたもん！」と筆者もまだ生まれていない20年以上も前のことを心の拠り所にしていたことが発覚。「やってないじゃない！」という我々のツッコミに対しても「やってると思ったんですけど……やってなかったのかも知れません」と完全に壊れた開き直り方。その直後から「やらなきゃ、やらなきゃ……」と呟き、窓の外を見つめて一心不乱にボーっとする。そのままの姿勢で5分が過ぎた頃、突然勢いよく立ち上がり「それじゃあ、ボク帰ります！」となにもせずにあっさり帰宅。やれよ、ポンコツ！

●これからの抱負を聞かれた中村カタブツ君（34歳）、「赤ん坊に戻ったつもりで頑張ります！」と日本の名言100選に確実に入る発言。

●広告代理店に向かって「おたくの広告が悪いからですよ（怒）」と打ち首ものの超問題発言。山口昇本誌編集長から『クビ』を言い渡される寸前まで事態は発展。中村カタブツ君（34歳）は、ビジネスのときもガチンコ（超弱いけど）の『カタブツ君』なのだ。その脳味噌にはシャレの概念が入り込む余地はない。

●前号のカタブツランドの『嫁が背中を向けて話してくれない……』という部分を嫁が読み、「私は怒ってたの！」と指摘。そこで初めてカタブツ君は自分が勘違いしていたことに気付く。

●嫁ネタをもう一つ。前号のカタブツ仕事、サスケインタビューの中の「寂しがってるかな、正美……。」の一行を読んだ嫁に、「あんなところで心配しないで、ちゃんと私に言って！」と言われる。結局、夫婦仲は円満になり、現在は「アツアツだよ。『ポケモン』のモンスターを交換したりさ。」（カタブツ君・談）だとさ。めでたし、めでたし。

●ピザ屋に注文を頼もうと電話をかけたカタブツ君。「あ、スイマセン」と言おうとして失敗。最初の2文字しか言えず、「アス！」と絶叫。直訳すると「尻の穴！」。海外なら射殺されても文句は言えない発言。

●コンバースの紺のローカットがお気に入りの中村カタブツ君（34歳）。ところが、そのスニーカーの右はボロボロ、左は新品同様という不思議なコーディネイト。その理由を聞いてみたところ、「以前履いてたコンバースがボロボロになったから、それと同じものを買ったんだけど、間違えて新品を片方捨てちゃったの」とアルツハイマー病患者のような、一点の曇りもないステキな表情で答えてくれたのであった。

●流行に敏感な中村カタブツ君（34歳）が『エヴァンゲリオン』を観に映画館へ。ところが、始まってから1時間半は居眠り、最後の30分しか見れなかったというトンパチっぷり。一応、映画の感想を聞いてみたところ「すごいんだよ、主人公がオナニーしてるんだよ！」とのこと。

●踏切を待ちながらボーっとしていたカタブツ君。電車が通過したのも気付かずに、上がってきた遮断機にアッパーカットを喰らう。

●保険屋のおばちゃんが持ってきたコンピューター占いによると「仕事運は最悪。やらないほうがまし。そのかわりレジャー運は最高。山や海があなたを呼んでいます。」という中村カタブツ君（34歳）。すると翌日から仕事もそこそこに3日連チャンで飲み会に参加。占いにまで翻弄されるダメっぷりを発揮する。

どーですか？　こんなステキな凄玉に石をぶつけてみたくなったでしょ？　まだまだステキな失敗談があるのだけれど、誌面には限りがあるので、全部は掲載できないが、実際のカタブツ君はこの程度のものじゃないということだけでも、心にとめて置いていただきたい。

相変わらずの調子でかっ飛ばす中村カタブツ君（34歳）に対して、遂に業を煮やした（株）ダブルクロスは『カタブツ君のための新制度』を設立した。名付けて、

『中村カタブツ君とりあえず罰金制度』

全10項目からなる禁止事項を犯したら罰金を払うという制度である。（ちなみに「とりあえず」はカタブっちの口癖）その内容はどのようなものかというと……

- **●伝言を忘れたとき**
- **●会社のモノをなくしたとき**
- **●家や会社に携帯電話を忘れたとき**
- **●車をぶつけたとき**
- **●明らかにカタブツ君のせいで苦情がきたとき**
- **●タバコで床を焦がしたとき**
- **●資料を出して元の場所に戻さなかったとき**
- **●1日に3回目の居眠りを発見されたとき**
- **●トイレを流さなかったとき**
- **●万引きを見つかって御用になったとき**

これらの禁止事項を破ったときは1回千円の罰金なのである。（最後の2項目は重罪なので1万円）どーですか？　でも、この翌日には、さっそく会社の鍵をかけ忘れて千円払っているのだから……。

前回ブチ上げて、今回早くも暗礁に乗り上げた『カタブツ革命』だが、これから一体どうなってしまうのだろうか？　先日も、素直な後輩にはすぐ奢ってしまうタニマチ体質、人を年齢とキャリアだけで人を判断する体育会系思考回路、空手家気取りで仕事に取り組む姿勢などを変えた方がいいと3時間かけて説いたときに「オレは生まれ変わる！　人の言うことを聞くし、ちょっとしたことで怒らない！（※カタブツ君はすぐヘソを曲げる）」と高らかに宣言したのだが……。その結果どう変わったかは、次号でお知らせする。このステキなポンコツがスクラップにされないことを祈りつつ……。



（株）ダブルクロスで吹き荒れるカタブツ旋風。もう、誰も止められない。張本人がノンキにカサさしてる場合じゃないのに。

やめるな長州！　記念　二代目を探せ！

5・17付けの東スポがいつも通りに届いたその直後、ダブルクロスに衝撃が走った。記事によると「長州力引退、佐々木健介が二代目襲名へ。尚、初代・長州力は吉田光雄としてシリーズに帯同。」とあるではないか。思えば、UWF旗揚げの際の前田の誘いを、長州への義理を理由に断ったというエピソードの持ち主が健介である。そんな彼にとっては最高のリングネームではないだろうか？　ラリアットとストンピングだけでも、東京ドームの最後方まで痛みが伝わるプロレスが見たい！　そういうファンにも嬉しいニュースだ。

しかし、マスクマンの二代目なら今まで何度も見てきたが、素顔のレスラーの二代目は前代未聞である。そんな掟破りの画期的な引退を可能にするのも革命戦士ならでは。そんな長州の革命精神を見習って、僕らができることとは何か？

僕らが勝手に二代目を指名すればいい。

というわけで、突然だが二代目を勝手に襲名させるコーナーを新設する。あの人じゃなきゃ二代目は務まらない！　とか、コイツは明らかにコピーだからアイツの二代目に任命してしまえ！　とか、理由は何でもいい。とにかく、アイツの二代目はコイツに継いで欲しいというアイデアを募集するものである。

例えば……

●二代目・天山広吉を小島聡が襲名。天山から伝説の爪楊枝刺しを伝授される。

●二代目・宗猛を宗茂が襲名。襲名式ではサッカーの試合後よろしく、お互いのメガネを交換しあう。

●二代目・茂木正淑を中村カタブツ君が襲名。しかし失敗ばかりしでかしてエースの座から転落＆新弟子以下に逆戻り。

●長州力を二代目だけしか指名しないのは不安なので、三代目は天山、四代目は小島を指名。以下、似たようなパワーファイターをずっと先まで指名しておけば、ラリアットプロレスはますます安泰に。

いかがだろう？　こんな感じで、誰に、誰を、襲名させて、何をやらせたいかというのを書いて送って欲しい。これでもう、好きなレスラーが引退しても怖くない！

★ハガキングダムに取り上げてほしいネタ、イラスト、ダジャ専、カタブツランド、二代目を探せ！　などの宛先は　〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702（株）ダブルクロス「ハガキングダム係」まで。

決して受け入れられぬ永遠の片思い・・・・・・
プロレスに恋したことありますか？

紙のプロレス RADICAL バックナンバーの告知

なぜか心がドキドキする第1号

特集『プロレスラーとは何か!?』

○前田日明「プロレス界がプライドを持つ方法？　一回潰すことやね」
○橋本真也「俺たちはどんなことをやっても美しい!!」



○初代タイガー
「芯にはガチンコがある。これからはそんなプロレスを見せてあげたいな～」

ほか船木誠勝、タイガー・ジェット・シン、高田延彦登場

★32ページぶち抜き
格闘探偵団バトラーーツ特集
石川雄規、小野武志、田中稔ほか
全選手インタビュー一挙掲載

★危険人物対談
ターザン山本VS鈴木健

瞳を閉じて夢見る第2号

特集『プライドとは何か？』

○アントニオ猪木VSタイガーキング対談　パート1
「今の新日の道場行っても『面白れぇことやってるな』っていうものが何もないんですよ」（アントニオ猪木）



ほか田村潔司、TAKAみちのく、高山善廣登場

★笑顔の裏の凶悪な素顔
佐山聡『爆弾発言』インタビュー

★前田に続き再び邂逅？
長州力VSターザン山本

★パンクラス特集

RADICAL1号～3号は通販でしか買えません（本屋さんでは、もう手に入りませんぜ）

Loveを語り尽くす第3号

特集『針の穴にラクダを通せ！』
大反響！　神様降臨！　カール・ゴッチ
「これっぽっちの器具でも、人を殺す練習はできるんだ！」

★読者から大反響！　FMWからも支持された八百長論議考察企画



『八百長論議と闘え！敵は世間だ』

○猪木VSタイガー対談2
「ズバリ言って『好きにさせる』ってことも凄く大事な要素だろうね」

○船木誠勝
「怖いなって思うのは心の中の怖さですよ」

○池田大輔
「基本は喧嘩っスから何やってもいいんですよ」

★専門誌では決して読めない！
工藤めぐみの『恋話』

●申し込み方法●

希望号数を必ず明記して、下記の方法でどーぞ
●現金書留
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3―11―3―702
（株）ダブルクロス『RADICAL通販係』まで
●郵便振替は00130―3―769154
（株）ダブルクロス
定価　1号＝610円　2号＝660円　3号＝680円
送料1冊＝310円　2冊＝340円　3冊＝450円

坂井結核死亡記念　ダブルクロス初のホーリーネーム公募です！　新しいホーリーネームを元・結核、現・ノブにくれてやってください。宛先は下欄外の住所まで。

私、バトラーツの味方です!?

Noboru Yamaguchi

ああああ〜、ナガサキィは〜、今日もぉお雨へェだぁったぁぁぁ——。

前川清が、眉間に皺を寄せ、独特のコブシを回して歌うこの歌が流行ったのは、ボクが子供の頃である。

この頃の演歌歌手は、地味ながらも派手な背広に蝶ネクタイといった出で立ちで、見るからに演歌歌手といった風情だった。

そういえば、その頃のプロレスラーも、やはり、デカくて、怖くて、強い!

その3要素がベッタリと背中に張り付き、プロレスラー以外の何者でもないといった雰囲気を醸し出していた。

今年の3月13日——。降り立った長崎には、本当に雨が降っていた。正確には小雨が降ったりやんだりのワガママな空模様といったところだったが、いずれにしても雨が路面を濡らしていたのは間違いない。

この日、バトラーツは九州初上陸をはたした。翌日は博多で試合が組まれていて、〝九州上陸作戦〟は長崎からスタートすることになっていたのだ。

長崎文化放送NCC&スタジオ。観衆は280人という記録が残っている。

そのリングに上がったプロレスラーは、ボクが子供の頃に見たプロレスラーのイメージとは違って、比較的小さくて、怖そうではなかった。

いや、それだけでは足りない。

バカみたいだった、というのを付け加えておかなければならない。

この場合の「バカ」とは、もちろん誉め言葉である。

今回の九州ツアーは、ファンサービスの一環として、選手とファンが一緒にバスで移動するというツアーが組まれていたのだが、ボクもそのツアーになぜか紛れ込んでいた。

バスの中や移動中の選手たちは、まるで漫画に出てきてもおかしくないほど、お茶目で素敵でバカだった。

だいたいよく考えてみれば、この団体の正式名称は「格闘探偵団バトラーツ」というのである。

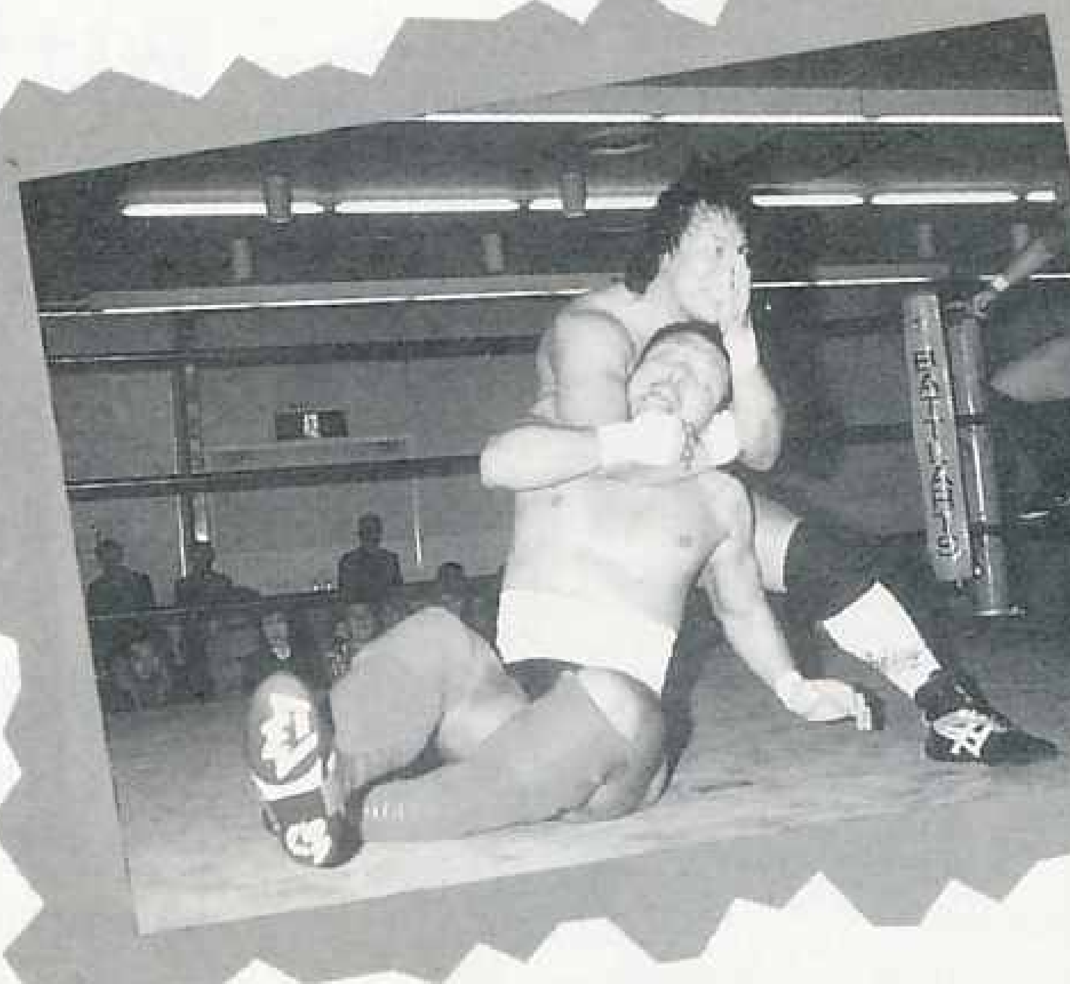
前田日明がレフェリーの島田裕二(またはボンジョビ島田)に「格闘まではエエけど、探偵団はないやろ、探偵団は。でしょ?」と冗談まじりに突っ込んだというが、たしかに誰もが「バカみた〜い」と突っ込みたくなる団体名ではある。

しかし、同じバカにも、良いバカと悪いバカがあるのだ。

良いバカとは、そのバカ度の具合が、度を超えてなければならない。

人間は、「そこそこ」のものはすぐに忘れるが、「度を超えたもの」には感激するものだ。そしてその感激はしっかりと脳と細胞に刻印される。

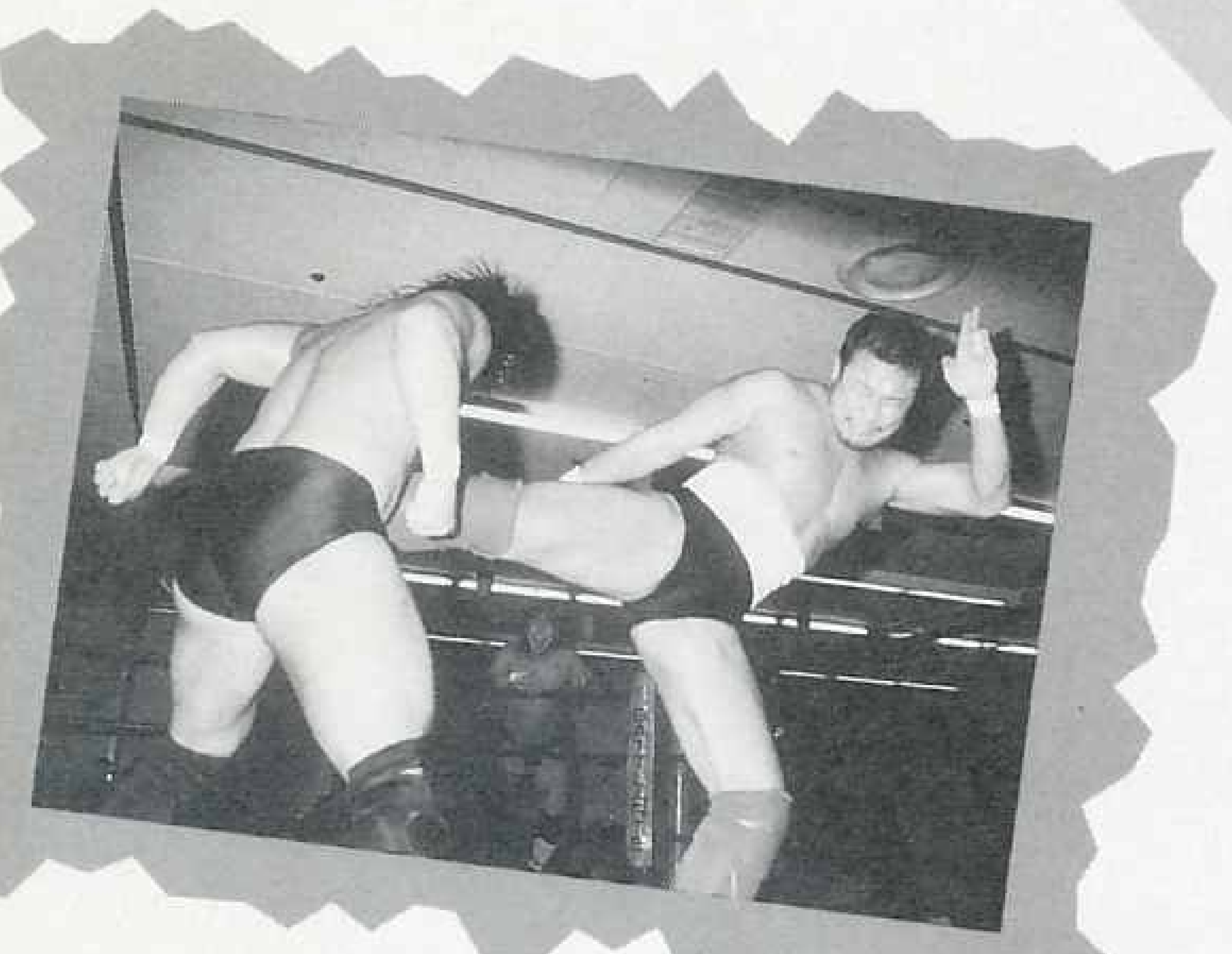
この長崎大会でも、アバラがイカれている池田大輔と、一般常識からはかると頭がイカれている石川雄規が、タッグマッチで相まみえ、まさに度を超えた〝熱〟をリング上から放射していた。



バカみたいに殴り、バカみたいに蹴りまくり、バカみたいに締め上げ



たのである。
　やはり、バトラーツの「Ｂ」は、「度を超えたバカ」の「Ｂ」なのだ！
　度を超えたバカは何をやっても許されて、度を超えていないバカは何をやってもケナされる。
　そういうものなのである！
　ところで、この日のオープニング・マッチは、慧舟会の西良典率いる西道場の鶴貴友と伊達崇文による、キック・ボクシングで、両者ともにデビュー戦だった。
　会場が「なぜプロレスなのにキック・ボクシングをやるの？」と多少戸惑う雰囲気の中、さすがに両者とも緊張を隠せず、前半は非常にぎこちない闘い模様となった。
　しかし、打ち合い、もつれ合い、弾け合う両者からは気迫がほとばしり、それが十分に客席まで届ききったのである。
　後半は、両者ともにヘロヘロになりながら、ほとんどノーガードに近い状態で打ち合う激戦となった。
　技術的には、ノーガードに近い状態で打ち合うというのは誉められたものではないだろうし、選手の安全面からみても決して奨励されるべきものではないかもしれない。
　しかし、この試合の両者に共通していたのは、「負けることを恐れない」ということだった。これは大事なことである。
　もちろんプロというのは負けたらパーの世界である。しかし、だからこそ「負けることを恐れない覚悟」を常に持ち続けなければならないというのがボクの「プロ観」である。
　その覚悟が、気迫と称されるものとしてリング上から立ち昇り、その気迫が人々の血をたぎらすのだ。
　そういった意味では、非常にプロらしいこの一戦は、ジャンルが違うキック・ボクシングながら、〝バトラーツとは何か？〟――それは〝血のたぎるプロレスである〟ということを、瞬時にこの日の観客に伝えきってしまったといっていい。
　やはり第１試合は大切である。
　かつて第１試合は、プロレスの興行でいえば「前座」と決まっていた。



　しかし、昨今のプロレス界の第１試合は、そのイベントのフォーマットに合わせたラインナップの組み替えといった趣で、「前座」という概念はなくなりつつある。
　前座とは、目をつむっていても針の穴に糸を通せる技術を道場で学びつつ、リング上では針の穴にラクダを通すかのような気迫で上を狙っていく世界のことを指す。
　ボクがバトラーツを好きな理由は、その「前座の世界」が独立した空間であるからだ。バトラーツは、プロレス界ではまだまだ前座なのである。
　前座だけを見に来るファンが、ドームを埋める数ほどいるわけがない。それを考えれば、バトラーツの観客動員の平均が２００～３００人というのは当たり前のことなのだ。
　しかし、この日――。
「プロレスは昔好きだったんだけど、いまは見なくなっちゃったんだよな。でも凄いなぁ、やっぱり」とおじさんは休憩時間に興奮した顔でつぶやき、バトラーツの選手のことなど確実に誰も知らないちびっ子は、真っ赤に上気した顔でエルボーを打つ真似をしながら試合に熱中していた。
　ドームに集まる６万人の２００分の１という少ない数ながらも、度を超えたバカたちの、度を超えた気迫を目にした人たちは、一人残らず〝血のたぎり〟を掘り起こされたのである。
　全試合が終了し外へ出ると、観客の〝血のたぎり〟を鎮めるように、長崎にはまだまだ雨が降っていた。

必読連載第3回

石川雄規の『闘いの美術館』

あるいは『二年目の覚悟っち』



先日、後楽園ホール大会の後、友人から電話があった。

「昨日の後楽園大会は素晴らしかった。でも激しさと凄さを賛美するのは、さらなる過激さを求めるようで辛い。バトラーツの凄さが認められ、闘いの過激さが話題になるのは、いちファンとしては嬉しいけれど、友人としては複雑な気持ちだ。とにかく今は君の体が心配だ」

また彼は続けて、「社長やレスラーとしての君はいい意味でどんどん変わってゆくけれど、こうして話していると少しも昔と変わらないね」。そう言って笑った。

やはり同級生というのはいいものだ。

彼とは高校時代からの友人で、一番感受性の多感な時期に知り合い、共に大人達の〝絶対数の価値観〟と闘った仲である。

私はなれるはずのないプロレスラーを目指し、そんな私に触発され、彼は受かる可能性がおそろしく低いといわれる司法試験に挑戦することにした。

共に〝猪木信者〟である我々は、『夢は叶う』という真実を手に入れるため、自ら長い長いトンネルに身を投じたのだった。

別々の大学を卒業した後、私はプロレスラーになるためにフロリダに渡り、彼は就職をして社会人になってゆく仲間達を横目に、再び受験生になる覚悟をした。

〝覚悟〟——。

それは簡単にできそうで、なかなかできるものではない。なぜなら〝覚悟〟をするというのは、世の中の〝絶対数の価値観〟、つまり常識に挑戦することになるからだ。

先日、ある漫画家の人と会った際、とても興味深い話を聞くことができた。

彼が言った。

「我々プロの漫画家よりも技術的には上手いアマチュアというのは確かに存在するはずです。プロとアマチュアの違いというのは、じゃあ何かと言うと、それは〝覚悟〟の違いだと思うんです。プロは、成功するのもプロの漫画家として成功し、同じく食いっぱぐれるのもプロの漫画家として食いっぱぐれてみせる。そういった覚悟、己の人生全てを捧げるという魂の美しさを持つ者のみがプロと呼ばれるべきではないかと思うんです。だから覚悟のない者はプロではないんです。たとえ上手くても決してプロではないんです。もちろん、プロとしての技術のない者は覚悟以前の問題なんですけどね」

まさにその通りである。プロは覚悟がみえるから夢の対象なのだ。そして覚悟のある人生は、老若男女・職業にかかわらず、きっと痛快であるはずだと思う。

バトラーツは〝世界征服〟をテーマに日本各地を回り、一周年を迎えた。

好きなものは好きと言いたい。

正しいと思うことは正しいと言いたい。

例え世界中が正しくないと意見しても、正しいと言い張りたい。

そしてそれを証明するために命懸けで生きる、そんな生き方がしたかった。そう、世界征服というのは侵略でもなんでもなく、生き方そのもののことなのだ。

作家の夢枕獏先生が著書の中でこのような内容のことを書かれている。

「世界征服の野望は誰の心の中にも存在している。例え退職間際の疲れたおじさんの心の中にだってその炎は確かに存在するのだ。小学生の男の子にとっての世界征服は、クラスで駆けっこが一番になることであったり、または好きな女の子を振り向かせることであったりする。（中略）しかしどうしたって自分より足の早い奴がいたり、自分より楽器をあやつるのが上手い奴が存在したりするのだ。云々」

以上、私の言葉で内容を表現したので本文とは異なる部分があるが御了承願いたい。

ともあれ、人はそういった闘いを何度も繰り返し、その度に自分の無力さを感じる。しかし、それでも世界征服の野望を捨てられずにいるのだ。

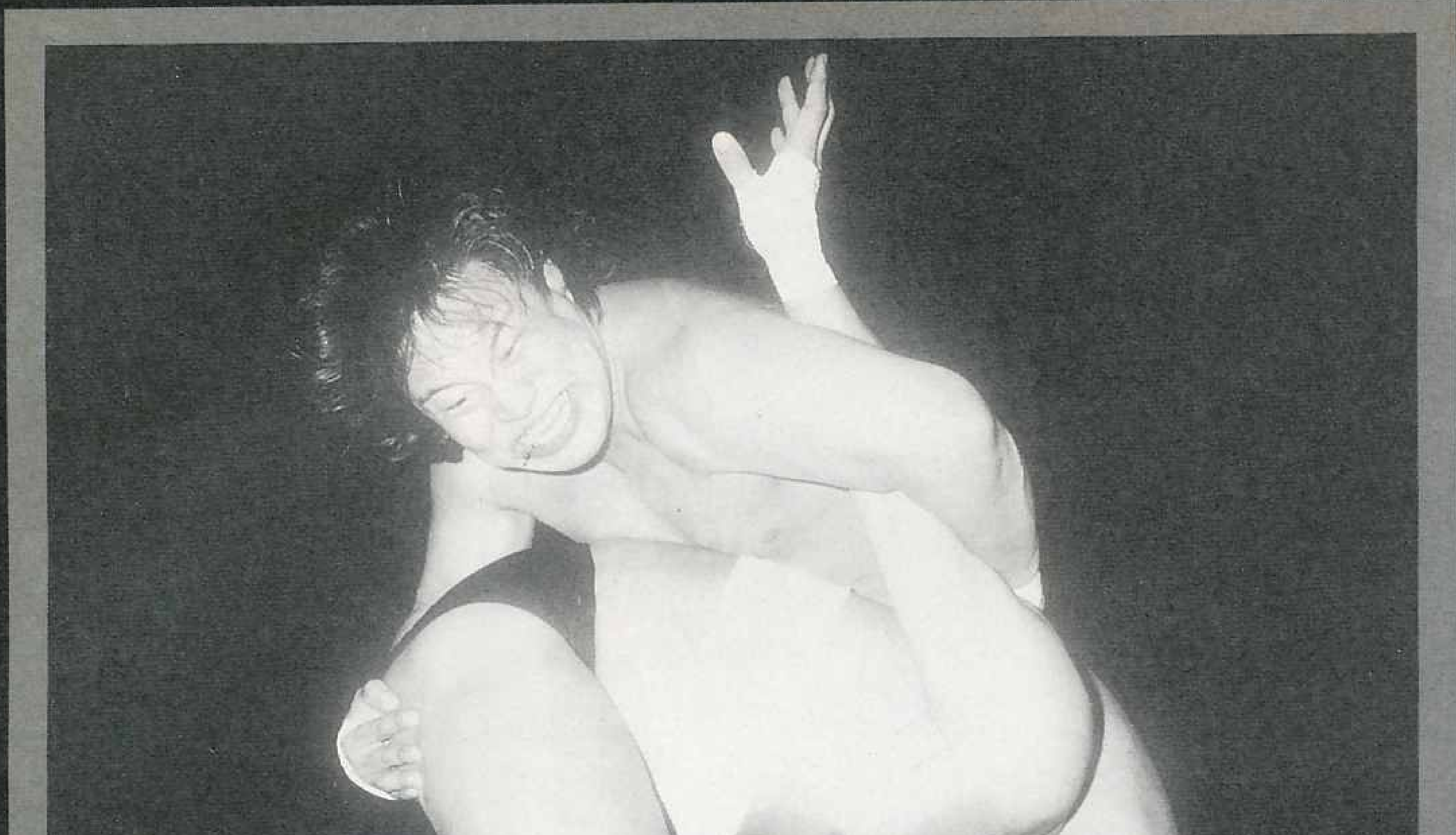
世界征服の野望を失った瞬間、人生はつまらなくなってしまうと思う。だからこそ皆の心の中に忘れられて眠っている、その人それぞれの〝世界征服の野望〟を闘いを通して掘り起こすことがバトラーツの野望なのである。

今の世の中、知識・情報ばかりが氾濫し、純粋に感動する心を忘れてはいないか。我を忘れるほど夢中になれるモノが少なくはないか。本来一番多感であるべき世代がなぜか醒めてはいないか。

世の中を引っ張っている人生の先輩達よ、今の世代を嘆く前に己を嘆け。

感動するモノを創造すべき己達自身の感性が渇ききってはいないか。多感な少年・少女達に何かを投げかけるべき己達が、他人の価値観に振り回されてはいないか。

我々バトラーツは、そういった〝つまらない大人達〟の代わりに、彼らに情熱的な生き方をみせていきたいと思っている。



「今、俺たちは地面に向かって掘り下げている時期なんだ。外からは何も見えないけれど、掘り下げた地盤が深ければ深いほど、あとで高くて頑丈な建物が建つんだ」

我々バトラーツの選んだ道は、メンバーそれぞれが開拓する過酷な〝自分探しの旅〟なのだ。

自分でぶち上げた夢、それに伴うリスクと責任、それらと真っ向から闘うことによってのみ生まれる魂の輝き。それを一人でも多くの人に感じてほしい。

一年間のうちに、北は札幌、南は博多・長崎まで行った。しかしまだ出会っていない人のほうがまったくもって多い。いま二年目を迎えた格闘探偵団は、まだ出会っていない人々に早く会いたくてウズウズしているのだ。

一年間というのは長いようで短いようで、とても不思議な感じがする。暦の上ではアッという間の感じがするけれど、一つ一つのシーンを思い出すと遥か昔のような気がするのは私だけだろうか。

地元・小田原での旗揚げ、そして夏祭りの夕暮れ。

バトラーツの故郷・越谷での試合、桜並木。

やまと焼き肉屋夏祭り、秋の越谷市民祭り。新潟から小樽へのフェリーの移動。

甲板で「ウチが儲かったら黒船を買いましょう……」と呟いた池田大輔の横顔。

大塚の凱旋興行、徳島大会での灼熱の野外リング。福島の人々の人情。

九州2大会の観戦ツアー、その後のファンの皆との狂乱の休日・飲み会。

全てが忘れられない思い出だ。

人生が思い出作りの旅とするなら、私は本当に幸せな人生をおくっているといえる。

昨年、冒頭でふれた私の友人が、ついに司法試験に合格した。十年越しの夢が叶った、いや叶えたのだ。

昔、夢の途中で彼が言った言葉を思い出した。

「今、俺たちは地面に向かって掘り下げている時期なんだ。外からは何も見えないけれど、掘り下げた地盤が深ければ深いほど、あとで高くて頑丈な建物が建つんだ」

当時何の力もなく、夢だけはでっかかった二人の猪木信者の高校生は十年の歳月を経た今、団体を背負うプロレスラーと、弁護士になっていた。

祝杯をあげる二人の立場は随分と変わってしまったが、杯の向こう側の彼の笑顔は、やはり昔のままだった。

格闘探偵団バトラーツ　石川雄規

紙のプロレスRADICAL第3号・読者プレゼント
日高っちょデート券♥当選おめでとう!!

日高郁人とラブラブデート。in浅草

［格闘探偵団BATTLARTS］

前号の読者プレゼントページに、まるで何かの穴埋めのように出された一つのプレゼント……。
それが『日高郁人デート券』である。バトラーツのインチキレフェリー兼広報の島田氏から
「日高のデート券ってどう？　バトラーツの世界戦略の第一歩として。じゃそういうことで、アディオス!」
と言われ、どうせハガキなんか来ないだろうけど、ダメもとで掲載したところ、これが意外や意外、
超が付くほどの大人気！　……ってのはウソだけど、そこそこの数のハガキを集め、見事、
人気プレゼントランキングベスト10入りを果たしてしまった。そして厳正なる抽選の結果、
神奈川県にお住まいの美和ちゃん（20歳）の手に、栄えある日高っちょデート券が！
新しいドラマが今ここに誕生した……。

取材協力／花やしき



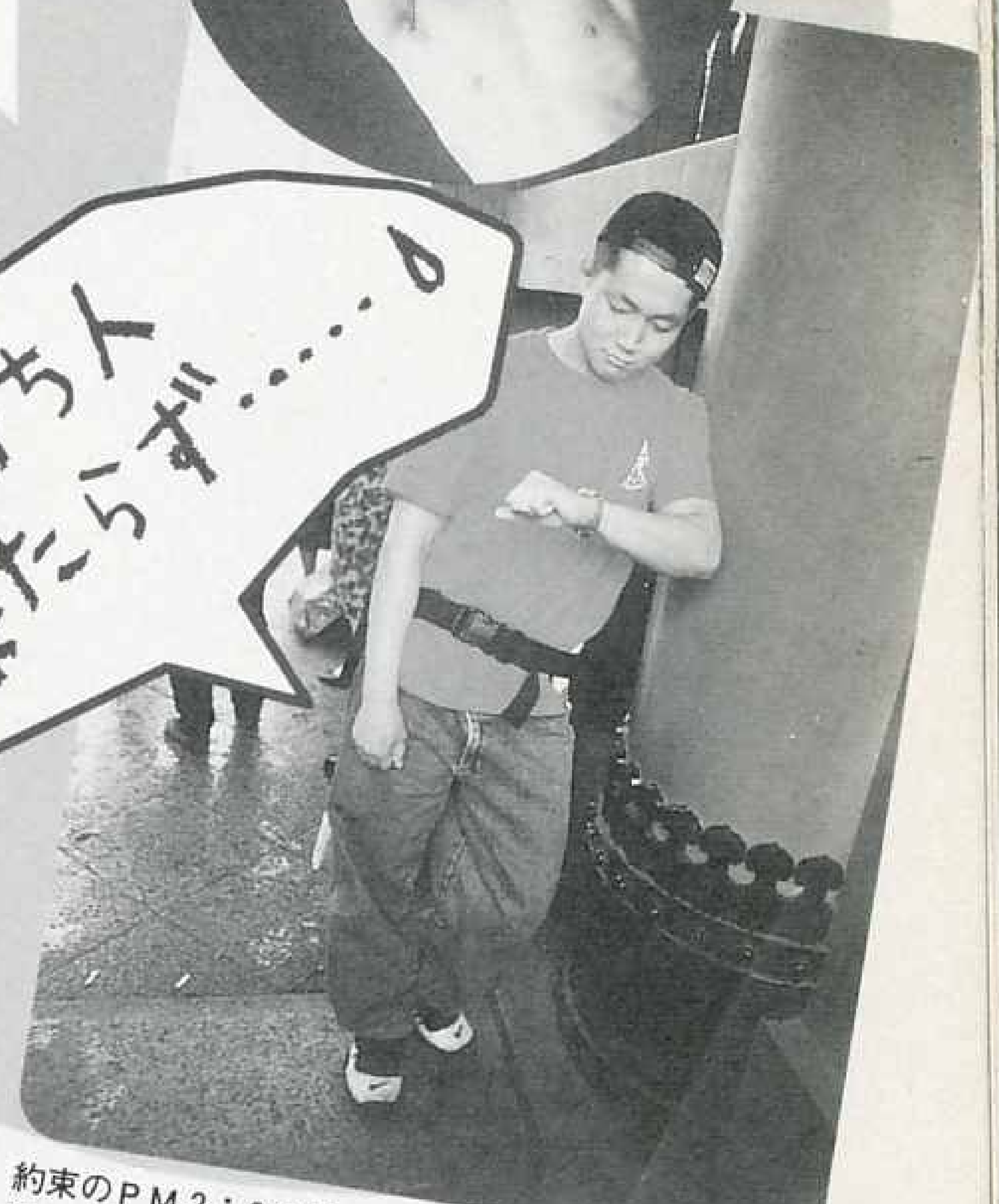
♥仲見世でショッピング～♥



「日高さん、髪の毛伸ばしてるんですか？」「うん、今度アフロヘアに挑戦してみようと思ってるんだ。似合うかな？」「じゃあ、このつけ毛でシュミレーションしてみたら？　あら、日高さん、けっこうイケてるぅ」「わぁお!!」



今日の日を楽しみに、前の晩あまりよく眠れなかったという美和ちゃんが、15分遅れて到着。出会ったばかりで、まだちょっとぎこちない2人。まずは、浅草仲見世通りでショッピングとしゃれ込もう！



約束のPM2：00を過ぎてもお相手の美和ちゃんは現れず、待ちぼうけをくらう日高っちょ。しかも天候はどしゃぶり。日高っちょ、日頃の行いが悪かったのかな？　スタートからつまずき、何だかイヤ～な予感。

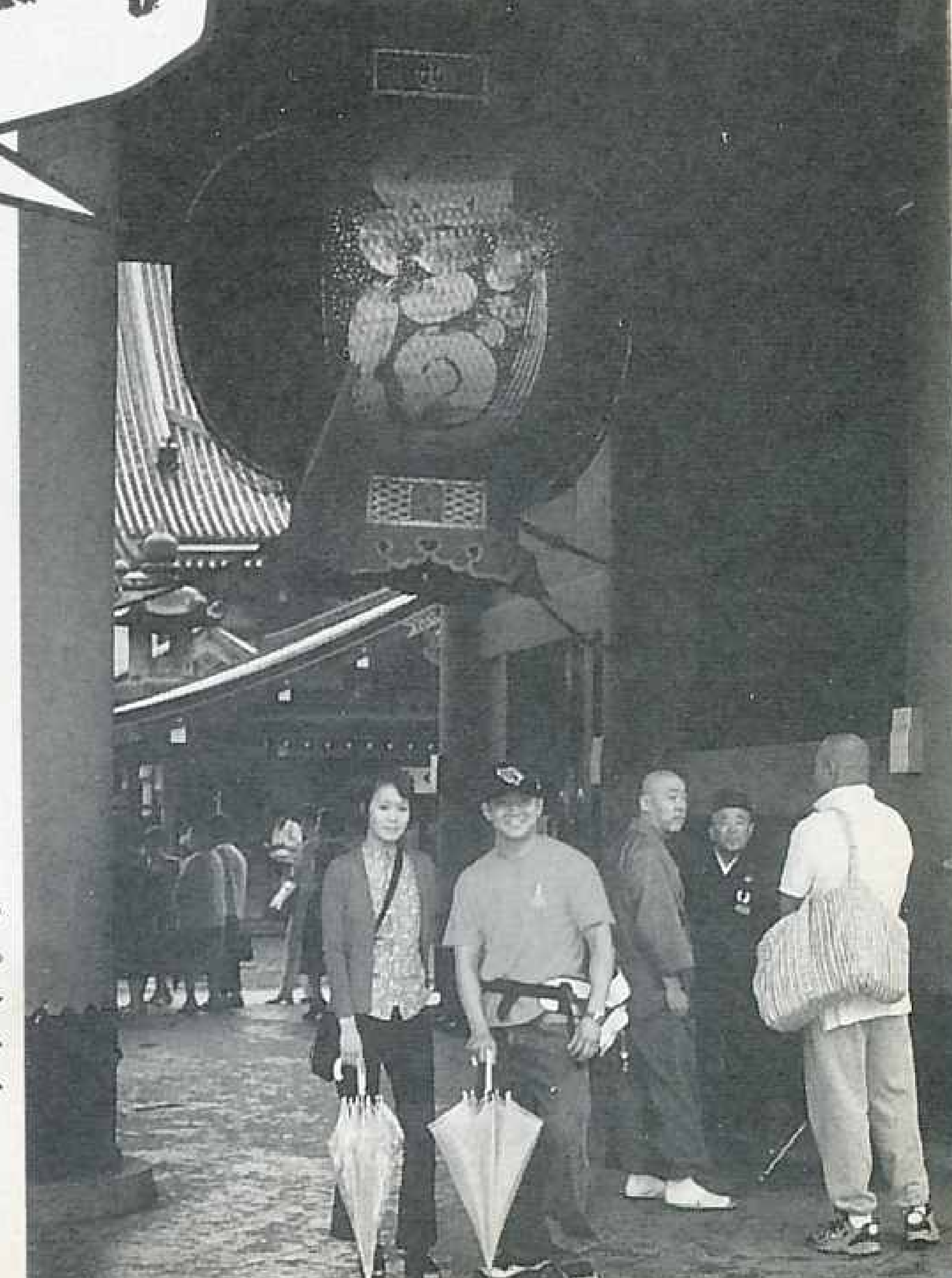
♥浅草寺でお参り～♥

美和ちゃんの気持ちをほぐそうと、賽銭箱の前で１万円札を出す日高っちょ。おいおい、台所事情が厳しいバトラーツ、そんなことしちゃっていいのかな？　と思ったらやっぱりジョークだった。美和ちゃんよりも、そばにいた婆ちゃん集団の方がウケてたよ。日高っちょ、ババアウケ度は上々。



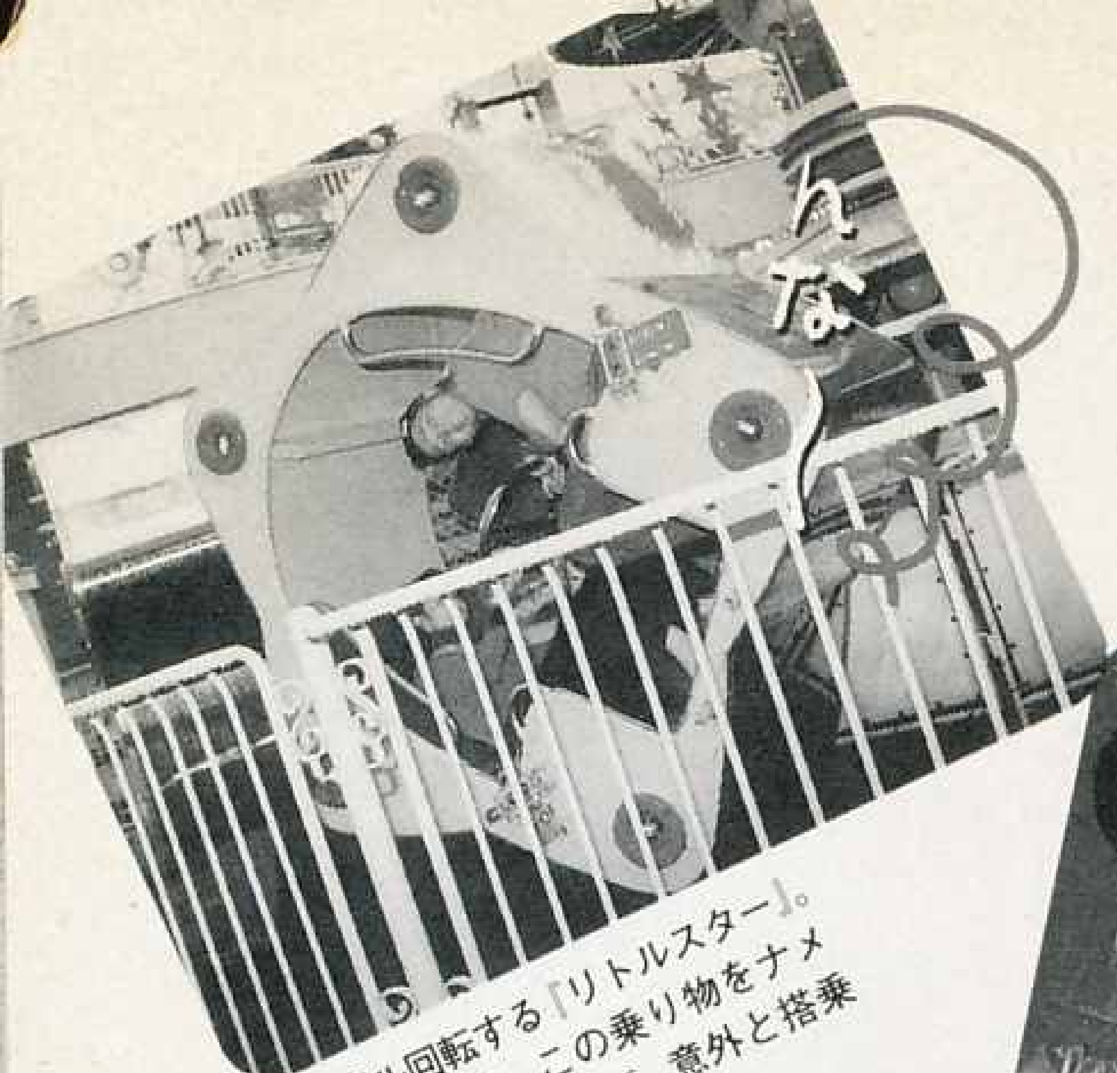


何か若者らしくないデートだなぁ。美和ちゃんの表情もどこかしら固いぞぉ。日高っちょ、ラブラブトークで美和ちゃんの気持ちをほぐさないと！



ラブラブショッピングで、すっかり打ち解けた２人。ここらで、ちょっと記念撮影。ややっ、後ろに坊主頭３人組が写りこんでしまってるぞ。南無阿弥陀仏……。ま、日高っちょも小坊主みたいだけどね。でも、やけにデカイ坊主が１人いるなぁ。

わあお!!!



グルグル回転する『リトルスター』。乗る前までは、この乗り物をナメていた2人だったが、意外と搭乗時間が長く、乗って後悔。

GO GO!! 花やしき



お化け屋敷を前にして、何故かはしゃぐ2人。2人っきりで行けばいいさ。行っちまえよ、どこまでも……。



わお！　若者のトレンドスポットとして今最も注目を浴びている『花やしき』だ。「下町のおもちゃ箱として、堂々健在でい」（花やしきパンフレットより）規模は小さいけど、遊び所は満載でい！



花やしきのシンボルタワー『Beeタワー』。「肩くらい抱いたらどうなんだい、ええっ！」と言う野次に負けて、無理な体勢で美和ちゃんの肩を抱く日高っちょ。ニヤついてる日高っちょとは対照的に、美和ちゃんは、至ってポーカーフェイスソルジャー。



占いの館で真剣に2人の相性占いをする2人。しかし、とても今日初めてデートするカップルとは思えないウソくさ～い結果に（下記参照）。ファラオの予言は、アテにならない……。

2人の相性占い ファラオの予言

姓名：ヒダカイクト
生年月日：1972年8月5日　土曜日
性別：男
血液型：O型

姓名：イシワタリミワ
生年月日：1976年6月16日
水曜日
性別：女

相性

今のあなた達を守護しているのはヘルシュエフ神です。ヘルシュエフ神は「湖上の者」と言う称号を持ち、畑から農作物を作り出す神です。この神は、あなた達が他人の交際を援助する事によって、二人に幸運が舞い込むことを暗示しています。

従順で優しいあなた達は、いつでも相手を思いやり、常に相手に対しての気配りが行き届いているようです。相手の気持ちを尊重し、理解し合えるあなた達は、かけがえのない存在の人に巡り会えたと言えるでしょう。

あなた達二人は、いつもお互いを向上させ合おうと思い、努力を怠らない素晴らしい恋愛をしている恋人達という印象を周囲に与えているようです。だから、周りの人達もあなた達のことを、憧れのカップルとして羨ましく見ているようです。

あなた達二人の運勢は好調のようです。それぞれ異性に大モテ!?　ということもあるかもしれません。お互い不安を抱くこともあるかもしれませんが、相手の新しい一面を見つけ、それが新たな魅力となってゆくので、二人の仲は深まってゆくでしょう。

自分のプライドを守ることは大切なことでしょうが、それが高すぎるのも考えものです。時には寛大な心で相手に接することも必要でしょう。プライドにこだわりすぎると、大切なパートナーを失ってしまうことも。つまらない価値観は捨ててしまった方が賢明です。

ゲーセンデートのお約束

プリクラ



2人の未来の子供



すっかりブラザーになってしまった2人の未来の子供像。これっぽっちもかわいくねぇ。っていうより、かなりヤバイよ、これ。

とりあえずメシ食っとく〜?



『浅草演芸ホール』の前にあった、落語家看板の前にて。日高っちょ、似合いすぎ……。それでなくても落語家顔しているのに。

オシャレな店に連れていくのかと思いきや、何故か魚料理専門店へ。この店けっこう高いよ、日高っちょ大丈夫? この後、当たり前のように手前のファミレスでディナー。



フランス座(ストリップ劇場)の看板の前で立ち止まる日高っちょ。美和ちゃんの目が冷たいぞ! クールアイ・日高っちょもたじたじ。って、それより、小屋から出てきた人、すっげー見覚えあるんスけど。もしかして、あの人? でも、あの人は確かホモだったハズ……。



川沿いのムード満点ポイントに移動し、仲良くスイートトークをかわす2人。って、それはいいけど、川から上がって来たのは何? もしかして、ア、アレ……?

すっかり夜の帳が落ちてイイ感じ〜のロケーションに。と思ったら、知らないうちに日高っちょの手が美和ちゃんの肩に! ん〜、日高っちょ、やるぅ〜。

「憧れの日高っちょとデートできて、今日はとっても楽しかったです」(by 美和) 来る前から考えてきたような社交辞令的な感想を残し、夜の街へ消えて行く2人。後は若い2人に任せて、我々は退散しますか。って、1日一緒にくっついといて今さら遅いよ! なーんちゃって、夜はこれからだぜ、ベイベー。って、それよりクールアイズカップルの前を歩くのは、やっぱり、んむはぁ〜のアレクサンダー選手……? わぁお♥



バトバト INFORMATION

デート券プレゼントは大人気だったけど、ファンレターはいまだ1通も来ない日高っちょ。みんな、もっと日高っちょを応援してあげようね。さてさて、只今バトバトの会場では、ご来場の皆様に携帯電話無料プレゼントを実施中! NTTドコモ、デジタル1・5G NM151を電話機本体、しかも新規加入料もすべて無料でプレゼントっちゅー太っ腹! 詳しくは会場で配布されているチラシを見てね! でもバトバトって、台所事情厳しいんじゃなかったっけ? って余計なお世話か。

な、なんと! バトバトが動物園にやってくる!
動物見て、プロレス見て、一度で二度おいしいプロレス業界初のドびっくりの試み。こんなこと考えるのは(できるのは!?) バトバトだけ〜!
7月21日(月) 千葉・市原市湘南動物園特設会場 ●バトルシート 6000円(入園料、プロレス観戦料、食事券) ●アートシート 5000円(入園料、プロレス観戦料)
※お得な観戦バスツアーもあるの〜!(詳しくはバトバト事務所まで!!) 石川社長はゾウに乗って、日高っちょはキリンに乗って入場してくるらしいよ。

バトバトフリーク必見!
7月13日(日) 午後4時から、ふく竹・両国店において、トークと鍋が楽しめる『ちゃんこバトル97』を開催しま〜す。記念すべき第1回のゲストは、なんと藤原組長! 組長&石川イカレポンチ社長の爆裂トークが炸裂! んむふぅ〜、これは楽しみだなぁ。料金は、ちゃんこ鍋&もつ鍋食べ放題、ドリンク飲み放題で7千円。これはお得!! 行くっきゃねえです!!

以上、詳細&問い合わせは、バトラーツインチキ事務所まで(TEL0489-63-0005)



「落とし前」と「世界征服」'97

Yuki Kondo

「実力主義のパンクラスがこんなことでいいんですかね」

「実力先行型」のキング・オブ・パンクラシストが船木、鈴木を語る

近藤有己

聞き手／Show
interview by Bitch
撮影／浜田孝一
photographs by Kouichi Hamada

―近藤氏、パンクラスではチャンピオンになると、副賞として何がもらえるんですか？

近藤 あれじゃないですか。パーフェクTVのアンテナとか。

―他には？

近藤 あと、フィットネス・プロテインとか。それは、いま道場のみんなで飲んでますけど。

―みんなで飲んでるってことは、個人的に副賞としてもらえるのは、アンテナとチューナーだけですか？

近藤 そうですね。

―それは、いまどこにあるんですか？

近藤 それは実家に送っておきました。

―親孝行ですね。変な話、ギャラがグーンと跳ね上がるとかは？

近藤 う～ん、どうなんでしょう。そうはいかないところがパンクラスなんですよ（苦笑）。そう簡単にいかないところが。

―それは近藤氏的には、改善しないといけない部分ですよね。

近藤 そうですね!!

―お、ちょっと口調が強くなった。

近藤 切実なところですね。

―確かにお金の問題は一番切実です。ところで、5月24日の神戸で、チャンピオンとして初めての試合をしたわけですけど、率直にどうでした？

近藤 入場する時に、自分がチャンピオンなんだなあって感じましたね。リングに上がって、チャンピオンベルトをしてるから、「オオーッ！ チャンピオンが来たよ!!」っていう感じで見てくれたんで、それがいままでと違うなっていうか。嬉しかったし、気持ちよかったし、かっこいいなと思ったし、フッ。

―自分で自分を？

近藤 はい。僕が何気なしに上着を脱いだ時にまた「オオーッ!!」っていう感じで。あれでチャンピオンを実感しましたね。いい意味で責任感を感じたっていうか。特にプレッシャーとかじゃないんですけど。

―初めての感覚ですか？

近藤 お客さんを意識したっていうか、お客さんの存在を感じたのは初めてぐらいですね。

―新しいガウンを着てましたけど？

近藤 あれはガウンじゃないですよ。『FILA』からもらったブルゾンです。

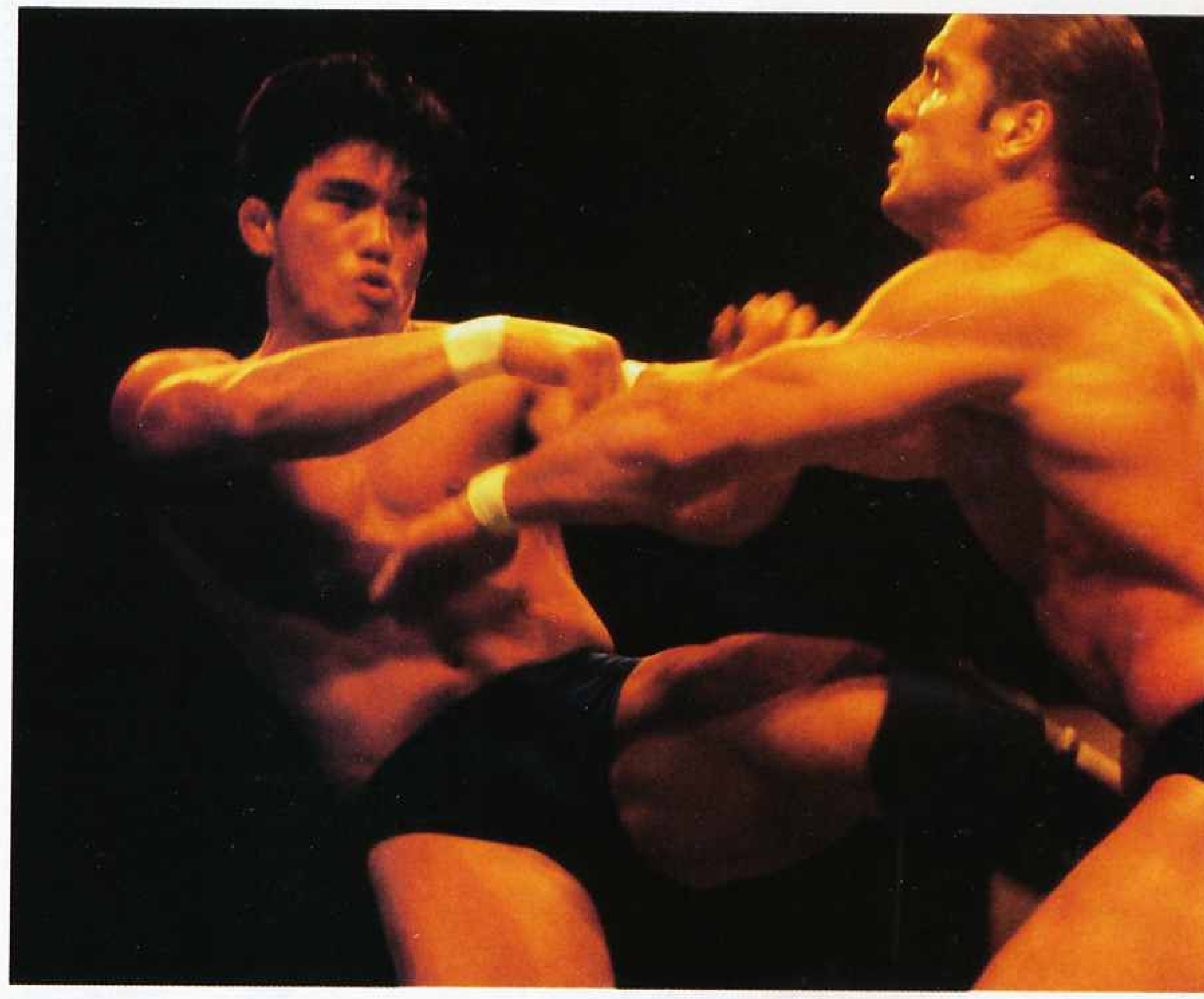
―いままで裸のままとか、Tシャツを着て入場したことはあったけど、上着を着ての入場はありませんよね。

近藤 はじめてですね。まだガウンていう柄でもないなと思うし。もっと年をとってからでも。

―ガウンは年寄りが着る物？

近藤 そう言うと、ちょっと誤解が生まれるかもしれないですけど、まだ若いじゃないですか。21歳でガウンを着て、まとまっちゃってもしょうがないじゃないですか。

―確かにまとまってほしくはないですね。それと、あの日は黄色いテーピングを巻いてリングに上がってましたよね。



「落とし前」と「世界征服」'97

近藤 あれはカッコつけただけですよ。サンプルで道場に送られてきてたんで、いいじゃないかと、フフフ。

―パンクラスのルールは細かいですけど、テーピングの色までは指定されていないんですね（笑）。

近藤 指定されてないです。

―正直な話、あの日の近藤氏の顔は、いつにも増して精悍な顔をしていたと思うんです。

近藤 ありがとうございます。

―ホントにプレッシャーはなし？

近藤 なかったですね。別にチャンピオンらしい試合をしなきゃいけないっていう感じじゃなくて、そういう試合がしたいっていうか。いつも何々をしなきゃいけない、じゃなくて何々がしたいんだ、っていう感じに思ってるんで。

―あのー、同じ日に近藤氏とダブルメインイベントとして、鈴木さんが7カ月ぶりに復活したんですけど、その試合見ましたか？

近藤 見てないですね。あまりにも（鈴木の）試合が早かったんで。

―その前の試合に出た近藤氏はまだ、勝利者インタビューを受けている途中だったんですね。

近藤 ちょっと見たかったんですよね。入場する姿とかを。試合後、何をするのかなとか。

―見てはいないけれども、会場の雰囲気は伝わりました？

近藤 そうですね。お客さんの反応とか声を聞いてたらわかりますからね。やっぱなんだかんだ言って、そういうとこは勉強になりますからね。鈴木さんのたたずまいとか。そういうのは盗んでいくものですからね。

―鈴木さんに聞いたんですけど、同じ控え室にいて、何かを話したとか。

近藤 あのー、それまで第1試合からみんながつなげてきてくれたんで、僕と鈴木さんとで最後をビシッと決めよう、まとめようっていう、そういうことですね。

―近藤氏の目から見て、鈴木さんは緊張してましたか？

近藤 どうなんですかねえ。緊張して



近藤有己

僕をメインにしないでどうするんだってことですよ

たって言えばみんなしてますからね。特に目立って緊張してたっていうのはないですけど。

――いつもの控え室と同じ雰囲気だった？

近藤　あの会場の控え室って広いですよね。試合数も少なかったんで、人数もあんまりいないし、いやすいなぐらいですね。あとは、試合もサクサク終わっていったんで。

――ただ、あの日は「ダブルメインイベント」と謳ってはあったけど、現チャンピオンの近藤氏が実質的にはセミファイナルをつとめて、復帰戦の鈴木さんが事実上のメインだったでしょ？

近藤　う～ん。結果的に見たら僕のあの日の試合がメインを張るより、鈴木さんの試合がメインを張る方が盛り上がったでしょうけど……。まあ正直に言って、いい気持ちはしなかったですよね。

――まだ言い方にとまどいが見られますけど、どんどん言っていいと思いますよ。

近藤　はい（笑）。でも、僕は自分の試合のあとにもうひとつ試合があるんだなんて考えずに試合はしましたよ。僕としては何番目であろうと自分の試合がお客さんの心に残って、会場をあとにしてくれれば、それがその人の心のメインじゃないですか。ただ、おいしいところを（鈴木に）全部もっていかれちゃいましたけどね（苦笑）。

――確かにそうでしたね。

近藤　なんだかんだ言って、あの日は鈴木さんの引き立て役になっちゃいましたよ。そう思いません？（笑）

――まあ（笑）。ていうことは、当たり前ですけど、興行の主役を張りたいわけですよね。

近藤　そうですね、主役をやりたいですね。

――やりたいし、「俺がチャンピオンなんだから、メインを張る資格は当然あるはずだ」と思ってるわけですよね。

近藤　そうですね、僕をメインにしないでどうするんだっていうことですよね。団体としての、何て言うんですかね。チャンピオンが一番最後っていう。相撲だってそうじゃないですか。人気とか関係なしに、千秋楽は横綱（の取組み）が最後ですから。実力主義のパンクラスがそんなことをやっていいのかなっていうか。

――それは誰に対して言いたいですか？

近藤　……会社ですね。

――すばらしい発言です（笑）。

近藤　その興行のメインを張るっていうのは、チャンピオンとして約束されたポストじゃないですか、もうほとんど。ていうことは会社にまだその辺が認められてないのかなっていうか。

――そうやって、言いたいことを言わないとプロレスらしくないですからね。でも、チャンピオンになって取材は増えたでしょう。

近藤　僕も忙しくなると思ったんですけど、そんなこともないですね。逆に鈴木さんの方が……。

――ああ、復帰前で。とすると、それも近藤氏のムカつく要因なわけですね。

近藤　そうですね（笑）。

――それはそうと、鈴木さんが復帰した日のパンクラスは、控え室は同じだったからかもしれませんけど、あきらかに会場は、いつもと雰囲気が違ったと思うんですよ。

近藤　やっぱ会場の色が、いままでは船木さんの色だったんですけど、船木さんがいなくて、鈴木さんが復帰してリングに上がるわけじゃないですか。だから鈴木さんの色っていうのがあったんじゃないですか。よく言われる「鈴木派」と「船木派」の違いって。僕もチャンピオンなのに、そんなところに染まってちゃいけないんでしょうけど（苦笑）。確かに何か僕も思いましたね。最近のパンクラスの空気と違うっていうか。

――それは単に、鈴木さんが最終試合をつとめたからなんですかねえ。


近藤　う～ん、そうなんですかねえ。お客さんの見方も変わるんじゃないですか。

――もし、近藤氏があの日の最終試合をつとめていたら、違ったものにさせられた自信はありますか？

近藤　そうですねえ、ないとは言えないです。

――とすると、次に近藤氏が出る6月30日の博多での大会で「近藤、メインを頼むぞ」と言われた時には、近藤色に染めないといけないですね。

近藤　鈴木さんがいる日の興行で、僕色に染まったらいいと思うんですけど。



―近藤派をつくらなきゃいけないですね（笑）。

近藤　はい（笑）。確かに次の6月18日の後楽園（鈴木がメイン）と、6月30日の博多（近藤、船木が出場）って違うような気がしません？

―それはどういう意味ですか？

近藤　出場選手とか見ると、色が違うような。

―ということは、鈴木さんの復帰した日は、見ている僕らも違うと感じたし、やる方からしても違うと感じたわけだから、やっぱり何か違ったんですね。

近藤　やっぱ、船木さんの出る日の試合っていうのは、「見させてもらいます」っていう感じがするじゃないですか。

―礼儀正しいというか。

近藤　鈴木さんの出る方は、鈴木さんが「見ろ、この野郎!!」じゃないですけど（笑）。そういうところでお客さんも違うんじゃないですか。

―近藤氏的にはどっちがいいですか？

近藤　両方好きですよ。両方のいいと

「落とし前」と「世界征服」'97

ころを吸収して、ハイブリッドしていきたいですね。

―よくできました（笑）。

近藤　フフッ。

―あのー、パンクラスのリングでは1年4か月でチャンピオンになってしまうわけですけど、他団体の同じくらいのキャリアの選手に関して意識はしますか？

近藤　しないです。他のプロレスラーとか全然意識しないですね。

―たとえば、新日本のnWoとかリングスとかも含めて同じ業界の人間だという意識はあるんですか？

近藤　「プロレス」っていう大きな意味で含めたらありますけど、特にファイターとしては何も感じないですね。

―日本人、外人を問わず、目にとまった選手はいませんか？

近藤　いないですね。

―子供の頃はプロレスファンだったんですよね。

近藤　そうですね。

―その頃に好きだったプロレスの路線とは、外れてしまったんですかねえ。

近藤　外れてますね。僕の頭の中にそ

近藤有己

「格闘技的には俺が勝った」――船木さんらしくない発言でしたね

ういうのはなくなってきましたね。あまりテレビでプロレスも見なくなってきたし……。

――なんでなんですかねえ。

近藤　……。

――じゃあ、話を変えて、4月27日のNKホールでの試合のことを少し聞きたいんですけど、あの日の第1試合では、みちのくプロレスのTAKAみちのく選手と、山宮恵一郎選手の一戦がありました。

近藤　あれは山宮にビシッと決めてほしかったですね。山宮は緊張しすぎじゃないですか。もっと殺気を出してほしかったですね。ここはパンクラスなんだっていう。

――なぜ緊張してしまったと思います？

近藤　絶対に負けられないっていう、そればっかり考えちゃったんでしょう。試合の何日も前から、すごい緊張してましたからね（笑）。

――見ていてわかるくらい？

近藤　はい。

――何か声はかけました？

近藤　まともなことを言ったんですけど、忘れましたねえ。あいつが緊張してたんで、「緊張するな」みたいなことを言いましたよ。あと、あいつは、自分に自信を持たない男なんで。

――自分に自信を持たない男（笑）。

近藤　自信がなさすぎですね。自信を[illegible]やったら、もっとバシッと決め[illegible]思いますけどね。

――[illegible]合は、一種の他流試合的なものだったと思うんですけど、近藤氏はそういう試合はどうですか？

近藤　やってみたいですね。ただ、この間、初来日の選手とやったんで。

――初来日の選手だと、何をやってくるかわからないから、他流試合に近いものが感じられると。

近藤　そうですね。

――この間の試合って、相手の選手が反則か何かを取られましたよね。

近藤　ああ、相手のミドルが僕のキン○マに当たったんですよ（笑）。ただ、それだけです。ファールカップをしてたんで、全然痛くはなかったんですけど。あれを見て、お客さんが「すげえな、近藤にはキン○マも効かねえよ」って、思ってくれたらいいなあと（笑）。チャンピオンになると、キン○マも効かねえのかよって。

――チャンピオンは違うなと？（笑）

近藤　ええ。

――それから、4月のNKでは、二度目の船木戦があって、近藤氏が勝ったわけですけど、率直なところ、あれから1カ月経って、あの試合は近藤氏にとっては何だったと思います？

近藤　そうですねえ………。ひとつの区切りっていう感じですね。

――それは、通過点という感じですか？

近藤　いや、ひとつのゴールではありましたけど、また新しい道も続いてるんで。ただ、ひとつ何かをやり遂げたっていうのはありますよね。

――変な話、ボクシングなら世界タイトルをとるために頑張って、タイトルをとったら防衛して引退するっていうのが理想的というか、ひとつの求められるパターンですよね。

近藤　理想的なのは、体が動かなくなるまで何十年と防衛し続けて引退するっていうんでしょうけど、まあどっかでとられるかもしれないですし。それで引退する気もないですし。

――でも、初防衛は最低でもしたいと。

近藤　そうですね。

――2度目の対決でしたけど、闘ってみて、船木さんはどうでした？

近藤　やっぱり強いな、思うようにはいかないなっていう。僕自身が、ちょっと躊躇してるんだっていうのがありましたからね。あの試合のビデオを見ても、僕自身もあんまり動きとか良くないし、試合的に見てもあんまり面白い試合ではないなっていうか。

――船木さんとの試合前に「穴を見つけた」と言ってましたよね。

近藤　最近、打たれ弱くなってるなってことですね。あと、穴っちゅうか、長期戦に持ち込めば、勝機もだんだん増えてくると思ったんで。短い時間だと、スキも生まれてこないですから。僕はどっちかって言ったら、逆に時間が経てば経つほど乗ってくる方なんで。

――あの試合の後に、船木さんが「試合には負けたけど、エスケープは俺が先にとったし、格闘技的には俺が勝っていた」みたいなことを言ったんですけど、どう思いました？

近藤　そういうことを言うと思わなかったですね。らしくないっていうか。

――船木誠勝らしくない。

近藤　だったら、そういうルールにすればいいじゃないですか。パンクラスのルールは5ロストポイントまでは許されていて、初めて試合が成り立つわけですよね。そんなこと言うんだったら、お客さんの見ているリングで闘う意味ないじゃないですか。

――確かに、考えるほどに興味深いコメントでしたよね。

近藤　どうなんですかねえ、どうせ（近藤が）勝つならビシッと勝ってほしかったんじゃないですか。

—それでも船木さんの言った、「甘い」という点は、自分でも感じた？

近藤　甘いですね。

—ただ、やっぱり船木さんのコメントは勝った人の言うコメントという感じでしたね。

近藤　変なコメントでした。

—それだけ変なコメントを近藤氏が言わせたのかもしれない。

近藤　ああ……。僕も、変だなあって感じでしたね。何か複雑な。

—そういえば、去年の11月に船木さんとリングで試合をしたあとに「一生ついていきます」って言ったんですよね。

近藤　はい、言いましたよ（笑）。

—あの時と、いまの気持ちではどうですか？

近藤　変わりはないですよ。

—一生ついていきますか。

近藤　状況がこれからどうなるかはわからないですけど、気持ちは変わらないです。

—それはまったく変わらないですか？　それとも、この半年で「この部分は変わった」みたいなのはありますか？

近藤　でも、あの時点で、一生下っぱとしてついていくっていう意味じゃないし、一生お供する家来っていう意味じゃなかったんで。

—でも、船木さんに勝った時に「近藤が勝った」ということよりも、「船木が負けた」という方がスキャンダルとしては大きかったですよね。

近藤　ああ。それはしょうがないですね。しょうがないっちゅうか、いままで積み上げてきたものが違うわけですから。

—正直な話、近藤氏が注目されたのは、去年の6月に鈴木さんに勝ってからだと思うんですよ。

近藤　僕としては、デビュー戦の時から、当時、「天才」と言われた伊藤崇文に勝ったっていう、あれからはじまってると思うんですけど。

—でも、鈴木さんに勝った時からは、注目度も違ったでしょう。

近藤　僕自身としては、たいしたことをやったっていう気はなかったんですけど、周りが騒いでるっていう。

—で、今度は船木さんにも勝ったし、同時にチャンピオンにもなっちゃった。

近藤　実力先行型ですね。人気よりも結果が先に出てきてる人だなあっていうか。

—船木誠勝、鈴木みのるをうまく利用したというか、理想的なパターンですよね。

近藤　あっ、そうですか？

—だと思いますよ。

近藤　だったらいいと思いますよ。逆に、先に人気が出てきて、勝っていくっていうのもそれもそれじゃないですか。みんなに知られていない人間が勝っていって、それからみんなに知られていくっていう感じだと思うんですけど。

—デビューする前に、こんなに早く両巨頭を倒せるなんて思ってました？

近藤　思ってなかったですね。

—正直な話、デビューする前に船木&鈴木と試合するなんて、考えたことあるんですか？

近藤　なかったですよ。2～3年は第1試合、第2試合でやってるのかなあと（笑）。で、海外遠征に行って、ちょっと強くなって帰って来て、そこから中堅になって、しばらく頑張ったらメインとかに食い込んでいけるかな、と思ってました。こんなに早くトントン拍子でいくとは思わなかったですね。

—とまどってる余裕もないですか？（笑）

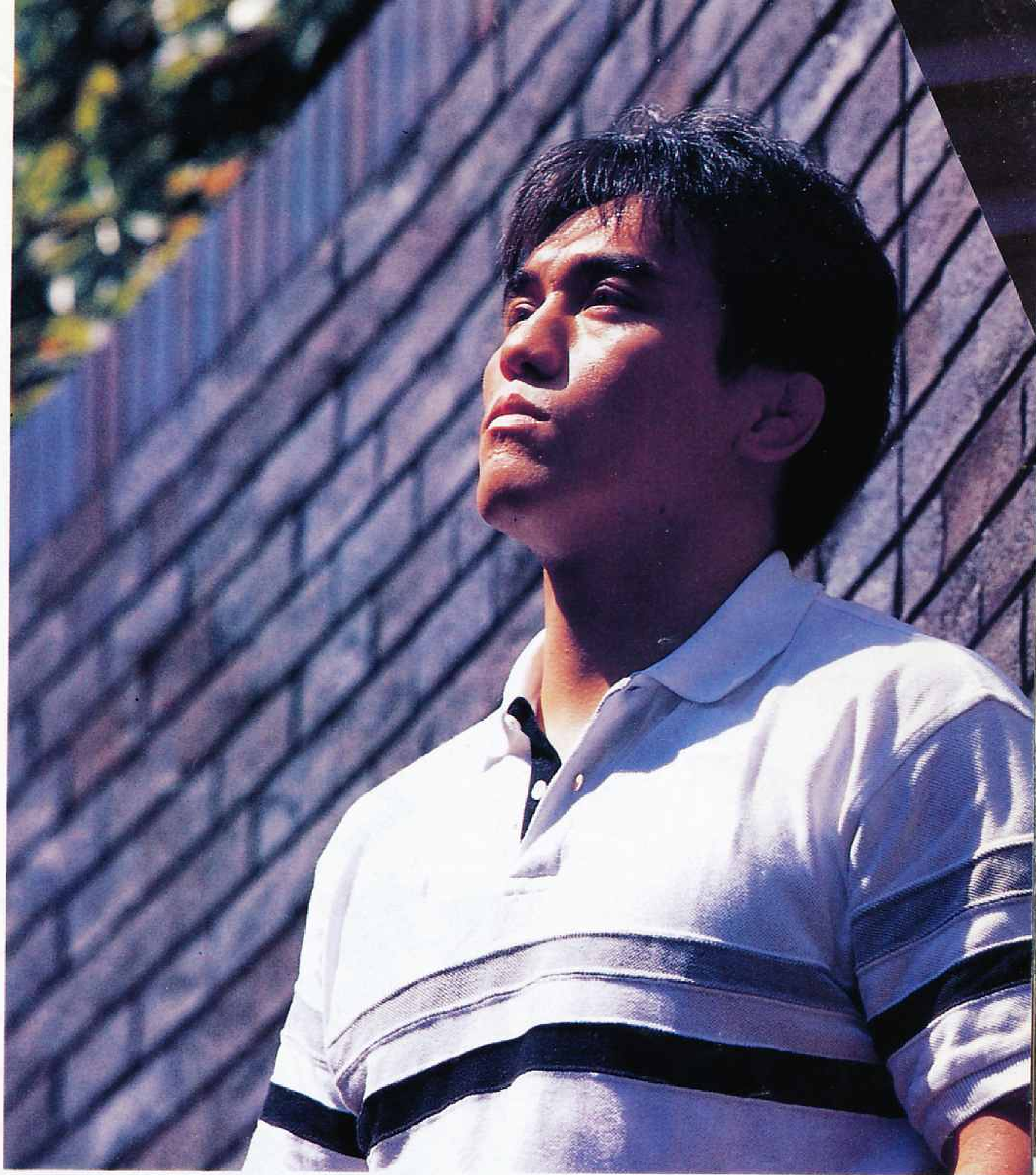
近藤　ホント、そんな感じですね（笑）。

—船木さんと鈴木さんに言われた言葉なり、いたずらとかで覚えていることはありますか？

近藤　いろいろありますけど……。やっぱ怒られたこととかって、結構気にしちゃいますよね。

—何を言われたんですか？

近藤　ある日の夜に、突然船木さんが道場に来て、「近藤、スパーリングをしょう」って言われたんですよ。で、



近藤有己

やったら、船木さんが疲れてきて、僕が優勢になったんですよ。そしたら、船木さんがムキになって、ローの連打で僕がダウンされて、その時の殺気がすごかったから、それは覚えてますね。すごい殺気だったんですよ、その時に。

――デビュー前で坊主頭だし、名前もまだ本名の近藤有己（たもつ）っていうひとりの練習生に対してムキになったんだ。それはいつ頃の話ですか？

近藤　練習生になって1年も経ってない頃ですね。何月だったのかは忘れましたけど。



――まだ近藤氏が10代の頃じゃないですか。

近藤　僕に対してムカついてるんですよ（微笑）。

――ちょっと嬉しかったんじゃないですか？

近藤　嬉しい反面、やっぱ怖かったですね。あと、伊藤さんに対してもキレたことがあって、怖かったですね。別に僕がやられてるわけじゃないんですけど。

――じゃあ、鈴木さん関連で何か覚えてる話はあります？

近藤　鈴木さんにはよく怒られたんで。

――「スクワット１０００回」とか言われませんでした？

近藤　そういうのはなかったですね。

――えっ、それは意外です。じゃあ、何を一番怒られるんですか？

近藤　「練習をタラタラやってんじゃねえ!!」って。あと、どっちかっていうと鈴木さんはすぐ怒る方っていうか、小出しにちょこちょこ怒ってるんで、

僕は実力先行型ですね、人気よりも結果が先に出てる

一気に爆発するっていうことはないんですよ。逆に船木さんは普段怒らないから、いざ怒ると爆発しちゃうんですよ。それが怖いですね。

――どっちが怖いですか。

近藤　っていうか、違う怖さですよね。やっぱりいまだに船木さんと鈴木さんが道場に来ると、ちょっと空気が変わりますしね。

――近藤氏にとって、船木誠勝って何ですか？

近藤　やっぱ船木さんは僕にとって特別な存在ですね。僕の目標っていうか、船木さんという人間がいて、はじめていまの僕があると思うんで。

――じゃあ、鈴木みのるって何ですか？

近藤　……強敵ですね、フフッ。

――船木さんは強敵じゃない？

近藤　あんまり敵っていう意識はないですね。

――鈴木さんにはその意識があるんですね。

近藤　いま僕に「挑戦する」って打ち出してますし。船木さんがまたガーッて来て、「近藤を潰してやる」とか言われたりしたら、またちょっと変わると思いますけど。ただ、もしも船木さんがそういうことを言っても、船木さんは僕にとって特別な人なんですよね。鈴木さんに対して「強敵」ってイメージを感じるのとは違うって気がしますね。

――その鈴木さんが「挑戦権を奪って、近藤戦に臨みたい」というような宣言をしてましたけど、チャンピオンとしてはどう思ってますか？

近藤　僕としては臨むところですね。ただ、それはもう鈴木さんが頑張るしかないじゃないですか。僕の方からは別に逆指名する気もないんで。鈴木さんが最強のチャレンジャーと認められる闘いをして上がってこなければいけないわけですよね。

――じゃあ、去年の6月に鈴木さんに勝ったことがありますけど、今度はチャンピオンとして挑戦を受けるわけだから、胸を貸すっていう気持ちはありませんか？

近藤　それはないですね（笑）。僕としては、前回は判定だったじゃないですか。実力的にもそんな追い抜いたっていうのもなかったと思うんで、誰にも文句を言わせないような勝ち方をするだけですね。僕がチャンピオンなんだっていう。誰からも認めさせられるような試合で勝ちたいですね。

――誰の挑戦でも受けると。

近藤　初防衛して初めてチャンピオンだって言われるじゃないですか、ボクシングの世界なんかだと。それに、パンクラスでは日本人は誰も初防衛はしてないんですよ。

――そうか。鈴木さんも船木さんも初防衛戦でベルトを奪われてるんですね。

近藤　だから僕はビシッと決めたいですね。

――ただ、鈴木さんは、近藤さんがベルトを奪った試合後のリング上で言った「時代が変わった」発言に対して、「近藤の『時代』っていうのはベルトを奪うだけ、そんな程度なのか」みたいなことを言ってましたよね。あの発

直接身体（からだ）でわからせてやりますよ鈴木さんには

言に対しての率直な感想は？

近藤　パンクラスって実力主義じゃないですか。だからベルトをとることが時代を変える。単純に考えたらそうだと思うんです。

——それでも鈴木さんは「そんなことなのか」って言ってたと思うんですよ。

近藤　それで納得しないんだったら直接……。

——身体（からだ）でわからせてやると。

近藤　その時に強い人間が勝って一番になるっていうのがパンクラスだったじゃないですか。僕はそれを証明しただけであって、そういうことを言われるとは思わなかったです。

——ということは、4月にベルトを取った試合後に、船木&鈴木の両者ともに近藤氏にとっては「何てことを言うんだ」っていう発言が続いたわけですよね。

近藤　自分たちが旗揚げから言ってきたことを、自分たちで無にしたことになるっていうか、そういうふうに思いますけど。

——実力で見せるのは当然だということは鈴木さんもわかっているはずですよね。とすれば、果たして鈴木さんが言いたかったことは何なんだと思いますか？

近藤　やっぱりアレなんじゃないですかね。キング＝その団体のエースではないっていうか。

——じゃあ、近藤氏の考えるエースっていうのは何でしょう？



「落とし前」と「世界征服」'97

近藤　僕を見たいってことで、観客を集められる人間ですよね。

——それから、鈴木さんは「パンクラスにはプロレスラーは俺だけだ」と言ってますけど、その発言を受けて聞きたいのは、近藤氏自身は自分が「プロレスラー」だという意識はあるのかってことなんです。

近藤　そうですねえ。あるって言えばありますし。

——それよりも、ファイターなのかアスリートなのか。

近藤　そうですね。僕はやっぱりそっちの方が……。

——意識が強いと。とすると、鈴木さんがメインをとった試合が、いままでとまったく違ったことから考えると、エースの条件としては、鈴木さんの言う「プロレスラー」の方が会場を沸かすのに、より近いんじゃないかと思うんですよね。

近藤　そうですね。

——そうですねえって認めちゃいますか（笑）。

近藤　現時点ではそうなんじゃないですか。

——そうなってくると、鈴木さんは邪魔になってきますよね。

近藤　いや、邪魔でもないんですけど。

——でも、もっと観客に見せるということを考えないといけないですね。

近藤　見せるとかいうのは、僕はつくるのが嫌なんですよね。

——自然体でいきたいってことですか。

近藤　まあアスリートとして、それでお客さんが入るのが一番なんですけど。

——じゃあ、鈴木さんは試合をつくろうとしてるとは感じます？

近藤　そう……。いや、わかんないですね。

——じゃあ、近藤氏は「ファイター」「プロレスラー」「アスリート」の3つの中で、一番呼ばれて気持ちのいいものはどれですか？

近藤　僕はやっぱりアレですね。「ハイブリッド・レスラー」って呼ばれる方が嬉しいです。

——ヌハハハ、いやあ、すばらしいですよ。「3つの中から選べ」って言われて4つ目を答えるなんて、やっぱり立派にプロレスラーなんじゃないかと思いますよ（笑）。

（97年5月26日・パンクラス事務所にて収録）

パンクラス6月7月8月の興行日程

●6月30日　博多スターレーン（19：00）
『ALIVE TOUR第7戦』
「近藤有己VSセーム・シュルト」
「バス・ルッテンVS冨宅飛駈」
「ガイ・メッツァーVS山宮恵一郎」　ほか全6試合。

●7月20日　後楽園ホール（昼＝14：00　夜＝19：00）
『NEO BLOOD TOURNAMENT DAY&NIGHT』
恒例となった若手選手ナンバー1を決める昼夜興行。

●8月9日　大阪・梅田ステラホール（18：00）
『PANCRASE道場対抗戦』
今夏オープンする広尾道場組（船木派）VS横浜道場組（鈴木派）の団体対抗戦。対立する船木と鈴木の理念と意地が激突するパンクラス初の試み。白熱必至、期待大！



「いつまでも追っかけてたら、かわいそうですよ、高田さんが」

Kenichi yamamoto

聞き手／坂井ノブ
interview by Nobu Sakai
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito

プロレス界には地位とお金と名誉が足りない!!

Kenichi yamamoto

山本 今日は何で、ボクのインタビューをしようと思ったんですか？

——キングダムの旗揚げ戦で、第一試合が一番面白かったんですよ。ルールが変わって、何を伝えたいのか分かりにくい状態ではあったんですけど、山本さんの試合では十分アツイものが伝わってきましたからね。

山本 そうですか。そう思ってくれる人が1人でもいれば……。試合中っていうのは観客とも勝負してるんですよ。ボクの名前覚えて帰る人が一人でも多くいれば、ボクの勝ちなんですよ。

——で、キングダムは、まずルールがUインターとは大きく異なりますよね？ だから闘いのテーマもUインター時代とは変わってくると思うんですけど、何か自分の中で変化はありましたか？

山本 最初はちょっと戸惑う部分もあったけど、だんだんおもしろいんじゃないかなって思えるようになったね。それに丁度、それまでアルティメットに向けて練習してましたんで。

——あ、そうなんですか？ Uインター時代から？

山本 それはウチが解散してから。そういう意味ではグローブ付けるのは同じだからね。（コンコン、とドアをノックし、キングダムの広報・志野氏が現れる）あい～や（渋い声で）。

——「あい～や」というのは口癖なんですか？

山本 「あい～や」はボクの口癖と言うか、ボクの家族はみんな「あい～や」って言うんですよ。

——あい～や族！

山本 そうそう（笑）。「あい～や」、良かったら流行らして下さい。

——今はどんな練習をしてるんですか？

山本 今は特に基本的なレスリングですね。バルセロナオリンピック代表の安達さんが来てくれてますんで、もっと面白くなっていくんじゃないですか。個人的にボクシングの大橋さんのところに練習させてもらいに行ってますし。

——ほう！

山本 ついこないだまでは、頭がアルティメットに向いてたんですけど、キングダムがスタートしましたからね。「よっしゃ、キングダムでNO．1になってやろう」っていう気持ちに変わってきましたね。

——今はどっちが強いんですか？

山本 まずキングダムですよ。自分の本分をしっかりやって、自信が持てたら、どんどん挑戦していきたいとは思いますけど。アルティメットには、闘いたいヤツがいるんです。

——それは誰ですか？

山本 こないだアメリカのアルティメット大会で優勝したビクトー・ベウフォードという選手なんですけど、彼がボクと同年代、19歳なんですよね？

——山本さん、今ハタチですよね？

山本 そうです。今年21歳。まだド新人です（笑）。

——ボクもそうなんですよ。

山本 あい～や（笑）。同い年じゃないですか！（がっちり握手）

——やっぱり19歳の若者がアルティメットで優勝したのは衝撃的でしたか？

山本 そうですね。オレ何してんやろ？って思いましたから。

——目標を失いかけてた状態だった？

山本 それを雑誌で見た瞬間「あ、これや！」と。アルティメットって、ボク自身それまで批判的だったんですよ。プロレスラーが挑戦して負けたら「ケンカに負けた」って言われるじゃないですか。納得いかないとこが多々あって。ムカついてたんやけど!!

——「ケンカに負けたって言われてムカつく」っていうのが山本さんらしくていいですね。山本さんのケンカってどういうことしてたんですか？

山本 こんまい頃（小さい頃）からケンカして育ちましたからね。まぁ、中学生の頃は腹が立つことばっかりで、その憂さ晴らしにケンカをふっかけることもありました。確かにね。

——え、どんな？

山本 肩をぶつけて、「すいませーん」て謝るんですよ。向こうは怒るじゃないですか？「テメーこの野郎！」って。そうしたら、しめたモンで、路地裏連れて行かれるんですよ、ボクが。そこでやるんですよ。人が見てる前でやったらダメですよ。

——なんでですか？

山本 ボクが人前で勝ったとしたら、そいつは一生恨むでしょう。そんなの闇討ちされても文句言えませんよ。

——闇討ちされてもやってやるぞっていう気構えは？

山本 確かに、来たらやりますけど、それじゃダメだってことに気付いたのは恩師に出会ってからですね。

——ほう。

山本 田島晴雄さん、恩師に出会わなかったら……。大阪の日本橋でケンカ空手並びにムエタイのジムのオーナーやってた人で、門弟何千人ているんですけど、その中に田中正悟（前田日明

大山倍達や前田日明の本を読んで、「オレ全然負けてへん」って思った!!

の空手の恩師）さんがいはったんですよ。田中さんはボクの師匠に教えてもらっていたんです。

——ほう。

山本　その田中さんのところに前田さんがいたっていう話は有名ですよね。ボクも『パワー・オブ・ドリーム』を必死になって読んでましたからね（笑）。ボクが初めて文庫本読めたのが、それなんですよ。漢字わからなかったら辞書引いたりして、線引いたりして。

——プロレスに興味はなかったんじゃないですか？。

山本　いや、強いっていうのを聞いたモンだから……たまたま、本屋行ったら前田日明『パワー・オブ・ドリーム』ってあったから、「ちょっと見てみようかな……」っていうんでのめり込んだんですよ。強いって聞いて、大山倍達さんの『強くなれわが肉体改造法』とか読んだりね（笑）。そこからなんですよ。「なんや、オレ、全然負けてへんやん」って。

——エッ!!　負けてない！

山本　昔、憂さ晴らしでケンカしてたとかいうのを読んで、「何や、オレの



5・4代々木競技場第二体育館で行われたキングダム旗揚げ戦。山本健一はその大事な第一試合を託された。ボコボコの乱打戦の末、7分14秒、裸絞めで金原弘光の勝ち。

「落とし前」と「世界征服」'97

方がすさんどるなぁ」とかね。
――その2冊に勝てる人はなかなかいませんよ（笑）。
山本 大山倍達さんの本で眉毛剃って、山に篭ったってあるじゃないですか？ あれ、ボクもやりましたよ。
――ボクらの世代で、篭ってる人がいましたか！
山本 そう、中学の頃、青森の三沢っていうところに引っ越してたんですよ。山の方に住んでたんで、ちょうどいいやと思って。
――雪山に篭ってたんですか？
山本 そう。巻き藁とか立てたりして、「イヤ〜っ」って突いてましたね。タイヤ引いて走ったりしましたよ。
――もちろん、片眉は？
山本 なかったですね、っていうか両眉なかったですね。中学入るまでは天然で薄くて、で中学入ったら先輩に「剃ってるやろ？」って因縁つけられたりして。あんまりオレが山篭りしたことは知られてないですけどね。
――そうですね。初耳ですね。
山本 いろんなとこ転々としてるんですけどね。あんまり、この歳で人生語りたくないですけどね（笑）。
――ところで先ほど、アルティメットはケンカじゃないというお話がありましたけど……。
山本 ルールがあるからスポーツとして見てますね、アルティメットは。他のスポーツだと、一流のプロ選手はアスリートと呼ばれるじゃないですか？ でも、プロレス界、格闘技界にはアスリートっていう言葉が存在しないじゃないですか？ それはスポーツとして認められていない証拠ですよね。これからはプロレスラーもアスリートって呼べるような状態にしてかないと。
――でも、プロレスラーって……。
山本 （遮るように）ケンカ屋はアスリートじゃないですよ。ケンカ屋はケンカ屋ですよ。別次元です。柔術を頑張って、試合に勝つための練習をしてる強いヤツを素直にアスリートと認めましょうよ、と。
――でも、その選手がアスリートかどうかを認めるのは世間の目ですよね？
山本 それは自分自身です。格闘技だけど練習で鍛えぬいた者同士の技の競い合いだから。純粋にスポーツとして見てもらいたいね。オレがアルティメットに出たいと思ったのは魅力ある選手がいたからでね。それと、今まで『格闘王』ってU系から出てるじゃないですか。
――ええ、そうですね。
山本 高田さんや前田さんも。で、『格闘王』って異種格闘技戦で決まるのかなっていったら違うと思うんですよ。異種格闘技戦もいいんだけど、これからは外に挑戦してみて……。
――え、外って他の競技のリングに上がるってことですか？
山本 うん、その上で初めて『格闘王』じゃないかなっていうね。それと、これからは『格闘王』っていう言葉も必要ないと思うんですよね。
――おお！ なぜですか？
山本 んん〜、『格闘王』はいないからですよ！（キッパリ）。
――なんでいないんですか？
山本 いない！ 『格闘王』はいないでしょ？ だって、そんなこと、できる時間と余裕はないと思うよ。そのスポーツ、そのスポーツで一生懸命練習して勝たないといけないのに、あれこれチョイスしてできないよ！ それができたら、すごいよ。神様だね。夢物語だよな。ファンにしてみれば、「誰が一番強いんだ？」って思うわけじゃない？ そういうことをやるんならエキシビションでやればいいんだよ。本気でやるのは……マンガの世界だよ。
――エキシビションですか？
山本 だから、ロッキー3！ ロッキーとさ、ハルク・ホーガンがさ、エキシビション・マッチを派手にやったじゃない？ ああいう感じでねNO．1のマイク・タイソンは挑戦しないでしょ？ それは自分のやってる本分が精一杯だからでしょ？ それをやってれば、しっかりとした地位とお金と名誉がついてくるじゃない？ プロレス界にはそれがまだ足りないのよ！（バンと机を叩く）それを出せるような団体になれば、みんな練習一本に集中できるじゃない？ で、「キングダムの山本は練習すごいんだよ」とか、「オイ、キングダムの山本が長者番付出てるよ」とかなれば「すご〜い！」ってなるわけよ。ホントは自分のスタイルだけやって儲かれば一番いいことよ。
――では、そのキングダムですけど、マウント・ポジションとかグローブとかって形的に新しいですよね？
山本 プロレスっていってもいろいろありますからね。全日と新日のああいうプロレスは昔からあって、まあ、いいやと。2つあってもいいじゃないかと。でも、キングダムは別モンですよ。誰が聞いても、『キングダム』だけでスタイルがわかっちゃう。オレはそういうふうにしたいんですよ。現時点ではね。
――他の団体は……。
山本 （遮るように）それぐらいの力をウチが持てば……最高じゃないですか。今、こんだけプロレス団体があって、プロレスラーと呼べないような選手と一緒にされたら、ムカっ腹立ちますからね!!
――でも、現在のプロレス界は価値観が多様化してますよね。
山本 （遮るように）だからね、新しいプロレスって言っていいと思うんですよ。近未来プロレス。で、ボクの意



Kenichi Yamamoto

識の中では「アスリートって呼ばれるためにはどうしたらいいか？」っていう考えがあって、それは「ルールが決まってその中で強くなっていく」っていうのがアスリートと呼ばれる条件じゃないかと思うんだけど、新日本、全日本は5秒間反則ありとかで、とてもアスリートとは呼びづらいと思うわけ。でもボクらのスタイルがこのまま上がっていけば、アスリートっていう言葉が出てくるかもしれないっしょ？

——山本選手はアスリートって単語にメチャメチャこだわってるんですね。

山本　て、言われないとボクの中では納得いかないんですよ。だからデビューしたての選手でも、「あ、こいつはキングダムでデビューしたんだ！　アスリートじゃん！」とアマチュアの選手からの憧れになるような。オレも憧れてもらえれば、プロとしてやってる甲斐がありますよね。

——アマチュアっていうより、ボクはプロレスラーは、世間の人からの憧れの対象であってほしいですね。アマチュアとかアスリートとかって言われても、ピンとこないですけど……。ぶっちゃけた話、夢を売るのがアスリートってことですか？

山本　そう、そう！　だからお客さんに見に来てもらってナンボですから。ボクらがご飯食べれて、練習が出来るんですから。

——山本選手は今、アスリートなんですか？

山本　自分自身の中ではそう思ってます。

——じゃあ、ちょっと話が変わりますが、高田選手とヒクソンの対戦が噂になってますよね。UWF、Uインターと築き上げてきた高田延彦像って、新日本との対抗戦で崩れてしまったじゃないですか？　で、予定されているヒクソン戦は、それを一気に挽回できるチャンスじゃないですか？　高田延彦に憧れてプロレス入りした山本さんにとっては、今度のヒクソン戦はどうなんですか？　万が一、高田さんが負けたらどう思います？

山本　それはね、オレの中で関係ないです！（キッパリ）。

——え！　関係なくていいんですか？

山本　なぜかというと、キングダムのルールじゃないですから。そしたら、それでいいと思うんです。オレがキングダムのNO．1になればいいわけですから。高田さんに憧れて入ってきて、高田さんを目指して練習したのは確かですよ。でも、時代は流れてるんですよ。いつまでも、追っかけてたら高田さんがかわいそうですよ。もう、若いヤツの時代だしね。

——もう、高田延彦の時代じゃないぞ！　ということですね？

山本　う～ん……高田延彦って言い切っちゃうと失礼なんで……。

——じゃあ、高田さんの（笑）。高田延彦さんの時代じゃないぞってことですね（笑）。

山本　そうですね（笑）。その方が高田さんのためでもあると思うし、会社にとっても、いつまでもそんなこと言ってたら、しょうがないですよ。キングダムが発進しちゃってるのに。時代を変えていかないと。

——時代を変えるっていうのは、大きく世間を巻き込んで転がっていかなきゃいけないじゃないですか。例えば、高田さんは、キャスターやったり一般誌の表紙になったりして、世間の知名度は高いですよね。それを山本さんがプロレスの技術的に高田さんを超えたとしても、まだまだ超えられない部分が出てくる思うんですけど。時代を変えるっていう部分でも。

山本　ああ、そういう意味でね。そういうのもいいんじゃないですか？　でも　ボクは現役の選手ですから。自然と有名になるんだったら、なるだろう



「キングダムを日本一の格闘技団体にします。中小企業が夢なくしたら終わりっしょ？」とも語っていた山本。その語り口は非常にエネルギッシュだった。

ひたすら強くなりたい気持ちは昔から変わってない!!

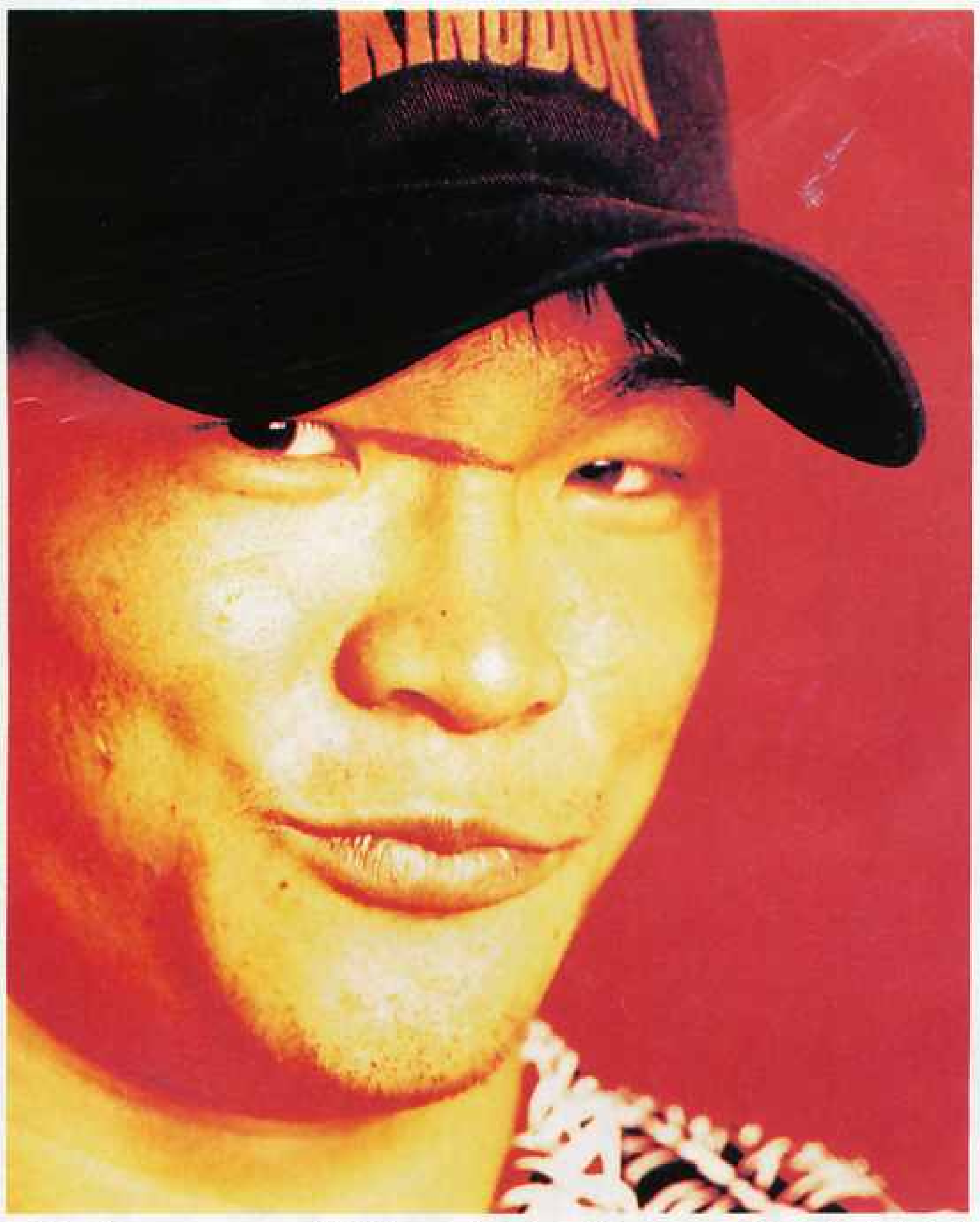
し。別に、今の目標はキングダムでNO.1になることであって、アスリートとして生きることですから。そんなことは考えてないです。ただ、強いか弱いか。そこだけです。だから、キングダムでトップ取るのが最高ですよ。倒す相手がこんなにいるんだから。

―じゃあ、高田さんは、その中の一人でしかない?

山本 そうですね。できれば高田さんともキングダムのルールでやりたいけど。ただ、キングダムでトップ取ったら、誰にも文句言わせない。オレがトップ取ったときに会社もね、今はそんなにお客を入れてないかもしれないけど、「どうしても山本選手がいないと興行打てないよ」ってくらいになれば、オレの意見も通るだろうし。で、オレがチャンピオンになれば、オレはそれで満足だし。で、キングダムっていう団体がメジャーになってくれれば……なれば……するんだけどね。

―「オレがやるぜ」ってことですね。

山本 誰もしないんだったら、オレがする。そこを絶対間違えてほしくない。オレがするんじゃなくて、誰もしないんだったらオレがする。



眉間の傷は、この日の練習中にできたものだとか。コワモテにますます拍車がかかって、非常にプロレスラーらしい顔つきである。でも笑顔はキュートなナイスガイだ。

―じゃあ、誰かがするときは?

山本 誰かするんだったら、やって下さい。ドンドンやってもらいたい。でも、オレはそれを絶対超えますよ。そしたら、こっちもやりがいがあるわけ。

―で、最後に一番上にいるのは?

山本 オレなんだよ。でも、社長にはなりたくない(笑)。

―あい〜や、なんでですか(笑)。

山本 それは高田さんが苦労してたじゃないですか。それを見て……社長にはならないよ。でも、選手としては「NO.1になるよ」っていう気持ち持ってないと、こんなキツイことできないでしょ。

―どこまでも上昇志向ですね。

山本 そう。前向きでいかないと。

―じゃあ今、ライバルはいますか?

山本 みんなでしょ。とりあえず、ライバルなんて別に決めなくていいんじゃないッスか? ただ自分が強くなりたいっていう気持ち、それは昔から変わってないですよね。ひたすら強くなりたいっていう気持ちはね。

―それが山本選手の根っこの部分ですか?

山本 うん。だから、もうね、10代の頃に遊びはある程度やったから。

―ハハハハハ。

山本 ハタチになったら、もう禁酒っていうね(笑)。

―あい〜や、飲む、打つ、買うは引退ですか(笑)。

山本 それはもう、禁止して。これからは、人生をまっとうにね。青少年育成でもって(笑)。

【97年5月23日 キングダム事務所にて収録】

Kenichi Yamamoto

キングダム興行日程

キングダム旗揚げ第2弾興行『BIRTH step2』が6月20日(金)場所は国立代々木競技場第二体育館でPM7:00から行われる。今回、インタビューした山本健一は、カリブ海の孤島出身でスラッシャーの異名をとる、カリブ・マンディエンコと対戦する。メインは安生洋二VS桜庭和志。又、今回も館内で実況中継が流れ、第四試合からメインエベントまでの解説を高田延彦が担当することになった。ノブ・マニアは必聴だ。尚、第3弾興行『BIRTH step3』は7月29日(火)、場所は同じく代々木第二体育館にて開催さる。詳細は未定。

山本健一PROFILE

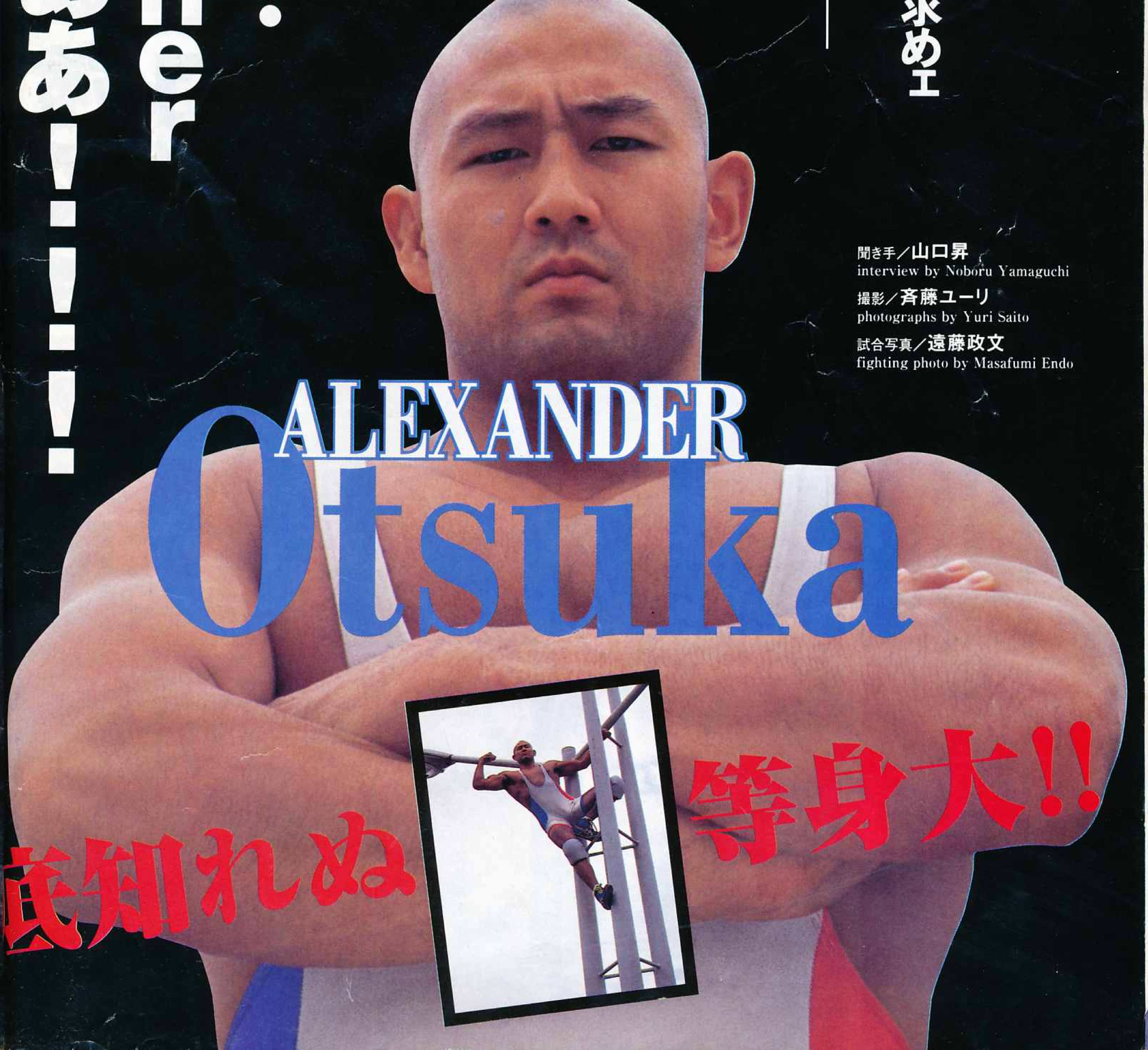
昭和51年7月11日、大阪府出身の20歳。平成6年10月14日、大阪城ホールのVS桜庭和志戦でデビュー。突如、金髪になりゴールデンカップス入り、新日本プロレスとの対抗戦で名を挙げる。だが本人曰く「あんなの考えてやってますかいな」。キングダム旗揚げ前にアルティメット挑戦をブチ上げて話題に。口癖は「あい〜や」。

日も当たりもしないい
じめついたぁ街でェ
たたかうことだけ
許されて産ぶ声を上げた～
幼～きイ頃から……愛情を求めェ
優しさ～に気付いた時にゃ
独り血まみれのリングぅぅ——
這いずりい回～りい
どうにか
ここまで来たーサ
明日さえ知れえぬ
俺に恐れる
モノなどない
さあてェ
そろそろぉ…
"AO"corner
からああああ!!!

聞き手／山口昇
interview by Noboru Yamaguchi
撮影／斉藤ユーリ
photographs by Yuri Saito
試合写真／遠藤政文
fighting photo by Masafumi Endo

ALEXANDER Otsuka

底知れぬ等身大!!



青コーナーより、格闘探偵団バトラーツ
アレクサンダー大塚選手の入場です!!

※一度会場で聞いたら絶対に耳について離れないアレクの入場テーマ曲は、這いずり回って調べた結果、青西高嗣「AO CORNER」というアルバムに収録されてることが判明しました(Vapより絶賛発売中ー)

——アレクさんは、ロックとか興味ないの?

アレク　ロック、興味ないです。残念ながら。ボク、竹内まりや系なんです。んむはぁ(微笑)。

——好きなアイドルは?

アレク　好きなアイドルは、今、別にそんなにいない……のものもぐらいですねぇ。

——のものもってウチののものも?

アレク　んむはぁ(微笑)。

——変わった趣味ですね。

アレク　んむはぁ。たまたま今そこにいたから言ってみただけなんですけどお……。

——やっぱり変わった人だ。その変わってる人の趣味は何? キョロちゃん集め以外には。

アレク　ドラえもんとかガンダム!のオモチャ……。

——オモチャ! なんかこう、アレクさんは"間"というか"たたずまい"が面白い人ですね。

アレク　……………(沈黙)。

——そこで黙りますか。で、アレクさんといえばアマレスなんだけど、空手の大道塾の大会にも出たことあるんでしょ?

アレク　急に話が飛びますね(ニッコリ)。

——僕の中では繋がってるからいいんです。

アレク　んむはぁ。そうですか。あの、その頃はサラリーマンをやってて、20歳の頃で、一回プロレスに入るのも諦めかけてて、でも、レスリングは続けたいと思ってたし、そういうアマチュアの大会にも出てみようかなと。

——なんでまた、いきなり打撃系に行ったの?

アレク　う～ん、打撃系っていうか、その時は大道塾の北斗旗の大会もグラウンドが少しあったりとかしたんで……まあ。

——通用するかなと?

アレク　でも一回戦で負けました! んむはぁ(微笑)。相手はパンフレットでは三級。でも、いざ試合終わってから聞くと、どっかの支部長か師範代してて、実は三段だったんですよ。

——ガハハハ。それはパンフレット作ったヤツが悪いね。言っといたほうがいいですよ。

アレク　JAROに電話したほうがいいですね。

——いや、JAROは関係ない(笑)。でも、そういう大会に挑戦するってことは、諦めかけてたプロレスに未練があったわけですか?

アレク　……やっぱりありましたね、ハイ。少なからずとも……(徐々に微笑しながら)んむはははははぁ……。

——なぜ笑う! そこは笑うところじゃないよ(笑)。アレクさんは、藤原組のテストを一回落ちてるんですよね。

アレク　ダ、ダ……あの、それは落ちたんじゃなくて、実は、あんまりこうやって自分で言うとアレですけど、一応、「じゃあ、明日から来いよ」って言われたんですけど、「親を説得出来てないんで」って言っちゃったんで……そのまま……。

——ふ～ん。で、もう一度藤原組というかプロレスの門を叩こうと決心したのは何か強烈なキッカケでもあったんですか?

アレク　んはぁ～、それ～はですね……ガバーッ!!(いきなり身を乗り出す)。

——ナニナニナニ!? ナンダ!!

アレク　ガヂャッ!!

※何をするかと思いきや、ここでアレクは突然テレコのスイッチを切ったのだ! もちろん無言のまま。突然の出来事に面食らった山口昇を尻目に、アレクは熱く語り出したのだった。といっても淡々とした口調で。しかし残念ながらここで語られたことは本人の強い強い意向によって掲載を見送ることにする。んむはぁ(微笑)。

——なるほど。ところで自分の性格を自分で判断すると、どういう性格だと思います?

アレク　あの、話……話が……飛んで……。

——いいの! 俺の中では繋がってるから。一言で自分の性格を言うとしたらどんな性格?

アレク　う～ん。……ヤサシイ……。それから、あの～、「心」ですね、ボクのすべては!

「心」なんです、ボクのすべては。んむはぁ

——へ？

アレク 「心」なんですよ、ボクのすべては！

——その頭も腕も下半身も、全身が心ってこと？

アレク そうです。んむはぁ（微笑）。

…………（小声で）ボソボソボソ……（突然大声で）でも、出会いを大切にするから！

——は？ 何を言ってるんだ、アレク！（笑）。

アレク サラリーマン時代にですねえ、ホノルル・マラソンに行ったんですよ。スポーツ・クラブに入ってて、そこが閉店しちゃったんですよ。ちょうどその時、20歳だったんで、最後の記念に、まあ……。

——顔に似合わないこと思うね（笑）。

アレク ボクが思ったんじゃなくて、そのスポーツ・クラブのみんなが……あのぉ、そこで、『出会いを大切にする』に繋がるんですよ。

——ここはぜひとも繋げてもらいましょう！

アレク そこは店舗がいっぱいあるんですよ、全国に。それで、全国から集まって行きました。そこで、出会った人たちと写真を撮ったのを、住所聞いたりしてマメに送ったり、年賀状出したり。それが、「心」と「出会い」を大切にするということです。だから、今もそのお陰で、地方に行っても、試合見に来てもらえるんですよ。

——あ、なるほど。

アレク 名古屋に3人くらい友達いるし……。

——3人！ 細かく刻むね（笑）。

アレク 大阪にもいるし……。

——（無視して）で、バトラーツを旗揚げして、曲がりなりにも一周年。予想以上の反響ですよね？

アレク そうですね。ハイ。

——旗揚げ当時の感覚からいうと、業界内でも「このメンツでやってけるのか？」とか「すぐ潰れると思った」とか言われてたんだけども、自分の感覚としてはどう思ってたの？

アレク 自分の感覚でだと……そうですね、あの、別にここに限らず、自分一人だけでも、うまく生き残っていこうという考えではいました。それが職業としてこの世界に入ってきたということだと思ってますから。

——じゃ、一年間、バトラーツとしてやってきて愛着とか出てきた？

アレク （やおら腕を組んで）……う～ん……。

——んふ、なぜそこで考える？（笑）。

アレク いや、別にィ……愛着愛着愛着……。

——ない？

アレク …………ええ!!（キッパリ）。

——ガハハハハハ！ いいゾ、アレク！。

アレク 別にバトラーツにこだわってない、ボクは一個人と思ってます！（キッパリ）。

——じゃあ自分に愛着がある？

アレク 自分に愛着がある？？？……というか、自分がかわいい！

——自分がかわいい！ ときましたか（笑）。もしかしたら自分勝手？

アレク はい!!（キッパリ）。さっきの「自分を一言で言えば？」っていうので、「人から言わせれば自分勝手だ」って言おうと思ったんですけどもね。

——自分から言わせると「全部が心」で、他人から言わせるとアレクサンダー大塚は「自分勝手」。

アレク だと思いますね。んむはぁ（微笑）。

——その、自分勝手なアレクサンダー大塚選手はですね、例えばプロレス界のことも別にどうでもいいんですか？

アレク へ？ いや、それは……どうでも良くないです。自分の中でしっかり考えてるつもりです。

——さしつかえなければ、それをホンのちょっとだけ聞かせてもらいたいんですけどね。

アレク いやぁ、それ言えない……。

——ナンデ！

アレク それはちょっと言えないです。自分のプランが、こう、ありますからね……。

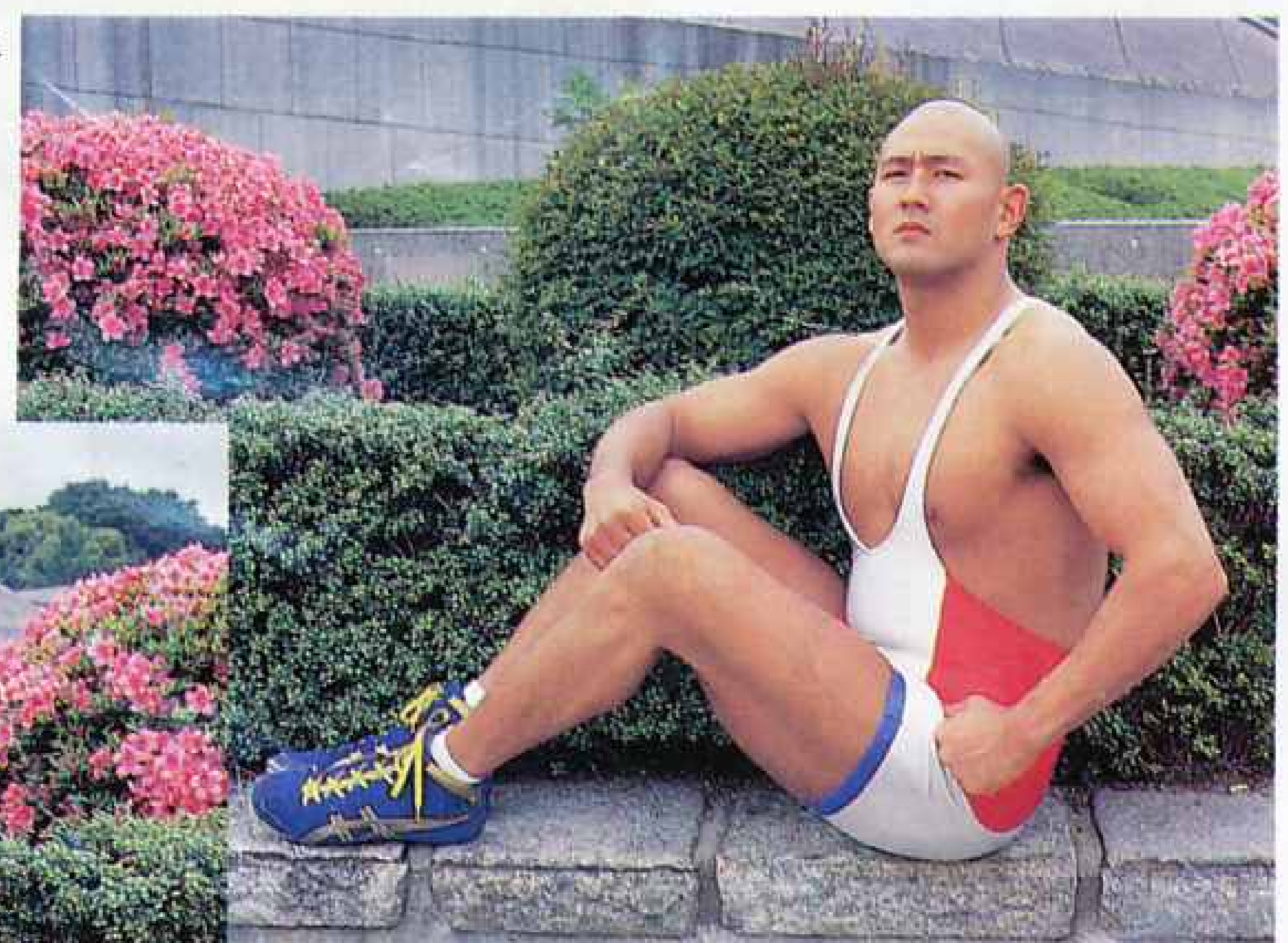
——いや、だからそのアレクさんなりのプランを聞かせてもらいたいんですけど。

アレク はい……。

——「はい」じゃなくて（笑）。さ、どうぞー！

アレク んむむむ。ま～たそうやっ

コカコーラで自動販売機の修理の仕事をしていたこともある、徳島大好きっ子アレク（実は派手好き）



中学時代に『あした天気になあれ』を読んでプロゴルファーになろうとしたアレク。パーマンになったこともある

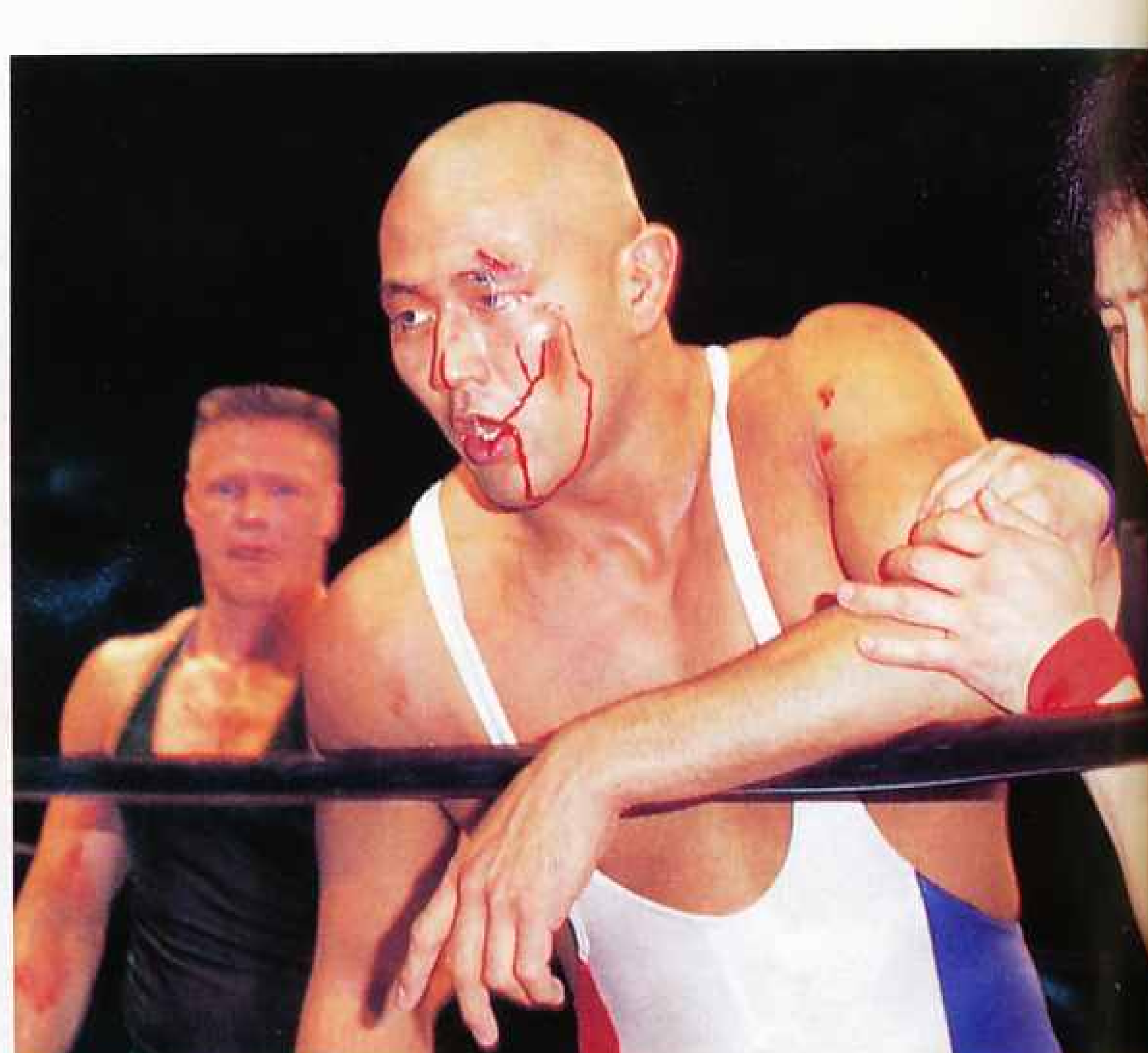


「落とし前」と「世界征服」'97

し……。
——3人！　細かく刻むね（笑）。
て崩していって喋らそうとするぅ……でも、それは言えないですぅ。
——この際、読者にヒントを与えるようなことぐらい言ってみちゃったら（笑）。
アレク　まあ、野望というか……むつかしいなあ……。だから……。
——オレがUWFを再結成させてやるぜ！　とか。
アレク　むはは。そ〜んなことは、出来ないですね。
——ガハハハ！　いや、でもアレクサンダー大塚というのはあくまでも等身大なんだね。等身大！　でも、その等身大がきっと「変」なんですよ。ダメなレスラーは等身大の自分をさっきのJAROじゃないけど誇大に表現しようとしてハズしたりするけど、なんかアレクさんは等身大のままでも十分に底知れない不気味さと面白さが眠ってるのが伝わってきますよ。
アレク　うひょひょひょ（微笑&頭を一休さんのように撫で回す）。
——でも、その等身大の自分を、まったく違う自分に見せてやろうとか、人の期待を敢えて裏切ってやろうとかはあるでしょ。
アレク　ああ〜、それはぁ……ありますね。試合の中で。だから、今、そういうのが少し出せてきてるのかな、という……。
——イメージとしてチーム・タコ（池田大輔、小野武志）にボコボコにされてかわいそうなアレク選手というのがありますよね（笑）。でも、チーム・タコのように前へ前へ出ながら何かを狙うんじゃなくて、追い込まれながら

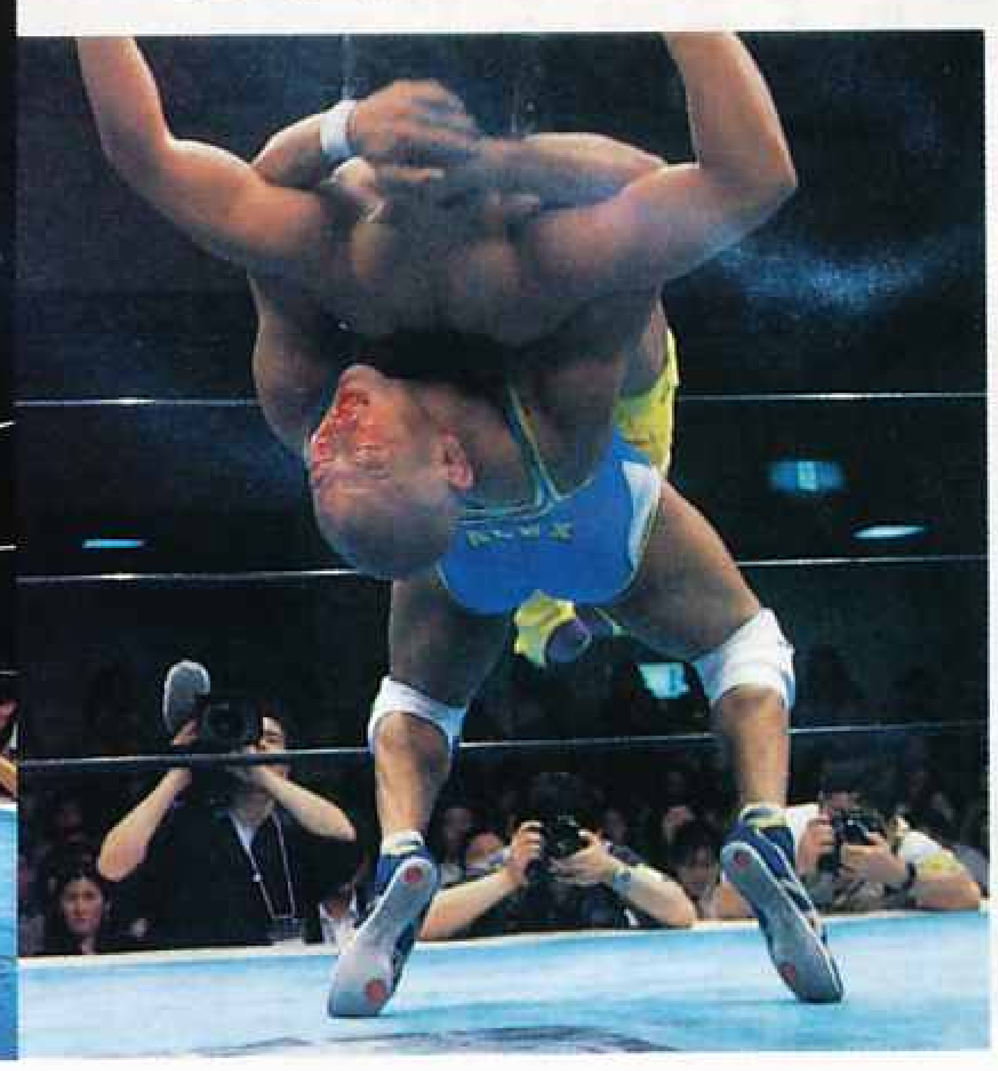
アレク　別にバトラーツにこだわって

も一発を狙ってるアレク選手とか石川社長の個性というのは、一番バトラーツらしいという気がしますよね。でも逆の意味でチーム・タコのような個性もバトラーツらしいし、その二つの個性が対象的ってところでアレク選手は光ってますよね。
アレク　ええ。でも、そう思っていただける人がいるってことは、自分にしたら、してやったりってことで……。でも、他の人も一個人と思ってると思うんですけどね。別に「バトラーツ」というんじゃなくて。だから、今は藤原組では出なかったモノがみんな出せてるんじゃないですかね。
——だからバトラーツって、団体でも組織でもなくてね、概念なんて言っちゃうとカッコよすぎちゃうけど、「集合場所」だよね。実力が拮抗した選手がそれぞれ好き勝手な方向性を描いて、たまたまその理念なり実力を競い合える集合場所（笑）。ま、つまり「荒くれ者の吹き溜まり」ですよね。
アレク　………（無言）。
——でも、吹き溜まりって強力なエネルギーが集まる場所ですよね。そこからみんなが一歩も二歩も抜け出そうとする場所だから。バトラーツもそんな感じでみんながバチバチやってるから面白いんだし、エネルギーを感じるんだと思うんですよ。それに引っ張られてバトラーツ自体も団体という単位で上へいこうとしてるし。
アレク　むはは、うまいこといいますねぇ。
——チーム・タコとか割とストレートに感情が伝わってくる人たちと違って、



4・22大阪ではリングスに突如出場。目尻を切ってC・ヘイズマンに無念のTKO負け。「なんで止めるんだ！」と本部席などに噛みつき"荒れるサンダー"となった。「（口を尖らせて）……だって、ノーダメージだったんですよ。だからまだまだと思って、控室帰って鏡で傷口みたら、やっぱりダメでした。んむはぁ」（本人談）





最近は田中、小野、石川を連続KOし大器の片鱗を存分に見せ始めたアレク。グッズ管理の仕事はつまんない！　と言い切る無口でシャイな男である。



アレク　んむむむむ。ま〜たそうやっ

ジワワァって感じで感情が伝わってくるじゃない、アレクさんの場合。飄々としてるし。
アレク　でも結構派手好きですね。
——ピンクのコスチューム着てたもんね。
アレク　自分の中では派手に見せてるんですよ。人と違ったことをして……。
——「君たちがやってるような派手ばっかりが派手じゃないんだよ」と。自分なりの「派手観」があるんですね。
アレク　そうそう。だからオレ、サラリーマンの時にも、一回スキンヘッドにしたことありますもん。
——ガハハハ！　さしずめスキン好きですね。
アレク　んむはぁ。そうですね（微笑）。
——みちのくプロレスとかリングスといった他団体に出て、やっぱり刺激になりますか？
アレク　もうそうですね。やっぱり、自分のとこだけでやってると、マンネリ化というか、自分の中でそういうのが……んむはぁ（微笑）。
——んむはぁ、じゃなくて何ですか！
アレク　いや、いろんなスタイルで闘えて、これからの自分のプロレスラーとしての幅の広さを持たせられると……。
——その幅の広さを横軸としたら、今まで出た団体は、いわゆる打撃・関節技のガチガチ・スタイルから空中戦まで、すごく横軸の幅は広いでしょう？　そこで、アレクサンダー大塚の縦軸は何なんですか？
アレク　縦軸はないです！（キッパリ）。というか、縦軸は短いです、ほんと。

愛県心もってます 徳島、大好き!!

ボクそのものだけなんで……。さっき山口さんが言ったように、もう等身大、それだけしかボクは縦軸はないです。

——ああ、等身大の自分が軸にあればスタイルは関係ない、ということ?

アレク …………(無言)。……あの、何でしたっけ?(ニコッ)。

——聞いてんのか、人の話を!(笑)。自分自身が軸にあれば……あれ? 俺は今、何て言ったんだっけ?……もういいや(笑)。

アレク すいませんねぇ、こんなトークで(一休さんのように頭を撫で回す)。でも、自分自身の最終目標と言うか、う~んと、プロレスラーが終わってから、その先も自分の夢を持ってるんで。

——エッ! もうそこまで考えてるの?

アレク 考えてます。そこを最終地点と思って、今の自分を磨いてってるんで。

——じゃあ、プロレスラーとしての最終地点は何なの?

アレク 最終地点はまだ見つかってないですけど、まだ空白なんですけど、こうありたいなっていうのはあるんですけど……言えないです。んむはぁ(微笑)。

——謎が多い人だなあ。じゃあプロレスやめた後の夢は?

アレク ……田舎に住むのが夢……。自分の中ではアイケンシンを持ったいいヤツだ、「心」のあるヤツだって思って……。

——アイケンシン?

アレク あの、自分の地元……。

——あ、ケンて、「県」ね。「犬」じゃなくて(笑)。

アレク ……好き…徳島、大好き!!

——ムググッ!「徳島大好き!」って言われてもなあ、その顔で(笑)。

アレク そうですよねぇ(微笑)。

——じゃあね、アレクさんは怒る時ってどういう時に怒るの? キレたら怖そうだよね。

アレク あの、話……話が……飛んで……。

——いいの! 俺の中では繋がってるから。

アレク 怒る時ですか? う~ん、例えば……このテーブルがボクの部屋のテーブルだとしますよね。で、いま、ココ(花瓶の左側)に電話がありますけど、自分の中では……(おもむろに電話を花瓶の右側へ移動させる)ココだったりするわけじゃないですか!

——ガハハハハ! はあはあ。

アレク で、そういう部分で……人に頼めないんですよ、掃除とかって。で、もし仮に頼んだとして、そこになってないとムカつくんですよ。

——自分の頭の中でいろんなもののポジションが決まってるわけだ。

アレク はい。自分の中で思ってるのと違うと「ン!?」って思う……だから、あんまりボクは人にものを頼めないんです。自分で何でもやってしまおうという。

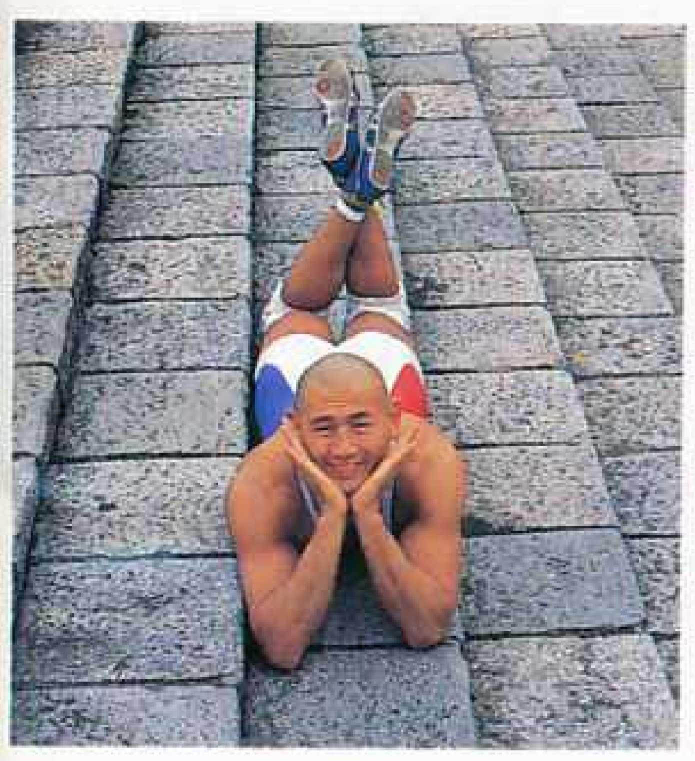
——面白いなあ。その話を人間関係に置き換えると、「ボクの中では○○さんはここ、△△君はここ、××ちゃんはここと決まってますからね。みんなそこのポジションにいてよ。それ以上踏み込んで来ないでよ」っていうことでしょ?

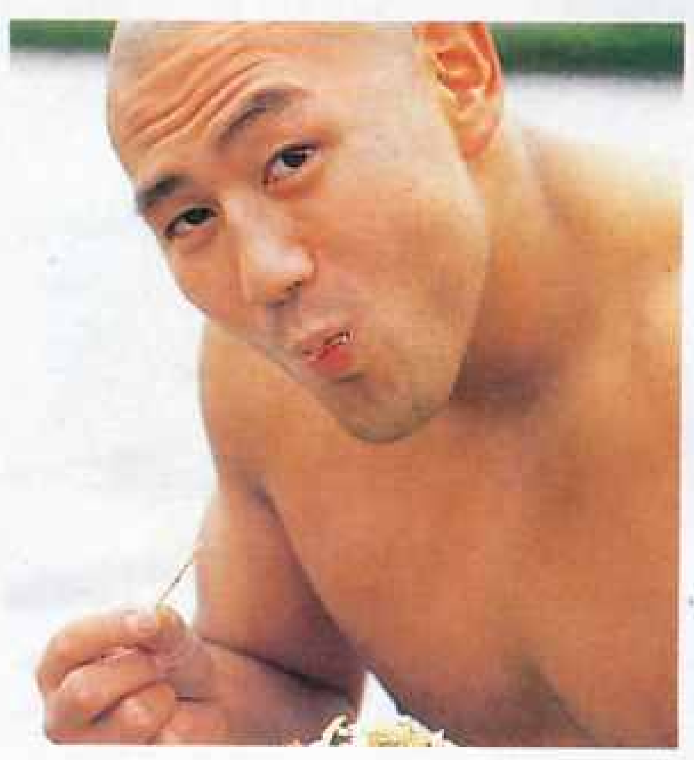
アレク ああ、そうですね、はい。

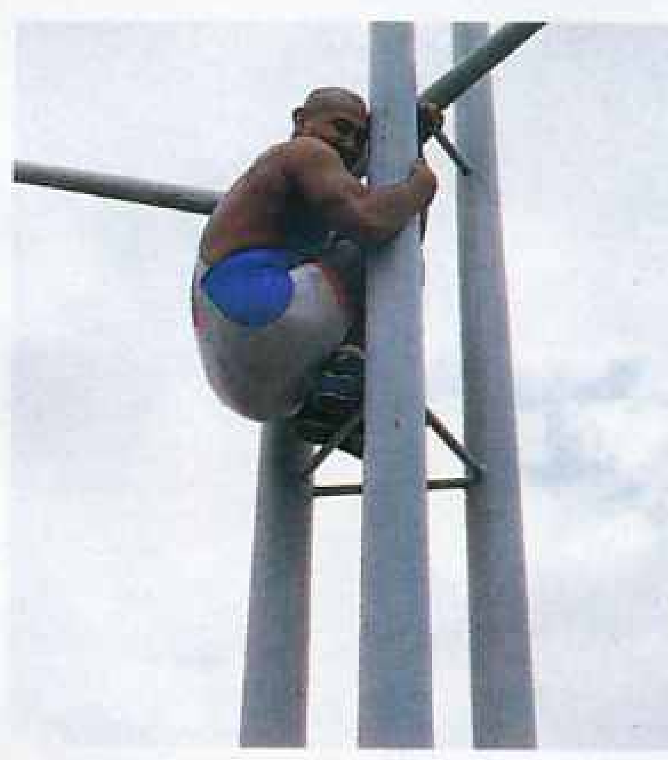
——それは凄くよく理解できるんだけど、そうすると自分が踏み込むのも嫌でしょ? アレクさんから相手に対して。

アレク はい。

——だけど、踏み込んで来るヤツがいたとして、アレクさんがガーッと怒ったとしますよね。で、最初はギクシャクするかもしれないけど、アレクさんも踏み込む。お互いが一歩本気で踏み込みあってこそ見える世界って絶対あると思うんですよ。それが俺はプロレスじゃないかなという気がするんだよね。







アレク ああ…………。

——自分が気付かないうちに一歩踏み込んだ時に、なんか違うモノが見えてくる世界ってあるんじゃないかなあと。

アレク …………(しばらく無言)。自分でも、それは思いますけど、限界を超えて一点交わる部分を作ることによって、ということですよね? 山口さんが言ってるのは。

——作れないかもしれないけどね。単なるしょーもない喧嘩になっちゃうかもしれない。

アレク だからそこなんですよ! 今のボクでは……今のボクっていう立場からはどうしようもないっていう感覚があるんで……。

——まだ今の実力では見苦しい喧嘩になっちゃう可能性も大いにあると。

アレク はい……。

——でも、ズバリ言って、アレクさんが人にどう思われようといいと思ってるんだったら、喧嘩になっちゃってもいいんじゃないの?

アレク …………(無言)。

——僕が言いたいのは、一歩踏み込むことによって出てくる、僕らの知らないアレクサンダー大塚、アレクさんさえ知らないアレクサンダー大塚っていうのを見たいんですよね。

アレク　う〜ん、そういったことを少し……多分、そういうことを無意識に望んでるから、ボクは他団体とかいろんな所に行きたいなって言ってるのかもしれないです。新しいおっきな自分を見つけるために。

——だからリングスで「荒れるサンダー」になったり、5・21の後楽園で鼻血流しながらも田中稔選手に向かっていった姿は僕的にはグーなわけですよ。

アレク　リングスに出たのは大きかったですね、ほんと。

——ところで好きなレスラーって誰だったんですか？

アレク　ある実在しない人物に憧れて、この世界に入ったんですよ。

——アンパンマンとか？（笑）。

アレク　違いますよぉ。西上馬之助！

——あ、漫画の『1、2の三四郎』の。

アレク　プラス東三四郎を足して2で割ったようなレスラーになりたいです。だからホントにレスラーになろうと思ったのは、『1、2の三四郎』の東三四郎と西上馬之助なんです。

——俺、バトラーツは「『1、2の三四郎』の世界だ」ってパンフレットに原稿書いた時ありますよ。

アレク　ええ、ボクもあれは、「あ、いい表現していただけたなぁ」って思って……。

——となると、「『1、2の三四郎』の世界」なんかじゃねえや！って思ってる選手たちも当然いるだろうから、まあ、その人たちとのぶつかりあいっていう意味でも、やっぱりアレクサンダー大塚の存在は面白いですね。

アレク　……はい（苦笑）。

——何笑ってるの？

アレク　え？　いや〜、ええ。辛い質問ばっかりするんですもん……。

——は？　何が？

アレク　いや絶対ポイント絞ってきてますよ、それ。いやいやいや〜……今の立場的にそれは厳しいですよ。そういう質問されたら……。

——じゃ、こうしましょう。単純にライバルって誰ですか？

アレク　……いないです。

——へ？　ライバルいなきゃ面白くないじゃない？

アレク　…………（無言）。…………インタビュー……辛くなってきた……。

——なんで！

アレク　…………（無言）。

——例えば、目標としてる選手でもいいし。

アレク　…………（無言）。

——あ、そうやって貝になるのね。今年の後半までにはメインで石川社長と一騎打ちやりたいとかさ。そういうのでもいいんだよね。

アレク　……目標……そうですね、もっと、今までに出てない団体に上がりたい……。

——では他団体で、夢として手を合わせてみたいっていう選手は誰ですか？

アレク　…………（無言）。

——夢としてだから。

アレク　ムムム…………ペチン、ペチン！（頭を叩く音）。これ、絶対チョメチョメにしといてくださいよ！

——はい。なんならマルマルにしときますよ。

アレク　××××とやってみたいです！

——はっはー！

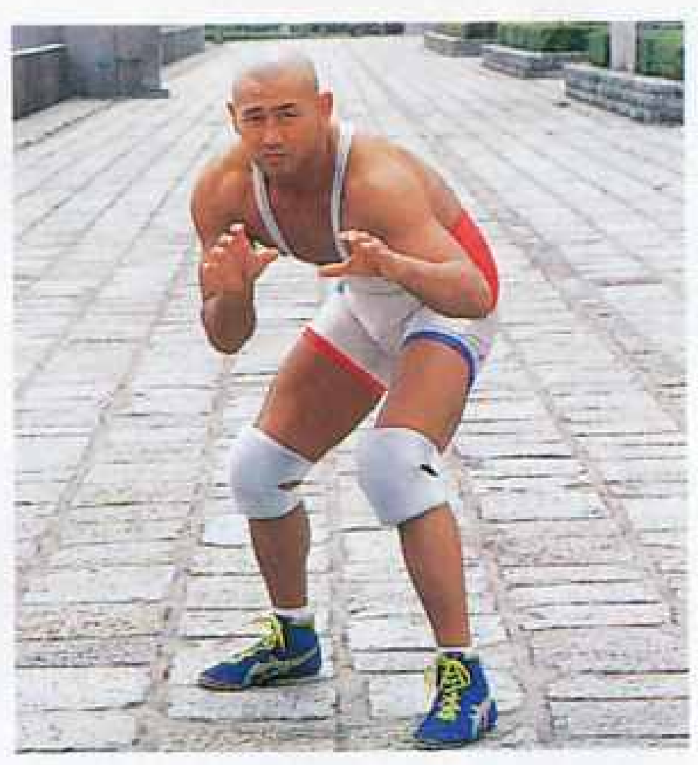
アレク　でも今の自分では闘えないです……。これからもっと、自分が変わっていかないと××××とは闘えない。今、闘うべきじゃない……。絶対面白くなるとは思いますし、あと……そこに行き着くまでの自分を大きくしていくのが今なんです。

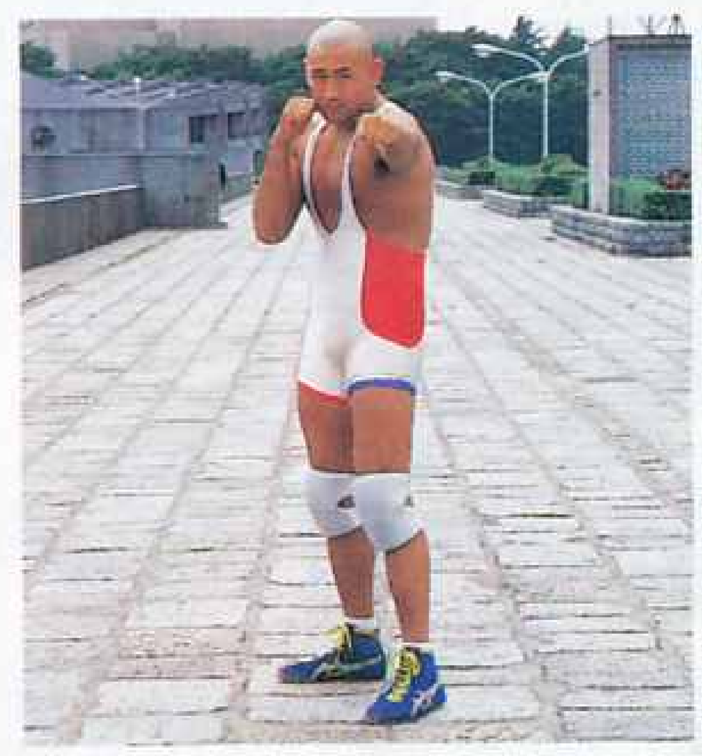
——バーリ・トゥードとか、あっちの方面は全然興味ないの？

アレク　いや、別に……まあ、お話があれば出てもいいです……。んむはぁ（微笑）。



PROFILE
71年徳島生まれ。平成6年に一度は諦めかけた藤原組に正式入門。同年8月に米山サトシ戦でデビュー。得意技はアマレスの経験を活かした各種スープレックス、ジャイアント・スイング、スキン・ヘッド、だんまり、阿波弁。3月の九州ツアーでももちろん単独行動。いろんなチラシを集めていたりと、その行動には謎が多い。





——あはは、そこなんだよね、アレクの強みは。バーリ・トゥードみたいなハードな世界を飄々と「いや、別に」「やれって言われればやるし」と受け入れる（笑）。バーリ・トゥードからみちのくプロレスまでっていったら底知れないよね。その幅が持てたら。

アレク　だから、自分をどういうふうに見ようが、どんな見方をされようがどうでもいいんですよ、それは。どういう見方であれ、その人の人生の起点を左右する人間になれればいいと思ってますから！　でも、いやホント、山口さんがボクに肝心なこと喋らせたいっていう気持ちはよくわかるんですよ。ボクも喋りたいのはヤマヤマなんですけど……。

——いいの、喋んなくて。喋んなくていいんですよ。その方がアレク選手らしい。「らしい」というのをどう伝えるかは自由ですから。

アレク　あの、一気にドカーンと行きますから!!　タマッテ……。

——黙ってね。

アレク　溜まって……。

——あ、溜まってね（笑）。溜めて溜めて一気に吐き出すと。そういえば、さっき質問が途中だったんだけど、これをやられたら絶対にオレはキレる、っていうことは他にないの？

アレク　う〜ん……自分の手紙を見られる……。

——なんでそういう私生活のちっちゃいことばっかり言う！（笑）。

アレク　「心」が細かいんですよ。んむはははぁ（微笑）。

【5月22日、バカ会社事務所にて収録】

【BATTLARTS試合日程】■6・28　東京・半蔵門FMホール　18：30　■7・6　福島・保原町体育館　16：30　■7・21　千葉・市原市湘南動物園特設会場（プロレス界初の動物園プロレス）18：00　■7・27　徳島・文化の森総合公園野外劇場　15：00
●問い合わせ／バトラーツ0489・63・0005

前回大好評!!
『バンバン・ビガロ』再び

●Tシャツ
各3名

シヨップオリジナルのレアTシャツ

○インポートショップ バンバン・ビガロ 提供 TEL03-3460-1146
○ダイエット・ブッチャースリムスキン提供 TEL03-5454-3081



ビガロ3 徳光和夫の絶叫インタビューを思い出すなぁ



ビガロ4 素顔はお兄さんと違っていい男（サスケ談）



ビガロ2 かつて全日で活躍したジミー・スヌーカ



ブッチャーT 白・ベージュ・紺の三種類。色を明記。



ビガロ1 素顔はアレッ?て感じ（サスケ談）の仮面貴族

生まれて34年、
初めて人から
正面切って"トンマ"と言われた
（しかも、ターザン山本から）
中村カタブツ君の

読者プレゼント ロストンマ・ワールド

ターザン様 競馬で負けたのを人のせいにしないで下さぁい。部外者なのに勝手に僕にクビを宣告しないで下さぁぁあい（号泣）



鈴木みのるT 近藤有己の"強面"鈴木の目がモチーフ



パンクラスT 雑誌「ブレーク」で絶賛された



高田龍T 夢ファク代表・高田龍の男の夢Tシャツ



カブキT 雑誌 ブレーク的には評価されない?



茂木正淑T 7月26日に再度ライガーに挑戦!



KINGDOMT 山崎サイン入りアスリート向きTシャツ



中野龍雄T 龍雄なのに虎。なぜ!

団体オフィシャルTシャツ

●提供
○パンクラス
○IWAジャパン
○KINGDOM
○中野龍雄
○レッスル夢ファクトリー

●RINGS提供



リングスらしいデカくて頑丈で無骨なキーホルダーを10名のリングスファンに



前田日明サイン入り6月21日有明大会ポスター　グレーシー柔術家とコマンドサンボの英雄が激突。　6名



RINGSの迫力をプレイステーションで再現。RINGS公認・新作ソフト　5名

●パラス提供



猪木論！　木村光一編・著　本誌・書評のページでも絶賛されているアントニオ猪木インタビュー集　3名

●コミックノーラ提供



綾香ちゃんハイキック　第1巻　女子キックの星、三井綾モデルの格闘コミック　三井サイン本5名

●リイド社提供



玉田りえセミヌード写真集　ストライク　個人的には非常にたまらん。僕の心にストライク　3名

●スコラ提供



福岡晶初ヌード写真集　デスヌーダ　ヘビとの絡みは自らの希望。松永、折原に続き第3のヘビ好きを発見　3名

●アイドール新宿店提供





「店の名前？　出さなくていいですよ」。器のでかいアイドール店長から頂いた品。赤か青を指定、各1名

●真正W☆ING提供



デタラメな情報を流して旗揚げの邪魔をする輩と、マスコミに対して怒りまくる茨城氏から頂いたポスター　5名

●MARK&I提供



コーセーアンニュアージュトーク
『前田百鬼丸シリーズパート4』
♥前田日明 vs 三井ゆり♥
7月19日（土）　開演7:00
会場　恵比寿ザ・ガーデンルーム

石田えりとの対談でも話題となった前田トークシリーズ。今回は三井ゆりと共演　5組10名に

●パンクラス提供



3月22日露橋大会、船木誠勝とのタイトル戦を前にした近藤有己の気合いが詰まった迫力のビデオ　1名

●KSS提供

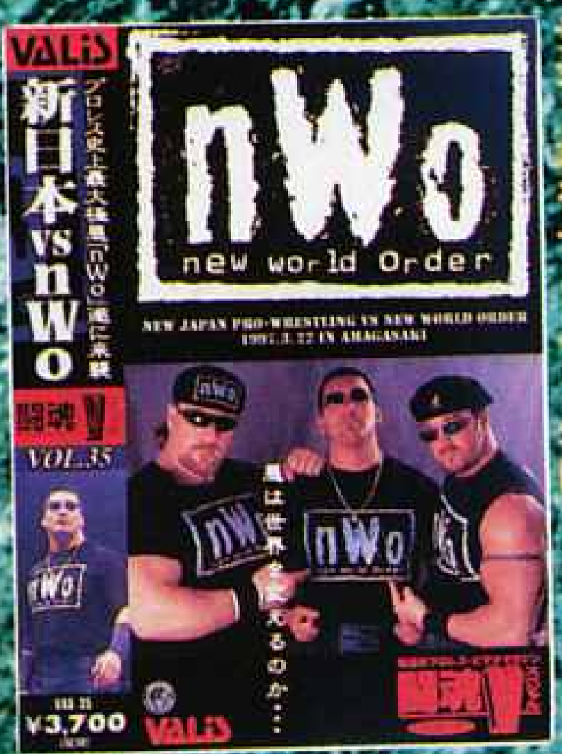


6月27日発売のプレ・ステ用プロレス・シュミレーションソフト　プロレス戦国伝　を3名に

●VALiS提供



平成5年の対ハルク・ホーガン戦、7年の対高田延彦戦などを収録。武藤敬司の闘いの歴史をつづったビデオ　3名





いまやプロレス界の話題の中心である蝶野正洋&nWo軍。悪の魅力充満のビデオ2本をセットで3名に

●紙プロ提供



パトラーツ、みちのくの夢の合同興行にターザン山本が絡んだ一夜限りのスペシャルマッチの数々を完全映像化　5名に



ワカマツが「俺はサイババだ」と叫び、サスケはUFO話を展開し、折原昌夫がプロレス裏話を暴露するキチ〇イ本

●藤原組提供



組長解説の関節技ビデオ。坊主頭の大輔など若きパトラーツ勢総出演　9本セットを1名



祝 東芝EMI映像事業部フロア移転 季節はずれのお年玉 在庫一斉プレゼント大会

●旧作ビデオ各1名ずつ

●Jr戦士の闘い



Jr戦士、ルチャドールの闘いばかりを特集。オールタイトルマッチの『スカイダイビングJ』本場のルチャドール総登場『大空中祭』などファン必見

●96年～97年



昨年から今年にかけてのビッグマッチが総登場。大日本VS新日本、UインターVS新日本、武藤敬司VSペドロ・オタービオなど日本プロレス史上に残るであろう歴史的な闘いばかりが行われた

●95年



北朝鮮興行後の福岡ドームでタキシード姿で入場してきた猪木の謎かけの意味は？ 新日VSUインターの事実上の開幕戦となったG1クライマックススペシャルでは緊迫感に満ちた安生洋二VS長州力の初激突を。新日VSUインター全面対抗戦第3弾ビデオも

●新作各3名



第1部は猪木の必殺技を、第2部・名勝負ではS小林戦等8試合を、第3部は格闘技戦を収録

大仁田、ジャガー横田との対談など特別映像や秘蔵試合映像を含む。くどめファン必見

●94年



安田忠夫対巨人エル・ヒガンテ、戦闘用ライガー対佐山聡を収めた福岡ドーム興行と夏男・蝶野正洋が光るG1

●エトセトラ



平成維新軍、無我の旗揚げ戦、アントニオ猪木、藤波辰爾、長州力、前田日明が熱くぶつかりあった80年代ビデオ、女子では最も熱かった対抗戦時代の激闘、北斗晶&神取忍の怨念の記者会見等を収めた総集編。『MSGタッグ&WWF王座』では猪木・ホーガン組VS藤波・前田組の死闘を収録

応募方法

50
151-□□
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス
「紙プロ」編集部
「忠夫」係まで

1.住所
2.氏名
3.年齢
4.希望商品
5.面白かった記事
6.つまらなかった記事
7.カタブツ君への一言
8.今後の感想&やってほしい企画

住所・氏名・年齢と希望商品名を明記の上、面白かった記事&理由、つまらなかった記事&理由、カタブツ君への一言、今後の感想&やってほしい企画を書いて左の住所へ送ってくださぁあい。
締切は7月30日。

紙のプロレス RADICAL
No.4
1997年7月15日発行
定価：本体648円+税

発売元：株式会社ワニマガジン社
〒160 東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03－3357－2911（販売・営業）
発行元：株式会社ダブルクロス
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
TEL.03－3403－5188（編集・制作）

編集兼発行人：山口昇
編集スタッフ：野本のものも真貴子／中村カタブツ君／坂井結核（ノブ）／吉田豪／八木賢太郎（ライブ後の疲労のため非番）
デザイン：ツースリー（出田さん、村松さん、ヒサくん、マツ）
運搬：出前持ち入江　アタリ：古川ほとり
カメラマン：斉藤ユーリ／浜田孝一
お勘定：林ヘックションー枝
フィニッシュ：ツー・スリー
印刷：図書印刷株式会社

編集内容等に関するお問い合せは（株）ダブルクロスにね♥

紙のプロレス RADICAL
No.5は
8月下旬
発売予定

東芝EMI映像事業部フロア移転

祝 季節はずれのお年玉 在庫一斉プレゼント大会

●旧作ビデオ各1名ずつ

●Jr戦士の闘い




Jr戦士、ルチャドールの闘いばかりを特集。オールタイトルマッチの『スカイダイビングJ』本場のルチャドール総登場『大空中祭』などファン必見

●96年～97年



昨年から今年にかけてのビッグマッチが総登場。大日本VS新日本、UインターVS新日本、武藤敬司VSペドロ・オタービオなど日本プロレス史上に残るであろう歴史的な闘いばかりが行われた

●95年



北朝鮮興行後の福岡ドームでタキシード姿で入場してきた猪木の謎かけの意味は？　新日VSUインターの事実上の開幕戦となったG1クライマックススペシャルでは緊迫感に満ちた安生洋二VS長州力の初激突を。新日VSUインター全面対抗戦第3弾ビデオも

●新作各3名



第1部は猪木の必殺技を、第2部・名勝負ではS小林戦等8試合を、第3部は格闘技戦を収録

大仁田、ジャガー横田との対談など特別映像や秘蔵試合映像を含む。くどめファン必見

●94年



安田忠夫対巨人エル・ヒガンテ、戦闘用ライガー対佐山聡を収めた福岡ドーム興行と夏男・蝶野正洋が光るG1

応募方法

50 151-□□
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
(株)ダブルクロス
「紙プロ」編集部
「忠夫」係まで

1. 住所
2. 氏名
3. 年齢
4. 希望商品
5. 面白かった記事
6. つまらなかった記事
7. カタブツ君への一言
8. 今後の感想&やってほしい企画

住所・氏名・年齢と希望商品名を明記の上、面白かった記事&理由、つまらなかった記事&理由、カタブツ君への一言、今後の感想&やってほしい企画を書いて左の住所へ送ってくださぁぁい。
締切は7月30日。

●エトセトラ



平成維新軍、無我の旗揚げ戦、アントニオ猪木、藤波辰爾、長州力、前田日明が熱くぶつかりあった80年代ビデオ、女子では最も熱かった対抗戦時代の激闘、北斗晶&神取忍の怨念の記者会見等を収めた総集編。『MSGタッグ&WWF王座』では猪木・ホーガン組VS藤波・前田組の死闘を収録

紙のプロレス RADICAL
No.4
1997年7月15日発行
定価：本体648円+税

発売元：株式会社ワニマガジン社
〒160　東京都新宿区内藤町一番地
TEL.03－3357－2911（販売・営業）
発行元：株式会社ダブルクロス
〒151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702
TEL.03－3403－5188（編集・制作）

編集兼発行人：山口昇
編集スタッフ：野本のものも真貴子／中村カタブツ君／坂井結核（ノブ）／吉田豪／八木賢太郎（ライブ後の疲労のため非番）
デザイン：ツースリー（出田さん、村松さん、ヒサくん、マツ）
運搬：出前持ち入江　アタリ：古川ほとり
カメラマン：斉藤ユーリ／浜田孝一
お勘定：林ヘックション一枝
フィニッシュ：ツー・スリー
印刷：図書印刷株式会社

編集内容等に関するお問い合せは（株）ダブルクロスにね♥

紙のプロレス RADICAL
No.5は
8月下旬
発売予定

紙のプロレス RADICAL
WANIMAGAZIN MOOK 51
1997 No.4
落とし前!!
つけたるで
平成9年7月15日発行 編集発行人／山口昇
発売元：(株)ワニマガジン社 〒160 東京都新宿区内藤町1番地 電話/03-3357-2911
発行元：(株)ダブルクロス 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-3-702 電話/03-3403-5188
ワニマガジン社 定価：本体648円＋税

東芝EMI㈱は世界のプロレス&格闘技を応援します！

がんばれ 紙のプロレス with "ハートブレイク" Nobby

著作・制作：フロンティア・マーシャルアーツ・レスリング㈱
発売・販売：東芝EMI㈱

■FMW・オフィシャル・ビデオ10th.

FMW8周年記念興行

工藤めぐみ引退試合

1997.4.29 横浜アリーナ



全面戦争 日米5大決戦

TOVS-1290 税込¥9,990
カラー／マルチトラック(音声多重)
152分収録

特別解説 工藤めぐみ
W★ING金村
伊藤 豪(F.M.W.レフェリー)

邪道姫伝説…ここに凄絶なるファイナル！
大仁田 厚"邪道魂"伝承・炸裂!!

[収録試合]

■メインイベント／第9試合〜工藤めぐみ引退試合〜
WWA世界女子インディペンデント・ワールド世界女子選手権試合
女子ノーロープ有刺鉄線電流爆破バリケードダブルヘルテスマッチ
(挑戦者) (選手権者) ノーカット
工藤めぐみ vs シャーク土屋

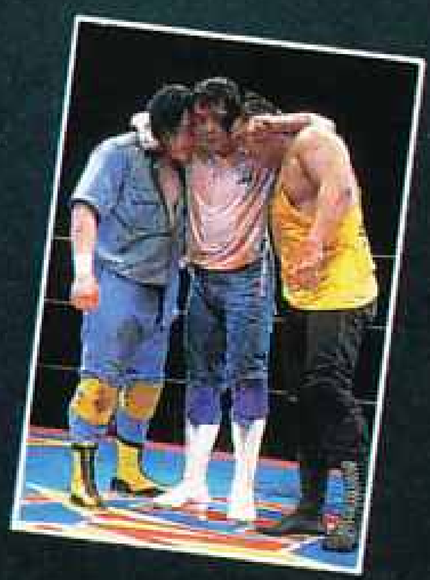
■セミファイナル／第8試合 ノーカット
テキサスウエスタントルネードストリートファイト6人タッグデスマッチ
大仁田 厚／田中 将斗／W★ING金村 vs テリー・ファンク／ザ・グラジエーター／カクタス・ジャック

■第7試合／マスカラ・コントラ・カベジェラ(敗者覆面剥ぎ髪切りマッチ)
ハヤブサ vs ミスター雁之助 ノーカット

■第6試合／「冬木マッチョバディ・オブ・レスリング vs ファンク・マスターズ・オブ・レスリング」ストリートファイト6人タッグマッチ
冬木 弘道／邪 道／外 道 vs 大矢 剛功／ヘッドハンターA／ヘッドハンターB

■第5試合／「みちのくプロレス vs F・M・W」スペシャルシングルマッチ(第68番札所)
新崎 人生 vs スーパーレザー

他全9試合収録





4・29 横浜大会を全試合収録！

■その他、出場選手のビデオ用特別インタビュー収録。大仁田 厚、工藤めぐみの試合後の控室での 言動一部始終もドキュメント収録／

絶賛発売中

7月発売ラインアップ

■7月9日発売 梶原一騎追悼記念試合 (TOVS-1308/¥9,990)
'96格闘技の祭典〜1996.7.14 後楽園ホール

■7月16日発売 ECWハードコア・プロレス〈PPV〉 (TOVS-1309/¥9,990)
ECWベアリー・リーガル〜1997.4.13 ECWアリーナ」

■7月30日発売 新日本プロレスリング・オフィシャル・ビデオ
'97 STRONG STYLE EVOLUTION IN 大阪ドーム」
PART.1&2 (2巻同時発売) (TOVH-1313/1314 各¥10,200)

■7月30日発売 nWoオフィシャル・ビデオ nWo (TOVS-1312/¥5,000) 日本先行発売

新日本プロレスリング オフィシャル・ビデオ

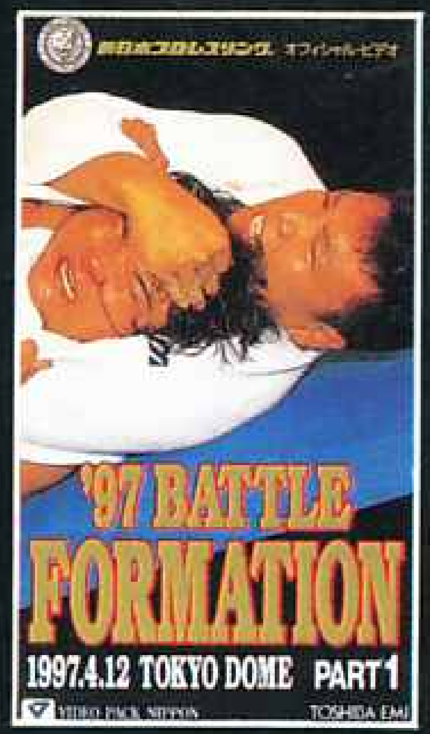
企 画：新日本プロレスリング㈱
発売元：㈱ビデオ・パック・ニッポン
販売元：東芝EMI㈱

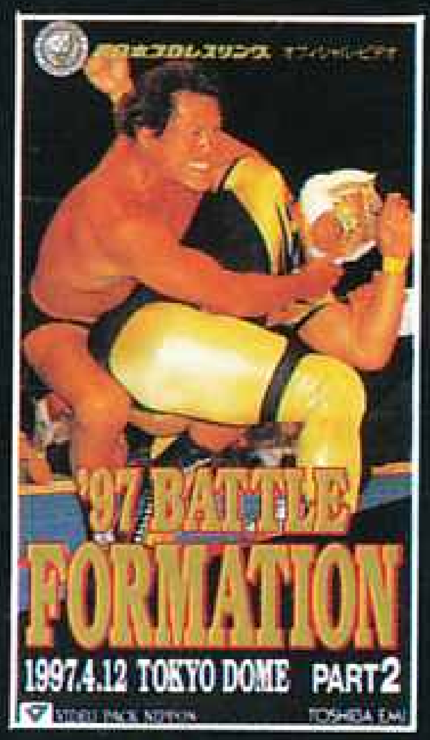
史上最大の異種格闘技戦を完全ノーカット！
4.12 東京ドームを全試合収録

新日本プロレス創立25周年記念

'97 BATTLE FORMATION

1997.4.12 TOKYO DOME





PART.1 & PART.2

各巻 税込¥10,200 カラー／ステレオ／Hi-Fi

[PART.1] TOVH-1309(100分)

■日本中が大注目のドリーム・マッチが実現／〈"プロレス vs 柔道"異種格闘技戦〉
破壊王・現IWGPヘビー級王者 元・柔道世界選手権覇者：プロ格闘家
橋本 真也 vs 小川 直也

■〈IWGPタッグ選手権試合〉
(王者組) (挑戦者組)
藤波辰爾&木村健悟 vs 長州 力&佐々木健介

他全5試合収録

[PART.2] TOVH-1310(100分)

■〈INOKI FINAL COUNT DOWN 7th〉
アントニオ猪木 vs タイガーキング
(初代タイガーマスク改め)

■〈THE WORLD OF DARKMEN〉
グレート・ムタ vs 蝶野正洋

■〈ジュニアヘビー級8冠選手権試合〉
(王者) (挑戦者)
獣神サンダー・ライガー vs ザ・グレート・サスケ

他全5試合収録



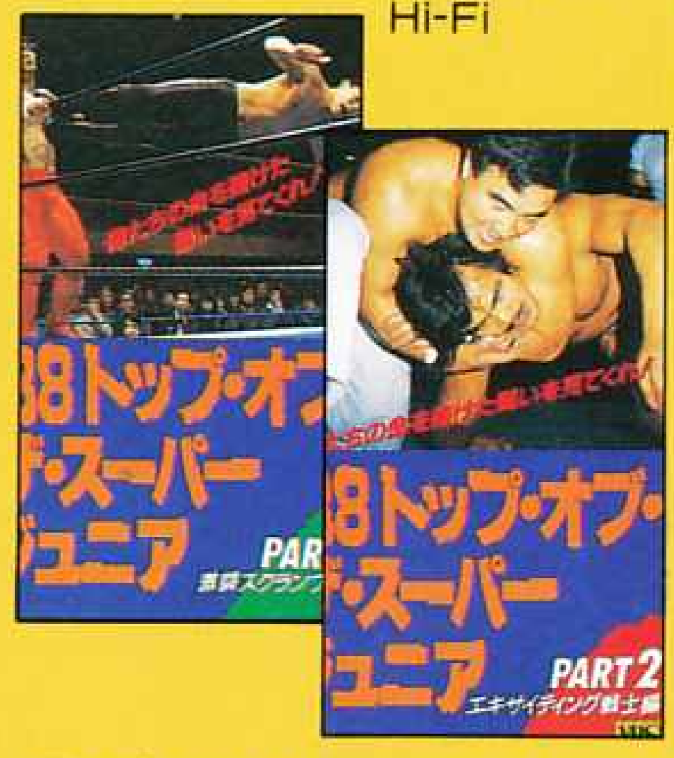
●TV未放映のインタビュー、記者会見シーンを満載しドキュメント一挙収録／

6月25日 2巻同時発売！

「俺たちの命を賭けた闘いを見てくれ／」
〈新日本プロレス名勝負列伝〉シリーズ

'88 トップ・オブ・ザ・スーパージュニア

各巻 税込¥6,200 カラー／ステレオ／Hi-Fi



■PART.1〈激闘スクランブル編〉
TOVH-1311(60分)
(収録試合)●山田恵一 vs 船木優治
●越中詩郎 vs 高田延彦
●馳 浩 vs 越中詩郎
(特別収録) 馳 浩 vs オーエン・ハート

■PART.2〈エキサイティング戦士編〉
TOVH-1312(60分)
(収録試合)●高田延彦 vs 山崎一夫
●高田延彦 vs 馳 浩
(優勝決定戦)●越中詩郎 vs 馳 浩
(特別収録) 越中詩郎 vs 小林邦昭

6月25日 2巻同時発売

〈新日本プロレス名勝負列伝〉シリーズ／これは諸事情により現在、廃盤となっている「新日本プロレス」のビデオ作品群の中から貴重な歴史的価値のある"名作ビデオ"を選りすぐり、低価格で復刻再発売する魅力溢れるビデオ・シリーズである。

全国のレコード店、書店、プロレス・ショップ及び各プロレス団体の試合会場にてお求め下さい。
●内容についてのお問い合わせは：東芝EMI(株) 映像部 ☎03-5512-1749
●ご注文についてのお問い合わせは：同 販売3部 ☎03-5512-1558

TOSHIBA EMI

9784898292921
ISBN4-89829-292-5
C9476 ¥648E
1929476006486
雑誌 69861-51